

BIRZ COMICS
家畜人ヤプー六
Egawa Tatsuya × Numa Shozo
原作作画 沼正三 江川達也
発行 幻冬舎コミックス

9784344806238
ISBN4-344-80623-9
C9979 ¥590E
1929979005900
雑誌 54244-23
定価：本体590円＋税
発行＝幻冬舎コミックス
発売＝幻冬舎

YAPO

ヴアス・ヴイルド・アオス・イーム

彼は何になるだろうか？

BIRZ COMICS

家畜人ヤプー六

Egawa Tatsuya × Nuno Shiro

江川達也
沼正三

幻冬舎コミックス

YAP

POO, THE HUMAN CATTLE

家畜人ヤプー

かちくじん

YAPOO, THE HUMAN CATTLE

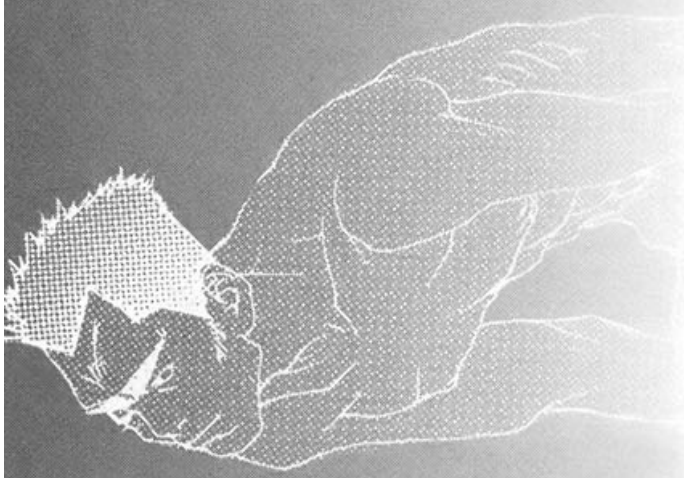
Egawa Tatsuya × Numa Shozo

YAPOO

六

幻冬舎アウトロー文庫「家畜人ヤプー」より

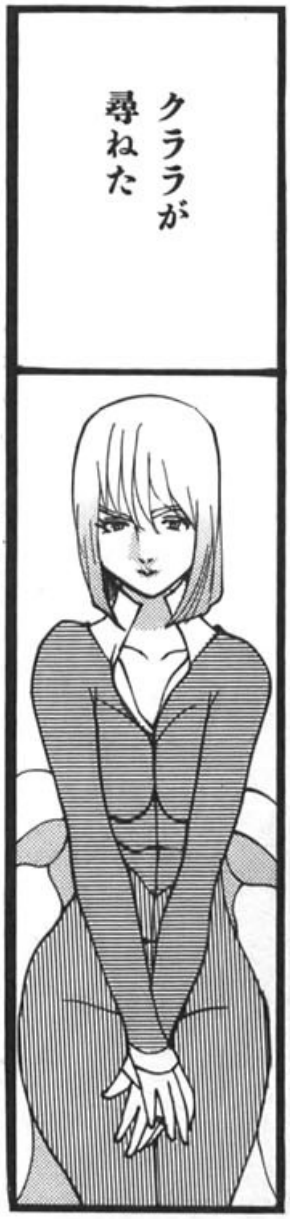
作画 江川達也
原作 沼正三

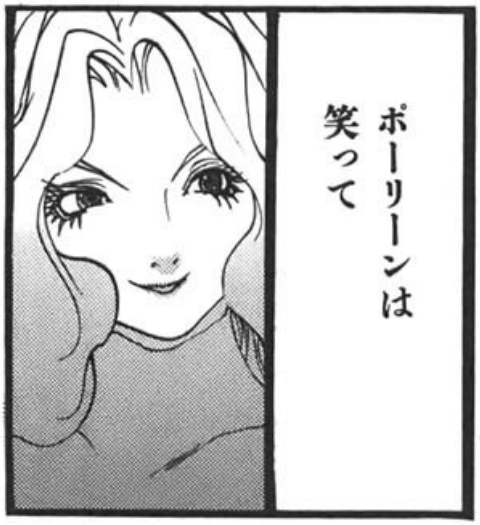


YAPOO,THE HUMAN CATTLE 6 CONTENTS

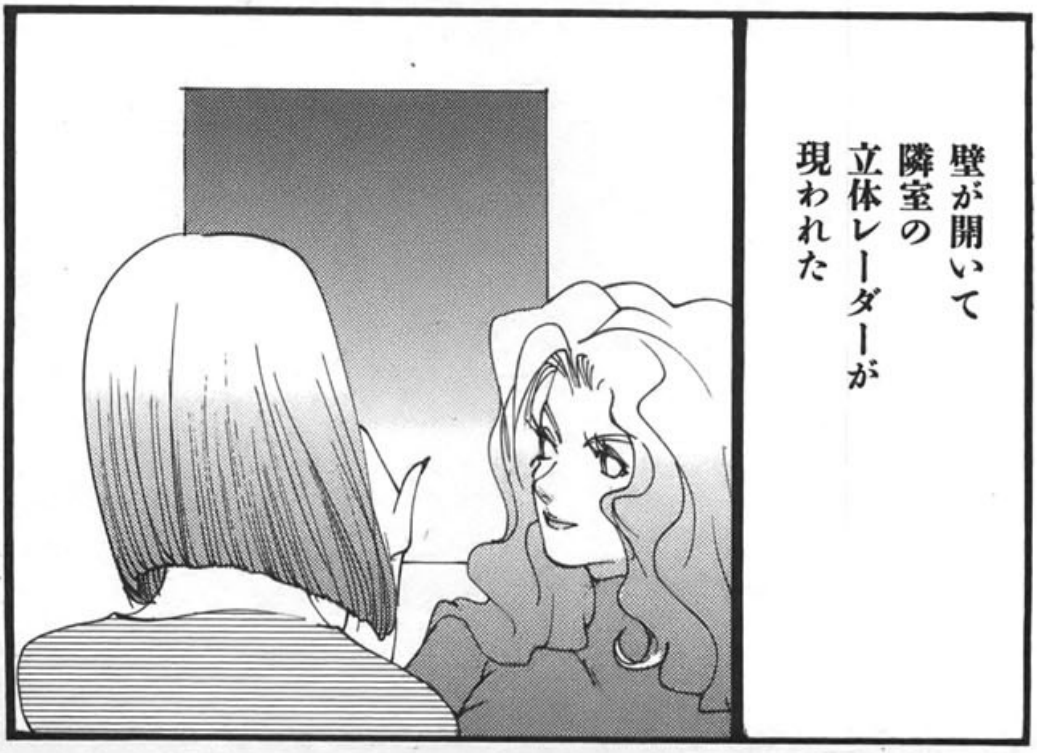
第十一章 別荘到着第一歩
第一話 5
第二話 41
第三話 77
第十二章 水晶宮の上階と地階で
第一話 97
第二話 115
第三話 151


別荘（ヴィラ）は
どこに
ありますの？


クララが
尋ねた

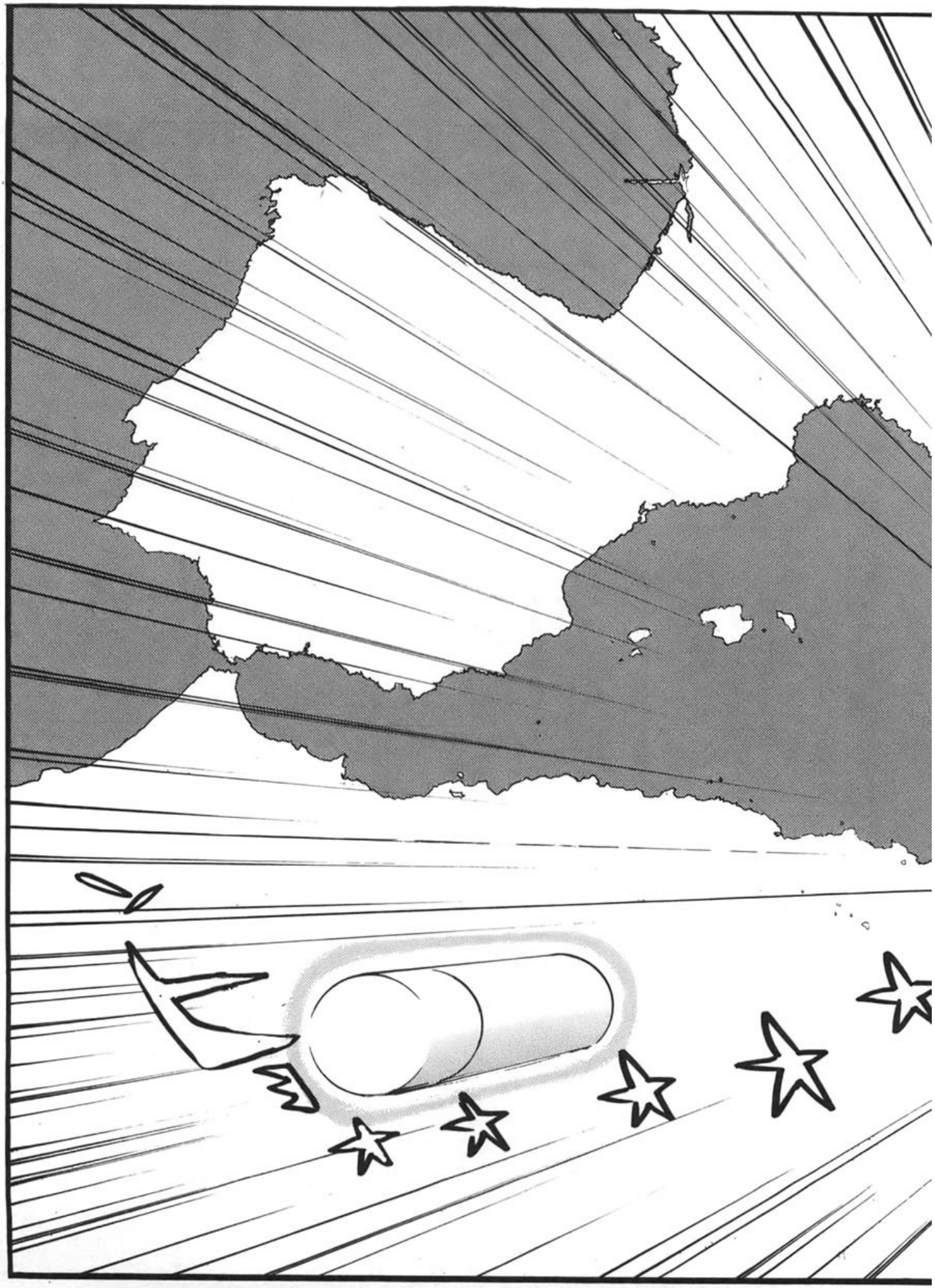

ポーリーンは
笑って


さあ
自分で
ご覧なさい


壁が開いて
隣室の
立体レーダーが
現われた


あ
シシリー島
……

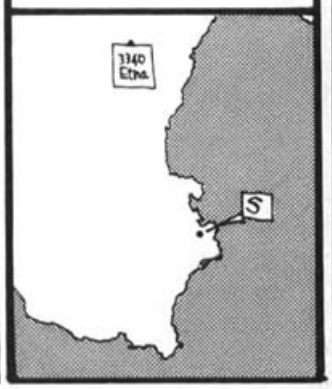

地図で
見慣れた
長靴の先が
見える
第十二章 別荘到着第一歩 ―第一話―



東海岸
エトナの山が
大きくなった



さらに
その南



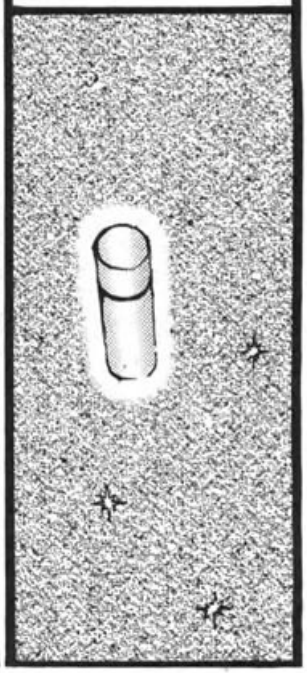
シラキューズに
近いあたりか



半島の
先端部だが
入江らしい
水面が光る



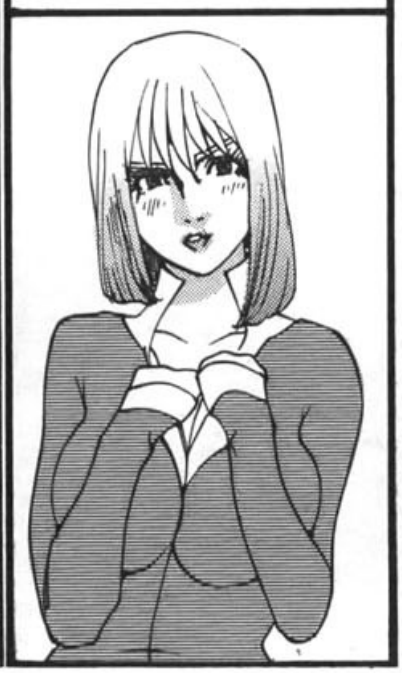
それから
かなり
離れた地点だ



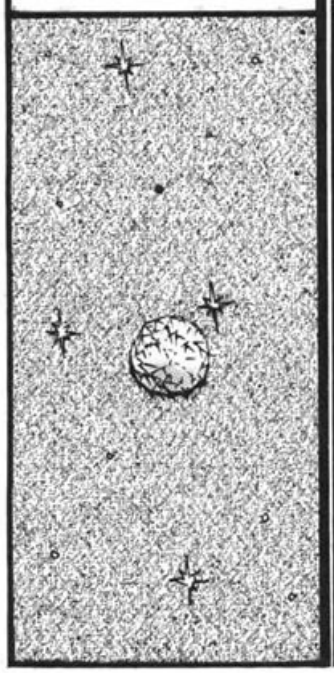
まあ
美しい……



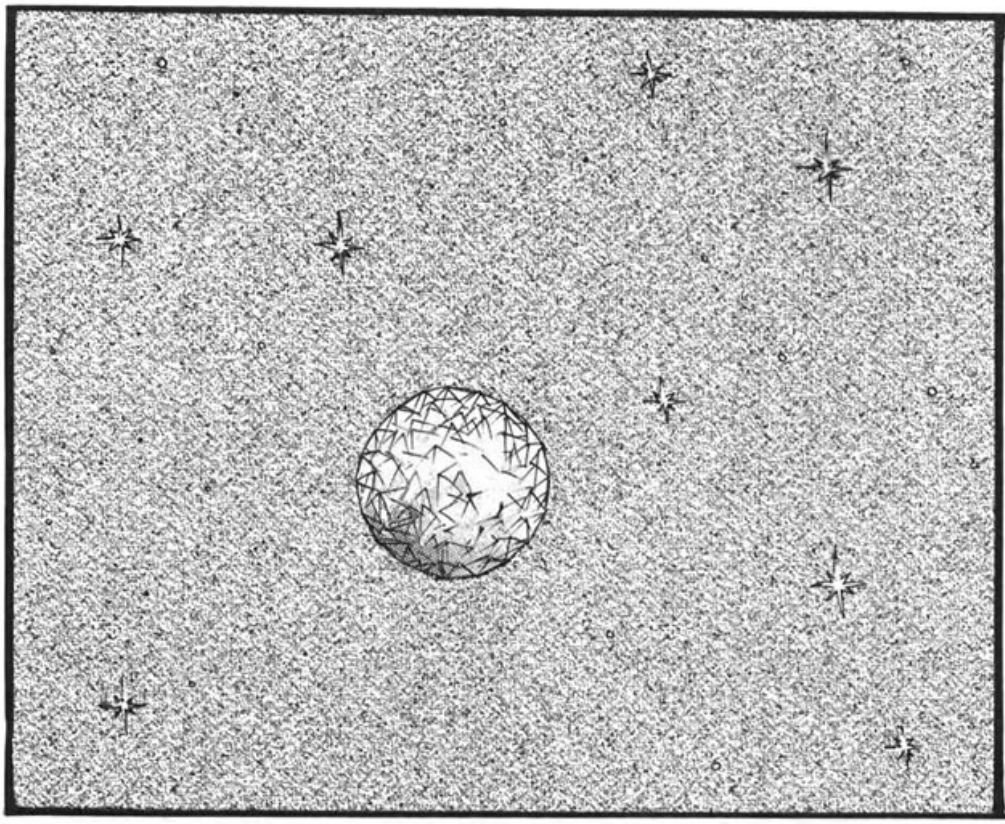
クララは
思わず
嘆賞の声を
放った



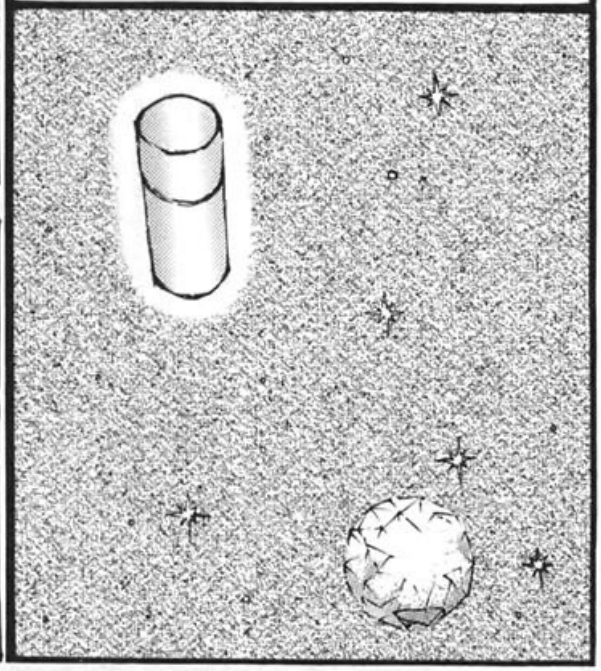
緑の絨毯に
大粒のダイヤを
落したとても
比喩したいような



広々とした
芝生に囲まれた
正多面体の
水晶宮(クリスタル・パレス)が



円筒(シリンダー)の
はるか斜め下方に
陽(ひ)の光を受けて
キラキラと
輝いていたのだ



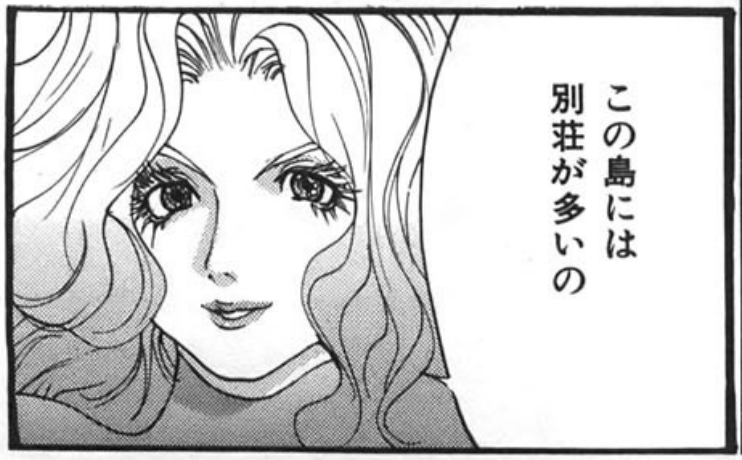
光は
西から
射して
来ていた



今
原球面は
秋の午後なの
だった



この島には
別荘が多いの



この辺
六十キロ四方
くらいが
うちの地所よ

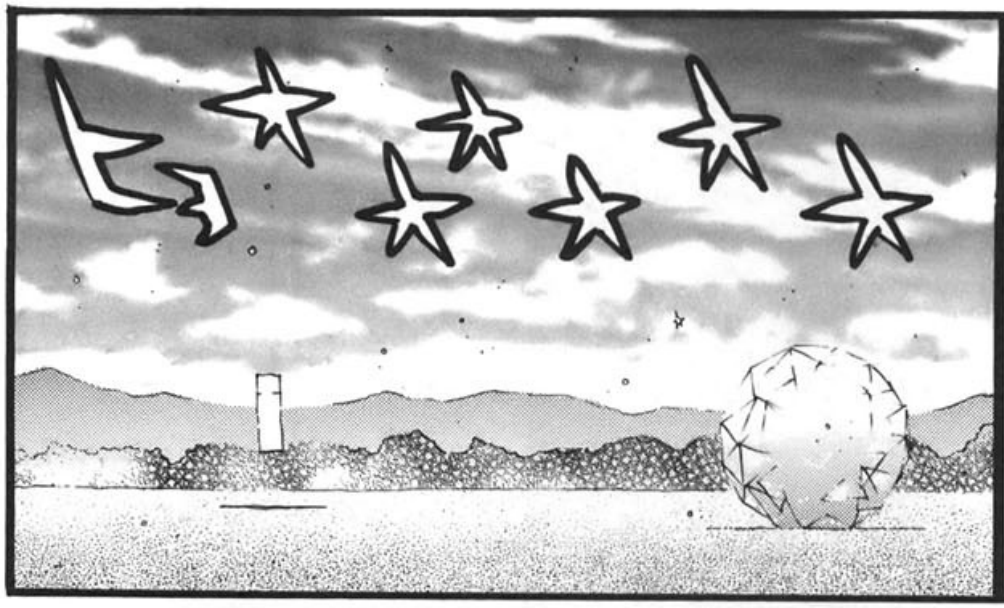
二つ目の
地球別荘だけど
前のよりいい

隣は
卿(レディ)アグネス・マック
といって
私の親しい
公爵の地所

ちょうど
彼女も地球に
来てるところなの

ポーリーンが
説明しているうちに
円筒船は
下降し続け

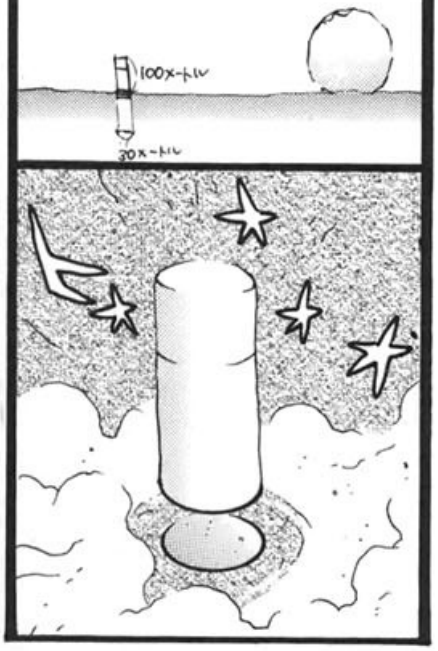
水晶宮からは
だいぶ離れて



……と
思うと



芝生の中に
径三十メートル
ほどに光る
金属板上に
着陸した



意外
さらに
沈み続ける



金属板は
深さ百メートル



船体を
完全に地中に
格納しうるだけの
竪穴の蓋に
なっていたのだ



出入口の
扉が開くと

立派な
地下街があった

地上は
芝生でも

下は
驚くべき
文明世界が
開けていた

一別荘とはいえ
地下には
一都市があるのだ
……

地下街の
床が
そのまま
動いている

それは
床にいくつかの
帯状の
仕切りがあり

一定方向に
絶えず
動いているの
だった

帯と帯が
交差するところでは
立体交差させて
停滞しないように
なっている

そして
一方向には
必ず逆方向のが
隣り合っていた

動路（エスカロード）で
行こうね

ポーリーンが
いった

エスカロード？

では
これは
一種の道路
なのか！

なるほど
前史時代の
都市でも

似たものが
開発されては
いた

しかし
これほどの
規模で
これほどの
様式をもって

都市機能を
コントロールしている
状態を見ることは
なかった

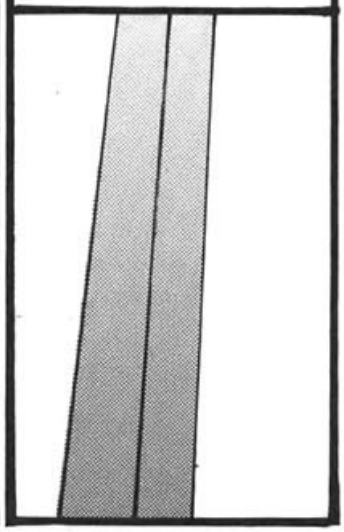
この
地下都市は
いったい
どれほどの
規模なのか？

その
全人口が
ただ一家族に
奉仕しているの
だろうか？

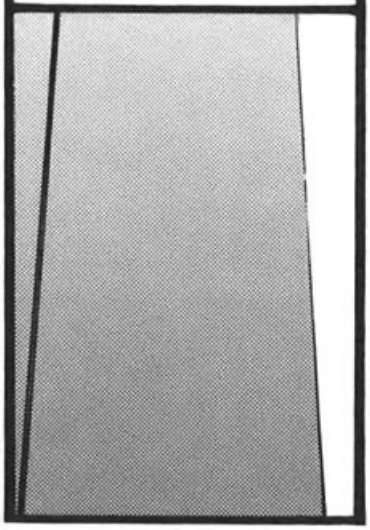
一行はまず
水晶宮のほうに
走っているらしい
動路に

ニューマを
先立てて
近づいた

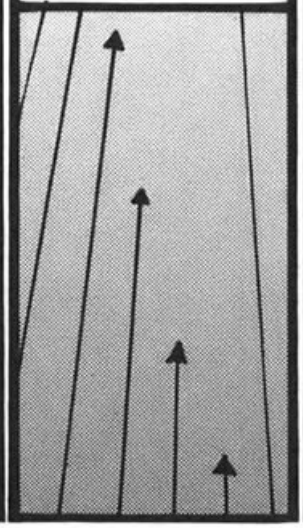
遠くからでは
わからなかったの
だが



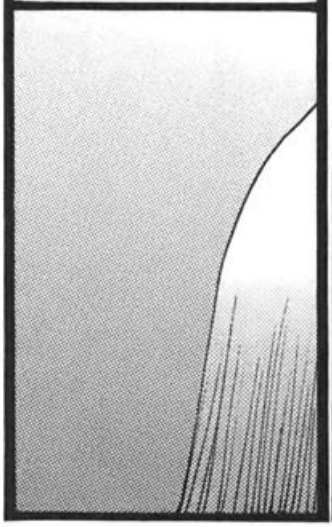
帯は
速度を異にする
いくつかの
移動路面で
できていて



端から
だんだん
速度が
増している



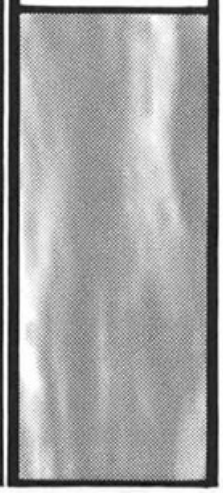
しかも
各部分の
仕切りが
見当らない



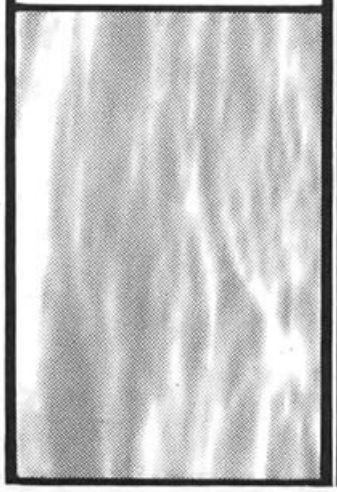
ちょうど
河の水が
岸辺で
ゆるやかに
流れ



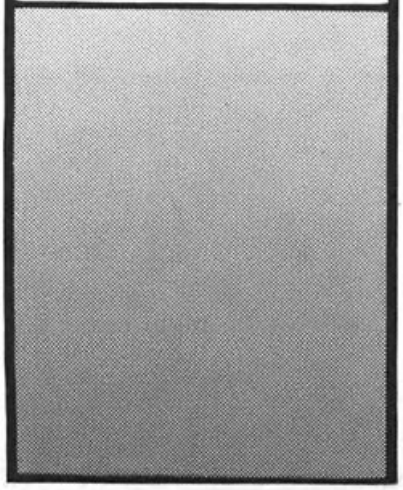
中流では
速く流れ



しかも
水面に区切りが
ないような
ものだ



この路面は
高密度粘性動体で
作られているので
ある



そこてまず
端の緩速(かんそく)の
帯に乗り

次々に
乗り換えて
最後に中央の
高速路面に
達するように
なっている

端の
路面から
奥の
中央路面を
見ると

ピュ～～～

ひどく
速くて
とても
乗り移れそうも
ないが

すぐ隣の
路面からは
楽に
移れるのである

これを
複式動路(プルラル・エスカレ)という

もっとも
慣れれば
無造作に
乗り移れるの
だろうが

初めての
クララは
やはり
足を取られそうな
気がして

思わず
手を伸ばして
ウィリアムに
ささえてもらった



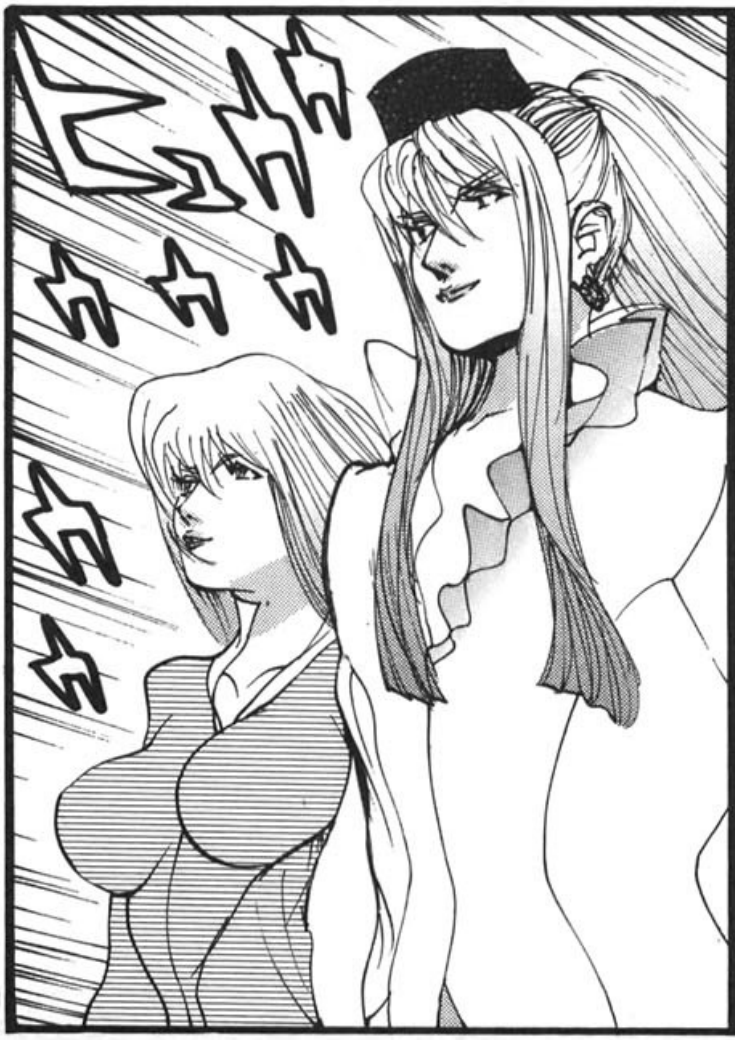
彼独特の
香水の匂いが
快く
鼻をついた



中央路面は
相当な快速だ

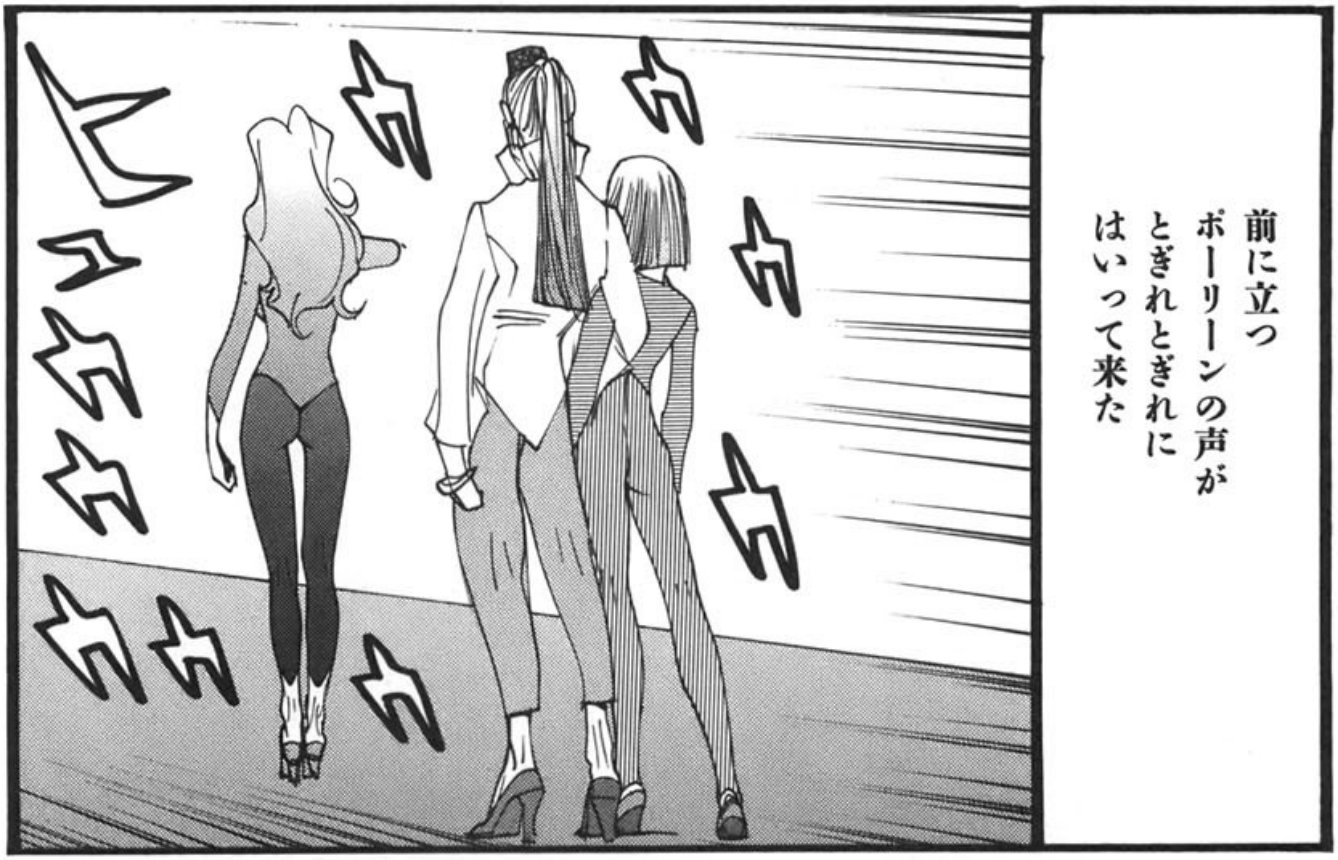


美青年と手を組んだまま
金髪を風になびかせて



足元の
路面の動きを
楽しんでいる
クララの耳に

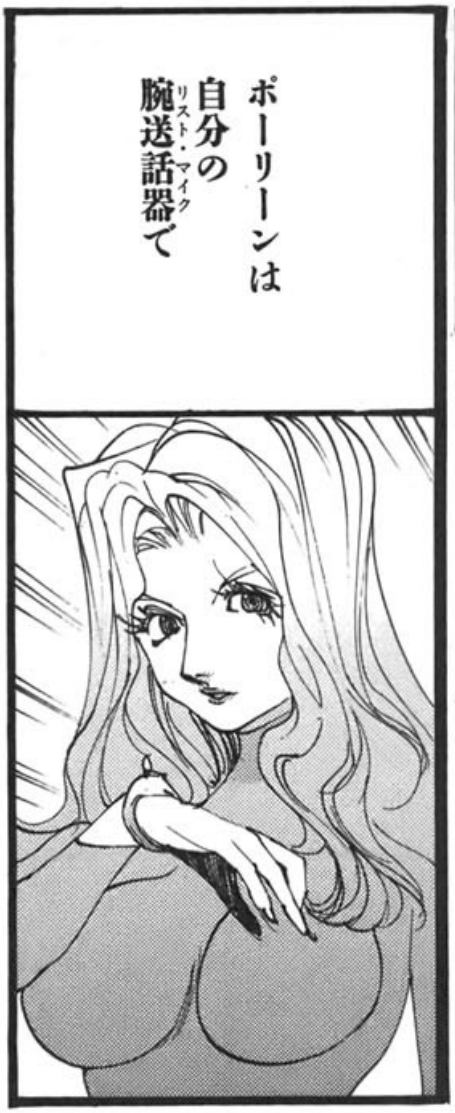



前に立つ
ポーリーンの声が
とぎれとぎれに
はいって来た

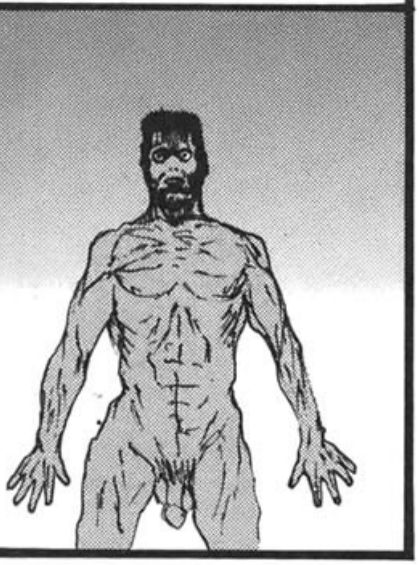

……から
獣医科手術室に
入れ…


…
緩解薬の
合成に
かかるよう…

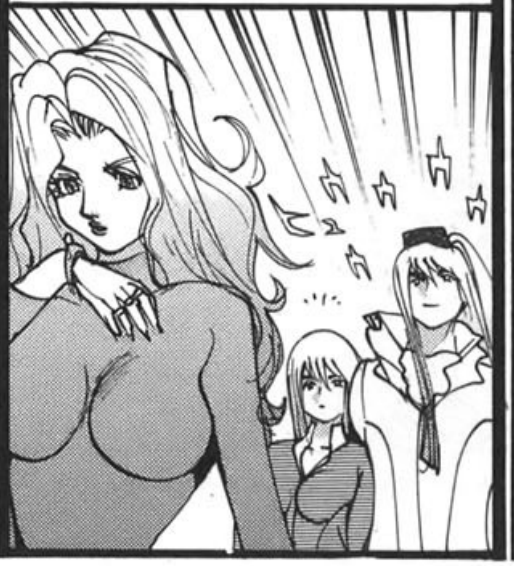

…さっき
ニューマに
咬まれたばかり
……


ポーリーンは
自分の
腕送話器(リスト・マイク)で

さっそく
麟一郎の
取扱い方を
指令しているのであった



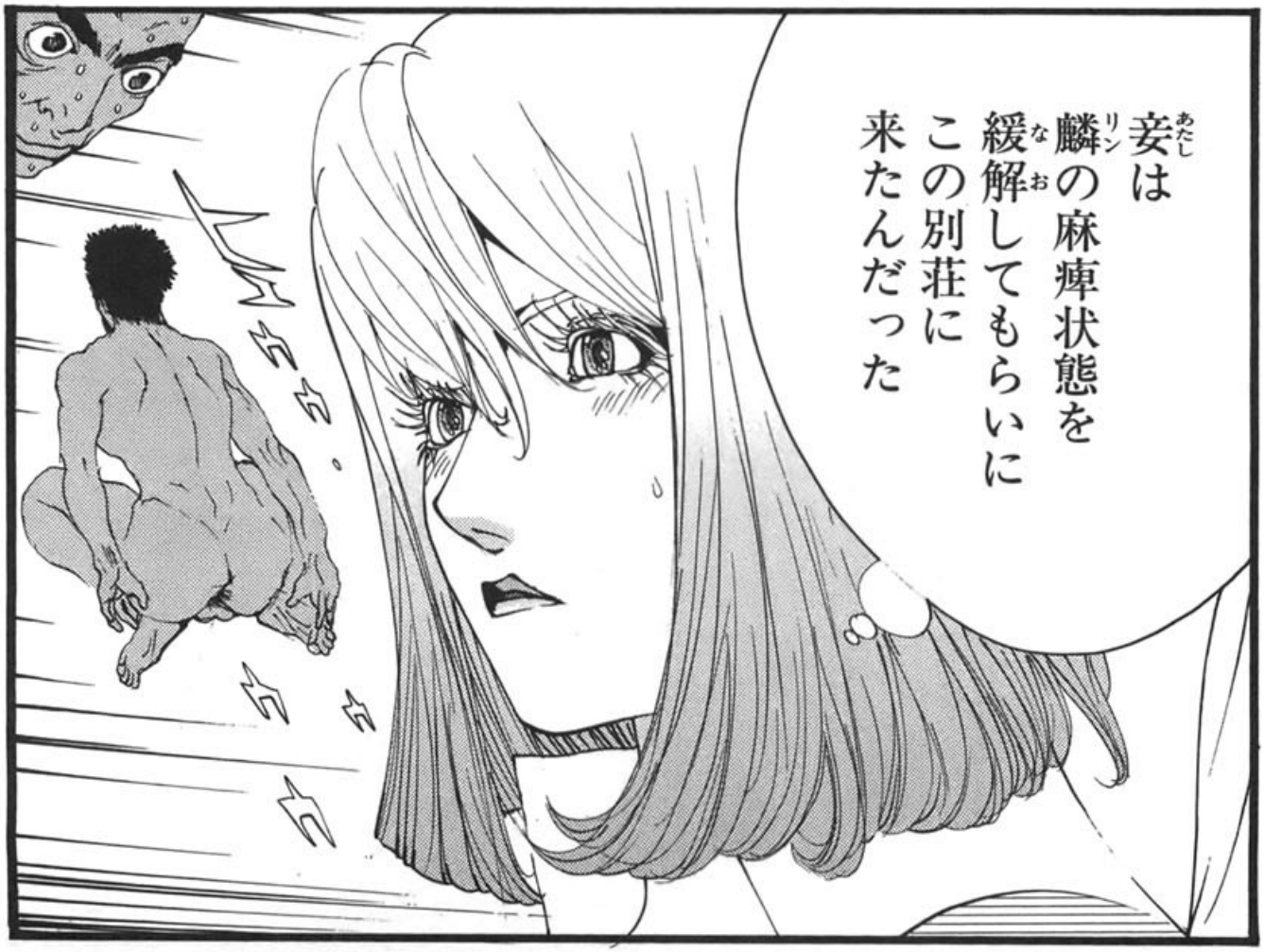
クララは
ハッと
彼のことを
思い出した



――
そうだ



妾は
麟の麻痺状態を
緩解してもらいに
この別荘に
来たんだった

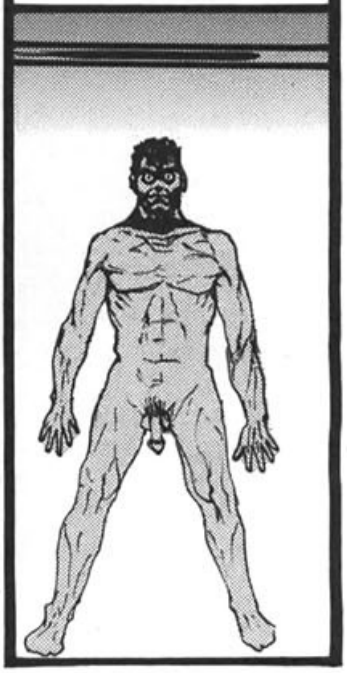


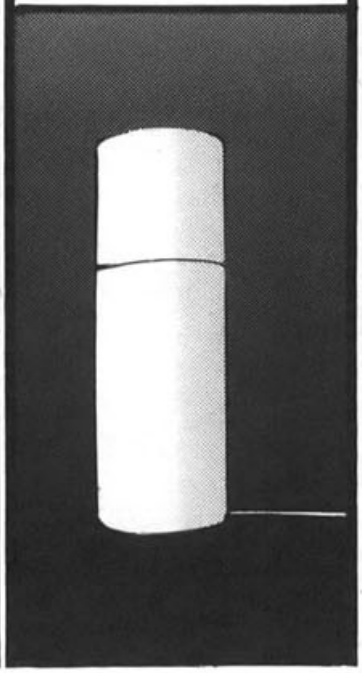
いったい
麟は
どうしてるの
かしら？

この動路（みち）を
後から
来るのかしら？

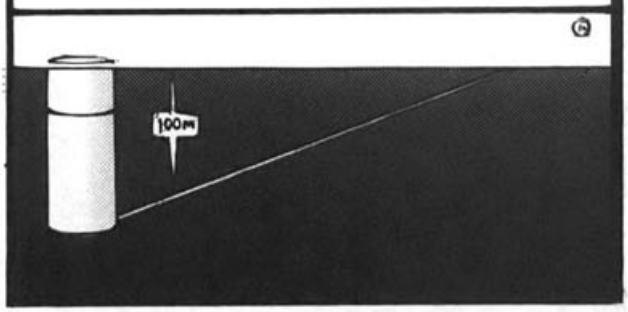
麟一郎は
隧道車（トンネル・カー）の
中にいた

「氷河号（グレイシア）」の
船底部から
外に出たところに





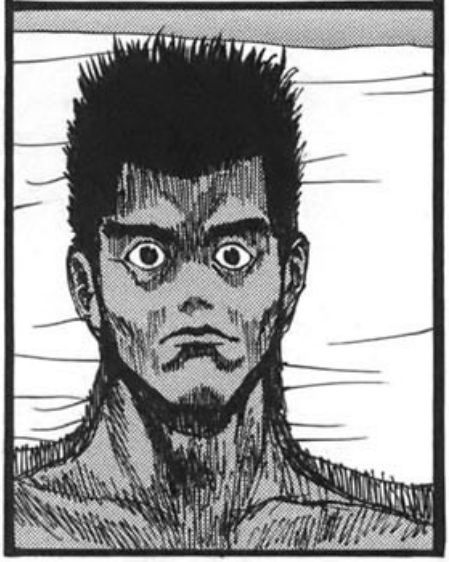
水晶宮の
地階に通ずる
地下百メートルの
深さの
地下道があり



これが
「氷河号」
乗組黒奴たちの
通路なのだ



麟一郎の耳に
二人の会話が
聞えて来た



さっき
このヤプーの
背中に鞭(むち)を
あてたことな

あれ
黙ってて
くんなよ

頼む
な……

さアて
俺も
公売(せりうり)されるのは
嫌だでなア

俺は
ボーリング・ピンに
されちまうかも
知れねエんだぜ

頼むよ
なア

俺は
うっかり
してたんだ

こんなことで
死にたくねエ

この会話を
理解して
いただくため



黒奴犯罪に
対する
「刑法典」の条文を
紹介しておこう



黒奴刑法第十九条

※人間ノ権利ヲ
侵害シタル者ハ
死刑三級ニ処ス

同第二十五条

日記報告（デイリー・レポート）ニ
嘘言アルモノハ
私刑公売（オークション・フォア・リンチ）
auction for lynch
ニ処ス

同第二十六条

他ノ黒奴ノ
犯罪ヲ知リテ
報告セザルトキハ
嘘言アルモノト
看做（ミナ）ス

同第百三十一条

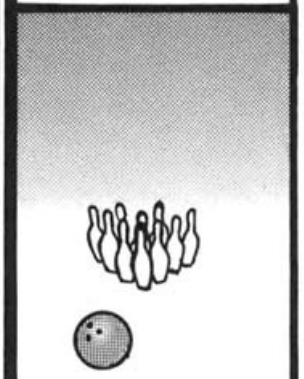
死刑三級ハ
十柱戯（ボーリング・ボール）ノ球ヲ以（モッ）テ
執行ス

同第百九十三条

公売セラレタル
黒奴ノ処遇ハ
畜人（ヤプー）ト同様トス

※ 白人のみを指す点に注意

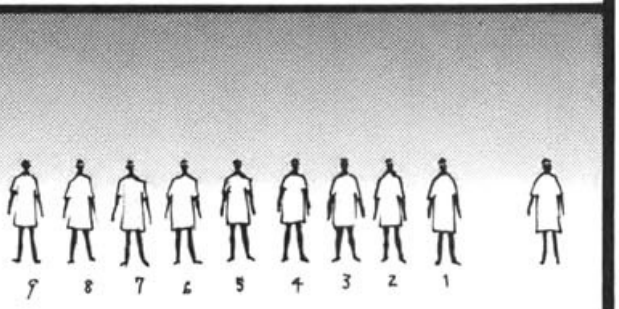
ボーリング・ボールによる
死刑というのは



犯行黒奴を
縮小し



生体複写に
よって
意識が
ないだけで
肉体的条件の
同じ写しを
九体作り



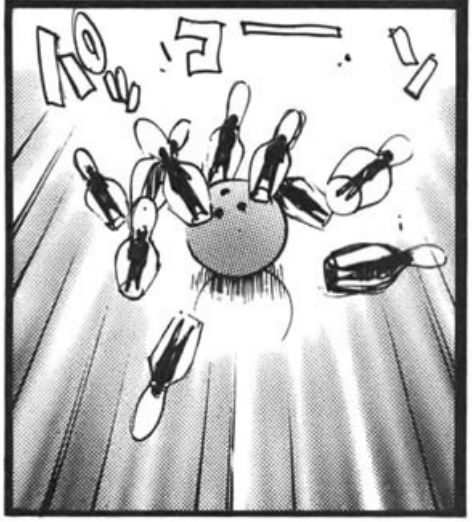
本物を
合わせて
十体を
ボーリング・ピンの
中に
閉じ込めて
しまい



これを
権利を侵害された
白人に
ボールと
ワンセットにして
交付する



ボールで
ふっとばされるごとに
意識を失う
ショックを受け



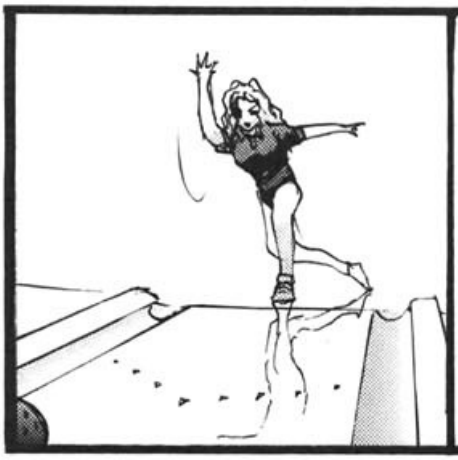
また
回復し
また
ふっとばされ



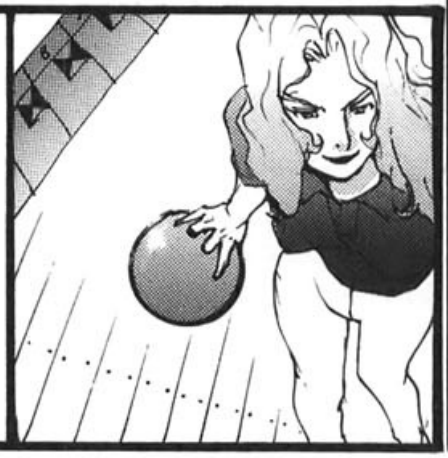
何百回となく
繰り返されるうちに
結局死亡するのだが



白人は
ボーリングを
楽しみながら



忘れてしまったころ
刑の執行を
完成することになる



犯行黒奴は
被害白人に
その楽しみを
与える点で



身を以て
慰謝料を
支払わされることに
なるのだ



次に
私刑公売に
ついて
いま少し
補足すると



貴族は
黒奴の生命を
奪うことが
できるが



ヤプーと
同じに
扱うことまでは
できないし



平民は
一般に
黒奴の生命を
尊重せねば
ならない



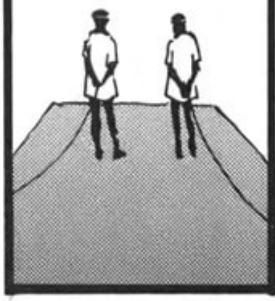
つまり
黒奴は
半人間としての
法律の保護を
受ける



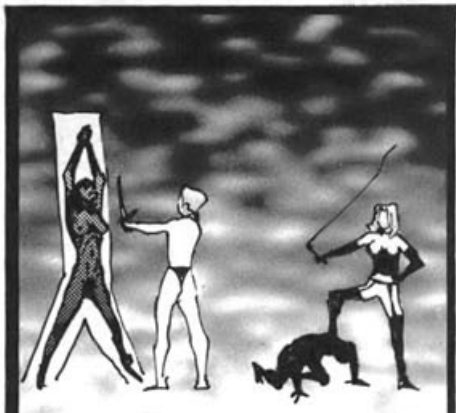
この保護を
公に奪って
ヤプー並にするのが
私刑公売の
刑であって



私刑用として
せり売りされる



※落札者は
この黒奴に
どんなリンチを
加えてもよい

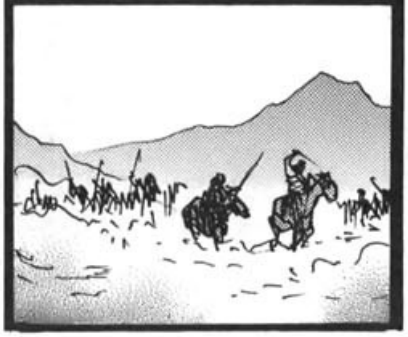


※ もちろん白人に限る。平民が多い

これで
民衆の
サディズム本能を
満足させている
ことが



戦争競技の
存在と並んで



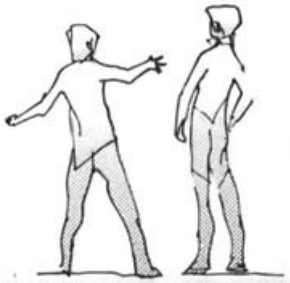
イース世界に
内乱などの起らぬ
心理的根拠だと
いわれている



黒奴や
ヤプーを
殺すことに
よって



白人同士の
殺し合いを
防止しているのが



※「イースの平和」
なのだ



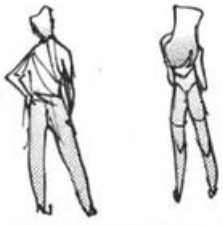
イース黒奴の
平均寿命は
三十年である

30年



——一方
白人は
天寿
ほぼ二百年を
享受している

200年



——が
それは
こうして
簡単に
殺されるから
なのである



——
つまらんことを
いっている



※ Pax Ehsia

俺の背中を
ちょっと
鞭打ったことより

俺を
釜の中に入れて
あんなひどい目に
あわせたことの
ほうが

よほど重大な
犯罪じゃないか

後で
体が利くように
なったら
此奴ら
ただじゃ
おかないから
……

その時
車が停って
降ろされた

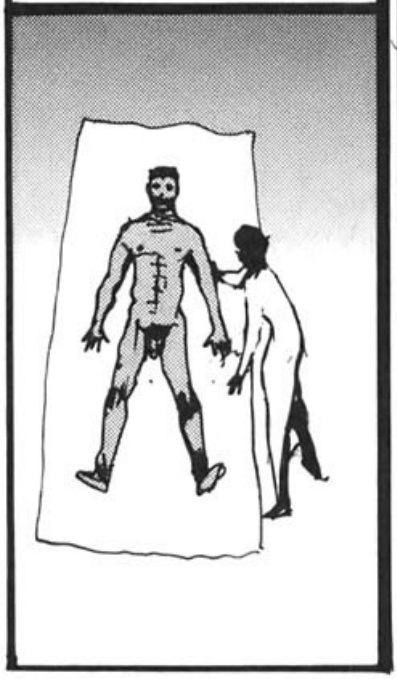
白人が
一人も
いないなかを
担架は
移動して

獣医科手術室に
着いた

この行先については
先のポーリーンの命令が



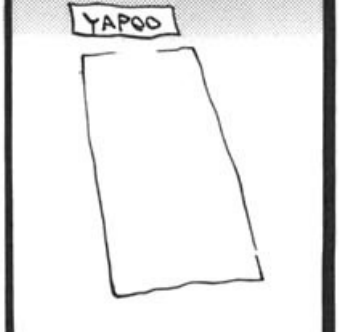
※黒奴看護婦が
麟一郎を寝台に
仰向けに寝かせた



召使頭（オーフ・サーバント）に
中継されて
護送の
二船員に
伝達されていた
のである



ヤプー専用の
寝台で



デルマトコンを
避けて
薄い金属板で
張ってある
冷たい寝台
だったが



彼の皮膚は
もはや
その冷たさを
感じないの
だった



獣医（せんせい）は今
お薬を作って
らっしゃるから



※黒奴社会には女権制はないので、黒奴女は昔のように「女らしい」のである。

看護婦は
護送の
両黒奴に
そう
いいながら



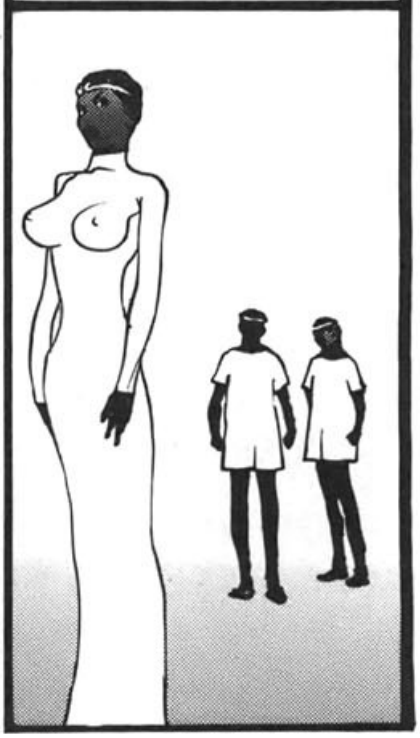
導尿管(カテーテル)を
挿入した



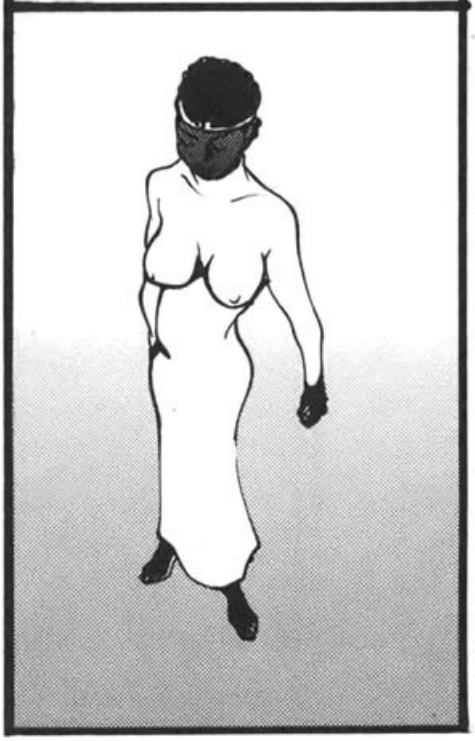
慣れた
手つきで
麟一郎の
体を扱い



看護婦の
制服は
男奴(おとこ)男たちの
半袖・半ズボンと
異なり



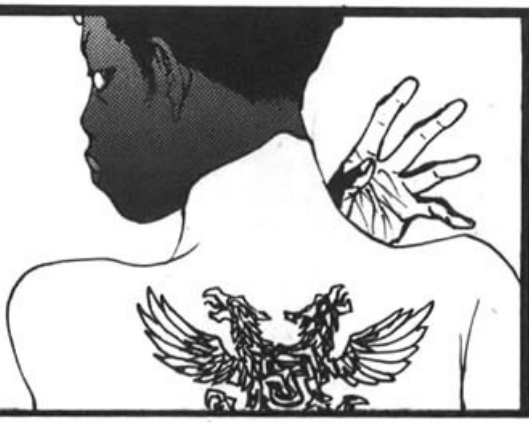
手首足首まで
とどく
長袖・長股引(ももひき)だが
肌に密着しており



やはり
尻で割れる
コンビネーション
仕立だった



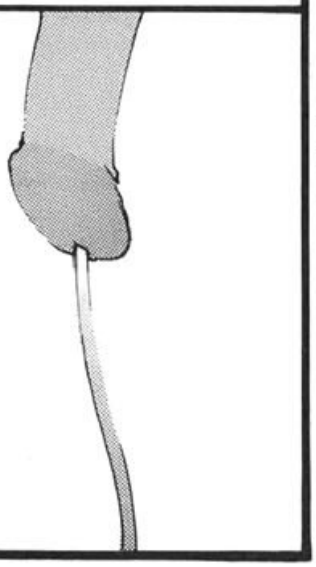
背中の
ジャンセン家の紋や



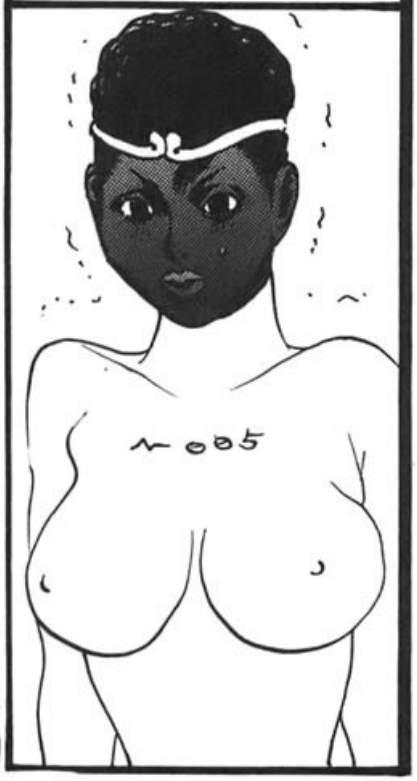
胸のN5号の
繍取(ぬいとり)も
色が派手で
女性好みで
あった



ヤプーに
導尿したので



つられて
自分も尿意を
もよおした
彼女は



椅子のわきに
引っ掛けてあった
真空便管の
先端器(コップラ)を



取りあげて



股にはさんだ



黒奴の股には
孔釦(ホール・ボタン)はないが



コンビネーション仕立
だから
挿入に不便はない



これは
彼女の
専用器で



これがあるから
一日中
この部屋を
離れないでよい



また
離れては
ならない



便利で
あるが



その
便利とは結局
黒奴を使用する
白人のための
便利さに
すぎないのだ



先端器を
元にもどすと
またヤプーの
検査である



口から
胃内鏡を
さし込み



エンジン虫の
頭部が
幽門の
適正部位に
付着してるか
どうかを
調べた



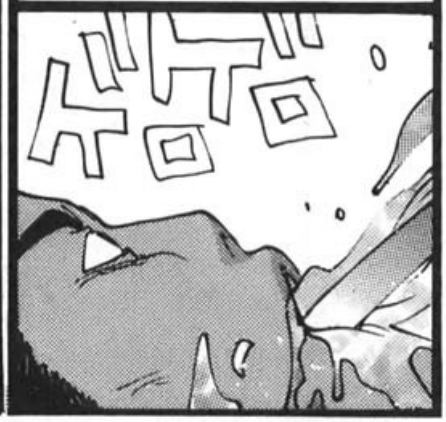
異常なし



伝声管で
その旨
獣医に
報告すると



胃内鏡挿入の
刺激で
麟一郎が
嘔吐した



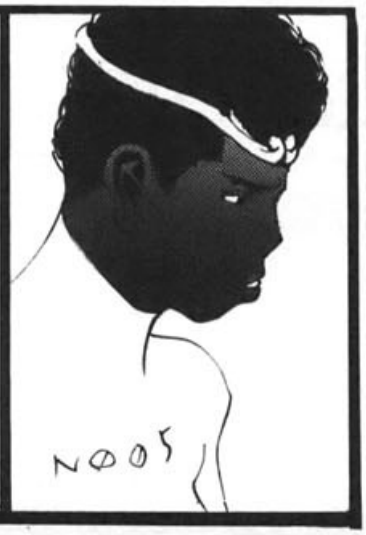
麻痺したまま
口から
汚物が
あふれ出すのを
認めて



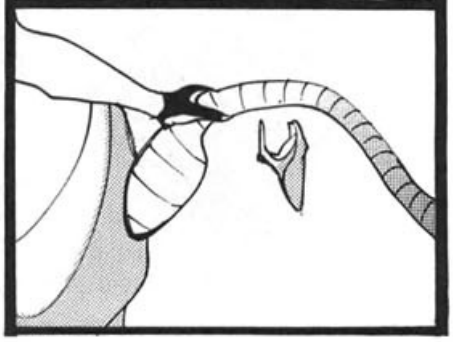
汚ならしい



舌打ち
しながら



つい今
自分が
使ったばかりの
先端器(コアラ)を
椅子のわきから
はずして



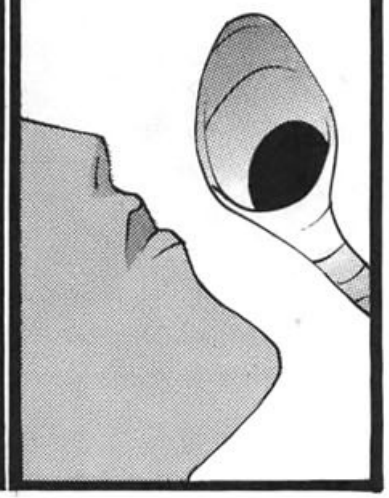
股当部を
麟一郎の
口に当てて
汚物を
吸い取り
掃除したうえ



消毒器に突っ込んだ



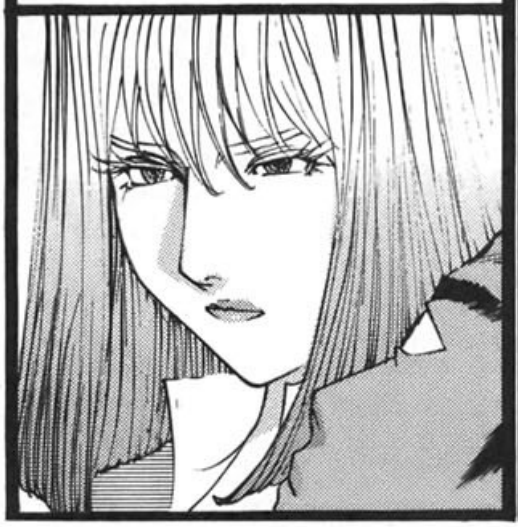
その接触で
汚れたのは
ヤプーの唇
ではなく
先端器なのだから



……
黒奴用の
便器に
接吻させられた
とは知らぬ
麟一郎は

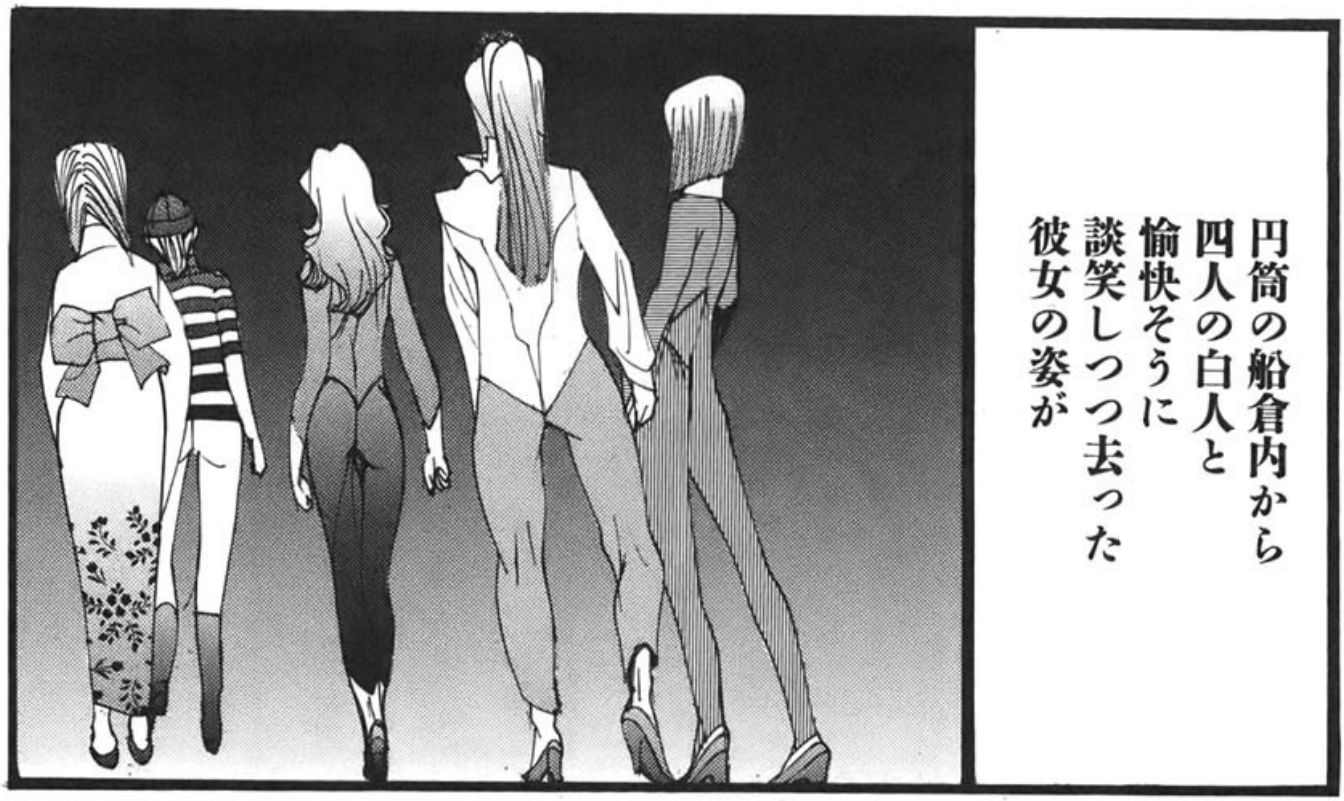


クララが
いっこうに
姿を見せない
ので



だんだん
心細く
なってきた




円筒の船倉内から
四人の白人と
愉快そうに
談笑しつつ去った
彼女の姿が


いまだに
目に浮かぶ
あれほど
誓ってくれたのに
来ないのは
何かあったのか
彼女の身に
……
それとも
俺のことを
忘れたのか
心変りしたのか

そんなはずは
ない……

疑心は
暗鬼を生み

思いは
千々に
乱れるばかり
だった

麟一郎が
寝台に
横たえられたころ





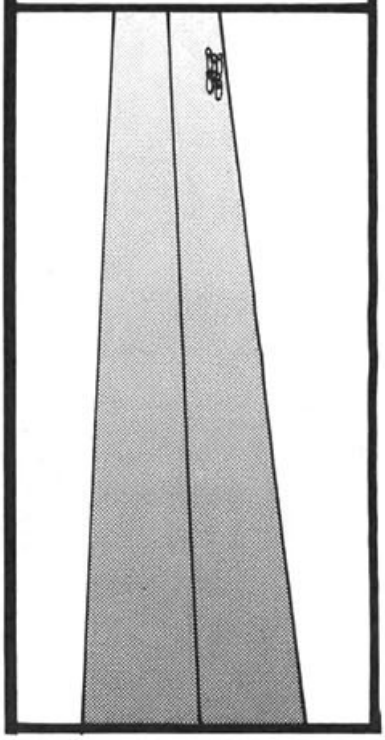


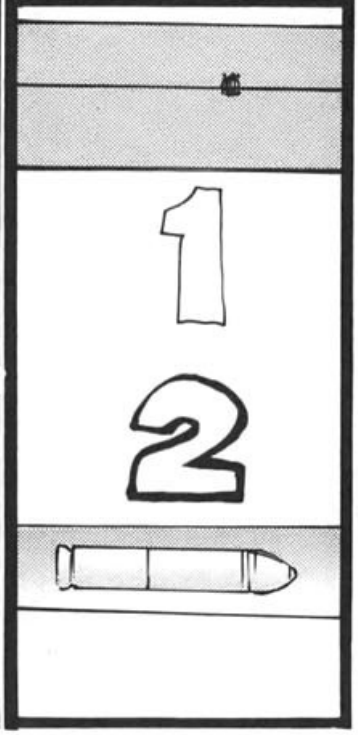


クララたちの乗る
中央路面は
ようやく
地階第一階の
ステーションに
達した

速い
といっても
道路は
隧道車の
半分くらいしか
速度が出ない

その代り
気まぐれな
白人たちが急に
「氷河号」を
使う気に
なった時にも









知らせを
受けて
後から出た
船員たちが

先に
円筒に乗り込んで
諸般の準備を
してしまえる等の
便利があった

速いばかりが
能ではない

イース人は
生活の
快適さをこそ
求めるので
ある

――
麟(リン)はほんとに
ヤプーなの
かしら？

一度
麟一郎のことに
考えが
向いてからは

この問題が
ずっと
心を占領し続けて
クララを
悩ましていた

円盤内で
見た

人犬（フント）

肉足台（バンク）

肉便器（シュトウール）

などから
考えて

ヤプーと
称（よ）ばれる
似而非人類（プソイド・メンシュ）の
存在は
疑えない

そして
彼女は
このヤプーには
同類としての
意識も同情も
持てそうにない

これらに
対して
イース白人と
同様な
感じを持ち

同様な
行動に出る
心理的準備が
整っている

矮人（ピグミー）に
対しても
それは
同じである

ただ
気がかりなのは
そのヤプーが
日本人の
末裔らしい
ことだ

なぜなら
麟一郎は
まぎれもない
日本人だから
である

日本人

たしか
ジャパニーズとか
ジャバニーズとか
いう……

と
ポーリーンは
いった

「黄色い猿」
ともいった

どうも
日本人のこと
らしい

壁から
出て来た
奇形の
便器人間を
叱りつけた
ときの言葉も
日本語だった
ようだし

矮人は
死ぬとき
彼女の
バンザイを
祈ったが

バンザイ

これは
日本語として
聞いた
記憶がある

……もし
日本人は
すべてヤプーだと
いうのなら

……
もし麟が

――
ポーリーンたちは
このことに
何の疑念も
もってないが

クララは
まだ心から
そう
信じる気には
なれなかった

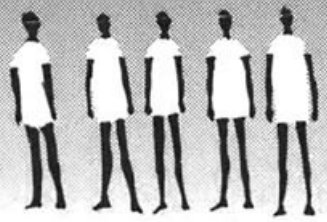
――
ほんとうにヤプー
だったら……

円筒の中では
芝居をする
必要上

麟一郎を
ことさらに
ヤプー扱いは
したものの

しかし
ヤプーでないと
言い切る自信も
ゆらいできて
いるのだった
……

五人の
黒奴が
出迎えて
いた



制服は
同じく
コンビネーション
でも



色が
船で見た
召使(サーバント)いたちと
違って
桃色であった



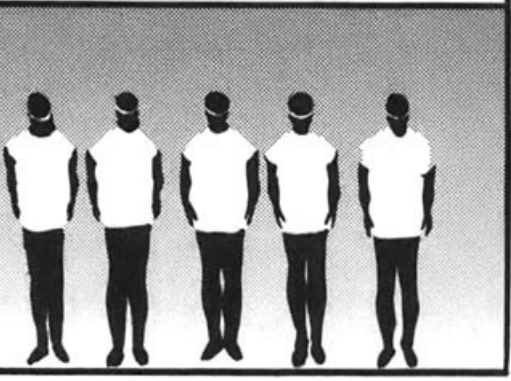
これは特に
主人の身の回りの
世話をする
名誉の召使いを
示す色で



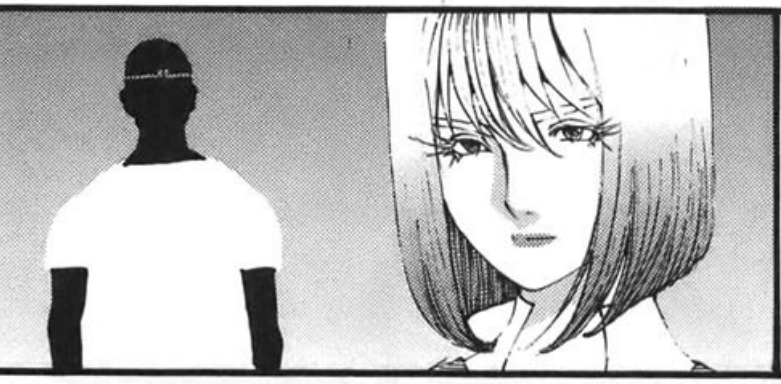
従者(フットマン)と
称(よ)ばれる



一人一人が
自分の主人を
迎えに
出てるのだ



クララにも
もう従者が
定まっている
手回しのよさ
だった

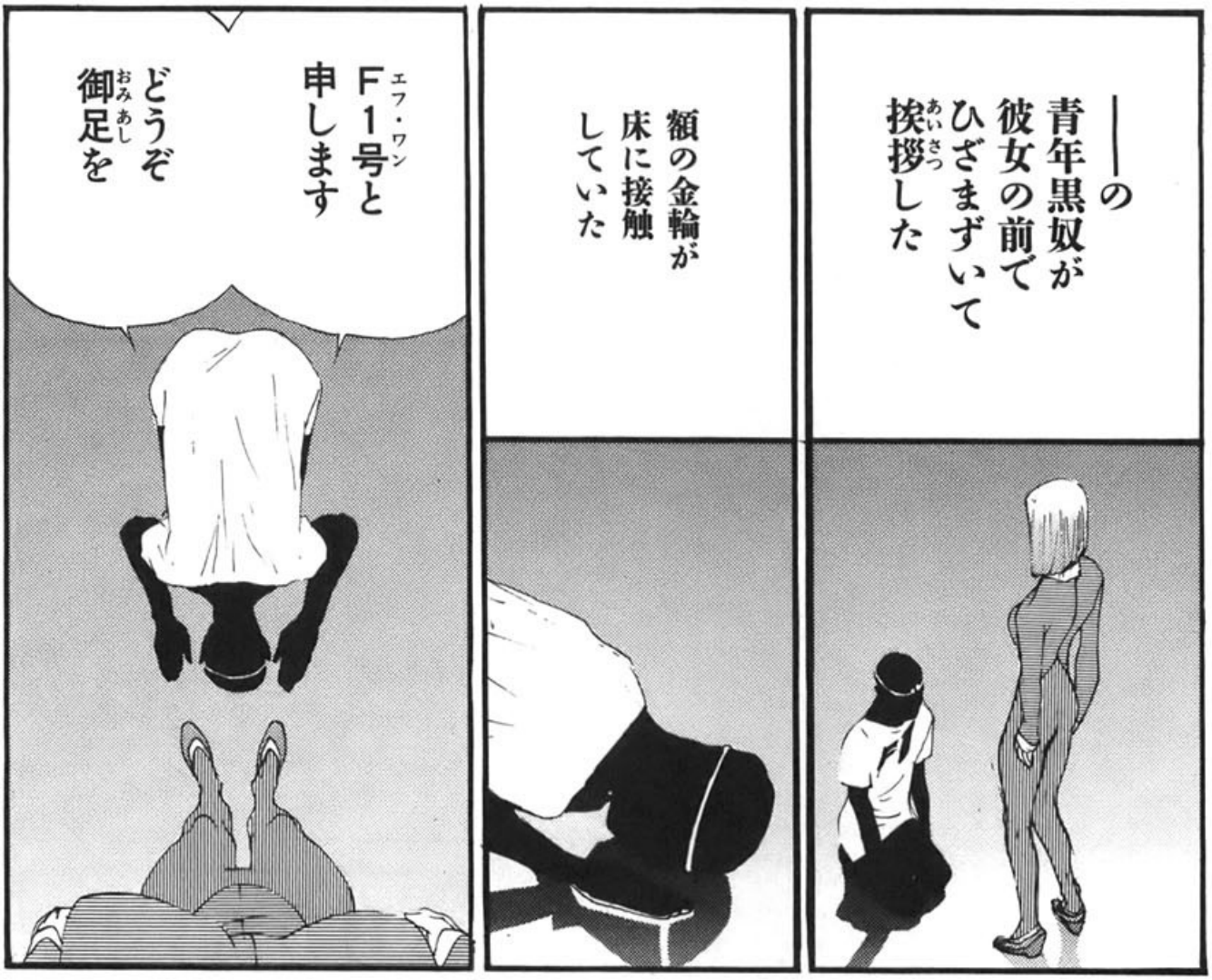


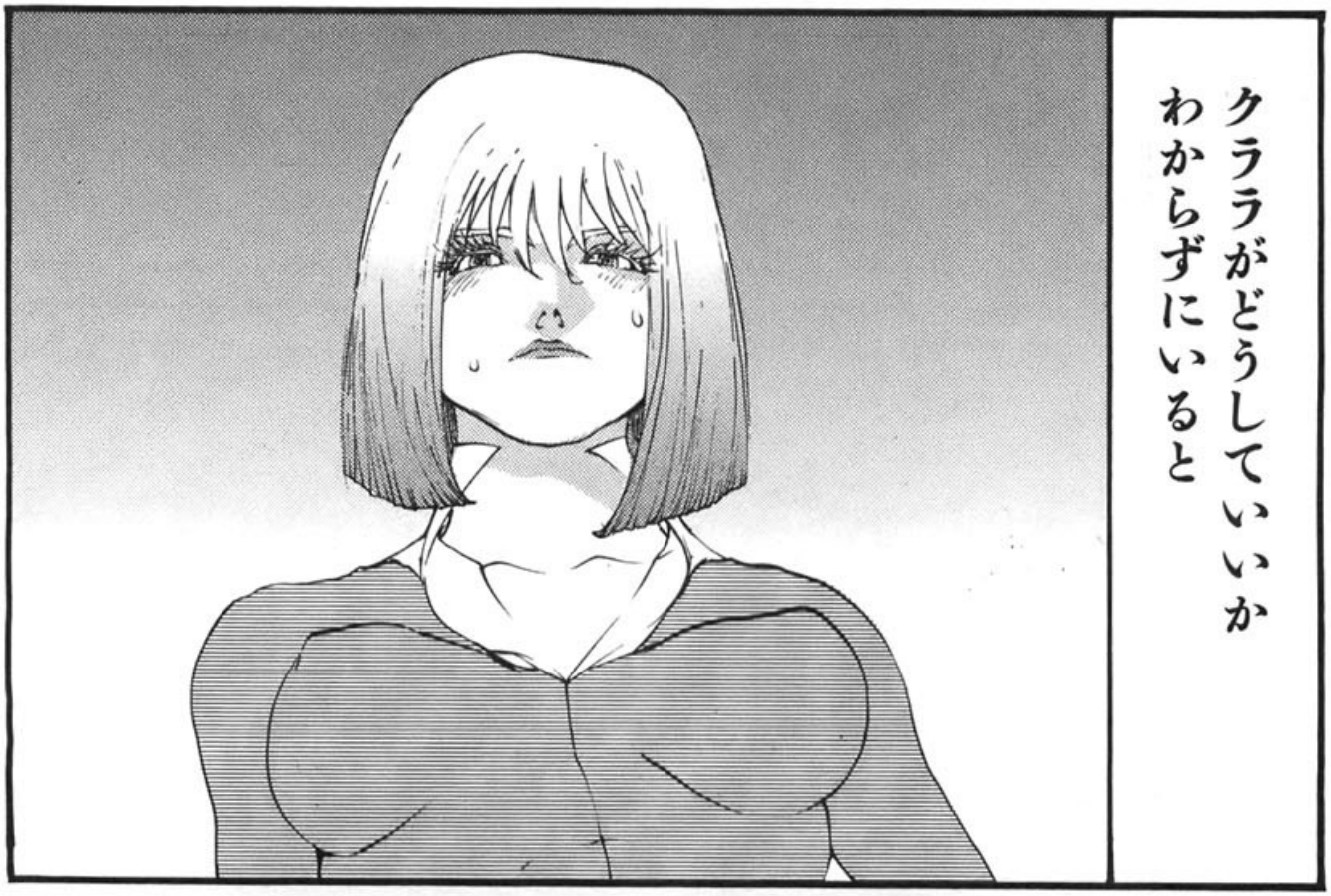
胸番号F1

――Fは小さく1は大きい



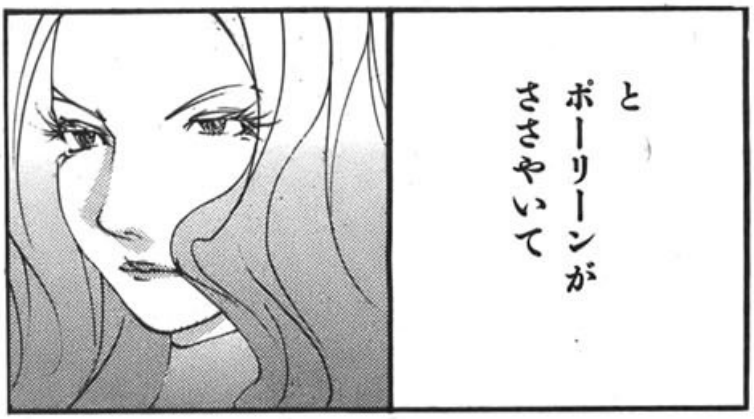
第十二章 別荘到着第一歩 ―第二話―


——の
青年黒奴が
彼女の前で
ひざまずいて
挨拶(あいさつ)した
額の金輪が
床に接触
していた
エフ・ワン
F1号と
申します
どうぞ
御足(おみあし)を

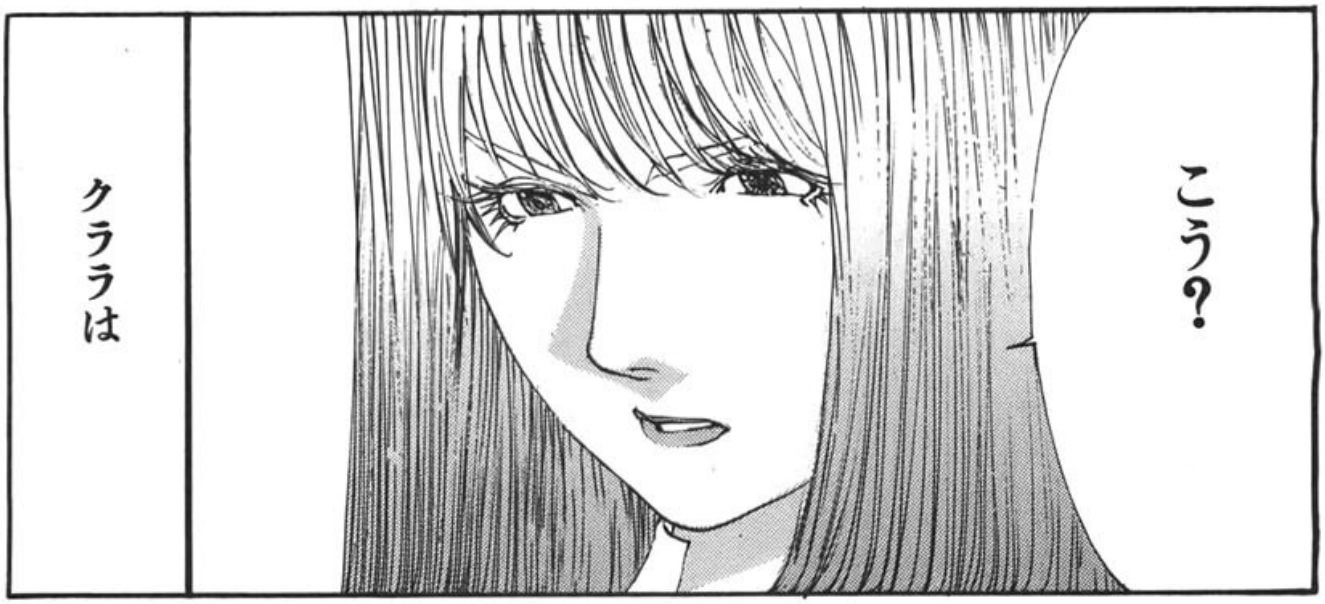

クララがどうしていいか
わからずにいると


足項礼(フット・ネッキング)
foot-necking
といってね


ここを踏んでやるの
強(きつ)いほど喜ぶのよ


と
ボーリーンが
ささやいて


靴(くつ)を
ちょっと
あげて
彼の項(うなじ)を
指した


こう?
クララは

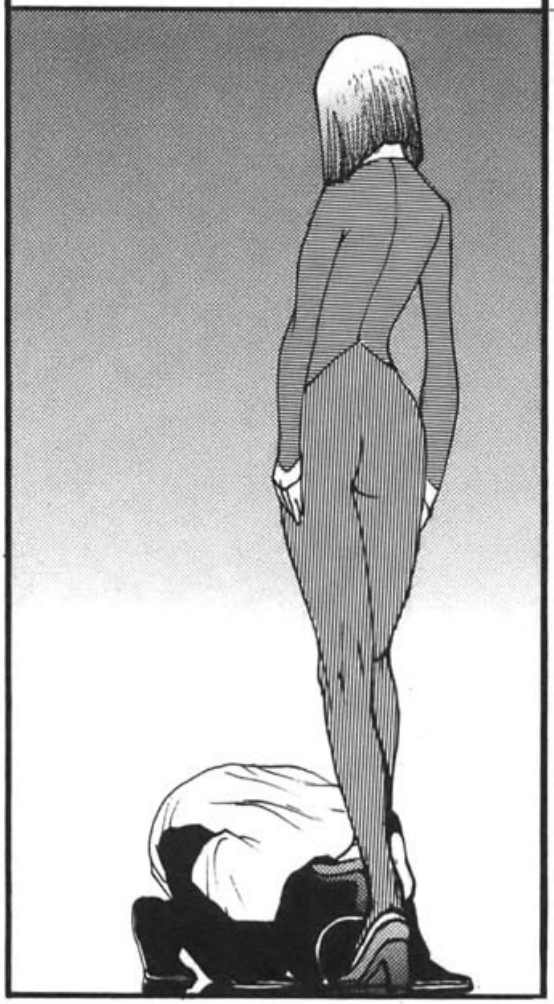
奴隷制当時の
アメリカでも
こんなことは
しなかった
だろうに



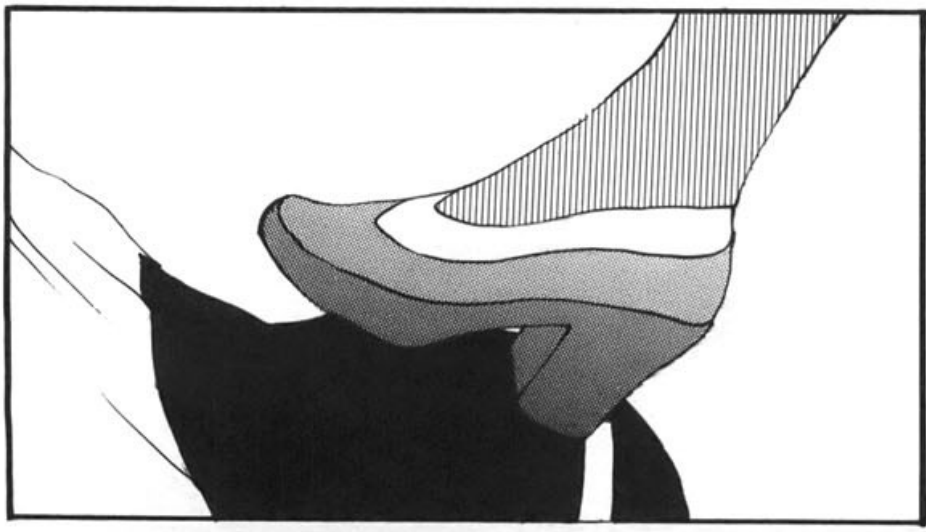


と
内心
驚きながらも

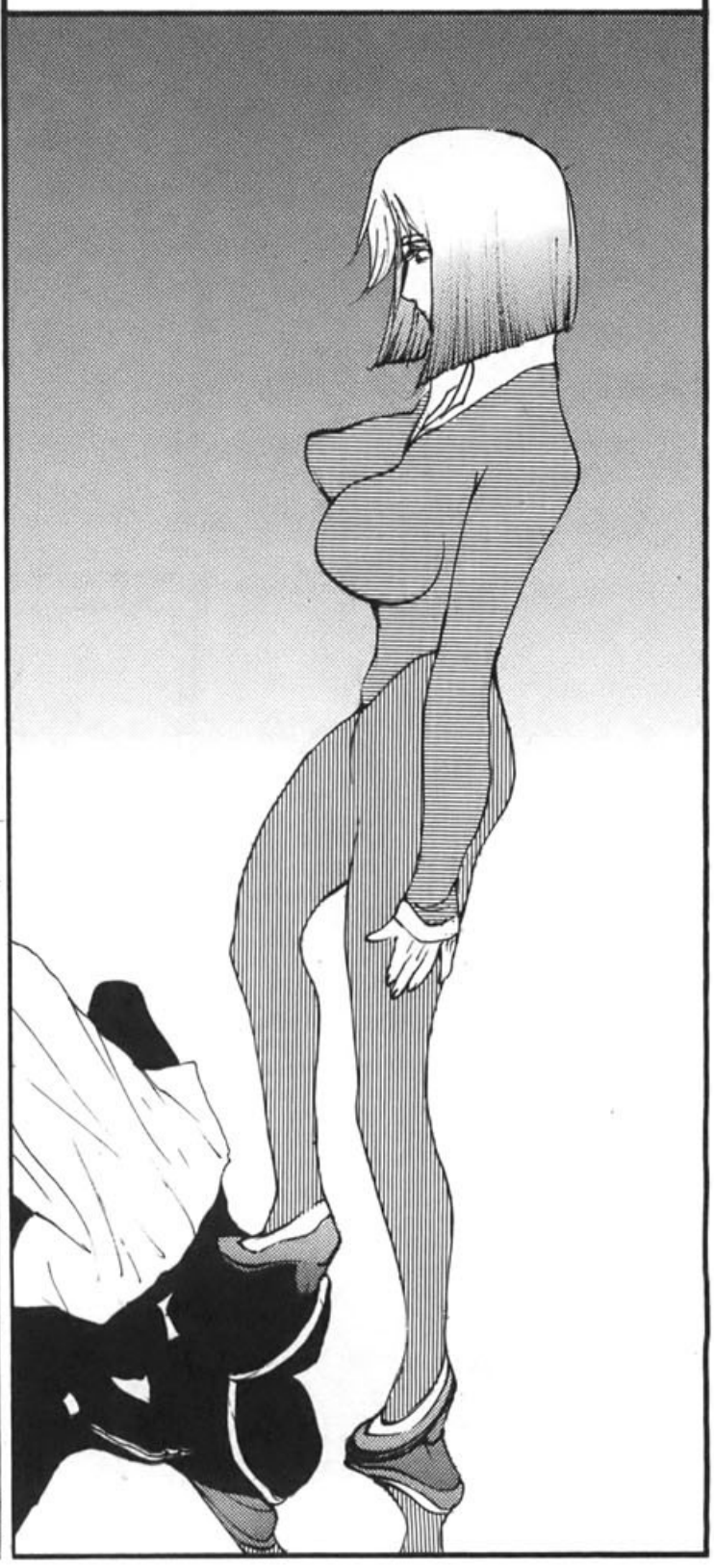
右足を
平伏して
いる
黒奴の
後頭部に
載せ

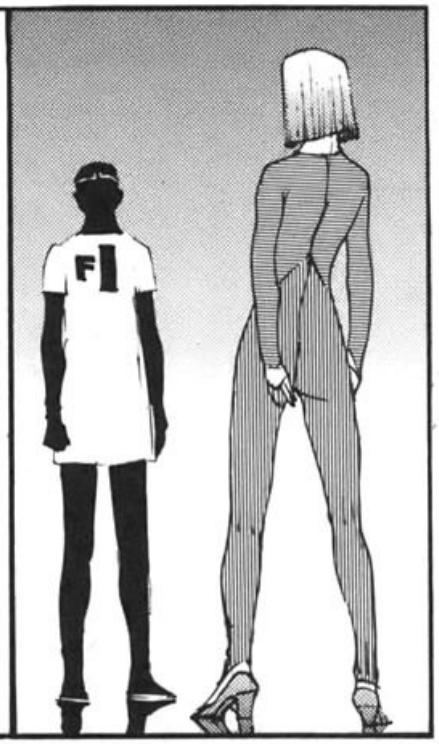


靴(くつ)の踵(かかと)を
金輪にかけて
支点にし



爪先のほうで項をギュッと圧迫してやった

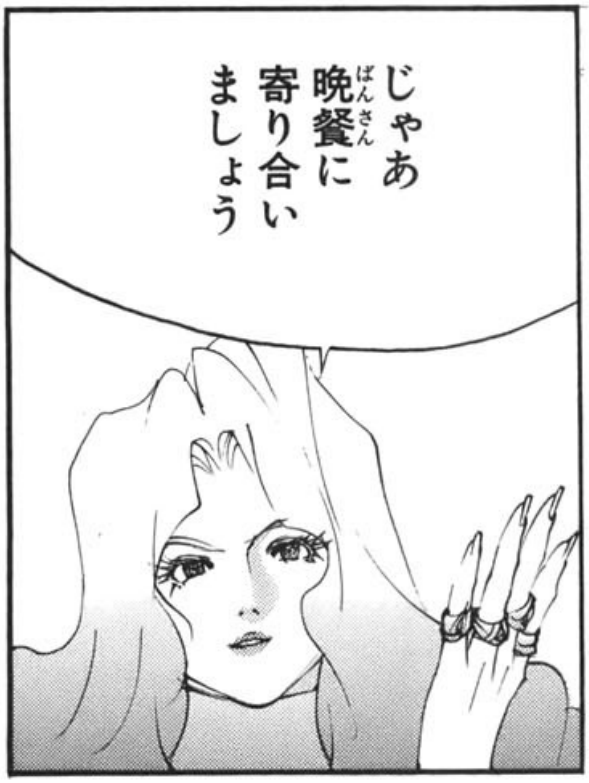




F1号が立ち上った

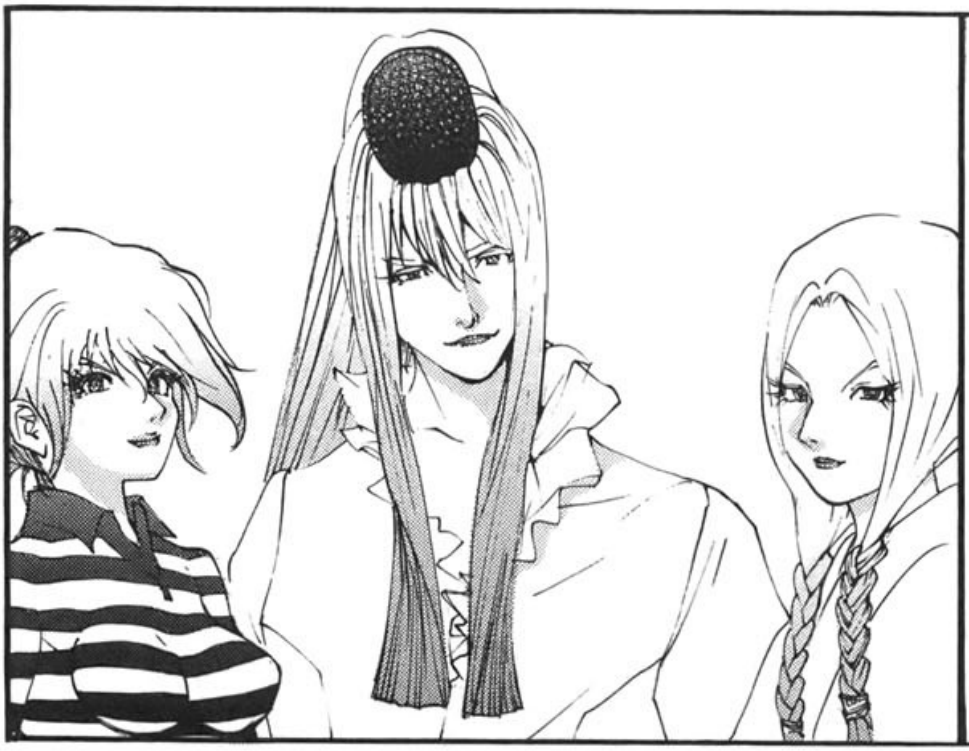


利発そうな目つきでキビキビした動作であった

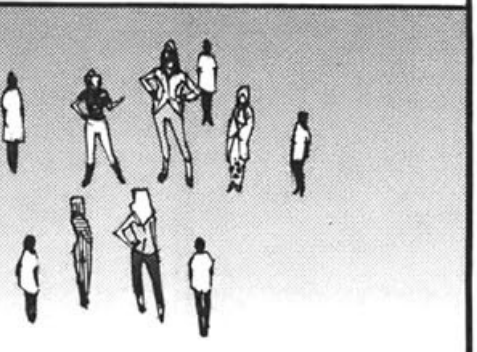


じゃあ晩餐に寄り合いましょう

ポーリーン遭難の
救出隊一行は
十二分に目的を達して



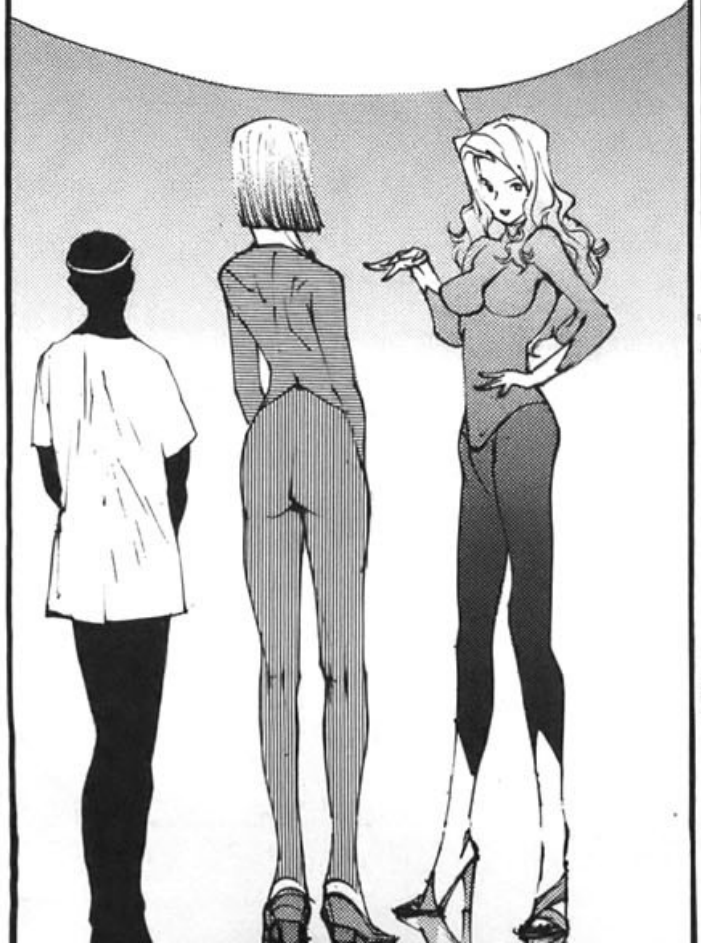
ここで
ひとまず
別れる
ことに
なった



ポーリーンは
クララに向って



貴女(あなた)ね
今
この従者が
お部屋に
案内するから
そこで待ってて



妾(あたし)は
貴女との
約束が
あるから

あのヤプーの
ところに
回って

奴(それ)を
貴女の部屋まで
連れてゆくから

そんなに
待たせない
つもりよ

緩解作業を
済ませてから
連れてゆこうとする
彼女の計画を
知っていたら

クララも
同行を
望んだだろうが

この時は
ただ
連れに行くだけの
ように聞いたし

待たせないと
いわれたので

いわれるとおりに
するしかなかった

ええ
麟(りん)――
瀬(ミスター)……

瀬部氏と
いい直しかけて
やめた

あれのこと
お願いするわ


じゃ
あとでまた
……あ
ちょっと
急いで
左腕から
腕送話器(マイク)を
はずすと
ポーリーンは
クララに
渡した
これ
お持ちなさい
便利よ
いいの？
貴女(あなた)は？
別のが
部屋に行けば
あるの

従者も
いるし
心配いらない
わよ

従者一人を
連れて
ボーリーンは
歩み去っていった

ニューマが
続いて駆け出し
追い抜くのが
見えたが
それを彼女が
呼び掛けて

ニューマ
お前は部屋に
お帰り

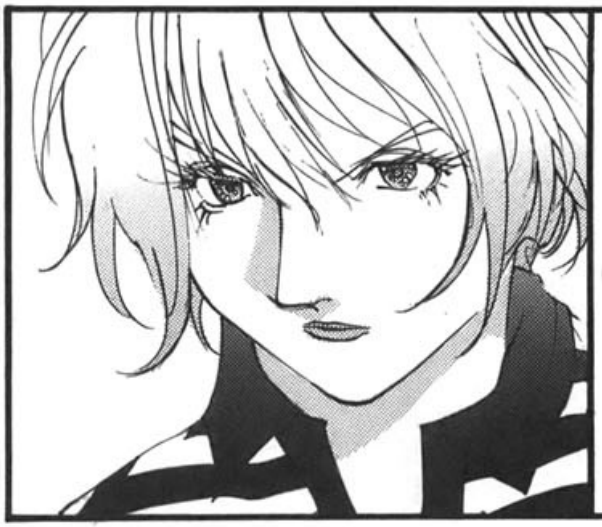
また
悪戯(わるさ)され ちゃ
たまらないから

という声が
聞えてきた

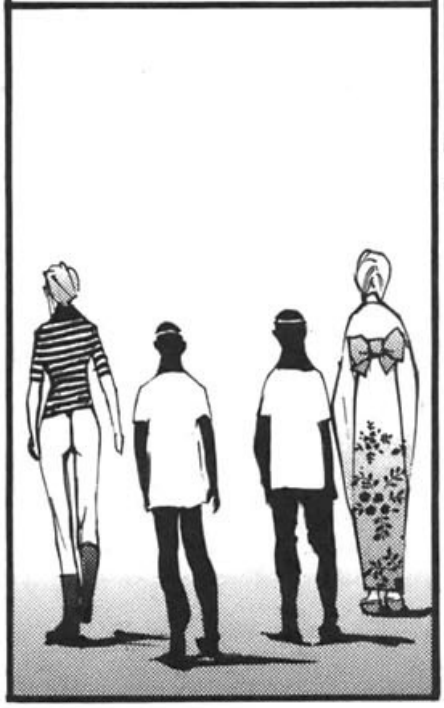
犬は
軽快に走って
姿を消した

その程度には
人語を
解するのだ

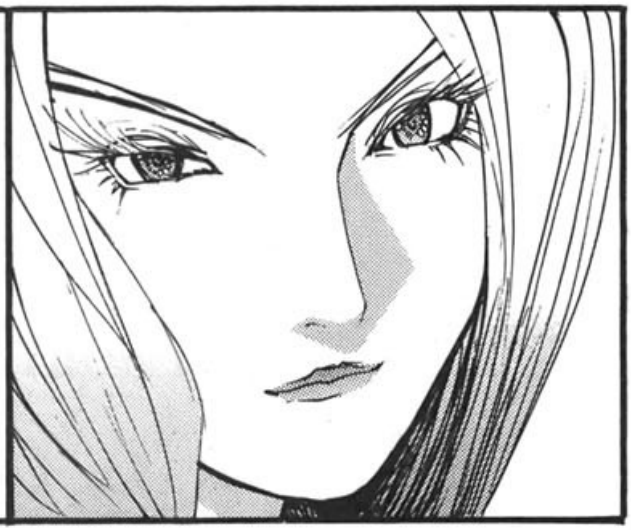
ドリスや



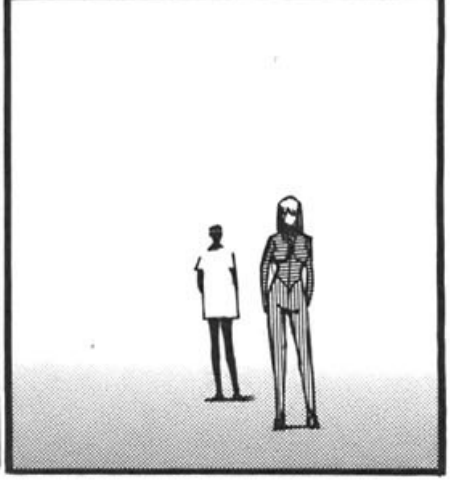
次々に
去っていった



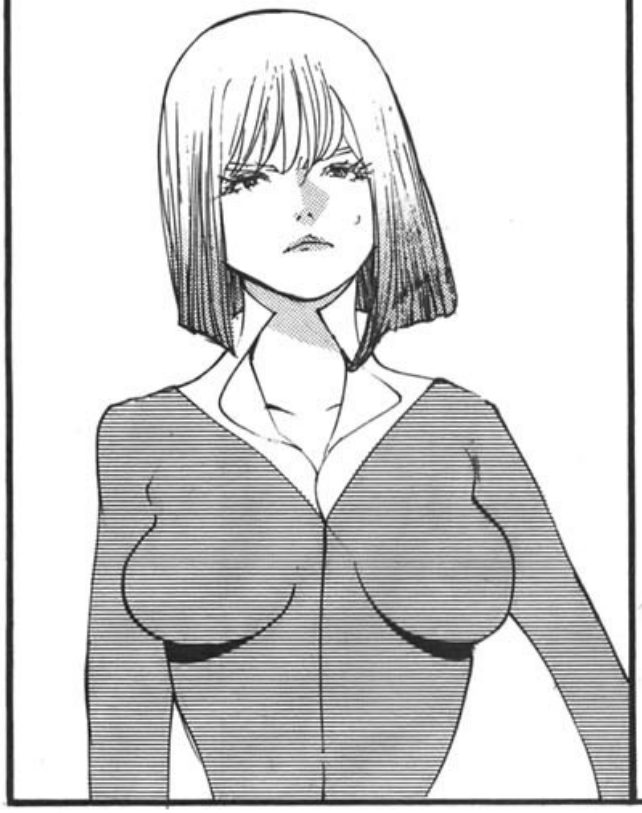
セシルも



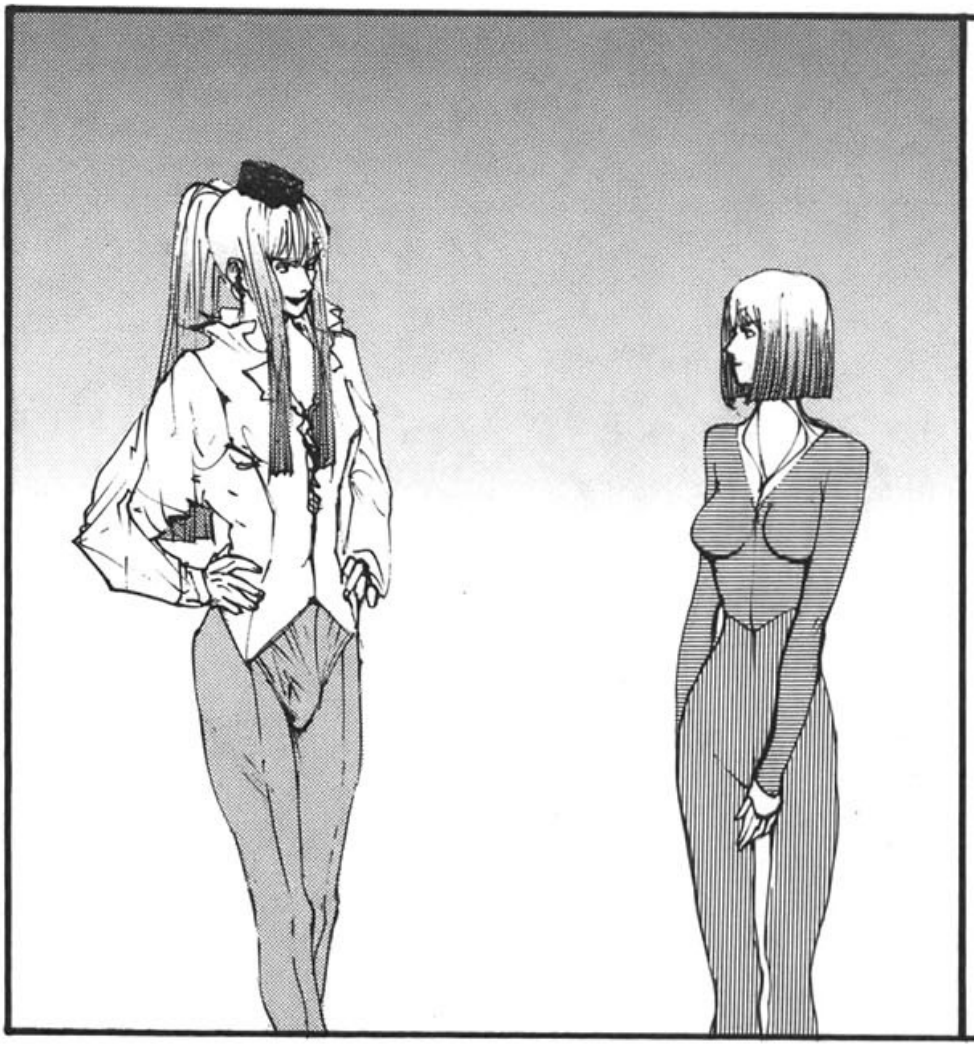
クララは
少々
心細く
なったが



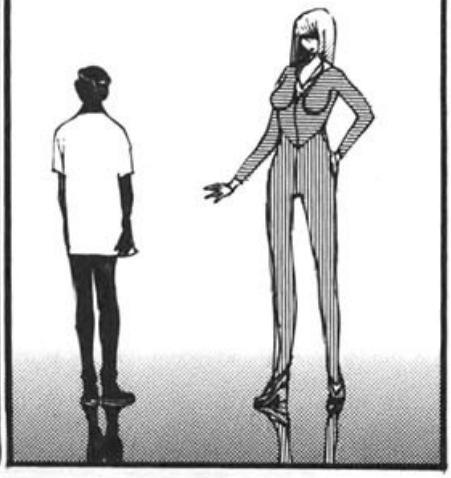
胸を張り



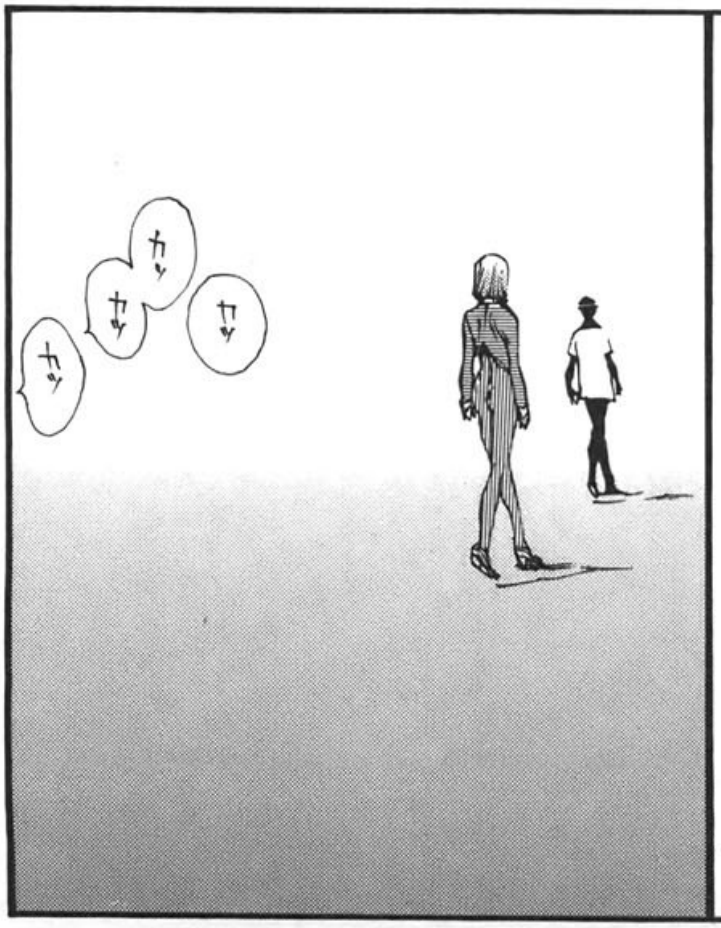
残っていた
ウィリアム・ドレイパアに
挨拶を済ませ

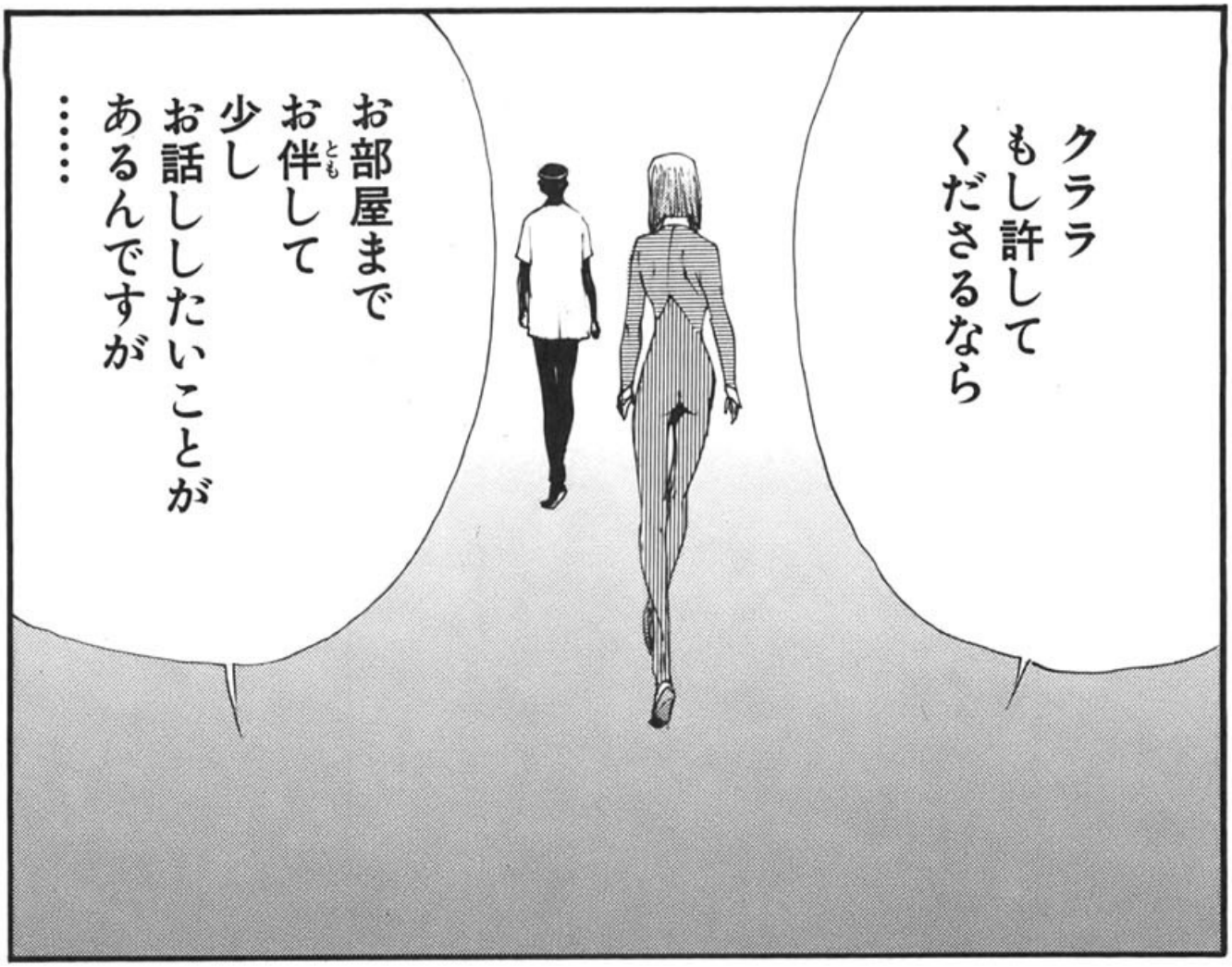


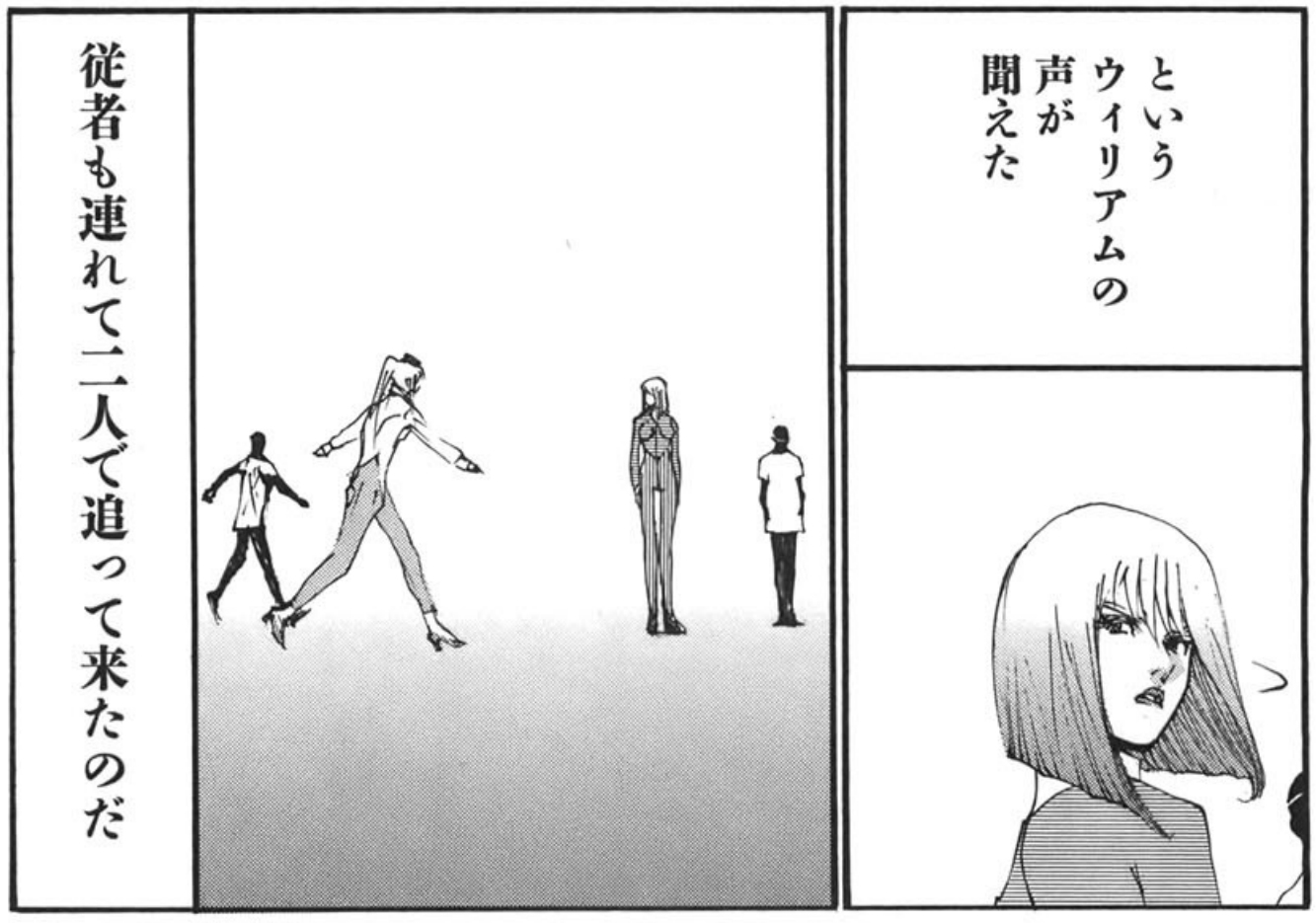
F1号に
案内を
命じた



少し行くと後ろから足音がして

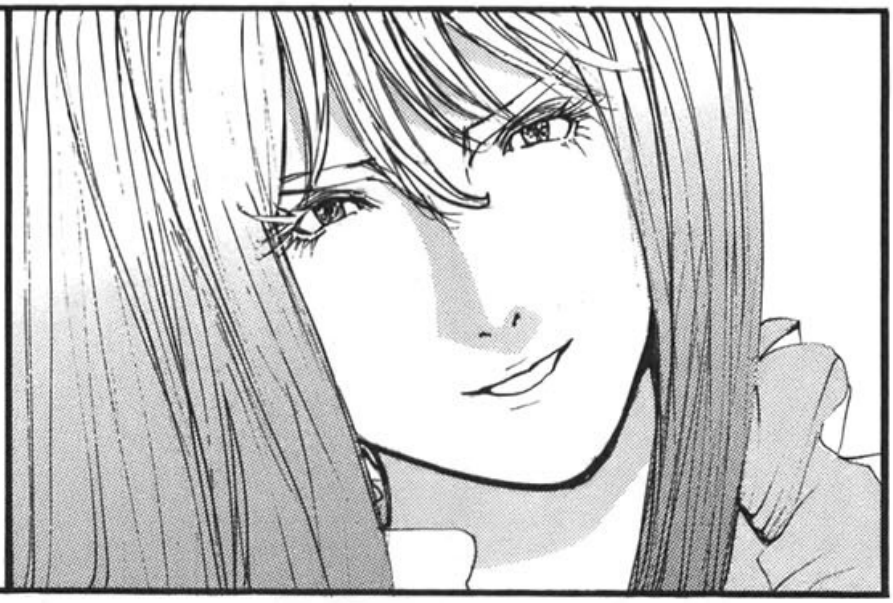



クララ
もし許して
くださるなら
お部屋まで
お伴(とも)して
少し
お話ししたいことが
あるんですが
……


という
ウィリアムの
声が
聞えた
従者も連れて二人で追って来たのだ

出がけに
遊んでいた
巨大蜘蛛（ジャイアントスパイダー）の
生餌かいが
中途だったことを
すっかり忘れて
いるらしい



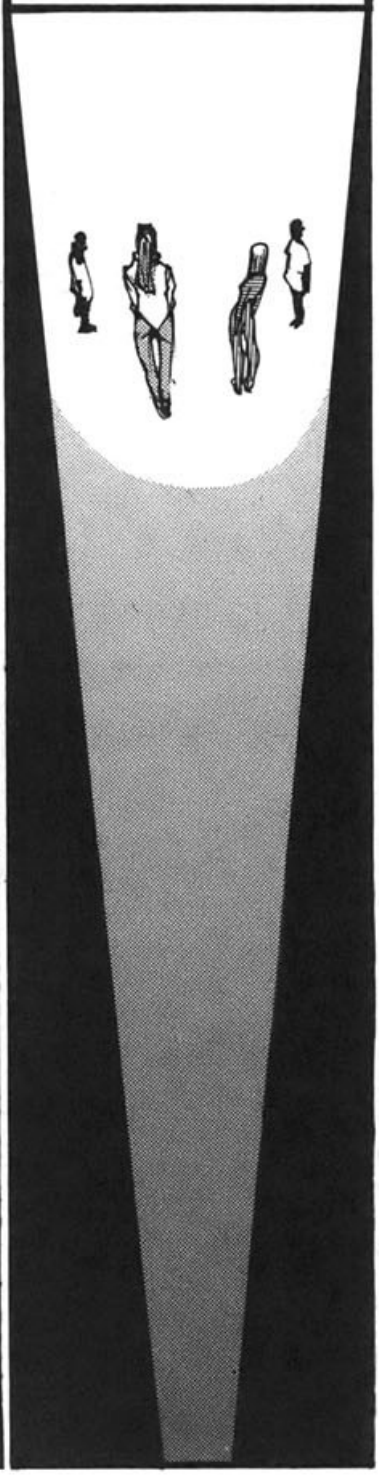


よほど
クララのことを
気にしているの
だろう



どうぞ
こちらから
お願いしたい
くらいよ

エレベーターで
だいぶ上った



開閉機が
開くと

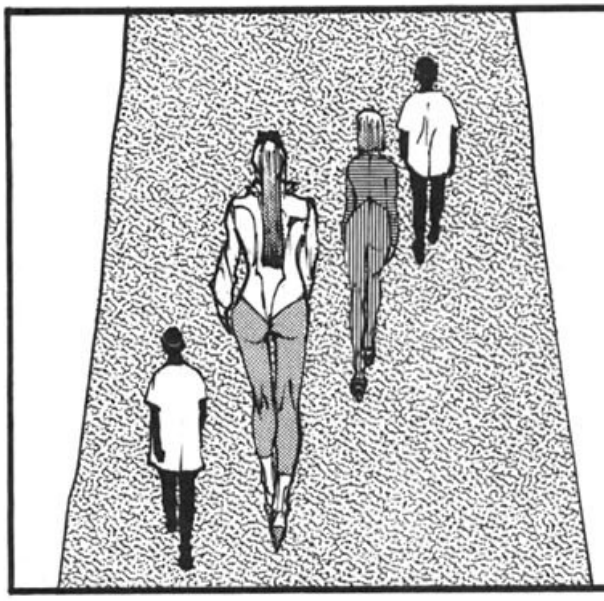
立派な
廊下がある

昇降も
開閉も
自動的だが
光電管などの
機械的な
仕掛ではない

矮人が隠れて
操縦している
一種の有魂装置(ソウルド・マシン)
だった

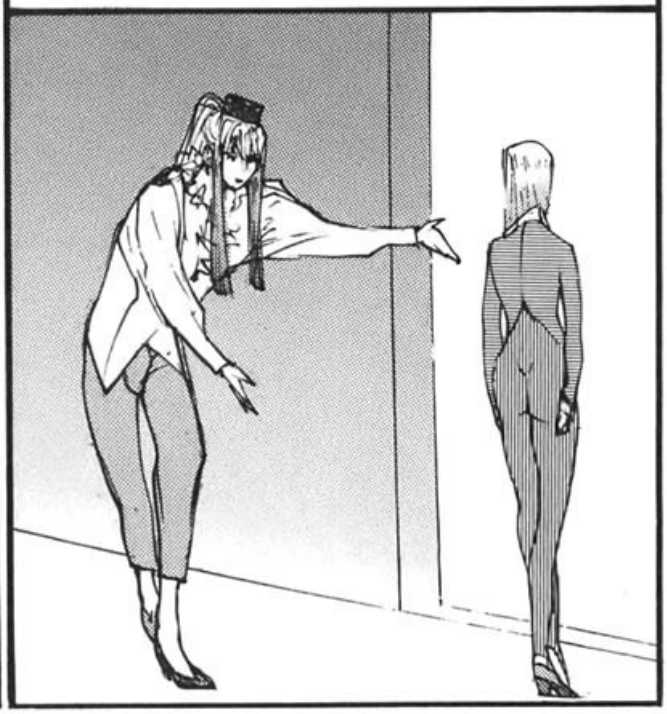
開け

絨毯(じゅうたん)を踏んで
ある私室の前まで
来たところで




F1号が
立ち
止った
ウィリアム
が
いった
さあ
扉魂(ドア・ソウル)に
新しい主人(ミストレス)の声を
聞かせるのです
クララは
そのとおり
いった
開(オープン)けよ
〝開けよ〟
と
お命じなさい
言下
に
扉(ドア)が
開いた

ウィリアムは彼女に先を譲りながら



これで脳波型声波型を覚えましたから

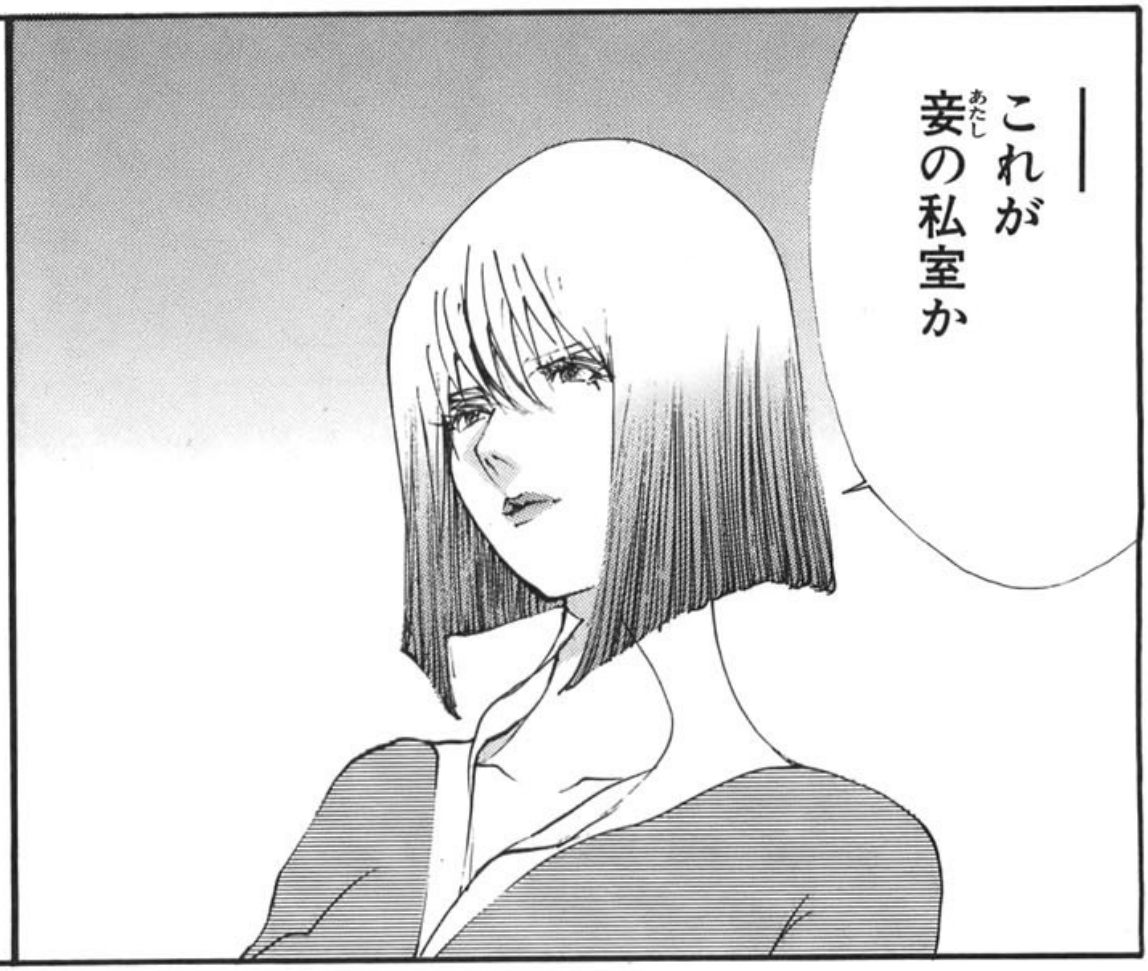
これからは貴女が近づけばひとりでに開きます

他の人の声では開きませんが貴女の命令なら開くわけです



――これが妾（あたし）の私室か

クララは心を落ち着けて見回した



奥に
寝室に続く
扉を持つ
二間続き

こちらが
応接間だ

絨毯も
セットも
豪奢なもので

立派な
ソファと
肘掛椅子が
あり

その間に
素裸の男が
ひざまずいていた

その背中に
大きな傷
……

と思って

ハッ

と悟った

円盤の中で
見たものの
倍はあろうか

普通人の
大きさの
肉足台ヤプー
なのだ

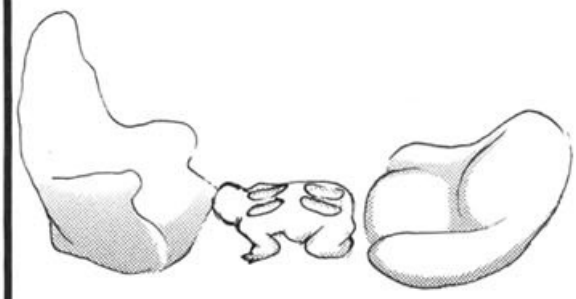
傷と
見たのは
足型に刳った
凹みで



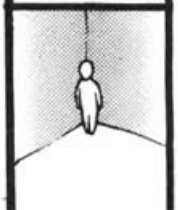
二つずつ
方向が逆に
計四つ
ついていた



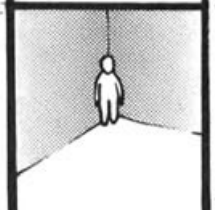
ソファの客と
それに向い合った
肘掛椅子の
主人役とが
両方から
いっしょに
足を
載せられるように
なっているのだ



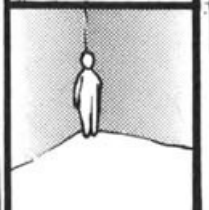
外にも



二分の一
くらいに
縮小された



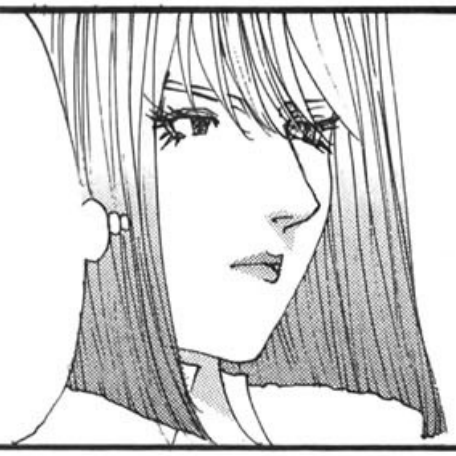
ヤプーが
室の四隅に



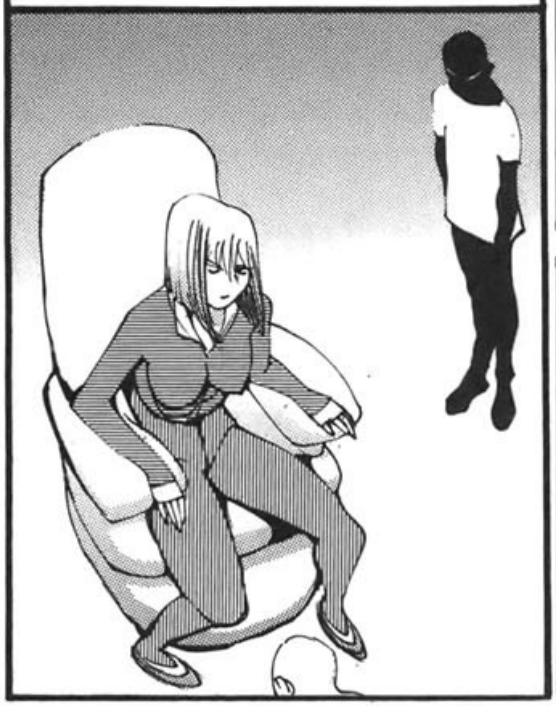
立っていた



何に
使うもの
だろうか？



クララは
ホステス用の
肘掛椅子に
掛けながら
従者に向って



名前は？

組頭以外は
名を知る
必要は
ないんですよ

名前……

F組頭はジョウで
ございますが
……

私奴はただF1号と
お呼び下さいまし

僕もこの別荘にもう何日も泊って

その間ずっとあのM9号を使ってますけど

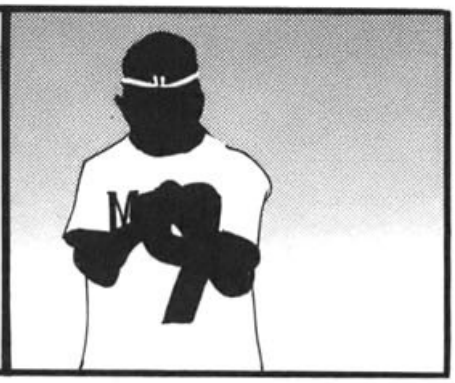
はい



M9号は
進み寄って



ウィリアムの
上着の
ポケットから
パイプを
取り出し

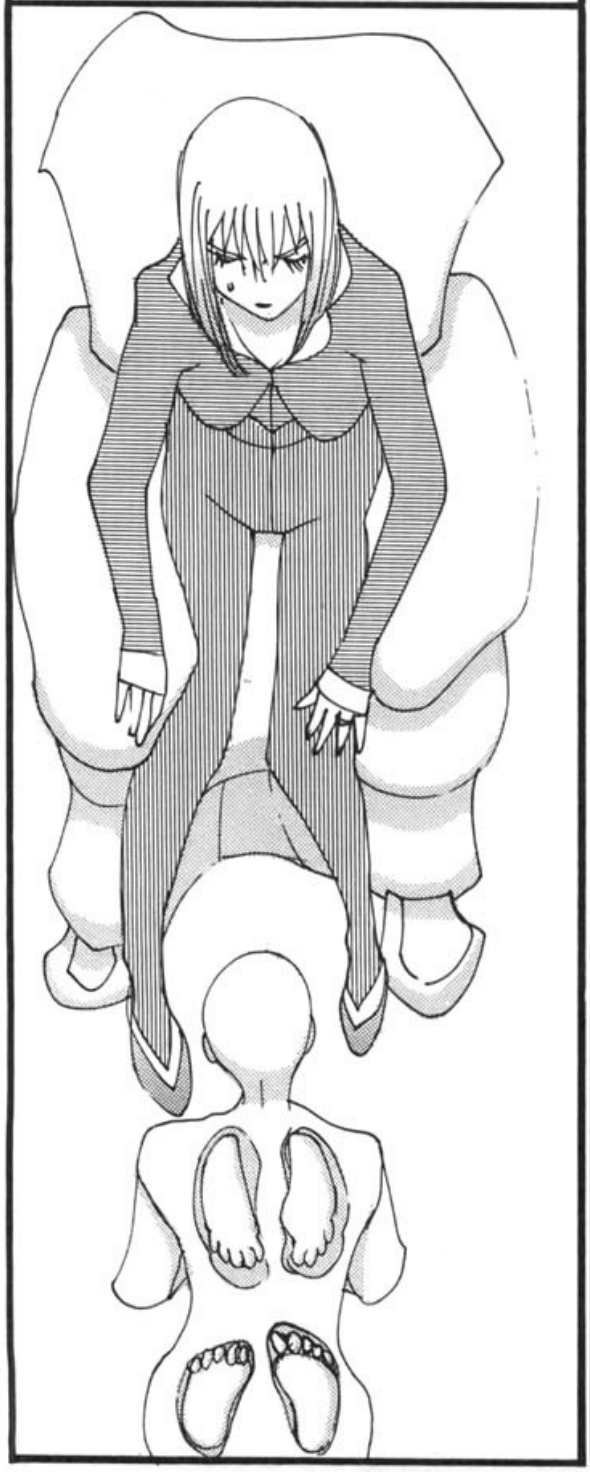


精気結晶(ホルモン)の
刻みを詰め
点火して



彼に
くわえさせた

クララは
肉足台の
凹みに
足を置いて
みたくなり



靴を
脱ごうとしたが



この男が
自分の
ポケットから
パイプを
取り出すだけの
作業さえ



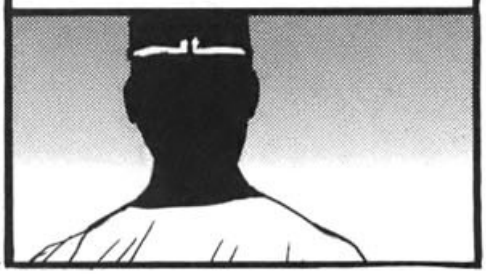
従者に
やらせるのを
見て



内心
あきれると
同時に



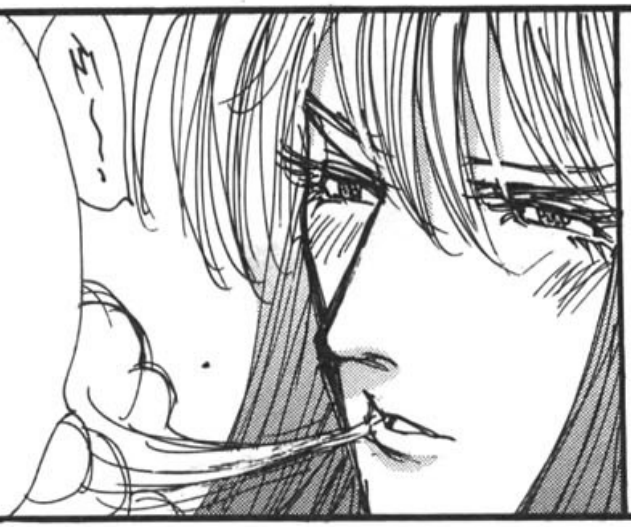
従者の
使い方を
実物教育
されたような
気もし



自分で
靴を脱ぐ動作を
中止した



ウィリアムは
煙を吐きながら



クララ
ちょっと
お話ししたいことが
あるんですが

貴女まだ
奥の部屋も
見てらっしゃら
ない

……
着替えや
化粧も
ありましょうし

僕
ここで待たせて
もらいますから

どうぞ
先に奥に
いらしって
下さい

奥にも部屋があるのに先ほどから
好奇心を起していたクララは
それをよい機会にして

じゃあ
……

と
立ち上ろうと
したが

ウィリアムの声が
その動作をさえぎった

自動椅子（オートチェア）
です

右の
ペダルを
踏みながら
行先を
おっしゃれば
いいんですよ

左を踏めば
止ります

来客用だから
読心能（テレパシー）は
ないが……

そういいながら

いつの間にか
ソファの
横に来ていた

二分の一縮小（ハーフ・サイズ）ヤプーの
顔に向けて
パイプの灰を落し

ついでに



と
唾を吐いた

クララは



としたが

このヤプーは
灰と唾が
顔面に
かかろうとする
一瞬



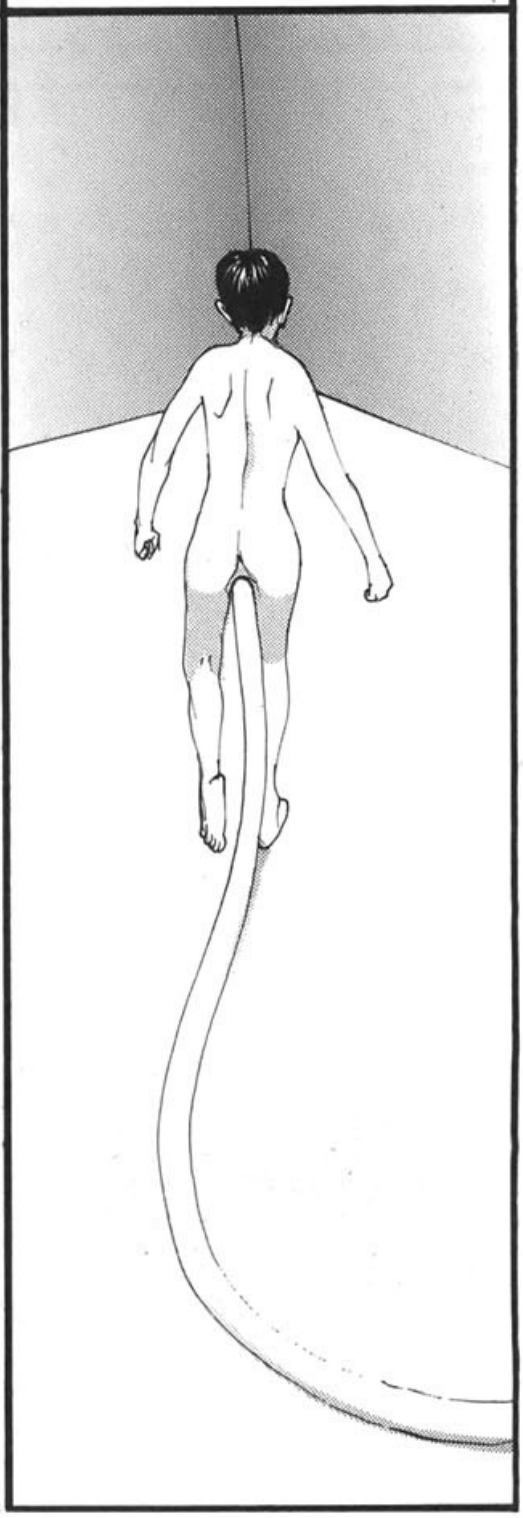
パクリと
口を開いて
含んでしまった



そして
用済みの
合図なのか
パイプで頭を
コツンと
たたかれると



尻(しり)から
コードを
引きつつ
部屋のすみに
戻って行った



これは
肉痰壺(スピツーン)
という
一種の
不浄畜(ラヴァタ)で



落ちかかる
小さい物体を



素早く
口中に
含むことを
専門に
仕込まれて
いるのだ



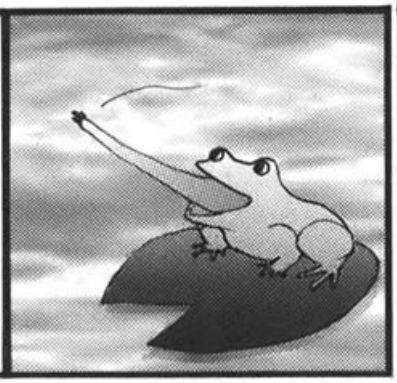
これを
使用する
場合
あらかじめ
口を
開かせたり
する
必要はない



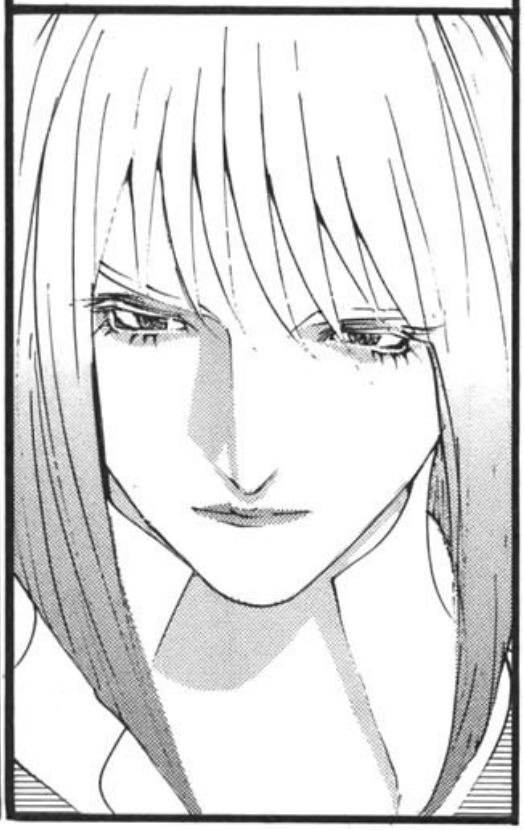
いきなり
顔の近くで
唾を
吐きかけても
必ず
口中に収める
素早い動作は



蛙(かえる)が
蠅(はえ)を呑む時の
ようで
目にもとまらぬ
早業なのである



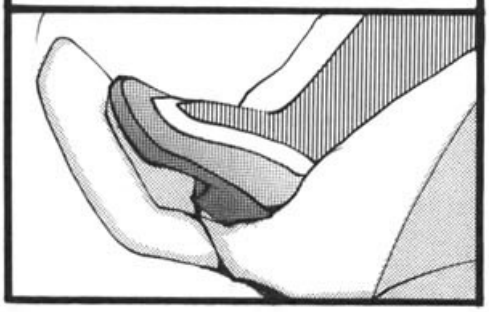
しかし
クララは
いつまでも
そんなものを
見ていたわけ
ではない



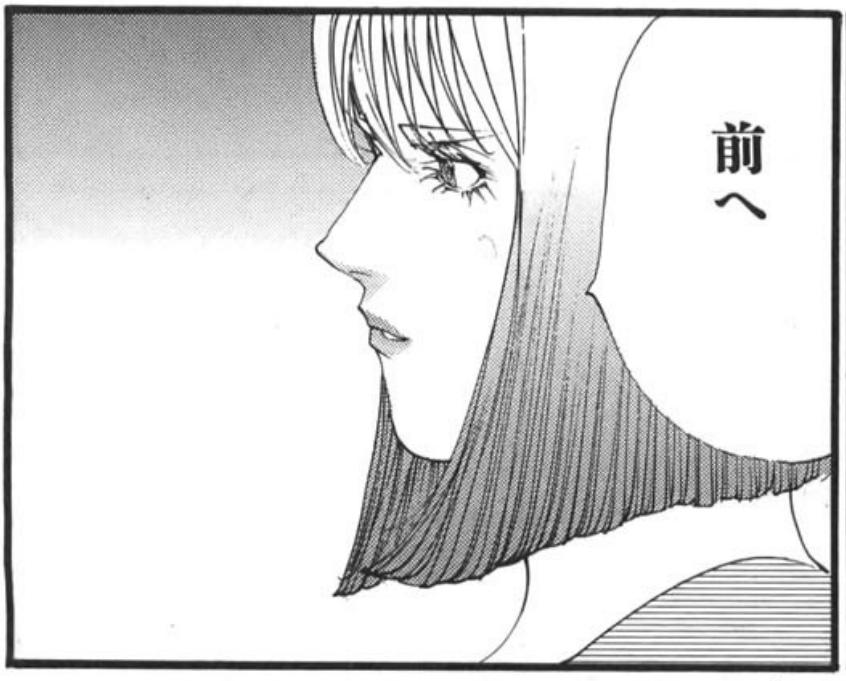
膝(ひざ)を曲げた時両足が載るような位置にペダルがあるので



その右を
ぐっと
踏みながら
命じた



前へ



自動椅子（オートチェア）は
矮人（ピグミー）登場以前からの
伝統的な
生態可動家具で



貴族の私室で
愛用される



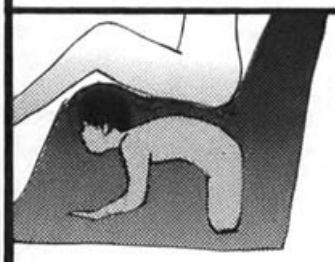
外見は
革張りの
肘掛椅子だが



小型の
自動車に
なっており



しかも
腰の下に
天然スプリング
としてのヤプーが
はいっていて



操縦者を
兼ねているので
あった



両肘（ひじ）の
ところに
宝石ような
装飾があるのが
眼鏡で

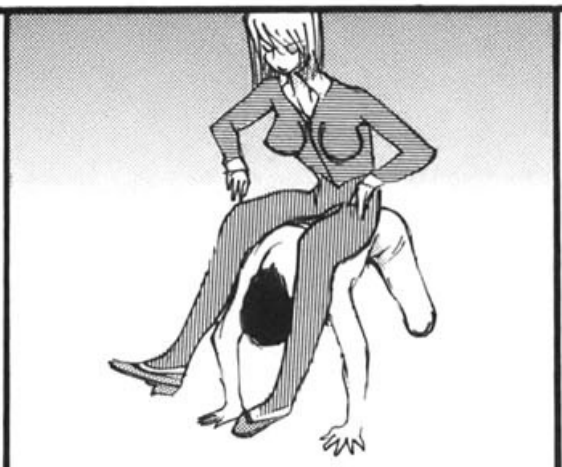


屈折鏡（プリズム）の作用で
ヤプーには
前方が見える



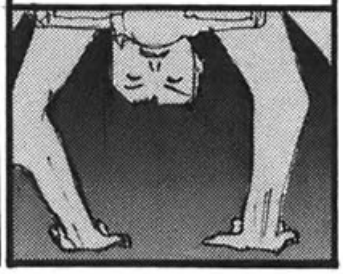
※四肢を
突っ張って
背中で
使用者の尻を
ささえねば
ならないから

腕や手の自由は
利かないが



※ ただし後肢は膝から下がない

十本の指と
顎(あご)に固定した
槓桿(レバー)とで



椅子を
自在に
操縦する



読心家具(テレパス)の
場合なら



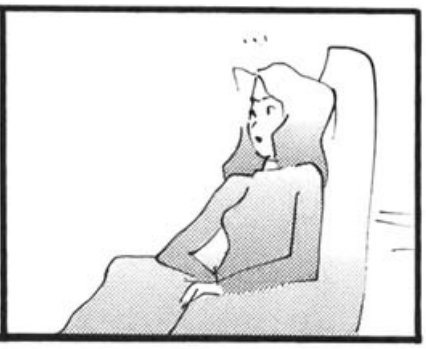
使用者は
まったく体を
動かさずに
部屋中
どこへでも
行けるのである



もっとも
ふと心に
思った
だけで



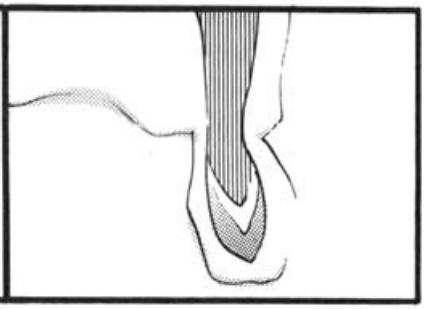
ほんとうに
その気に
ならぬうちに
動き出したり
しないように



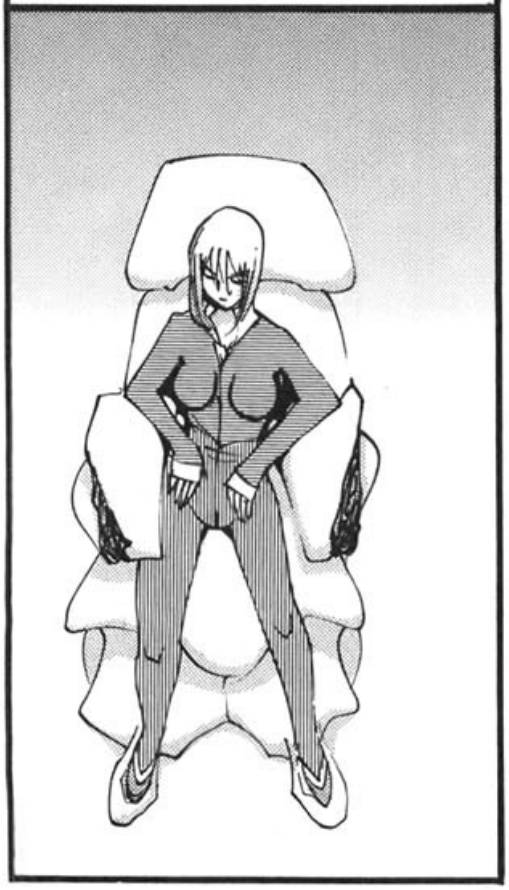
使用者が
右のペダルを
下に押して
初めて始動(オシツク)し



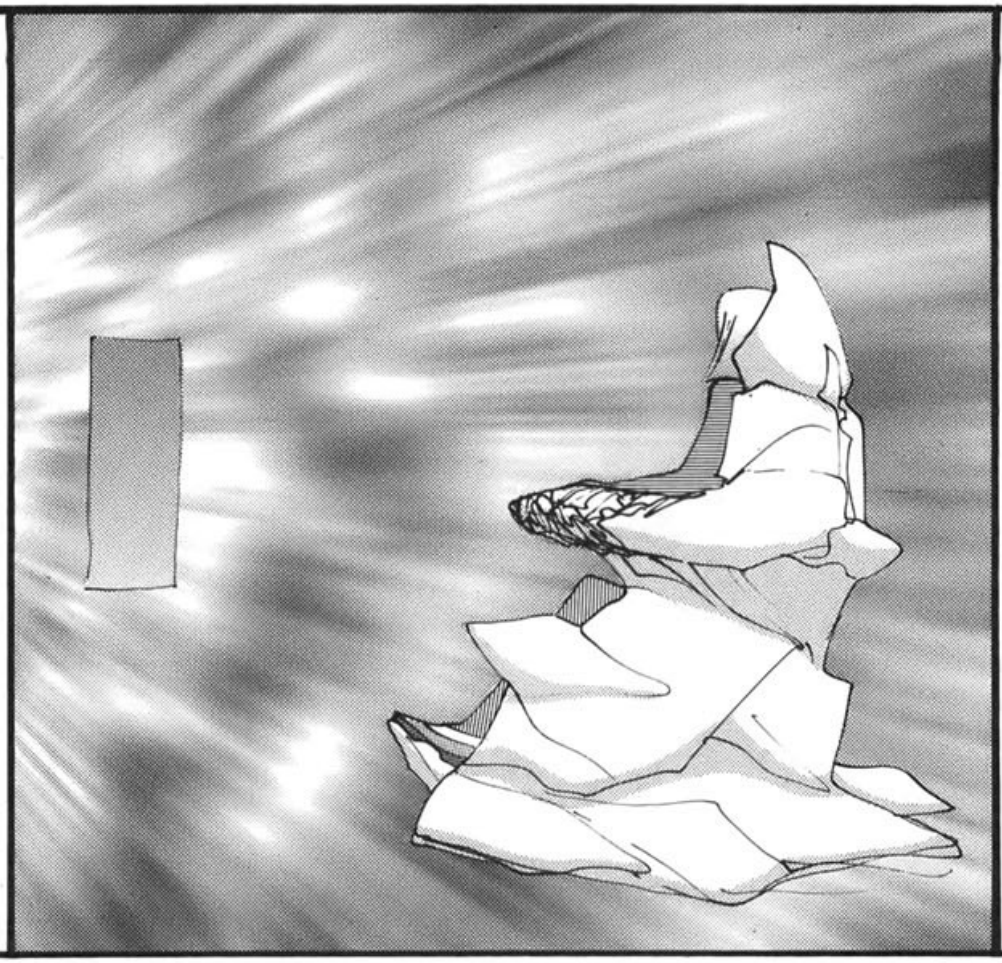
左を押せば
止る仕掛に
なっている



クララの
自動椅子は

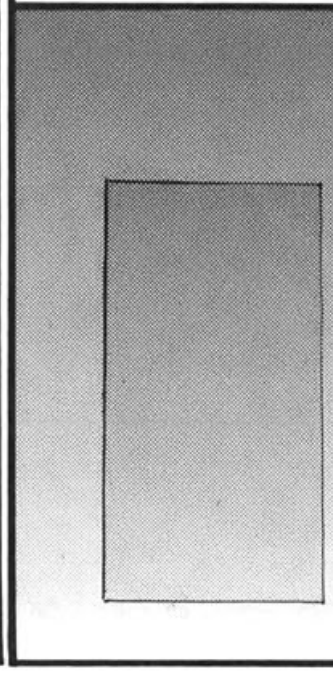


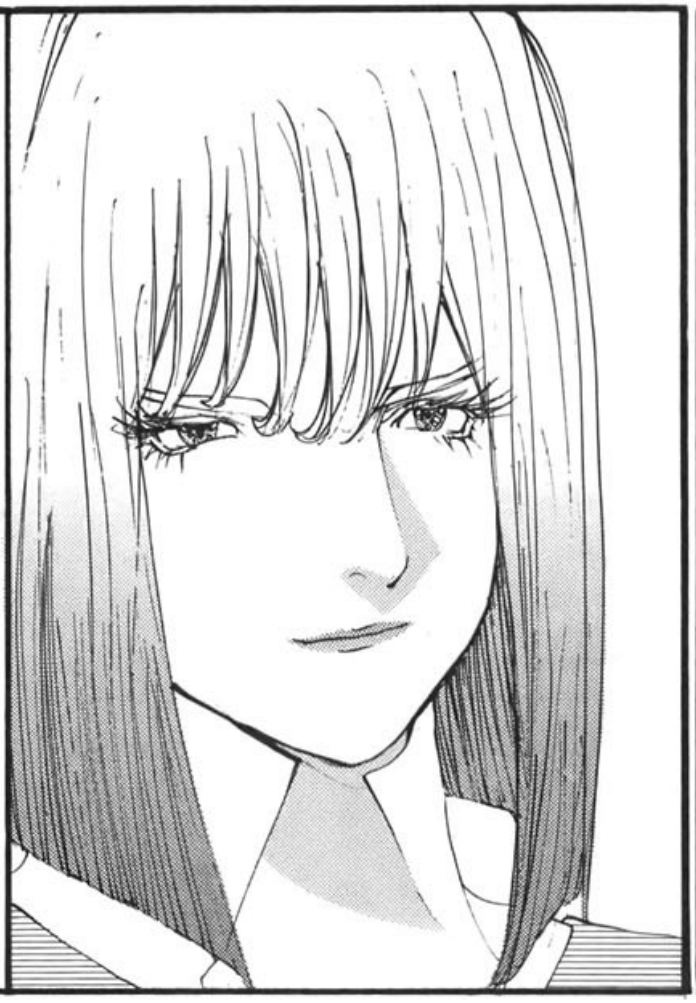
命令に応じて



奥に続く扉（ドア）のほうへ進み始めた

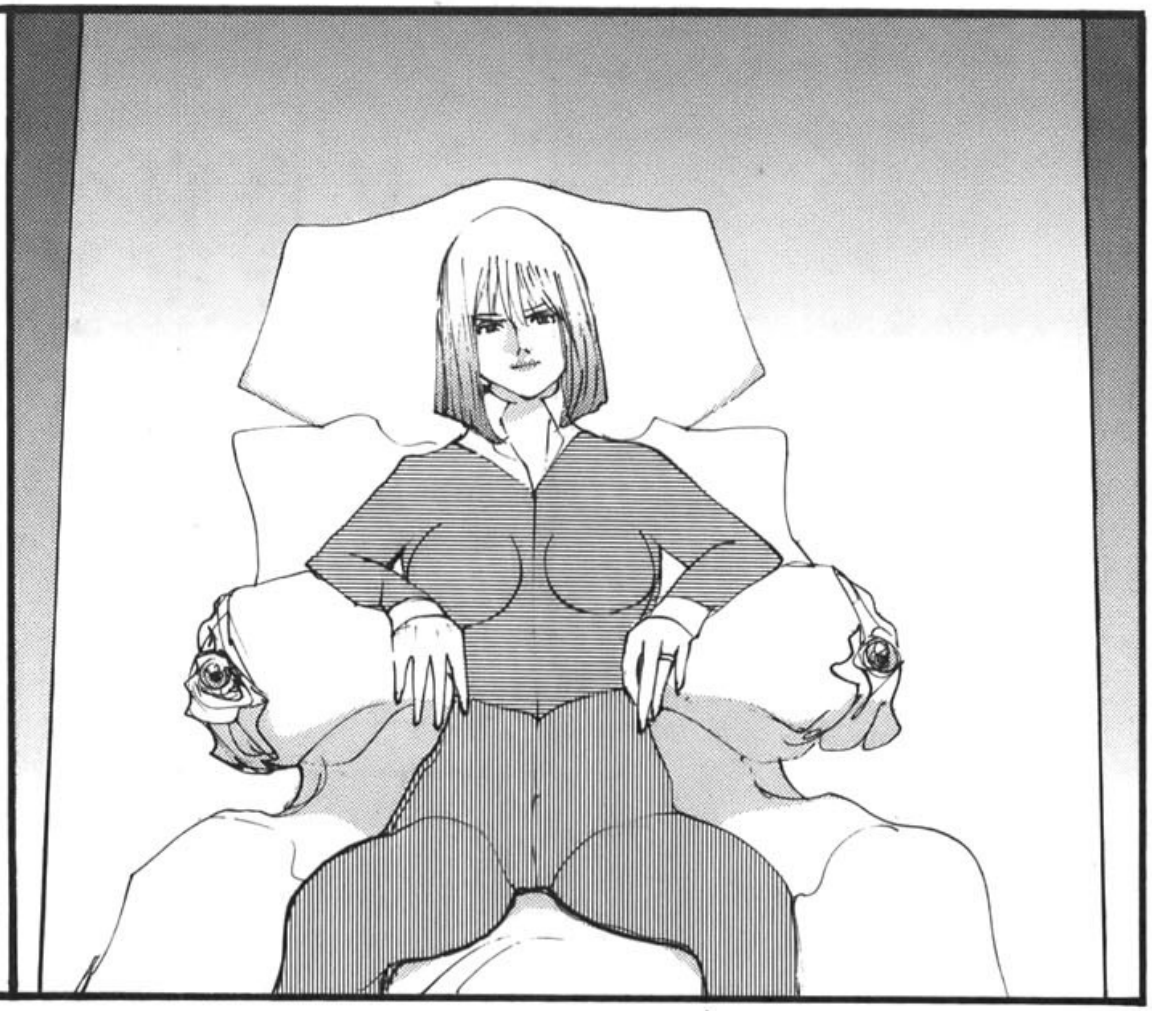
この
扉も



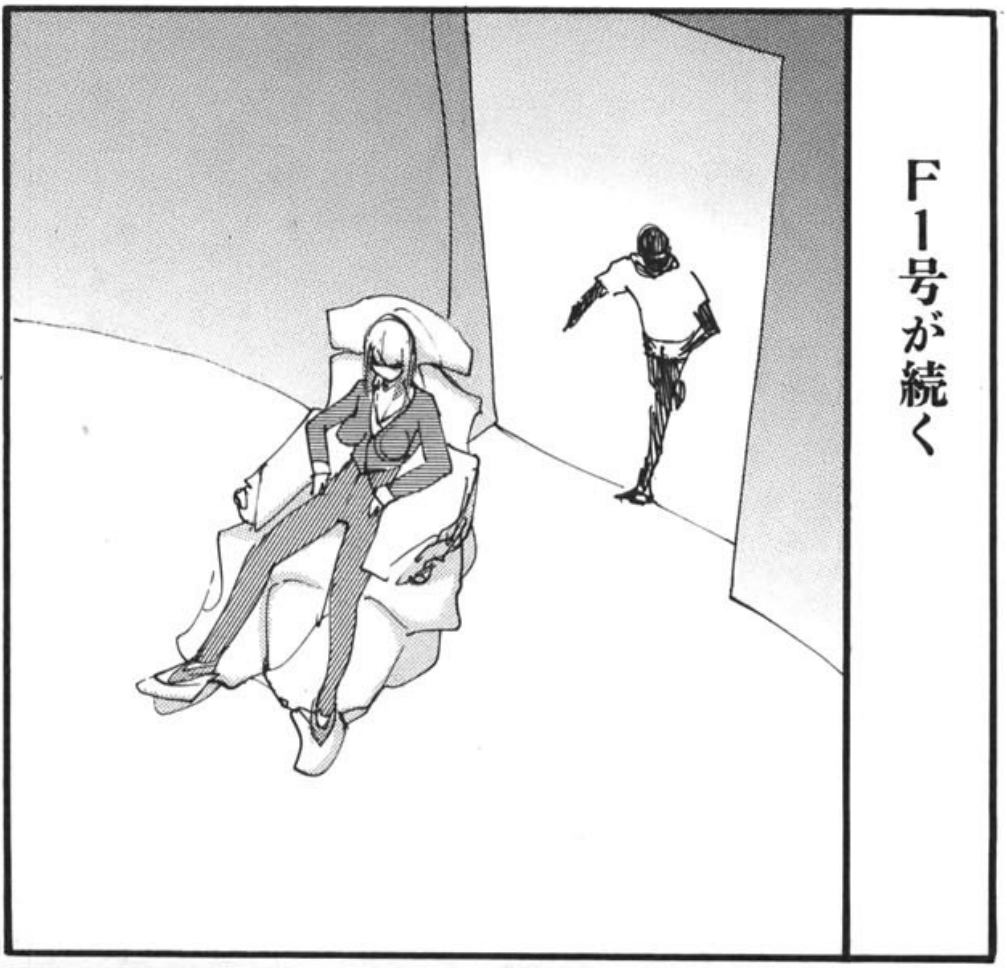


既に彼女の脳波型をしってるのか

椅子の前に音もなく開いた



F1号が続く



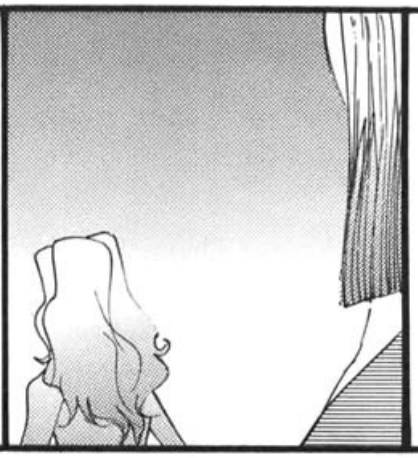
扉が
閉じた



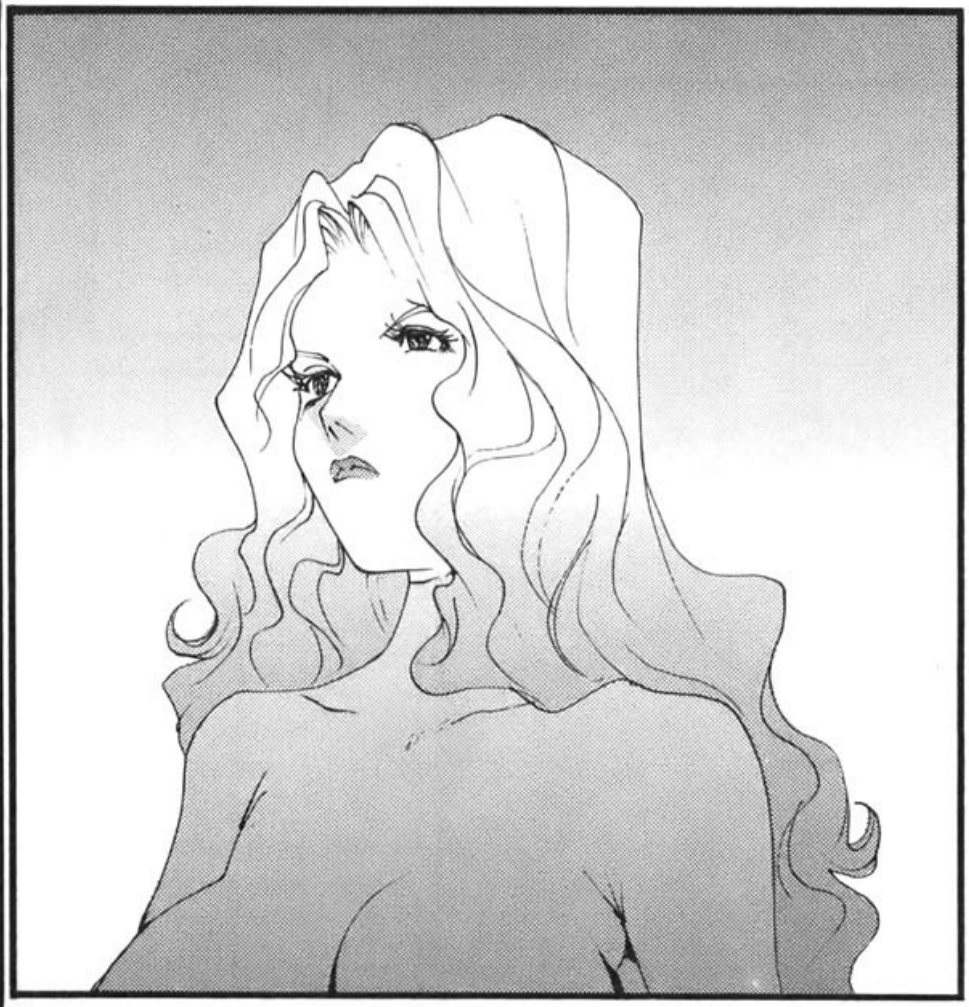
クララは
豪奢な
寝室の中に
自分を
見いだした



一方
クララと
別れた



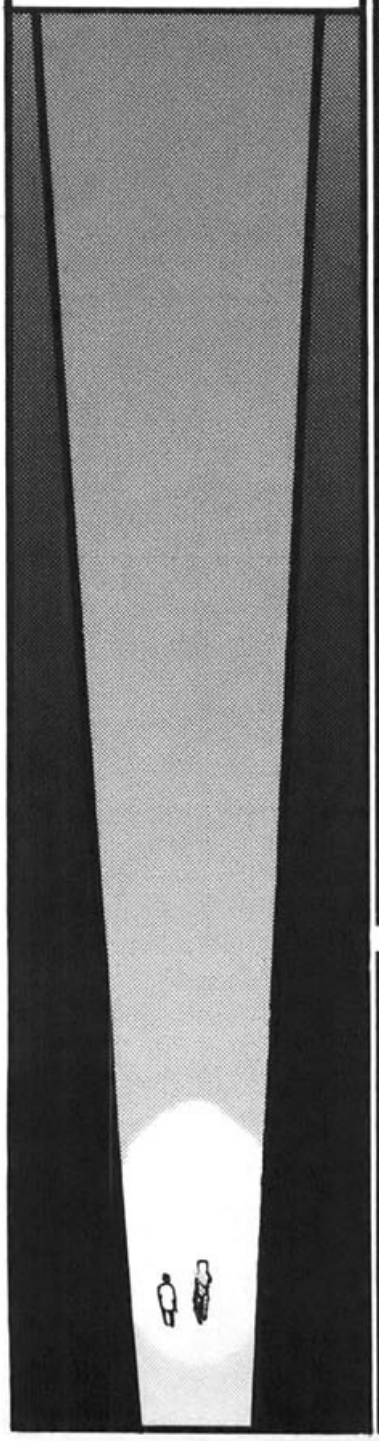
ポーリーンは





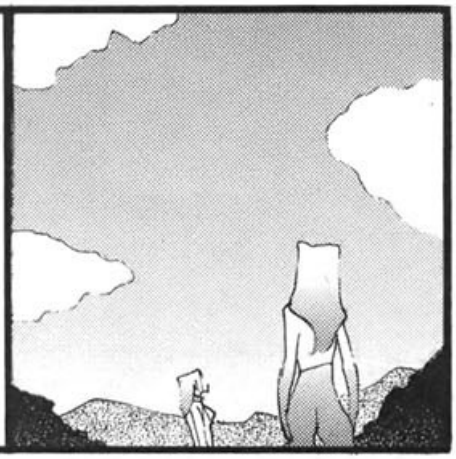
従者(フットマン)一人を
連れただけで

エレベーターで
降りて行った



イースの
全版図を
通じ





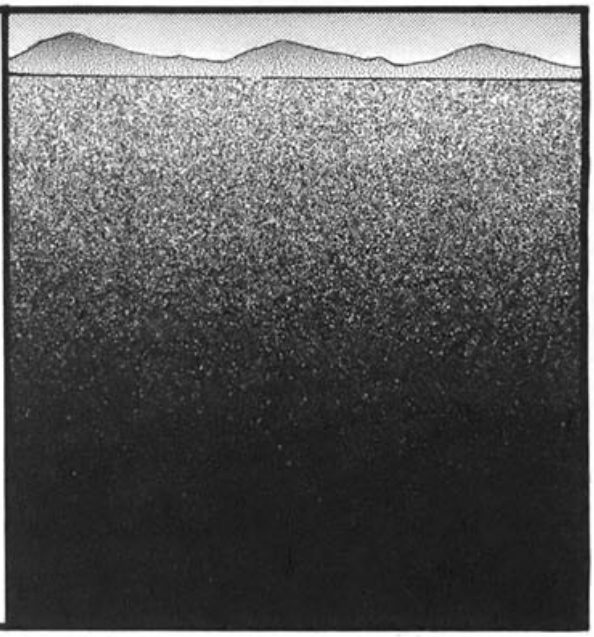
白人居住星（ホワイト・プラネット）では
白人は
地上に住み

黒奴や



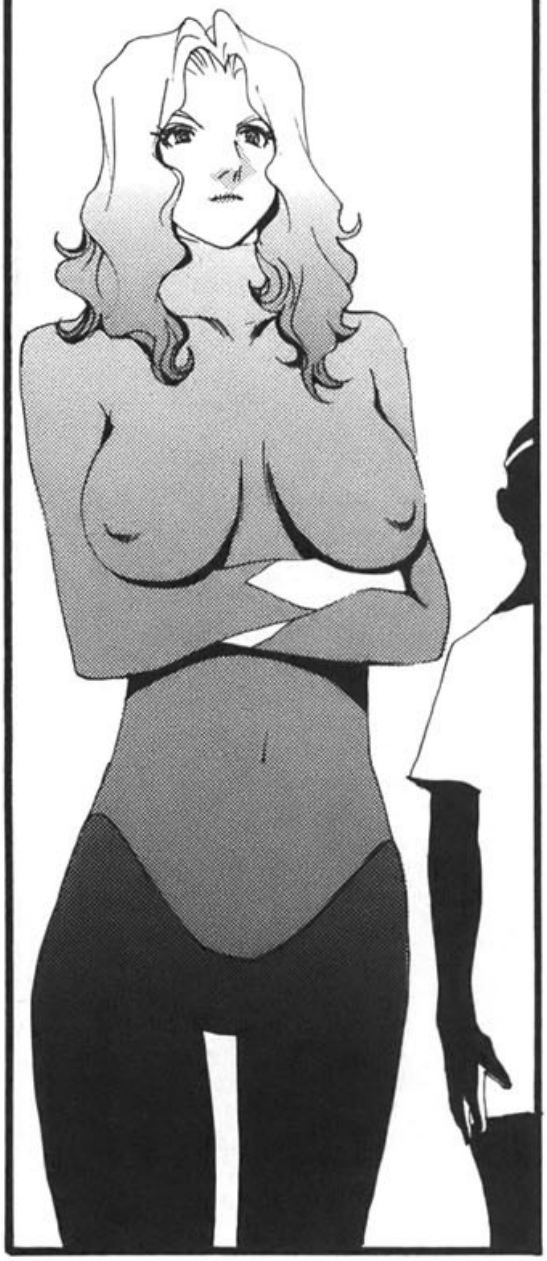


原ヤプーは



地下で暮す

そこへ
緩解作業を
見に行くのでである



ネアンデルタールを
捕獲してきた時にも



獣医に
緩解作業させる
のだが



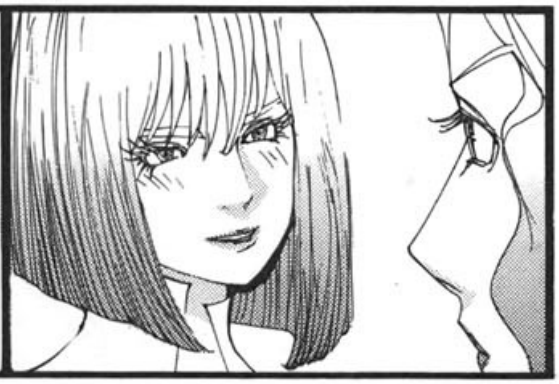
ポーリーンは
平生緩解されて
元気になって
地上に送られて来た
奴しか
用がないので



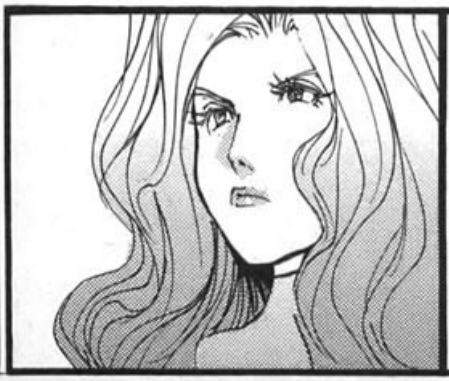
今まで
緩解作業
そのものを
見たことは
ない



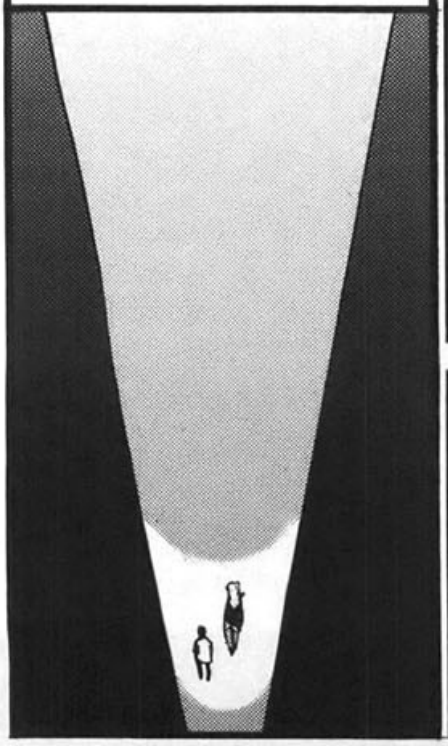
しかし
今日は
クララとの
約束もあり



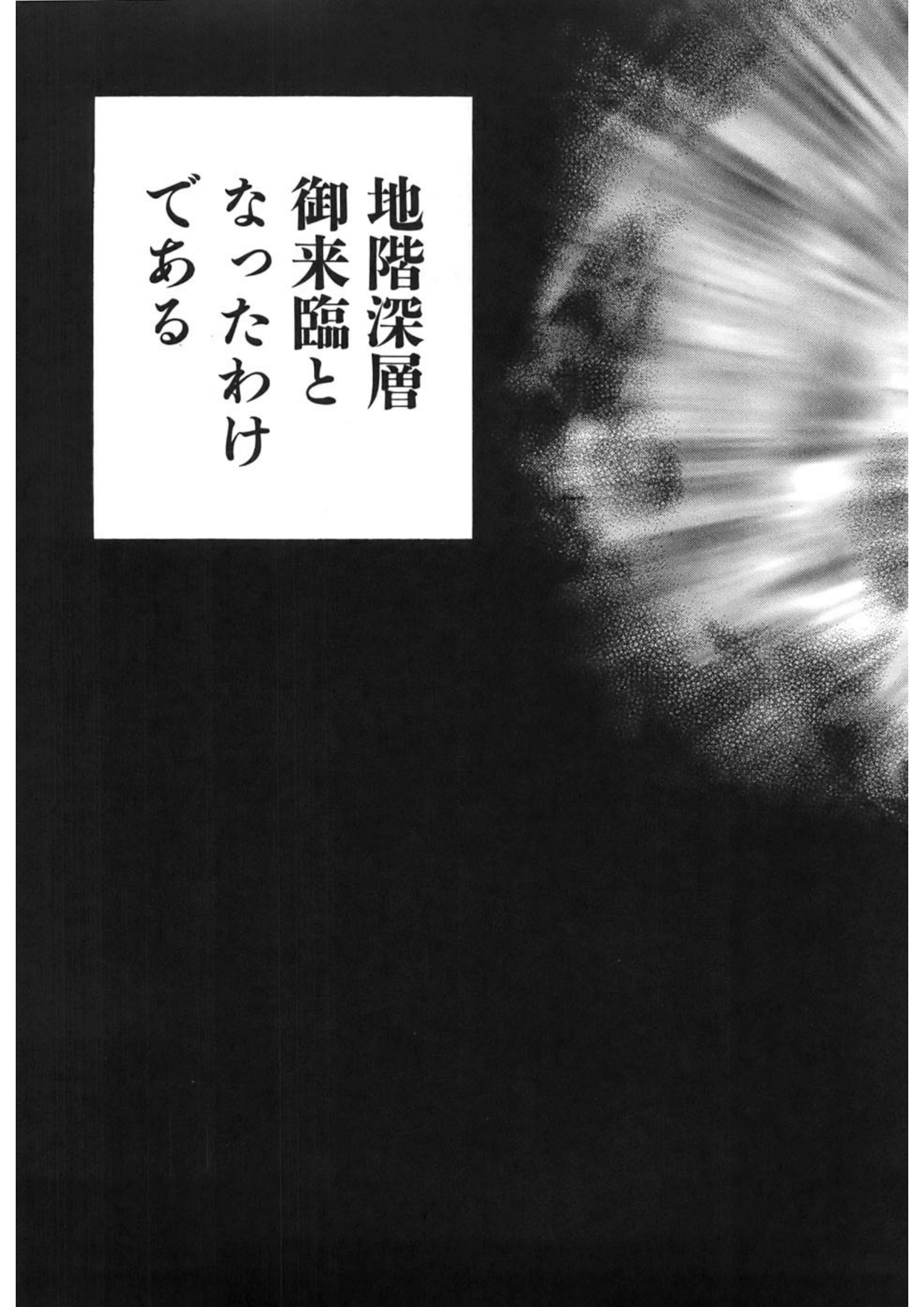
責任上
自分で
緩解作業に
立ち会うことに
したのだ



かくて
珍しくも



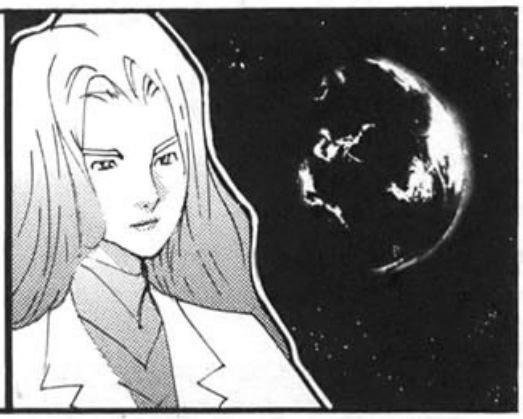

若奥様の
第十一章 別荘到着第一歩
—第三話—


地階深層
御来臨と
なったわけ
である

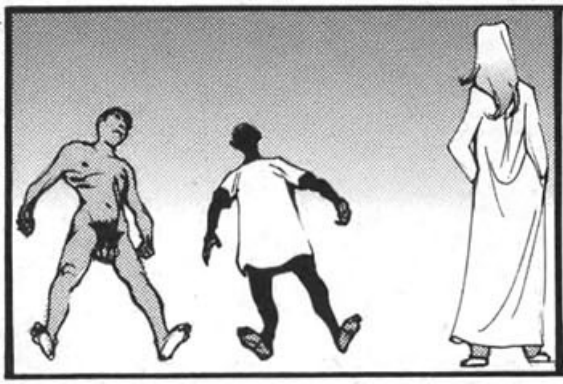
獣医ジムは
黒奴である



イースでは
単に
医師といえば
もちろん
白人だが



彼らは
黒奴や
ヤプーの
診察はしない



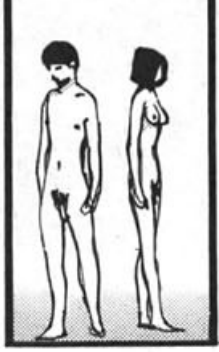
手が
けがれるから
である
そこで



黒奴



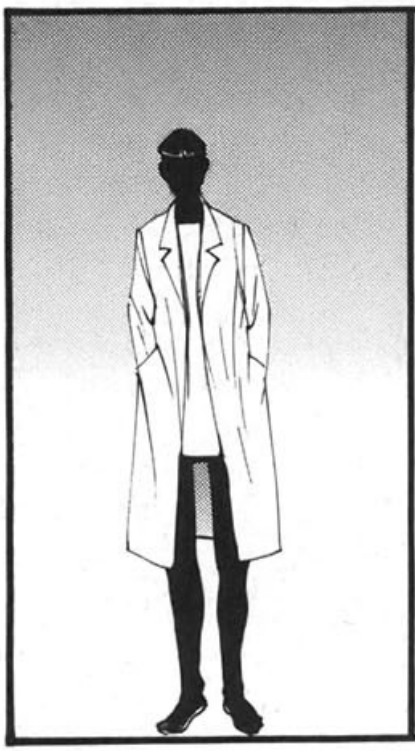
ヤプー



天馬（ペガサス）



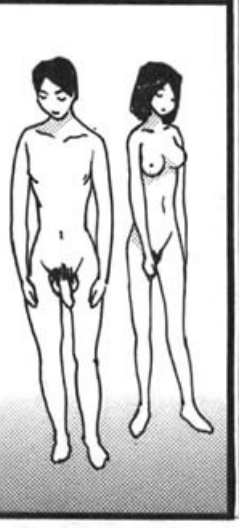
等のために
黒奴の医者がいた



この獣医も
その一人で



ヤプー専門で
あった



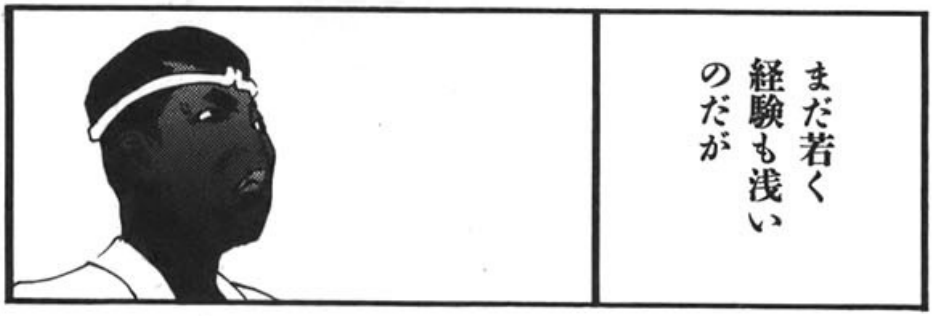
医者と
いっても
黒奴だから



もちろん
奴隷の身分
である



まだ若く
経験も浅い
のだが



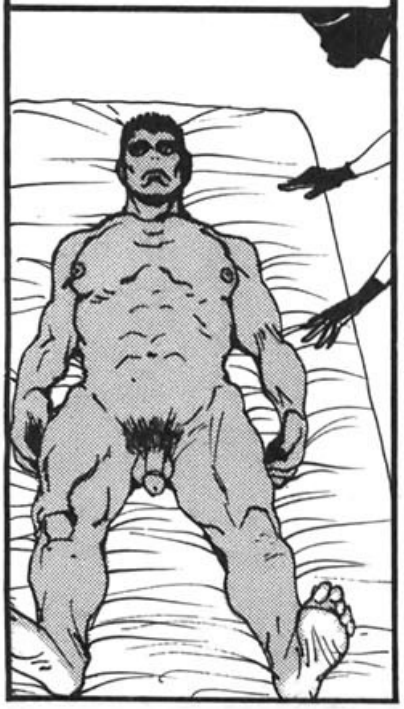
学業成績を
買われて
第二地球別荘の
新築落成とともに
ここに
派遣され



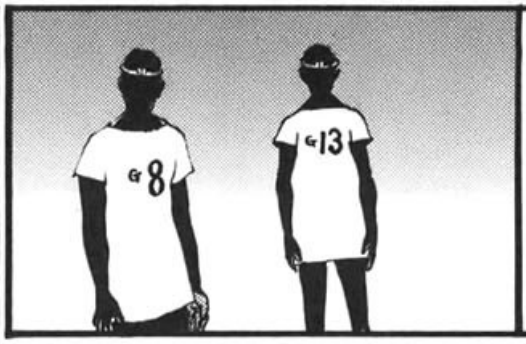
組頭(チーフ)待遇で
別荘内の
数多いヤプーの
健康管理を
命ぜられている



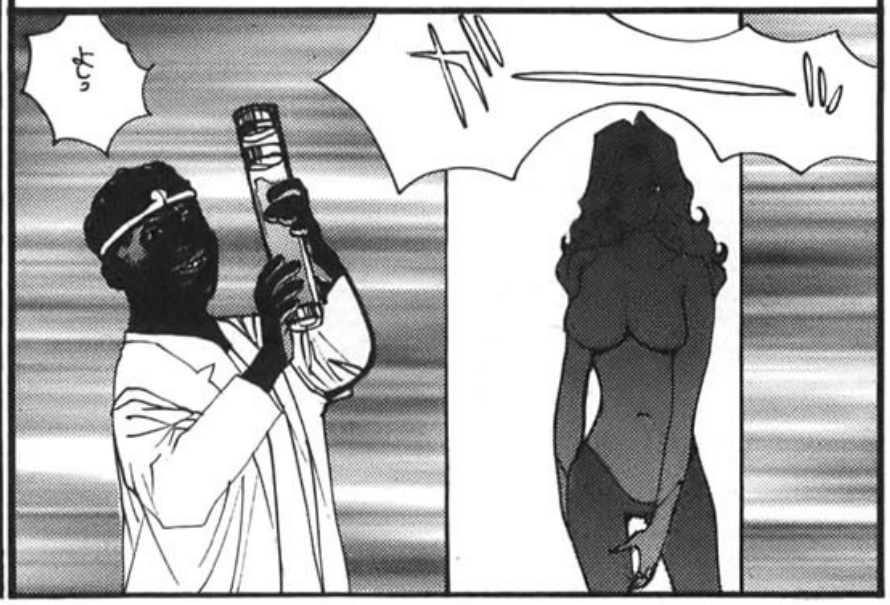
寝台に
ヤプーを
寝かせ



護送の
二船員を
待たせて



緩解薬(アンティ・ドウト)を
合成し終り
これからと
いうところへ
ポーリーンが
はいって来た





白い手術着の
裾(すそ)を乱しながら
彼は平伏した





看護婦N5号も
それに続いた

ポーリーンは彼の頭を軽く右足で蹴(け)って







これは
足蹴礼(キッキング)といって

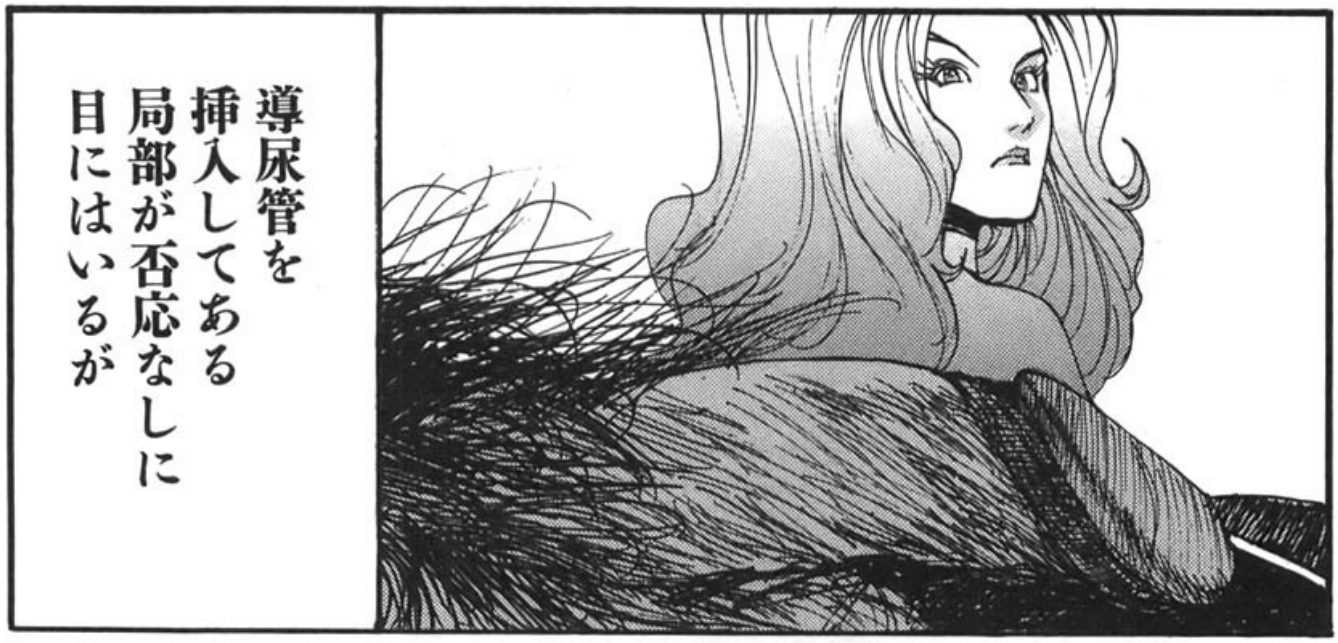


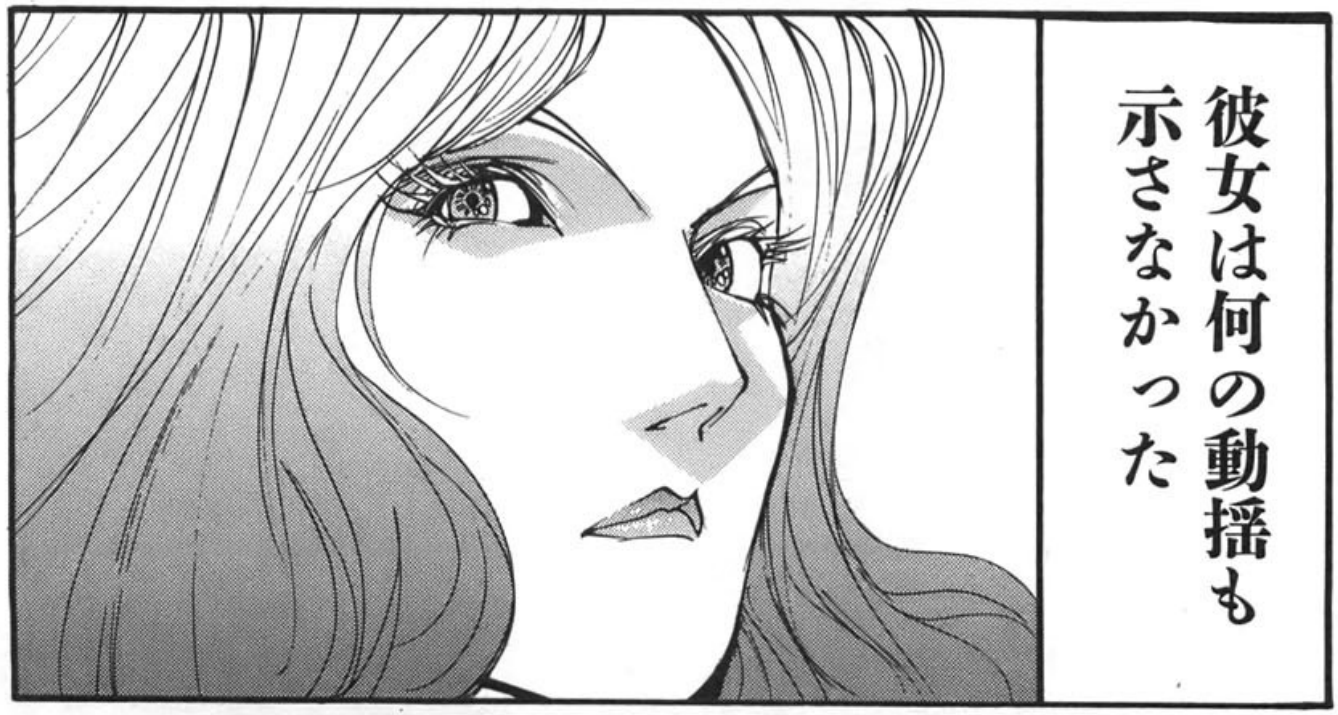


足項礼(フット・ネッキング)より
少し略式の答礼である

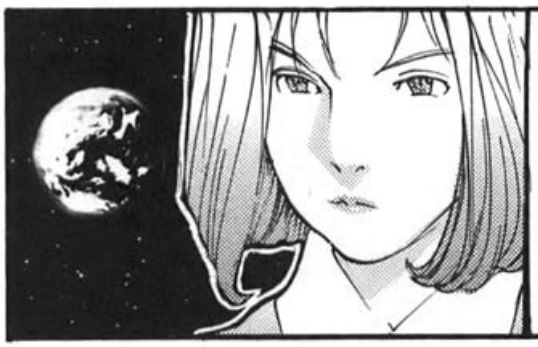

薬は？
できあがったところでございます若奥様
はい
畏まりました
早くおし
彼女は見回してヤプーを認めた


たくましい
男性の
全裸体が
寝台に
仰向けられていた


導尿管を
挿入してある
局部が否応なしに
目にはいるが


彼女は何の動揺も
示さなかった

二〇世紀の
女性が



飼犬のそれに
羞恥を感じないのと
同じだ



麟一郎の
ほうは



体こそ
凝っと
していたが

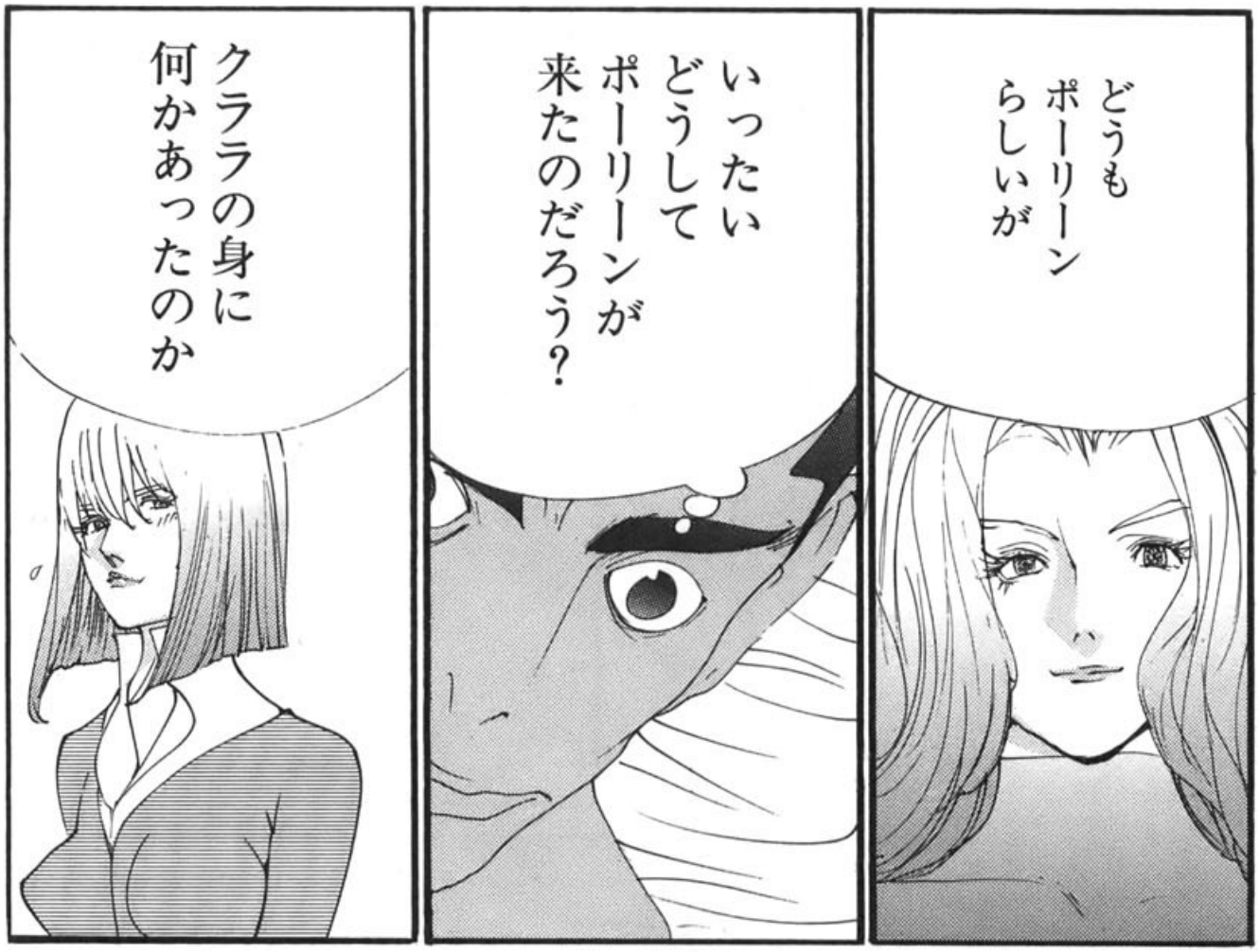


内心の
動揺は
はなはだし
かった



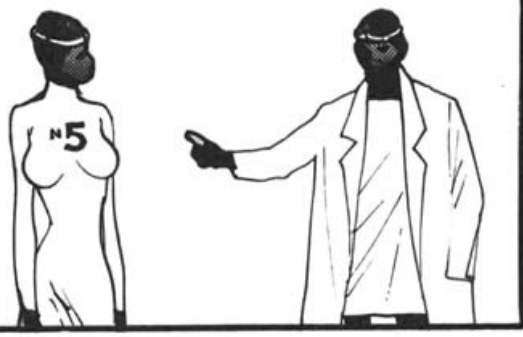
声で
クララでは
ないと
わかる

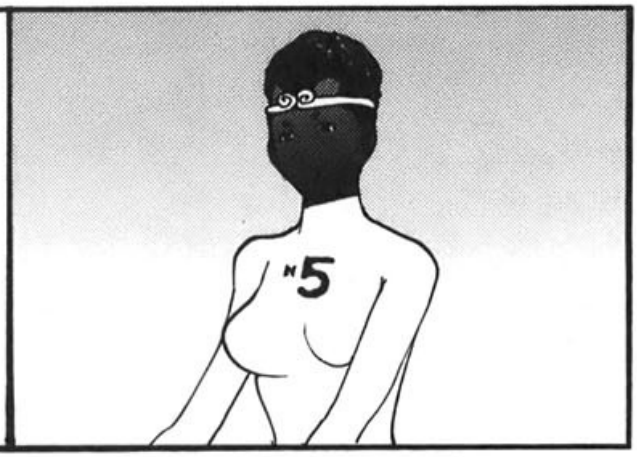



どうも
ポーリーン
らしいが
いったい
どうして
ポーリーンが
来たのだろう?
クララの身に
何かあったのか


それとも
俺(おれ)を……

獣医は
N5号に
命じて

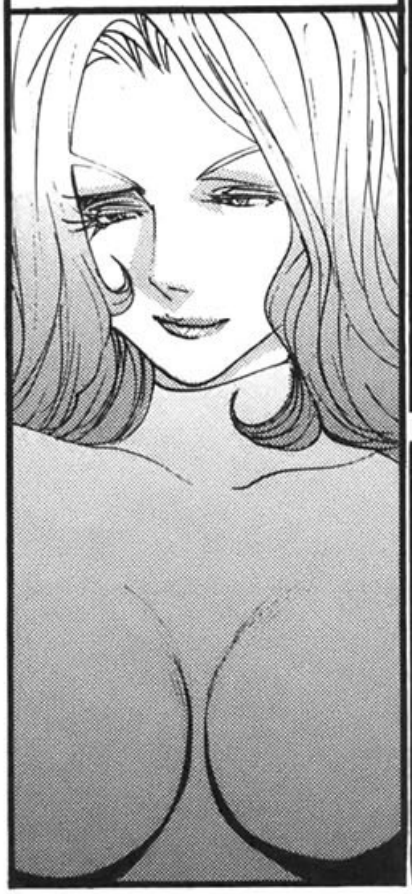




ヤプーに
手錠
足錠
を施させよう
とした

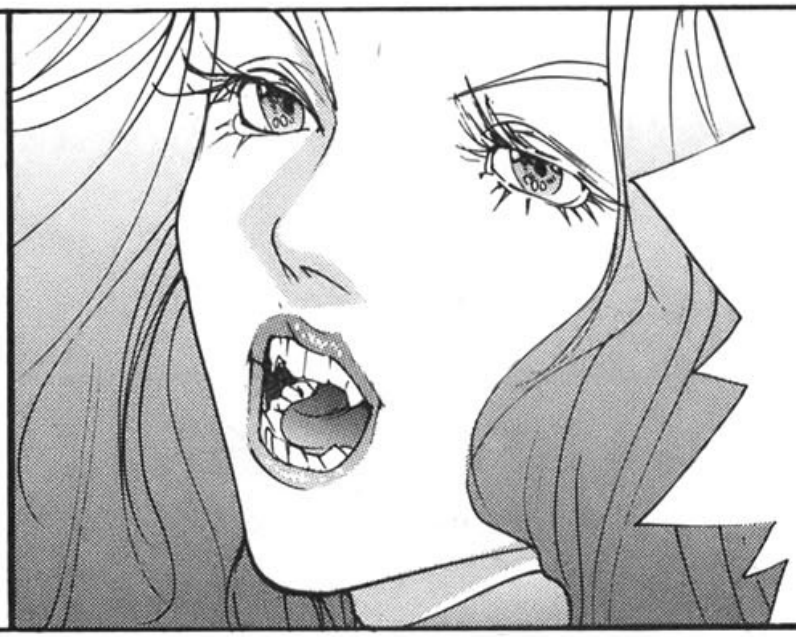
ネアンデルタールは
麻痺が解けると
あばれだすから
いつもそうするのだ



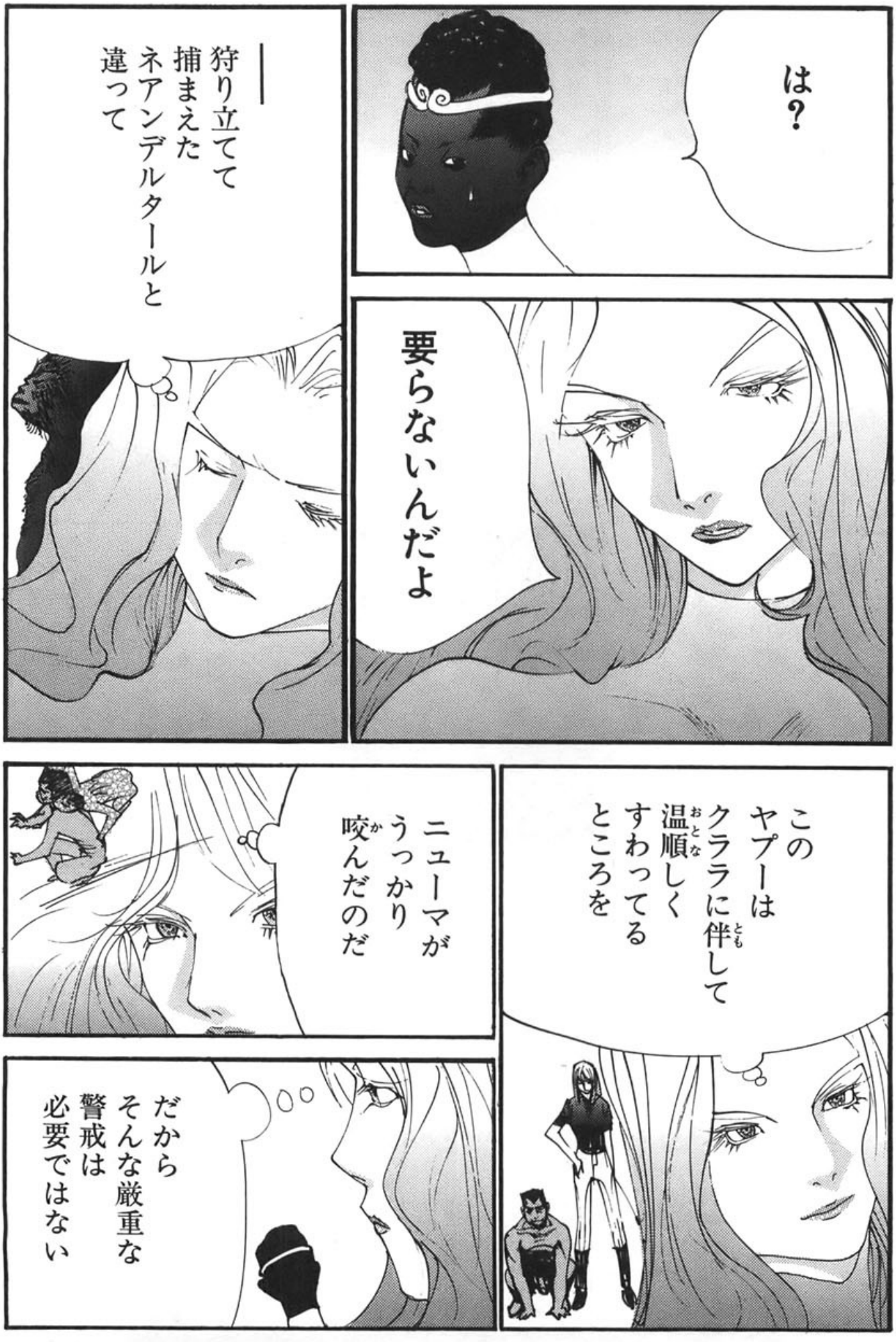


がポーリーンは

そんなもの
要(い)らないよ



と
きつくいった


は？
要らないんだよ
――
狩り立てて
捕まえた
ネアンデルタールと
違って
このヤプーは
クララに伴して
温順しく
すわってる
ところを
ニューマが
うっかり
咬んだのだ
だから
そんな厳重な
警戒は
必要ではない

どうせすぐ
上階(うえ)に
連れて
ゆくんだし
……

ポーリーンの
気持は
そんなことで
あったが

命令の理由を
いちいち
説明するなんて
不見識なことは
しないのが
イースの白人だ

彼女の
意向は
絶対命令
である

ジムは
緩解薬液を満たした
太い注射器を取り出し

麟一郎の太腿(ふともも)に
ズブリと突き立てた

美しい
若奥様に
足蹴礼を
受け



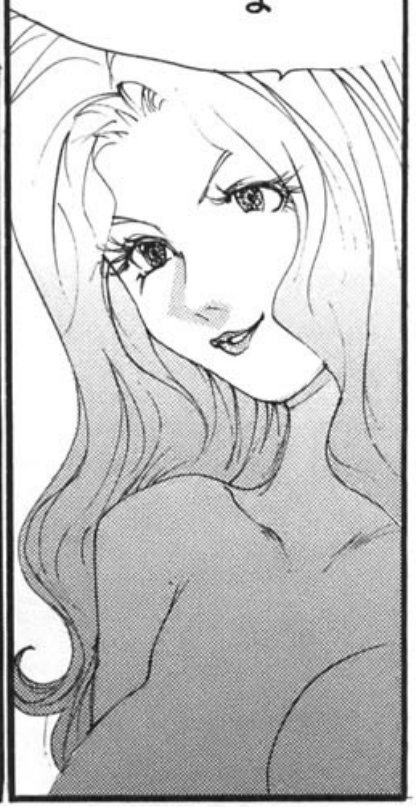
その御前(ごぜん)で
仕事をする
という
破天荒の
光栄に





若い獣医は
すっかり
あがってしまって
手がブルブル
震えた

だらしないわよ
震えてるじゃ
ないか



ポーリーンに
笑いながら
叱られて



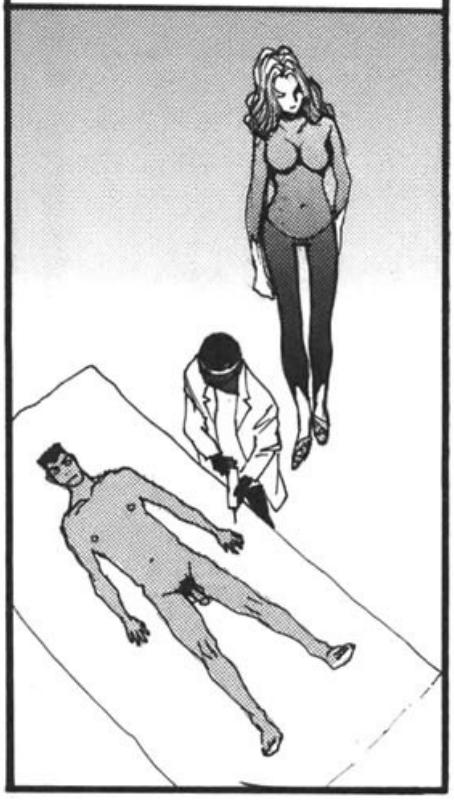
獣医は
ますます
震え出し



麟一郎の
注射の苦痛を倍加させた

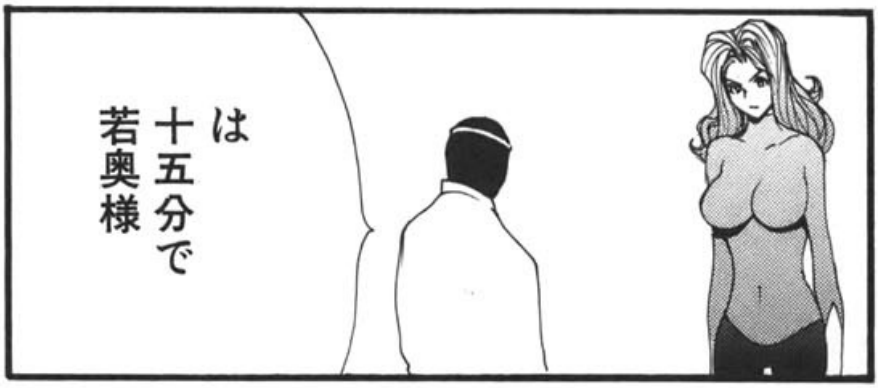


が
どうにか
こうにか
注射は終った



この薬は
すぐ効くって
聞いてたけど





は
十五分で
若奥様



毒が
少しでも
残ってますと
まったく体が
動きませんが

毒が
消えますと
瞬間的に
元通りに
なります



漸層的でなく
飛躍的に
肉体能力が
戻りますのが



この
衝撃牙(ショック・ファング)の毒の
緩解経過の
特徴で
ございまして
……



十五分ね
その時
また来るわ

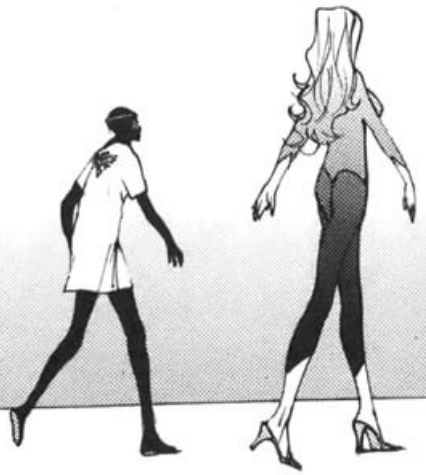
この部屋で
ただ
待っているより

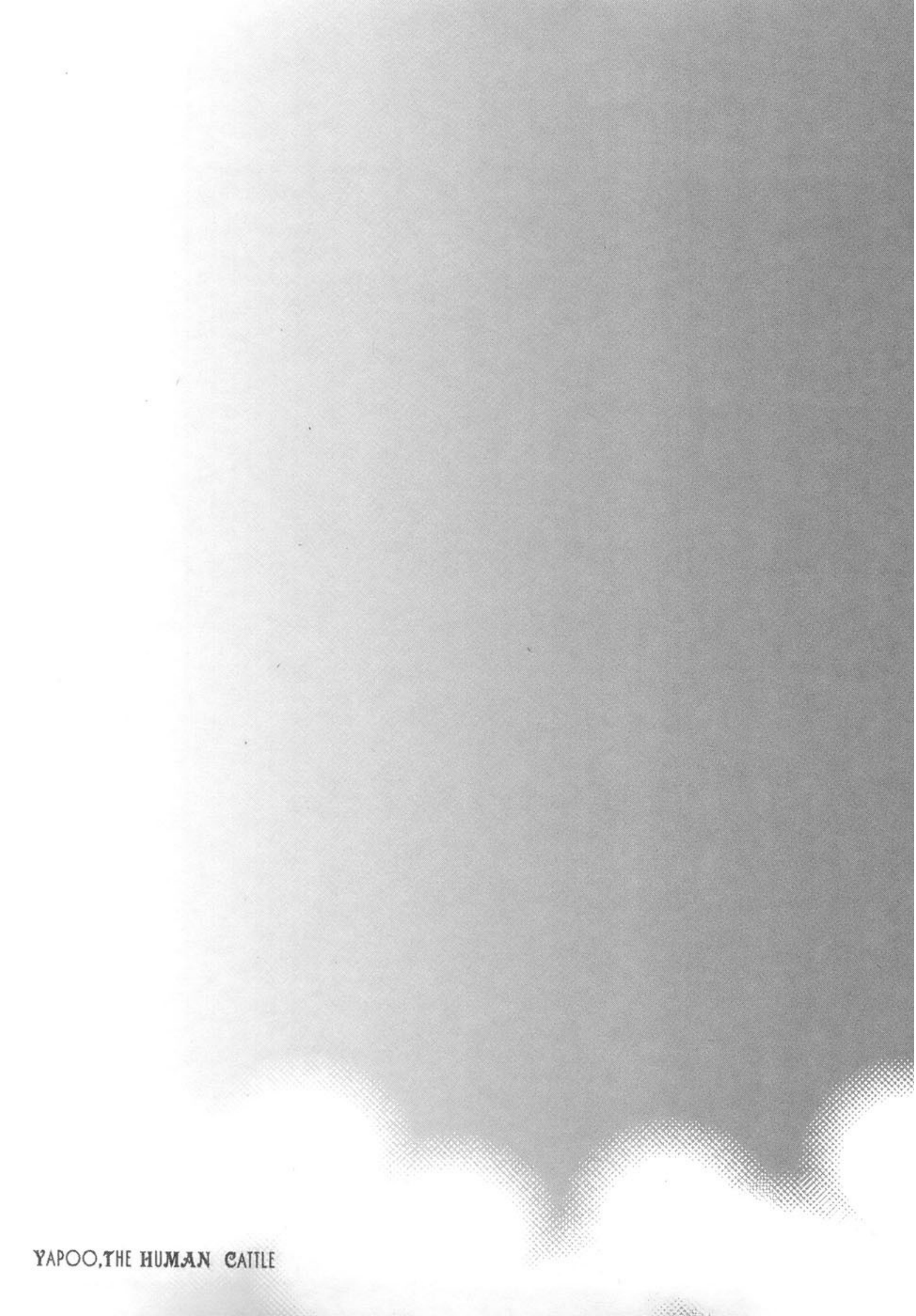
この機会に
地階の
黒奴舎でも
見回ってみよう

と
ポーリーンは
獣医科手術室を
出ていった



従者のA3号が
形に添う影の
ように従った



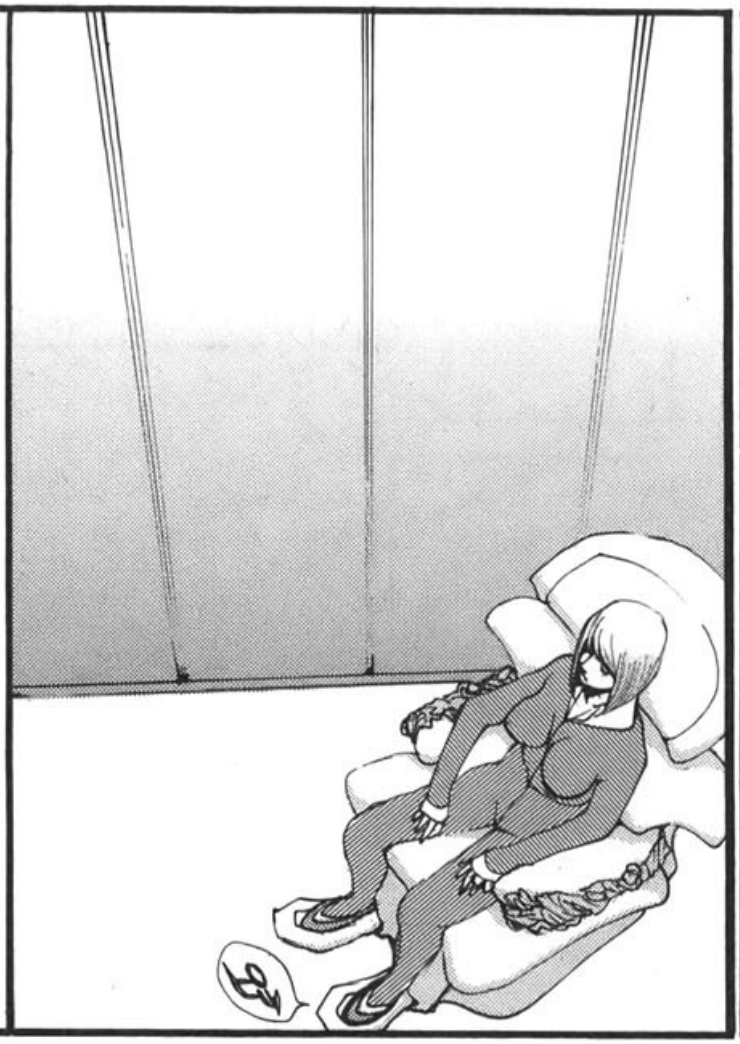


YAPOO,THE HUMAN CATTLE



クララは
自動椅子に乗って
寝室に
はいって行った





衣装箪笥の前で左のペダルを踏んだ

F1号が訊いた



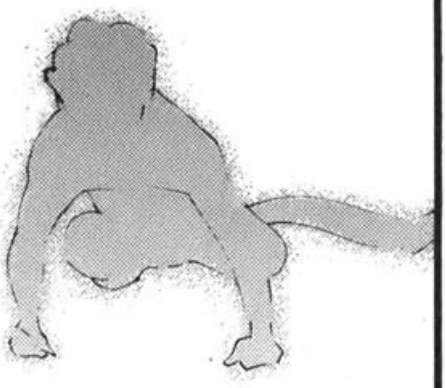
お召替えは……
部屋着に
なさいますか？



そうね
それに
スリッパに
はき換えたいわ



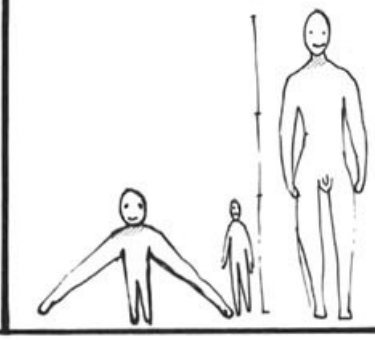
すると
簞笥の横から
奇妙な
生体家具が
現われた



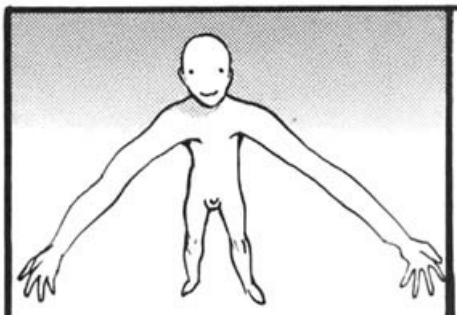
身長は
三分の一
縮小型で



1/3



頭部と
両腕だけが
尋常の
大きさだから

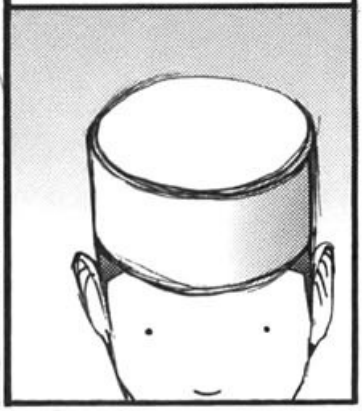


手長の
頭でっかち
だが

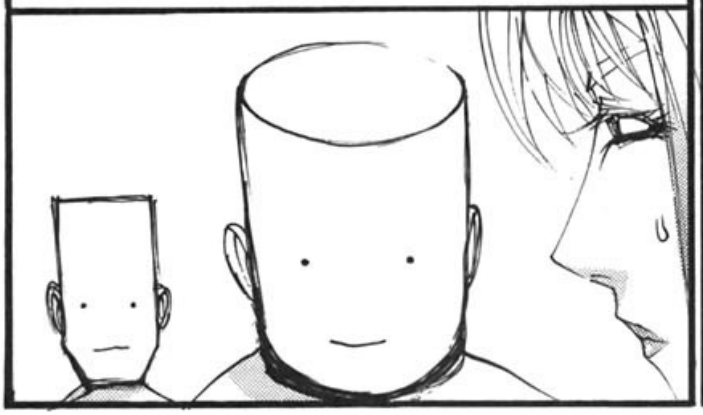
変って
いるのは



帽子を
かぶって
いるのかと
思うほど



幅広の頭蓋の
頂上が真っ平らで
その平面と
下顎が左右に
張っている
その底辺の面とが
平行に
なっている
ことと



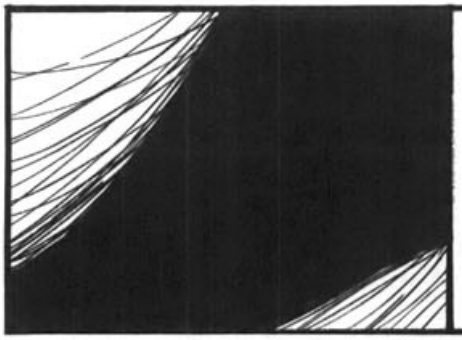
頭頂平面上に
一足の室内靴(パントフエル)が
揃えて
載せてあること
であった



——と
見えたが



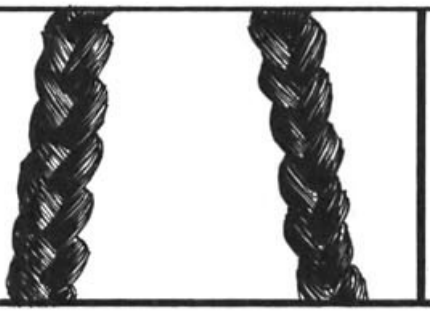
それに
頭髪が異常に
長く



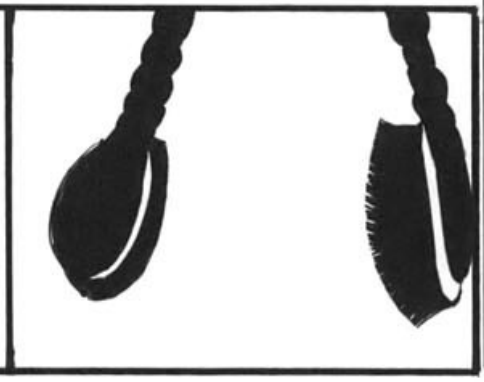
左右に
分けて編んだ
黒い太い
髪束が



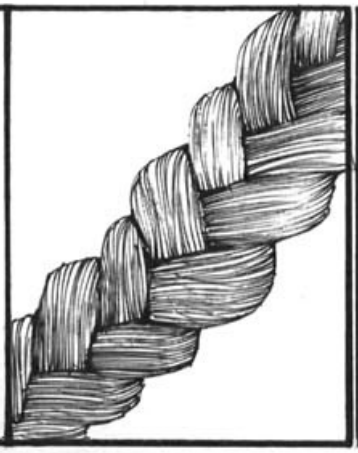
左右とも
五十センチ
くらいに
伸びており



その先に
ブラシが
結びつけてある



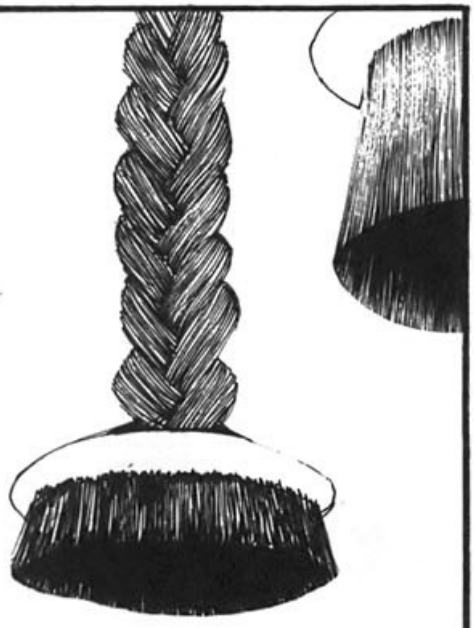
実は
そのたばねた
頭髪の
一本一本を



握り部の無数の
小孔(こあな)から通し



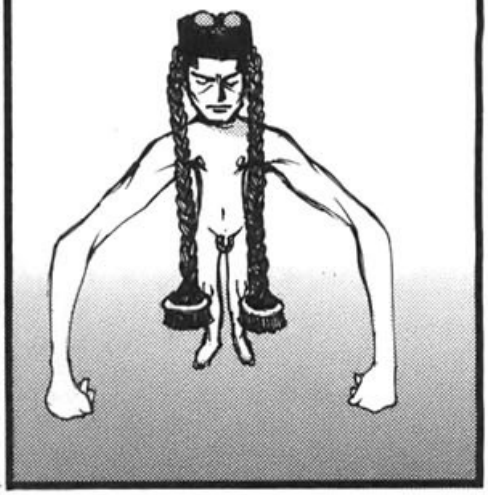
その裏の面で切りそろえて
ブラシに作ってあるのだ



つまり
このヤプーの
髪の毛は



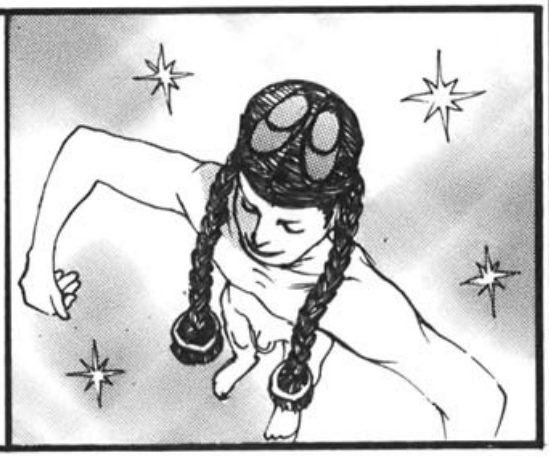
生きながら
二個のブラシ
そのものの
一部分に
なっているの
であった



この靴具畜(シューヤプー)は
製造工場から
納入された
ばかりの品



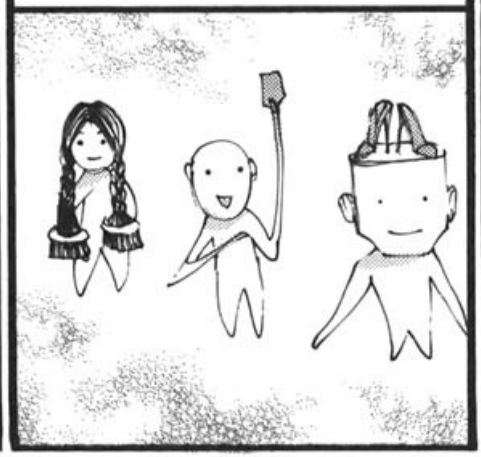
つまり
養成所卒業直後の
新畜である



靴具畜養成所には



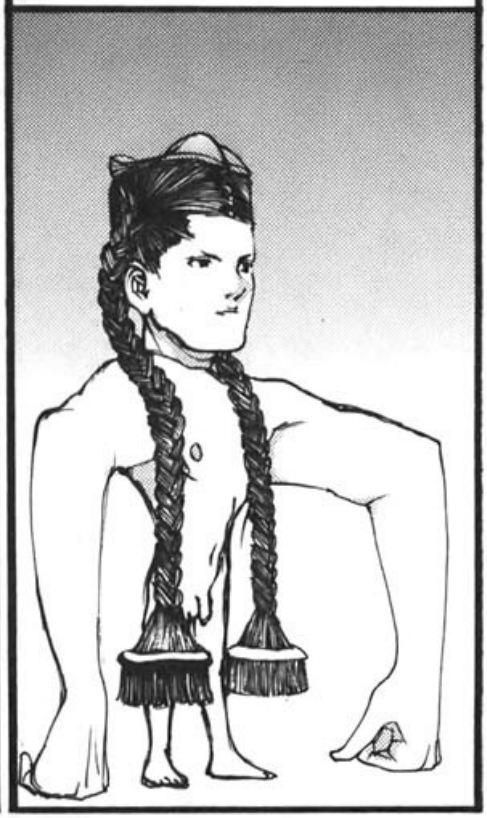
戴靴奴（くつぬぎ）
捧靴奴（くつもち）
磨靴奴（フラシ）



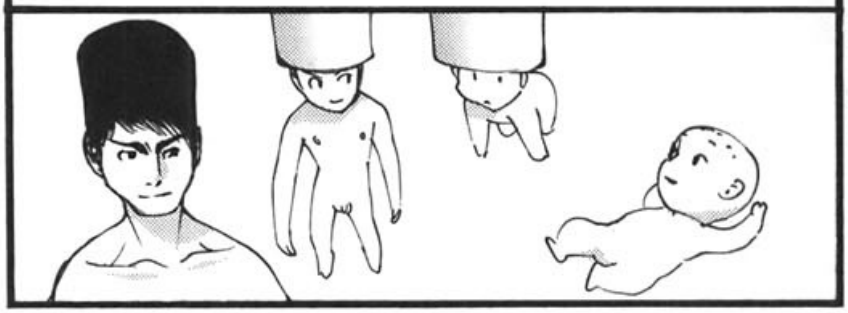
……など
貴族邸で
使役される
各種作業専門畜の
訓練課程があるが



彼は
別荘用の
兼用多能畜
である



生長期に
頭蓋に
加圧されて
頭頂扁平の
福助頭に
なっている
のだが



そのカリキュラムは



履物（はきもの）の
歴史や
靴製造法の
学科を
別として



術科が
三段階
ある



第一過程は
「靴冠（くつかむり）」



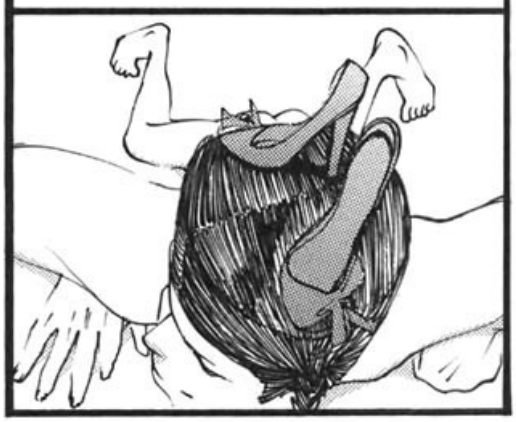
起居動作に際し
各種の履物を
頭に載せ



頭頂面を
常に床に
平行に保って



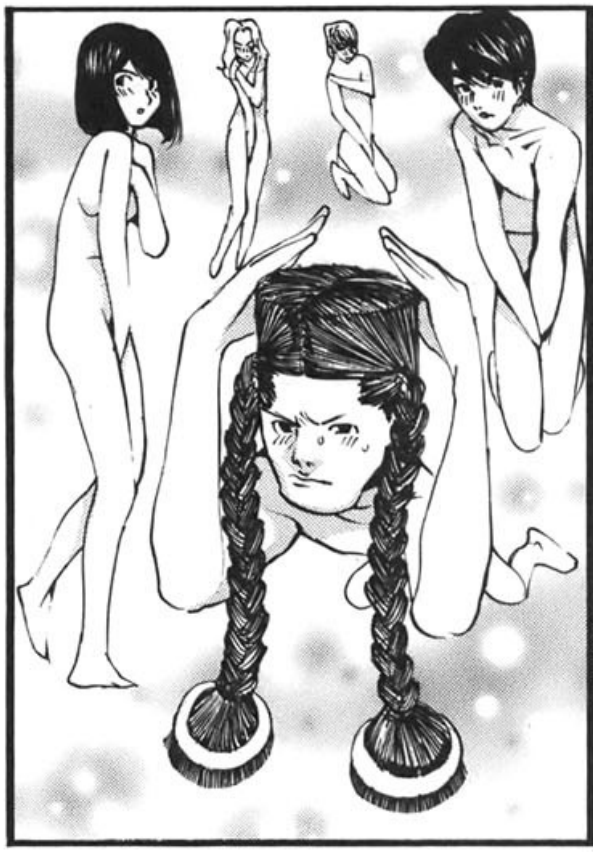
冠である
履物を
絶対に
落さないよう
訓練するうち



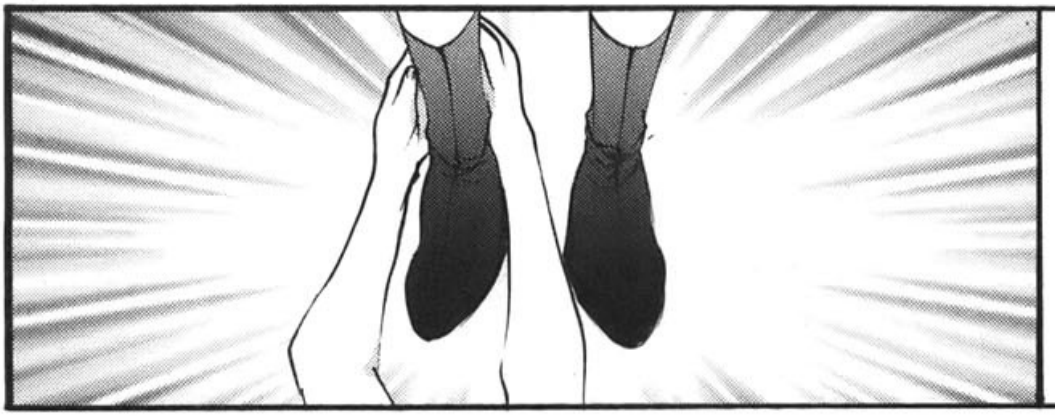
何も
載っていないと



ちょうど
人間が着物を着ないで
裸でいるときのような
恥ずかしさを
覚えるようになる



第二過程は
「脱靴（ぬがせ）」



下顎を床に付けた
姿勢のまま
長い両手を使って



アンドロイドの
「御足（おみあし）」から
履物を脱がせる作業



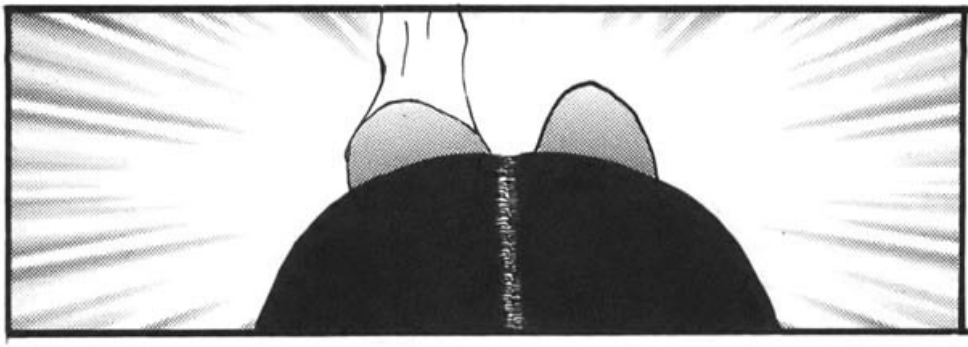
靴から
抜かれたばかりの
蒸れた足が
発散する
異様な臭気に
快感を覚え



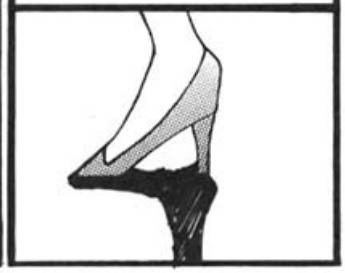
その芳香を嗅げる特権に
プライドを持つようになる



第三過程は
「頂戴」
といって



靴を
履いてもらう
作業だ



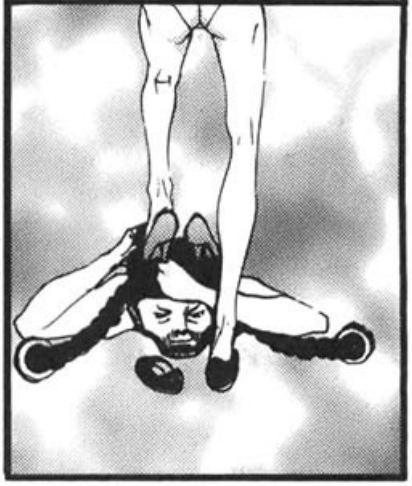
このとき
頭頂に
戴く靴に
「御足」が
かかると



頭頂面が
踏まれて
その圧力が
下顎を床に
押し付ける



このときが
この多能靴具畜の
至福の瞬間だ



頭の天辺を
人の足に
踏まれると
喜ぶ



など
可哀そうに
思えるが

履物知識を
詰め込んだ
頭の上に
靴を載せて
一生を送る



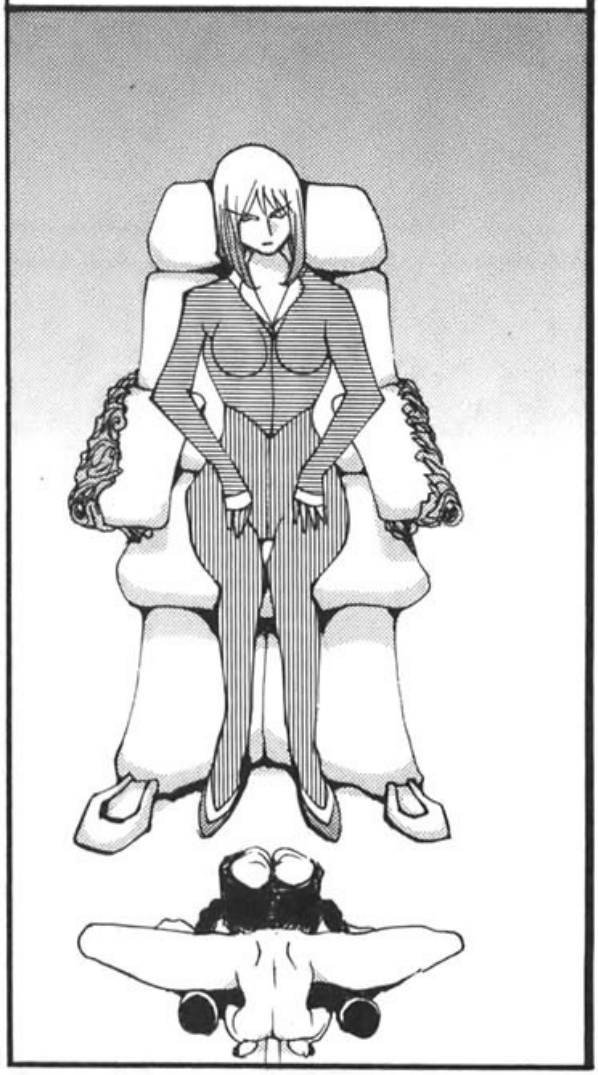
ヤプーには
それが
ふさわしい
として
そういう
習性を
条件づけて
あるのだ





イース白人の
慈畜(いつくしみ)は
合理的なのである

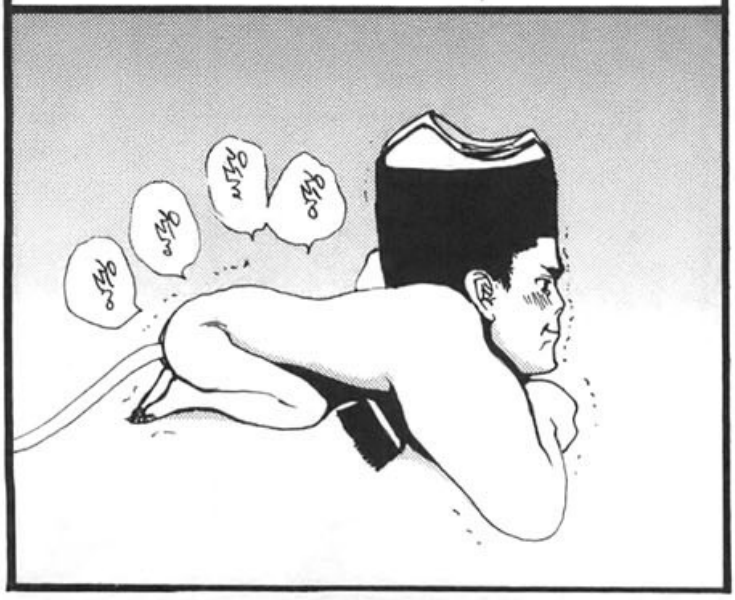
彼は
クララの
椅子の前に
ひざまずき





実習授業で
覚えたとおり
下顎を床に付けた

白女神(ホワイト・ゴッデス)への
初奉仕の
緊張で
身体(からだ)が
慄(ふる)えている



両手を上に伸ばして
クララの靴を脱がせた



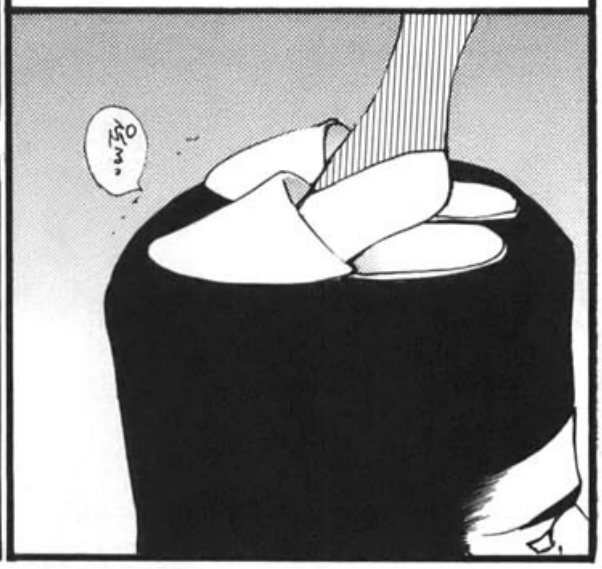
頭上の室内靴（パントフェル）が
ちょうど
突っかけやすい
位置にあるので



クララは
片足ずつ履いたが



足を
頭の天辺に
載せた瞬間
室内靴が
揺れたのは



靴具畜が



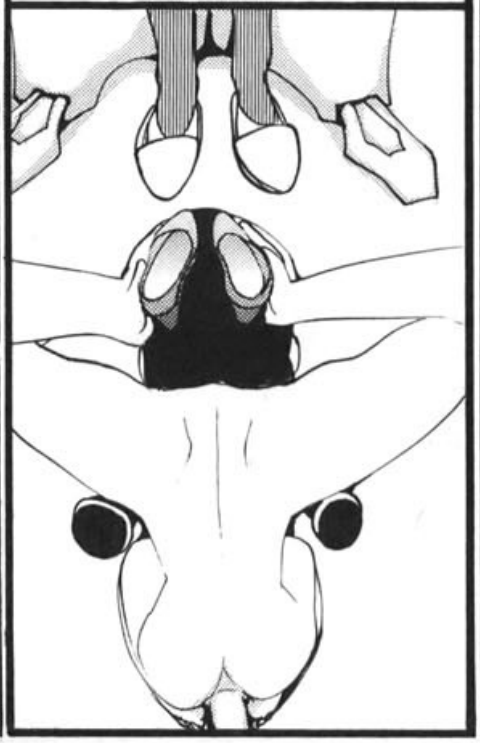


〈ほんとの
白い御足〉

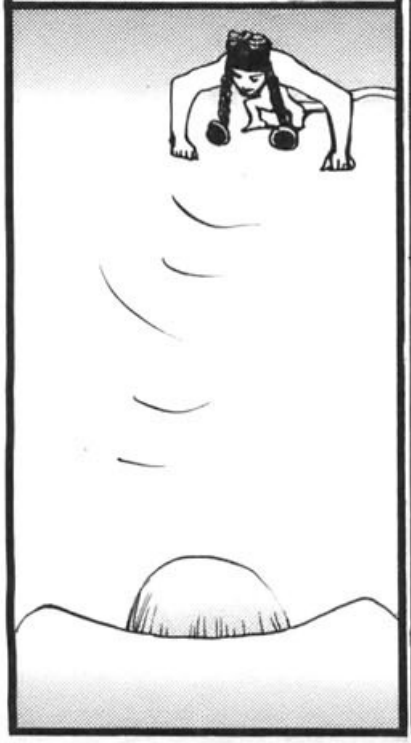
に
踏まれた
感激のあまり
身を慄わせた
のである



彼は
脱がせた
中ヒールの
パンプスを
頭に載せると



出てきた
元の場所に
帰って行く




其処(そこ)に
坐って

今日の
初仕事の
感激を胸に

舌で
埃(ほこり)を
舐め取った
上


頭髪のブラシと
精液クリームで
磨き上げ

足裏布団(プランター・クッション)を
交換しておく
のである

履物(はきもの)を換えた
わずかの間に

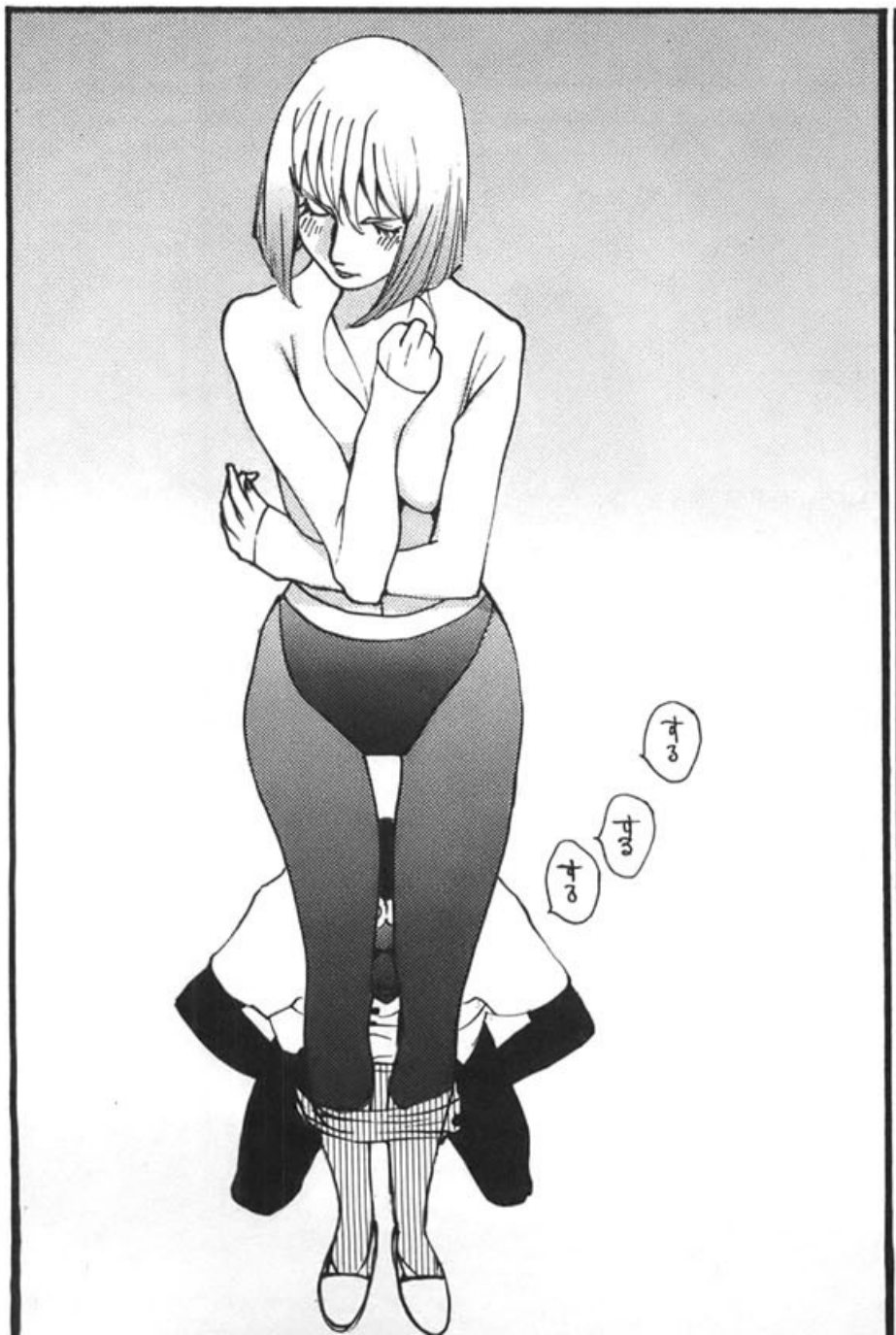


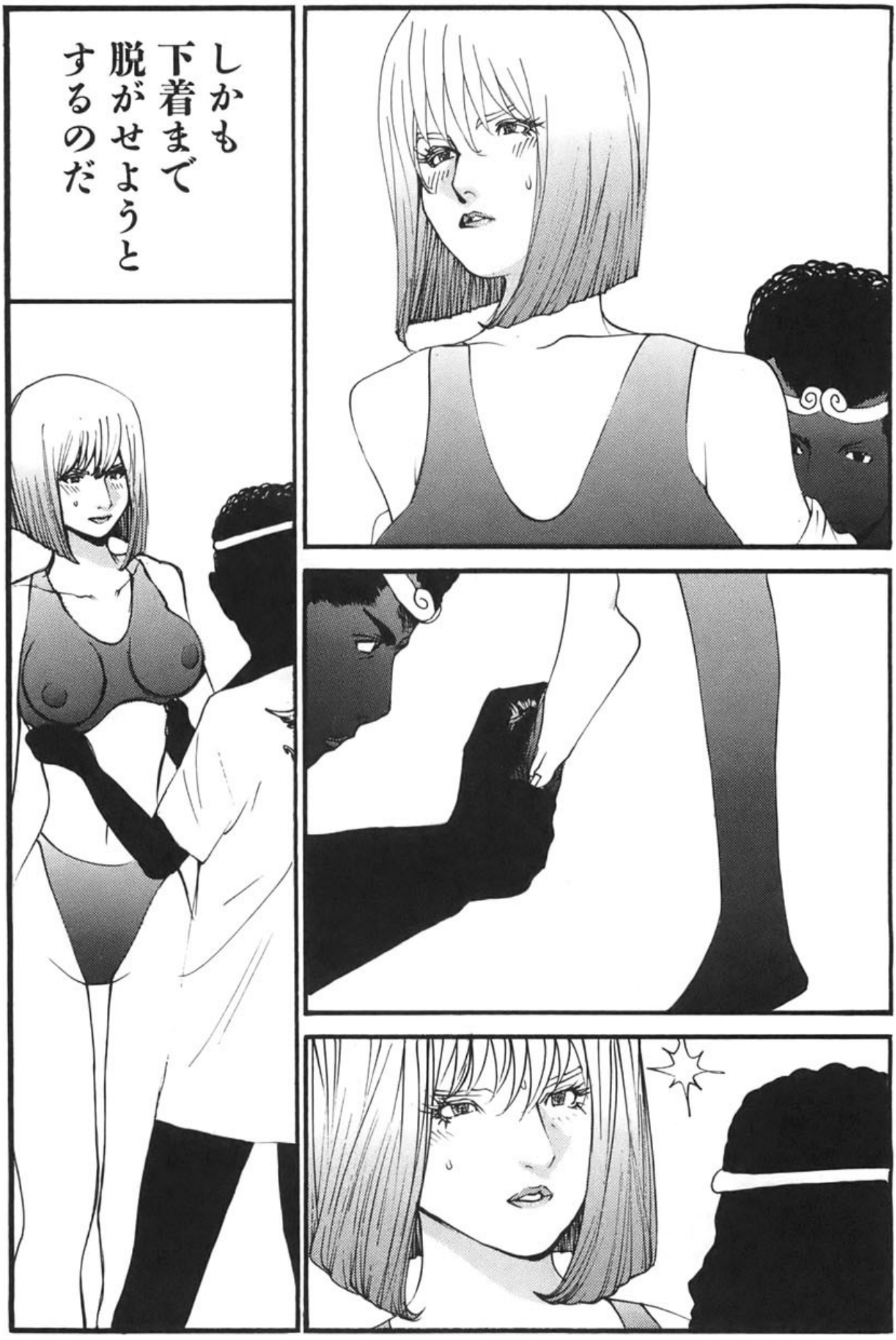


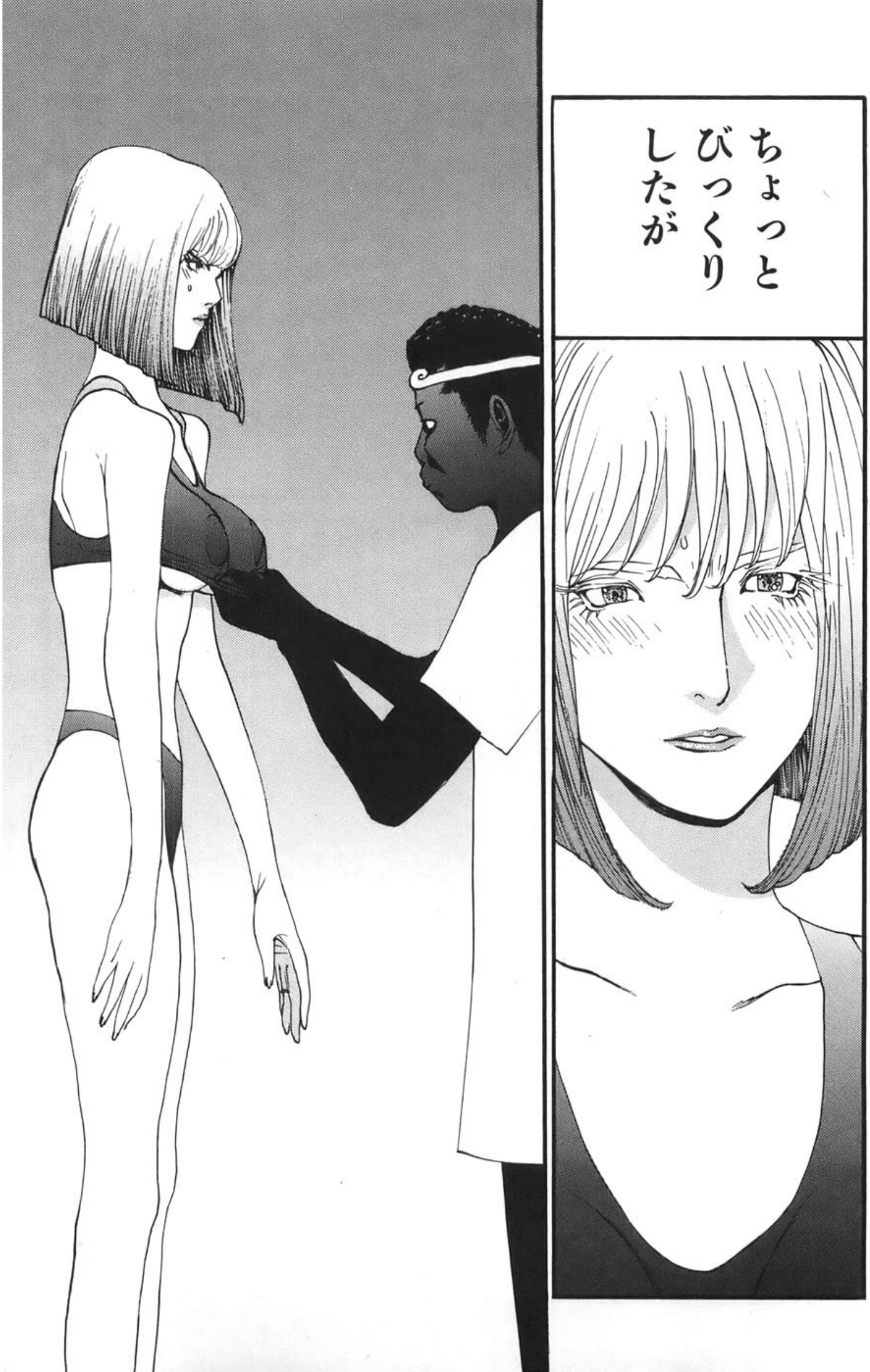
F1号は
着替えの用意を整えて
待っている

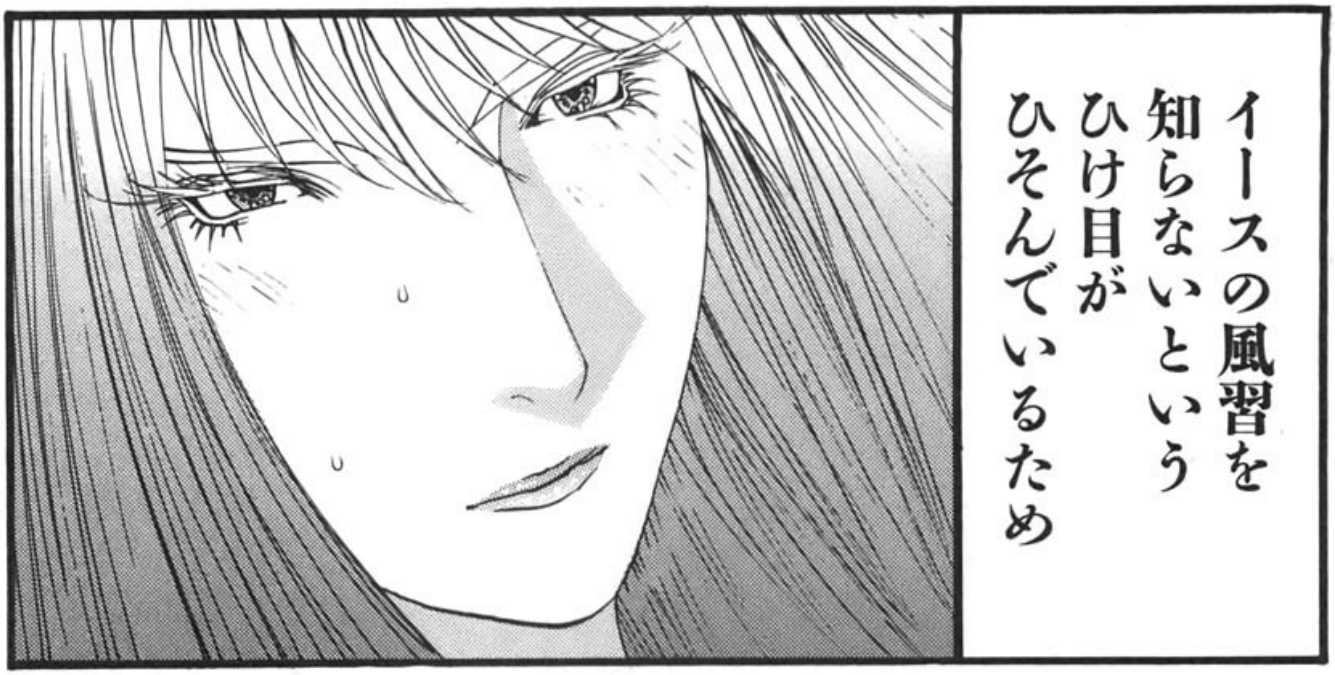
三つ揃(みつぞろ)いの
スーツを
脱がせてくれ

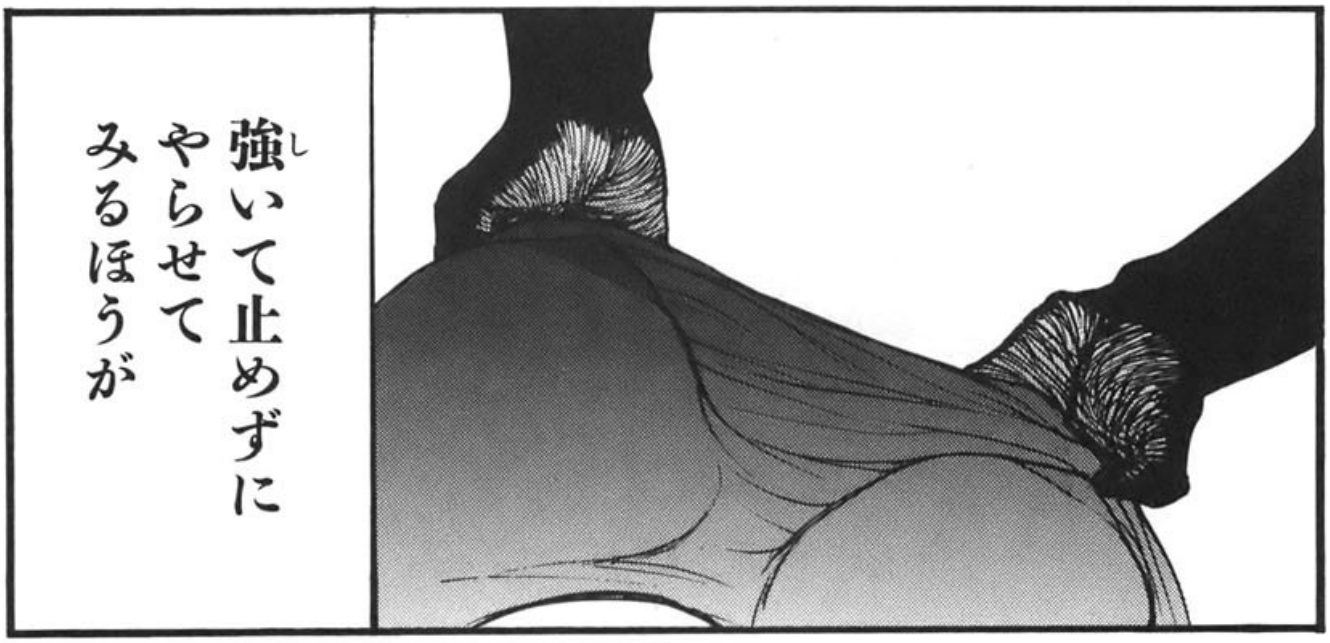


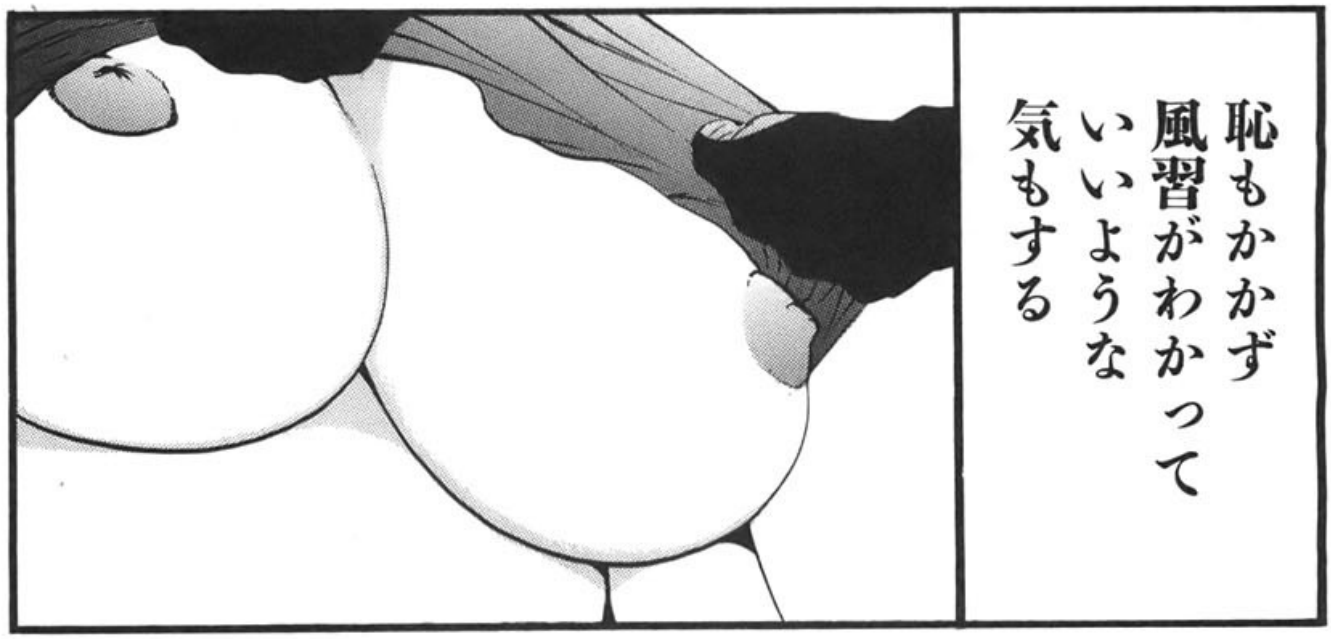


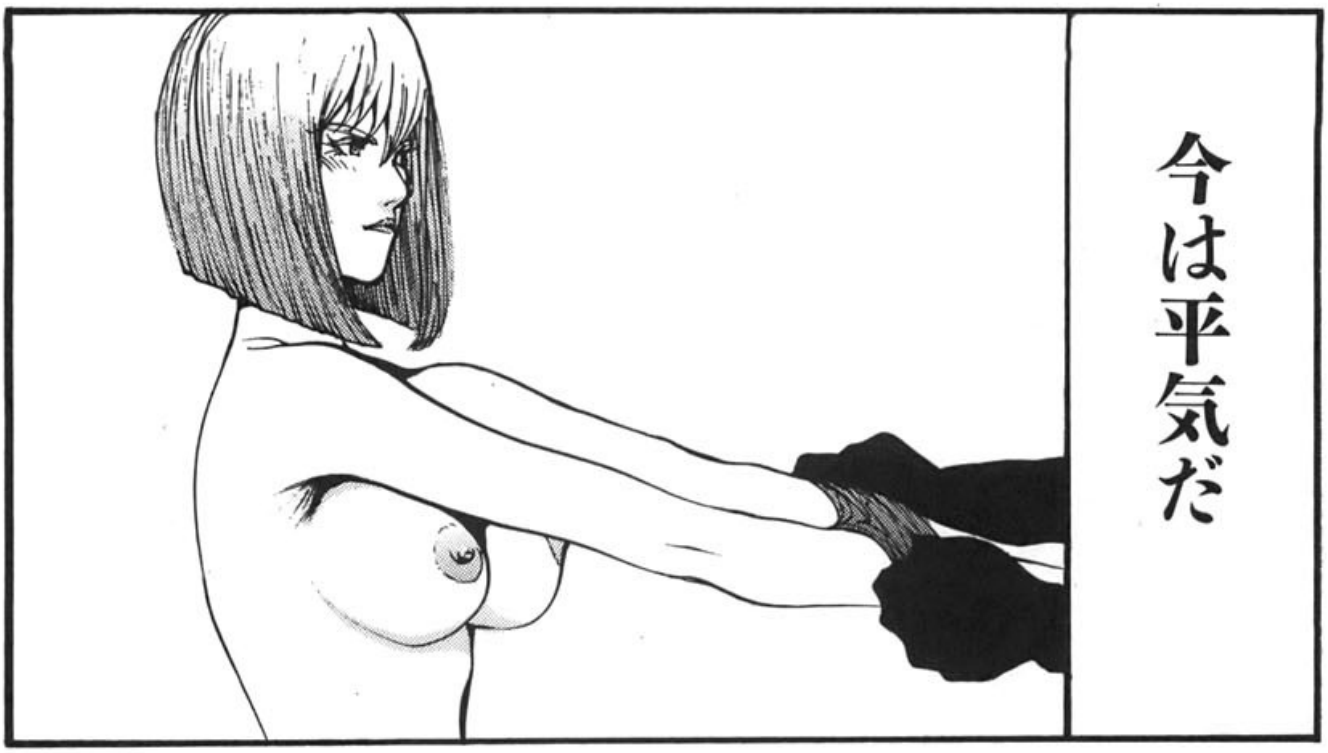

しかも
下着まで
脱がせようと
するのだ

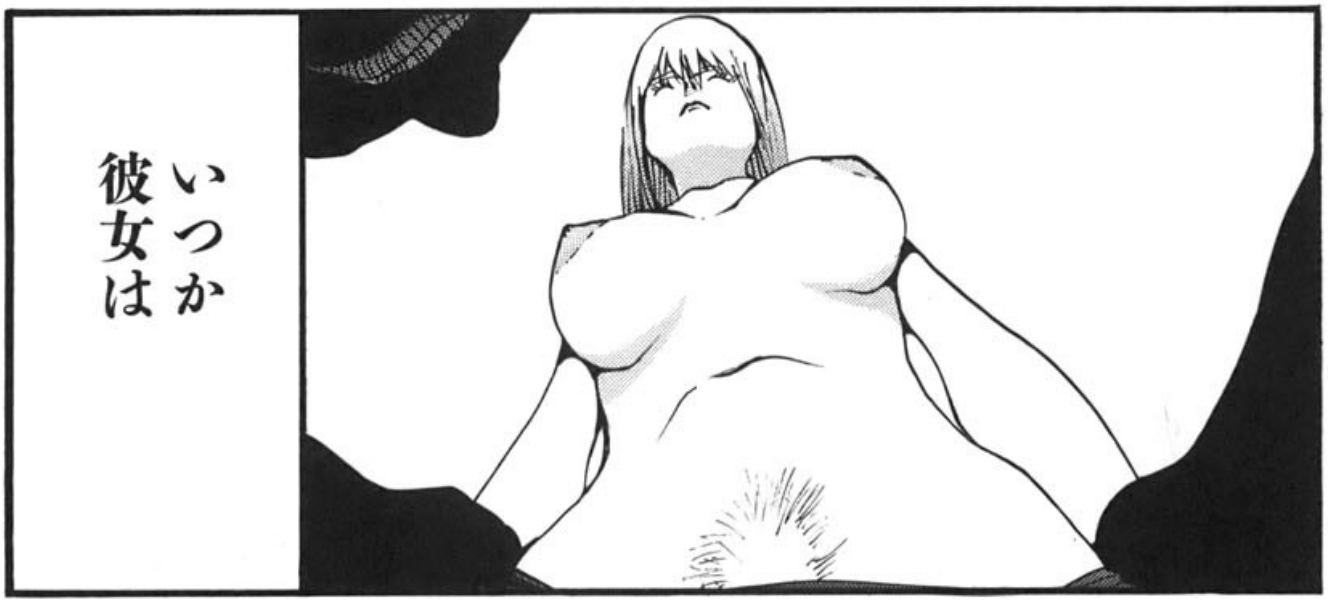

ちょっと
びっくり
したが

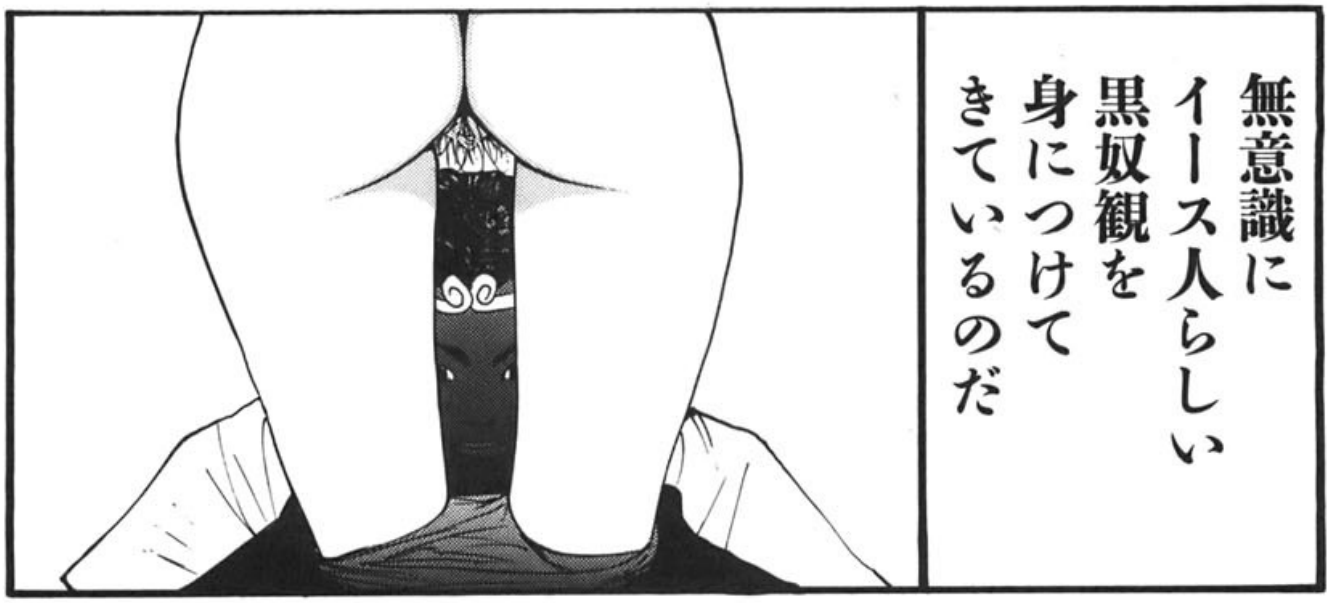

イースの風習を
知らないという
ひけ目が
ひそんでいるため


強(し)いて止めずに
やらせて
みるほうが


恥もかかず
風習がわかって
いいような
気もする


今は平気だ

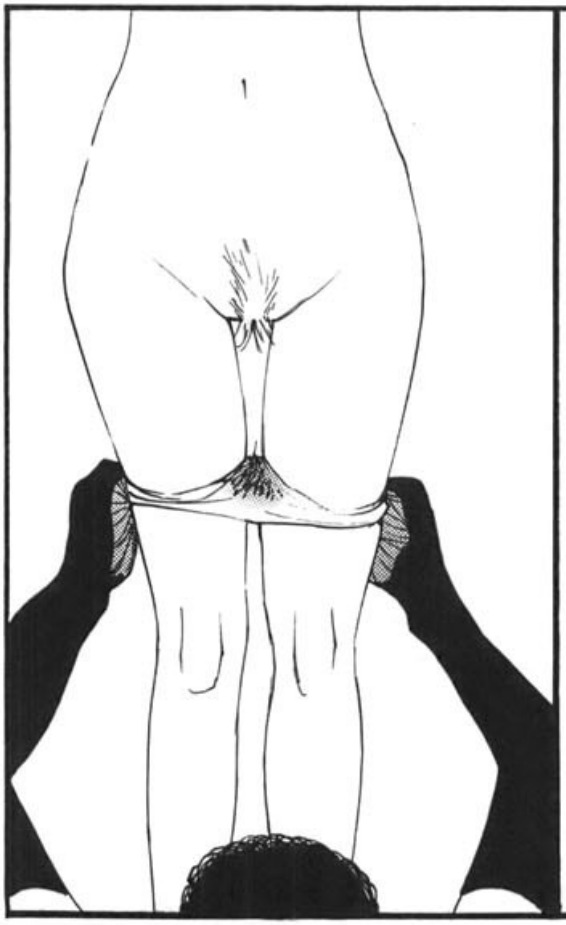

いつか
彼女は


無意識に
イース人らしい
黒奴観を
身につけて
きているのだ

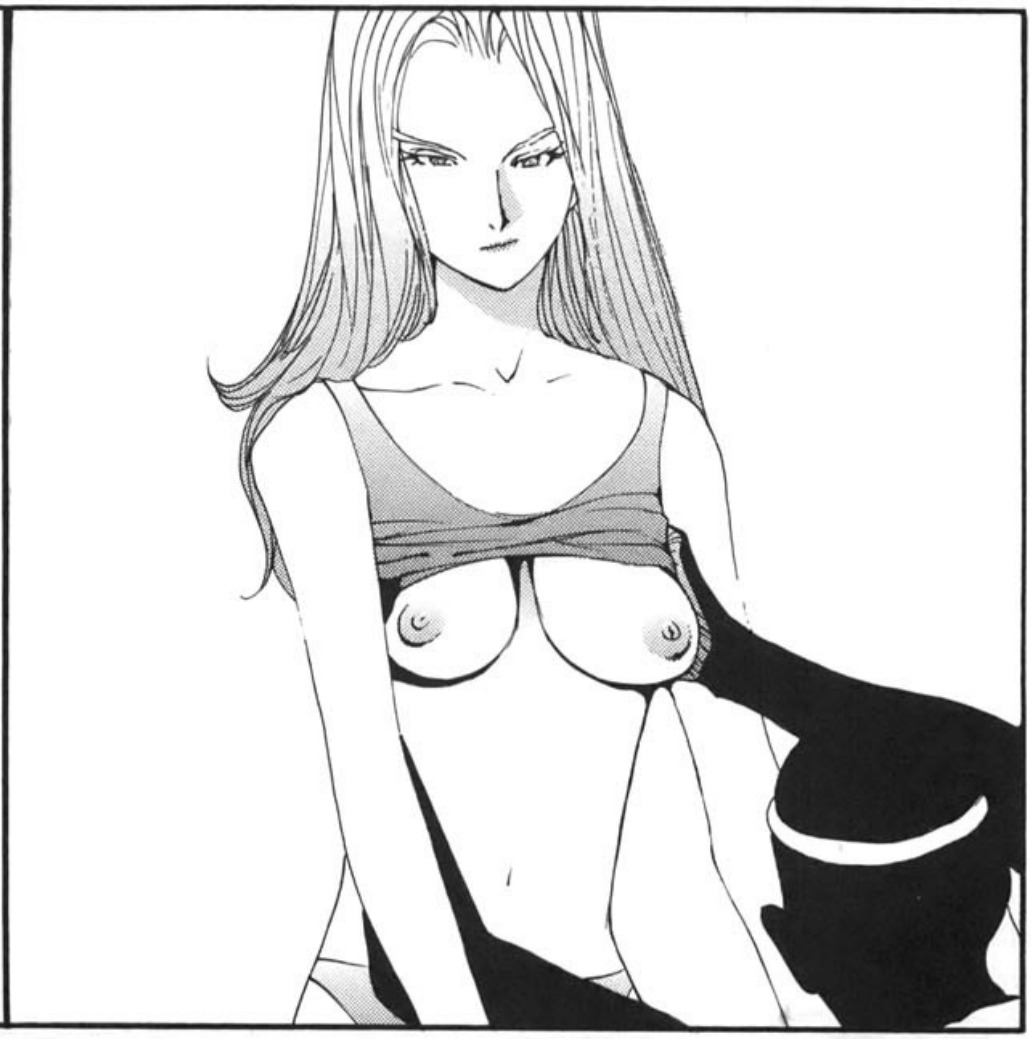
下着を
よく換えるのは
イース人の
身嗜(みだしな)みである



ことに女性は
下着を汚しやすいから



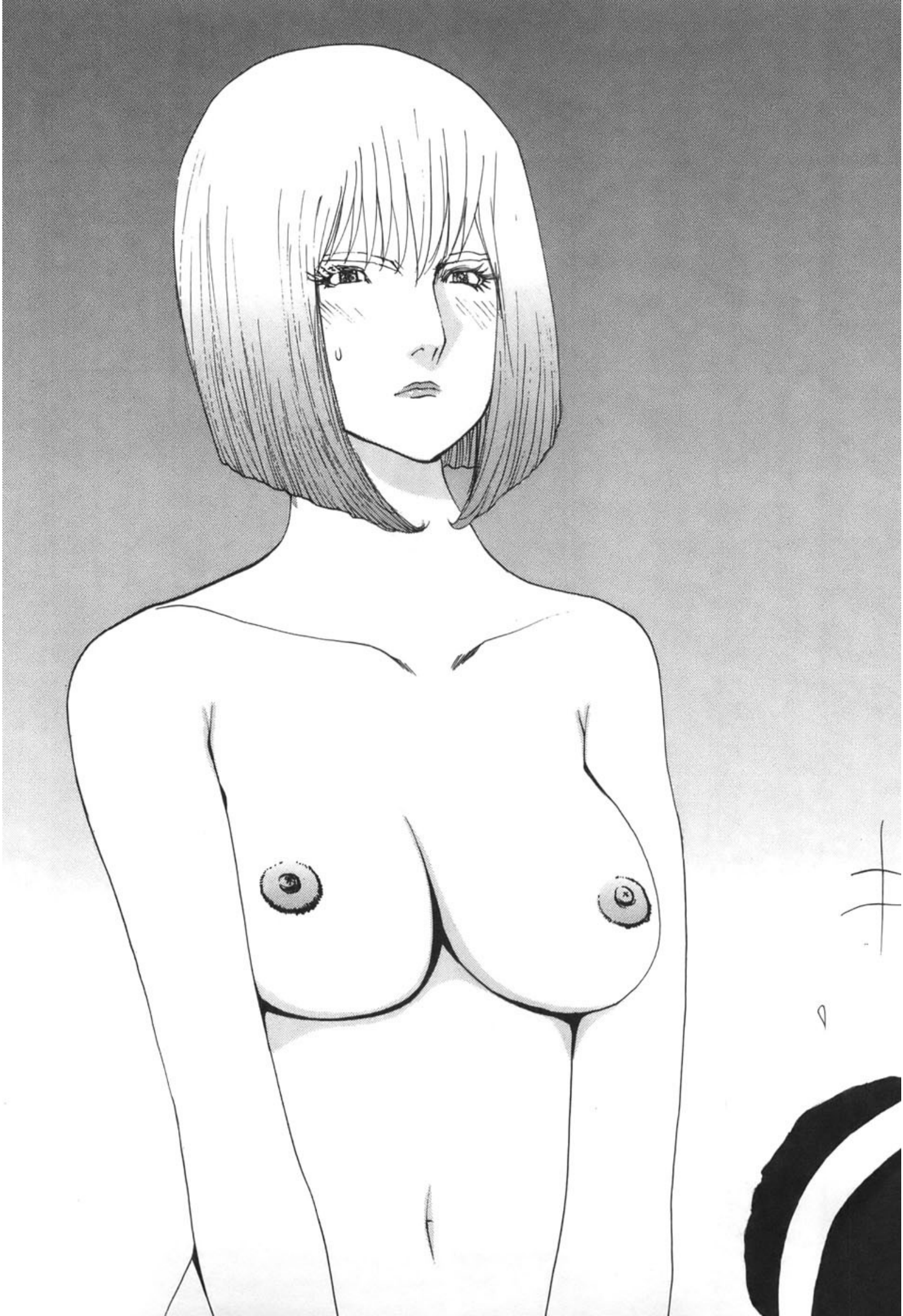
できるだけ
たびたび取り換えるのが
オシャレとされている



黒奴の従者に
手伝わせるのは
その場合
当然のことだ

第十二章　水晶宮の上階と地階で　―第二話―

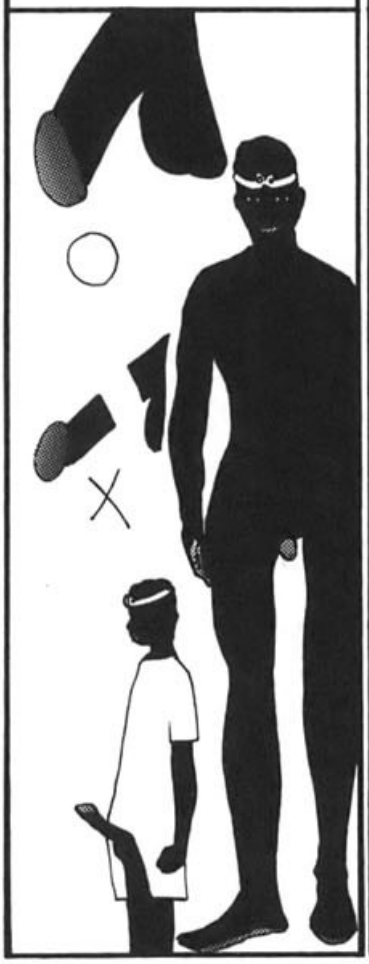




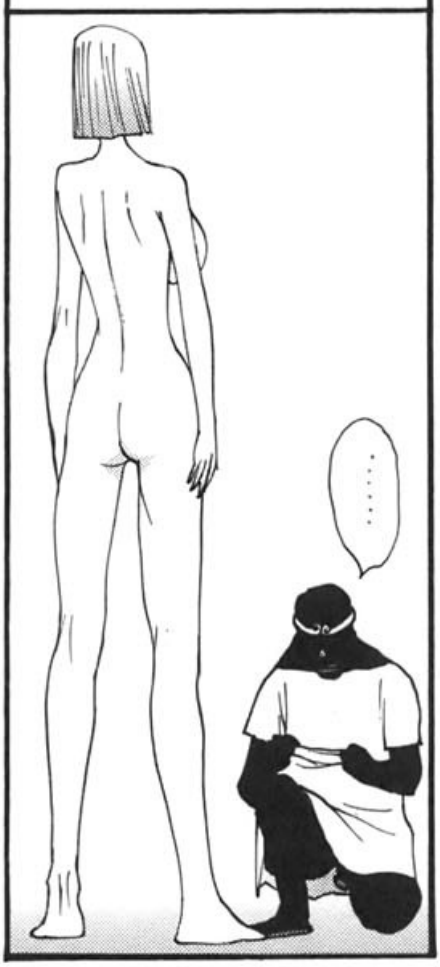
女主人の肉体に
劣情を催すような
不届きな黒奴には
恐ろしい処罰が
待っているから



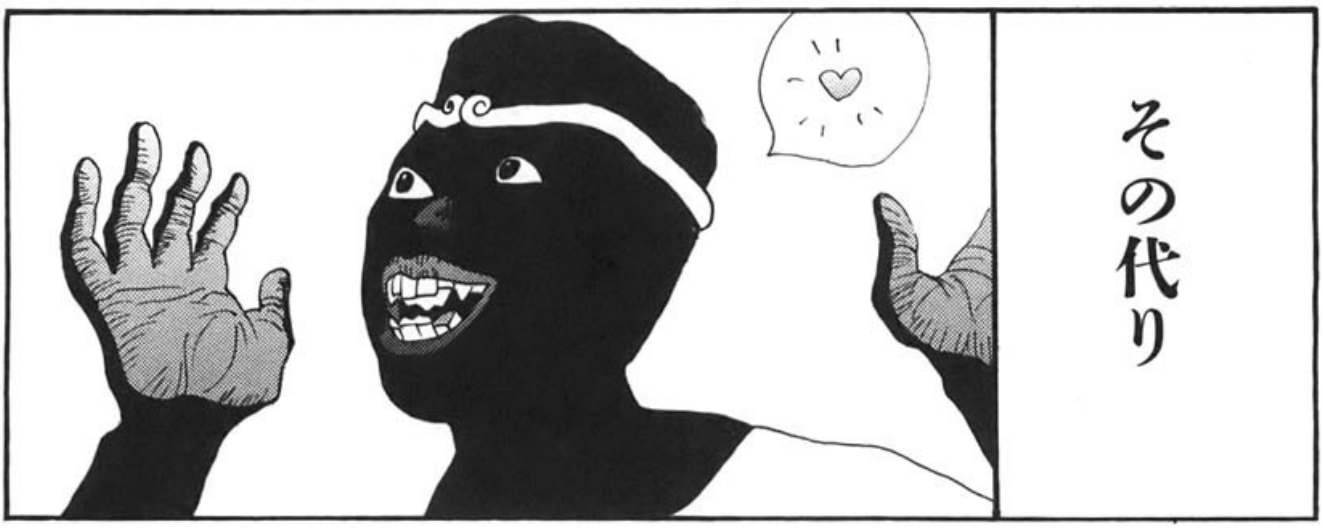
べつに
去勢した奴を
使う必要はない



黒奴は
我慢する義務が
あるのであった



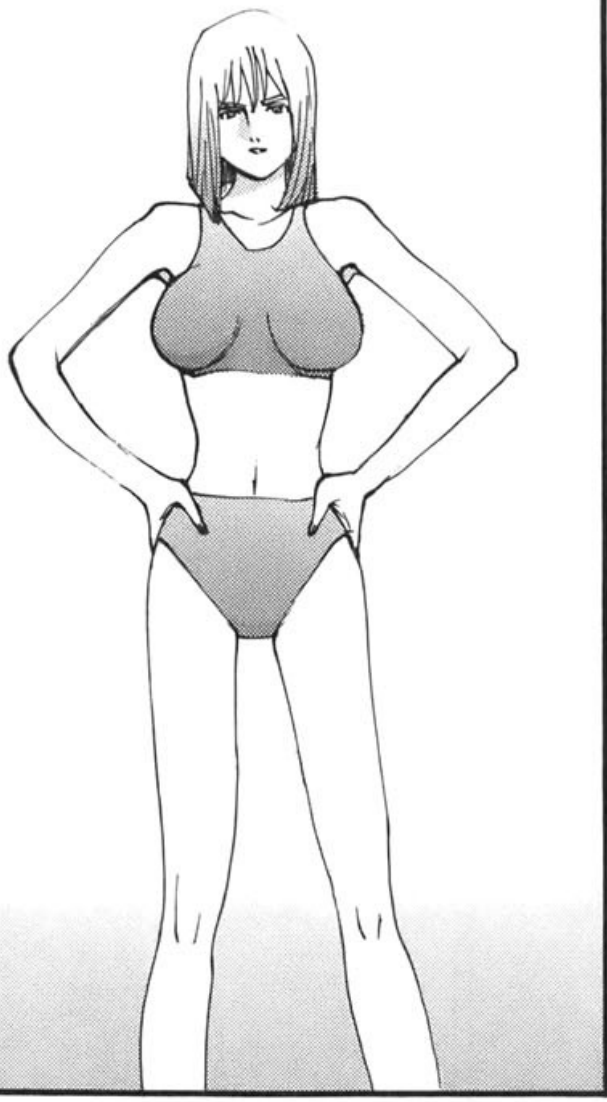
その代り



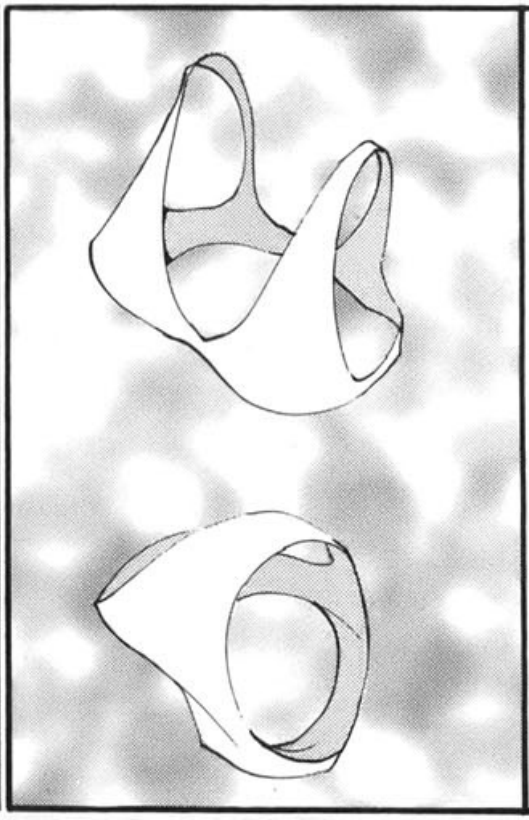
はき捨てられた
パンティーなどの
下着(ランジェリー)に対して
優先権が
与えられる



後に説明するように白人の下着は



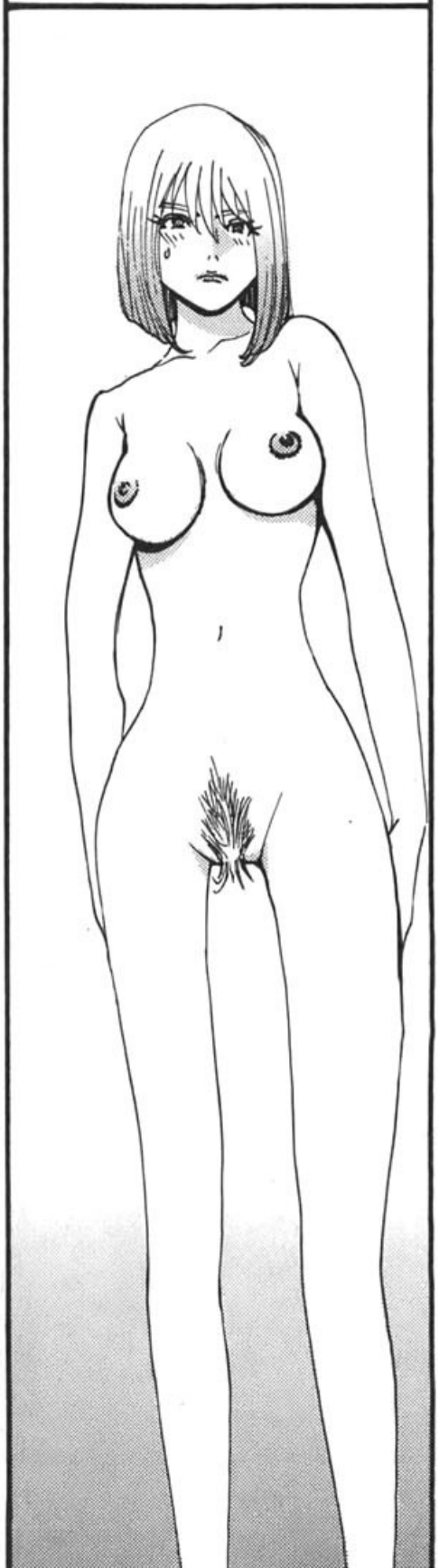
サヨナラ・パンティー
サヨナラ・ブラジャー



であって
それが
黒奴には
食堂での
ご馳走(ちそう)に
なるのである



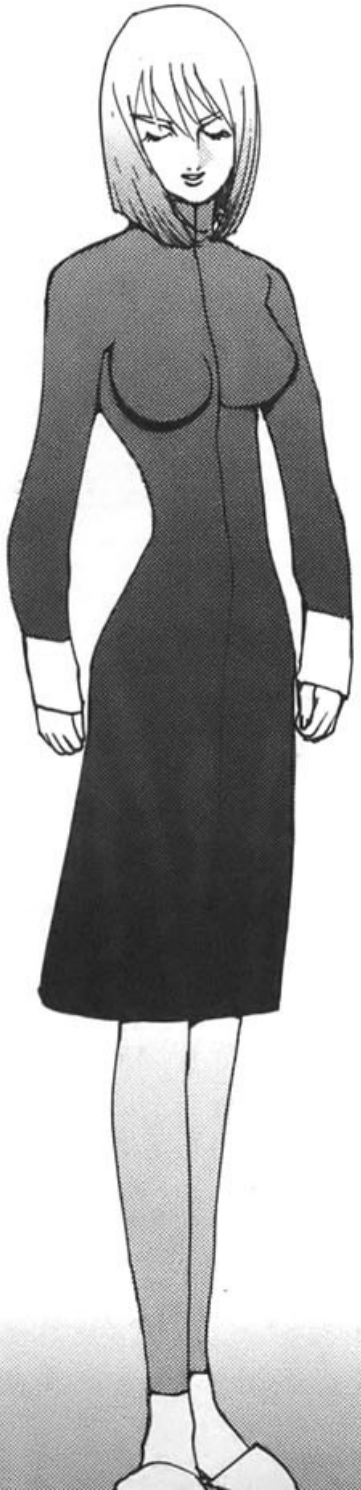
素裸に
なって



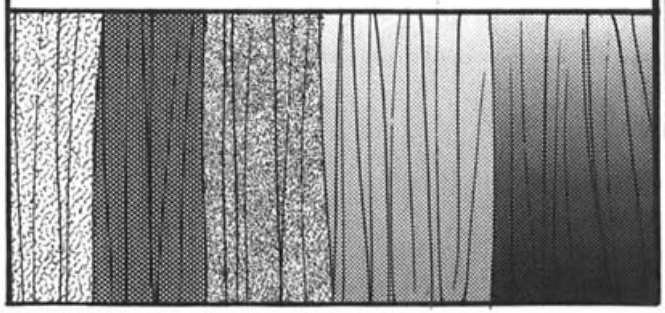
新しい
下着を
つけ



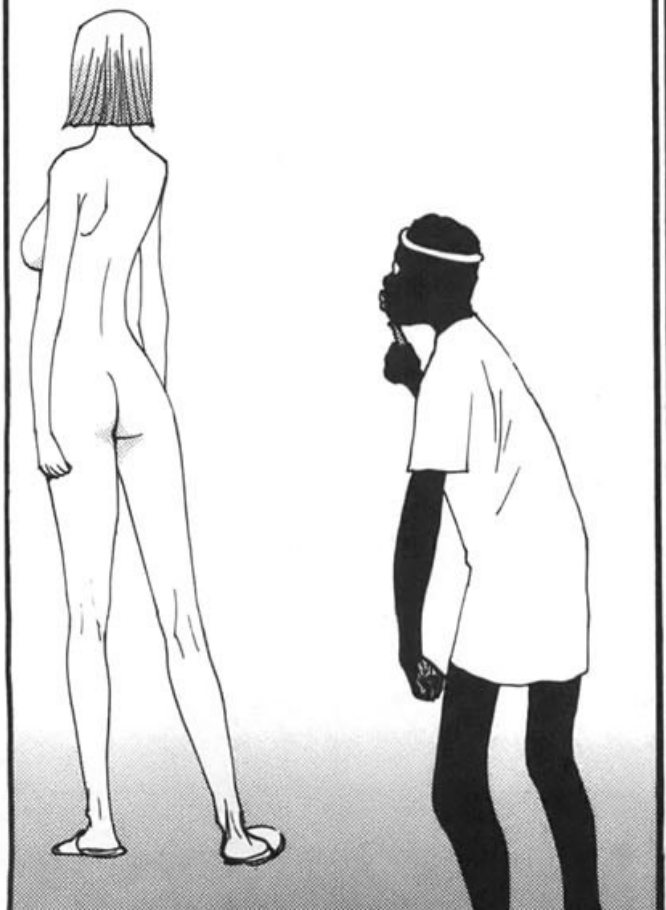
細身のズボンと
ジャンパー風の
コートを着た



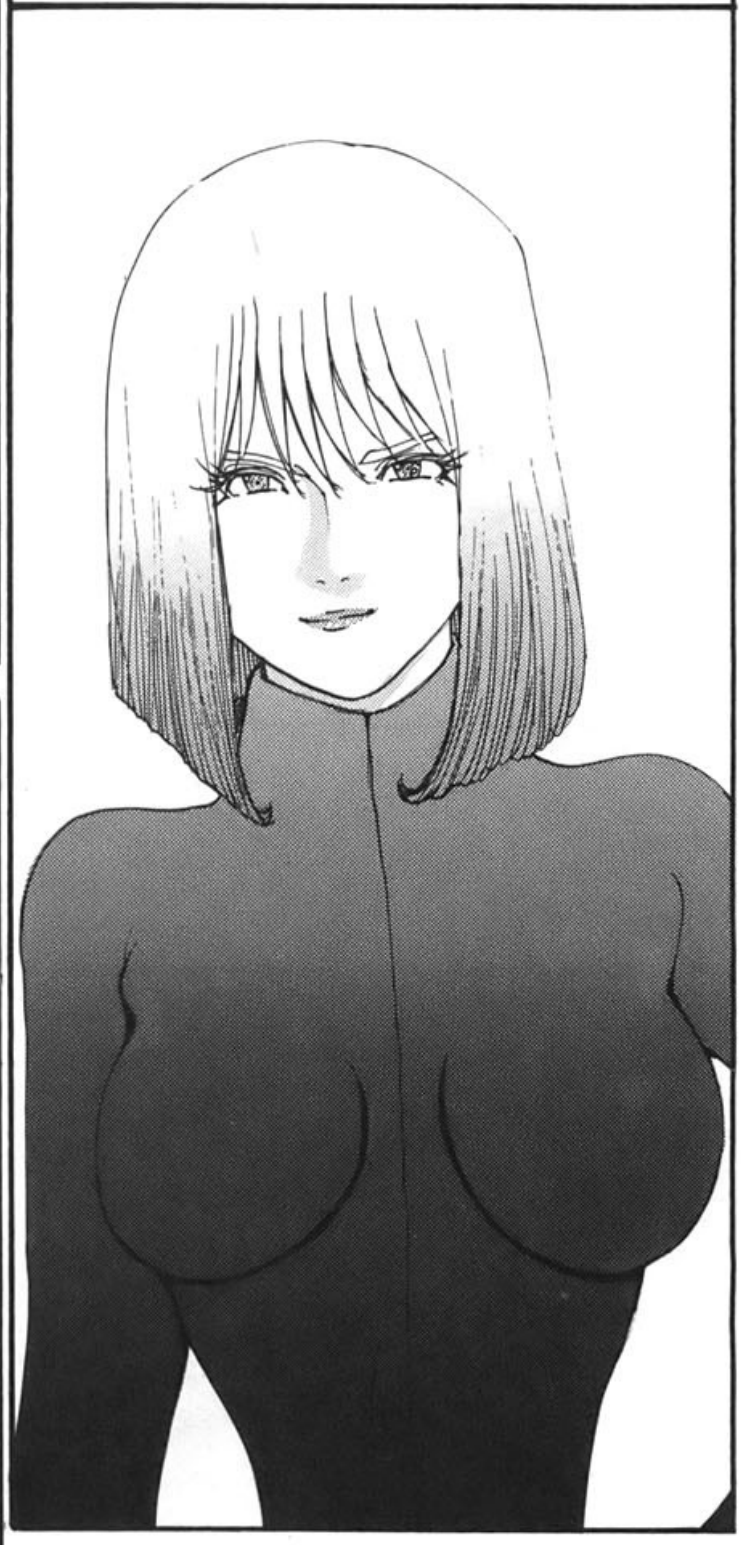
来客用に
各種の寸法の
衣服が
用意されて
いる中から



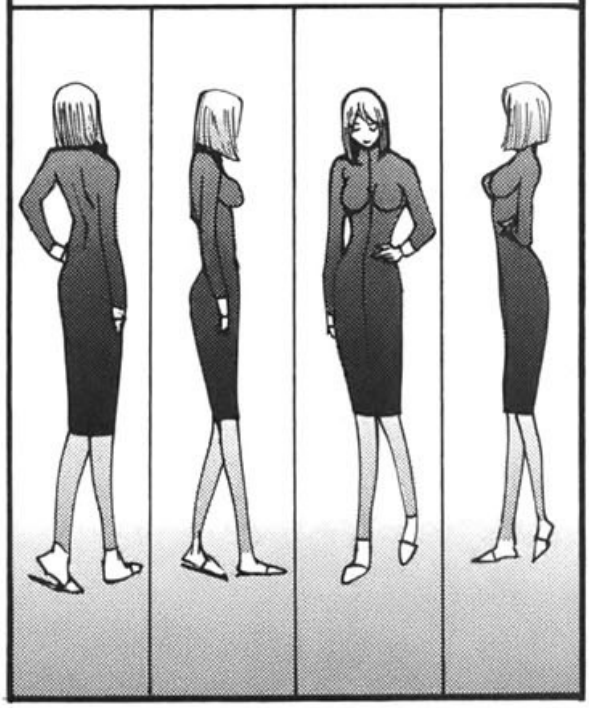
クララの
体にあった
寸法のセットを
F1号が
選(え)り出したので
ある



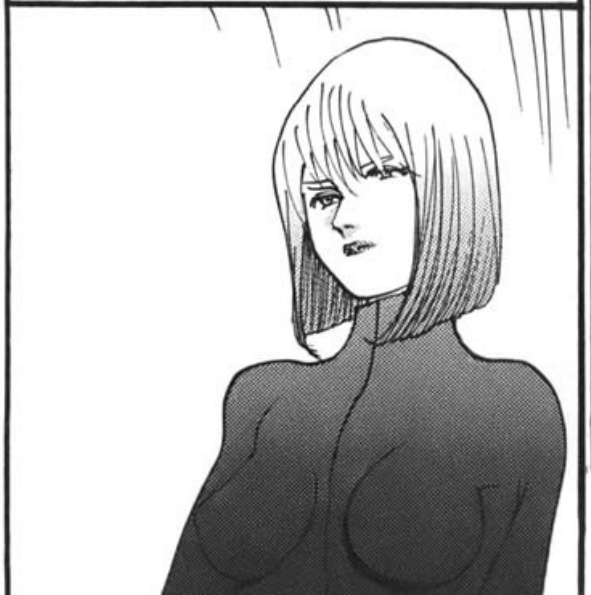
新しい服の
・・・
うつりを見る
鏡は



円盤の
中のと違って
四面鏡だった



彼女は
化粧台に
すわった



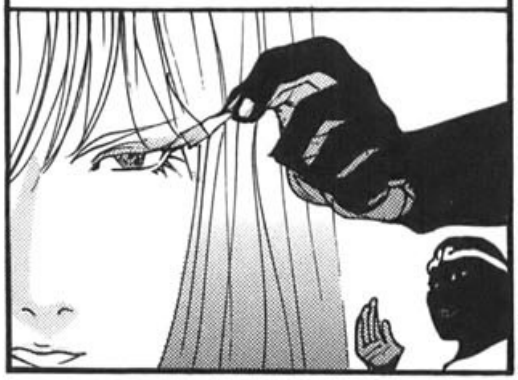
鏡台付矮人（ミラー・スレイブス）たちに
手伝わせながら
F1号が
髪や顔を
作ってくれた



元来
従者は単に
主人の手の
代用品で
あるだけで



化粧など
特殊技能には
専門の黒奴が
別に
いるのだが

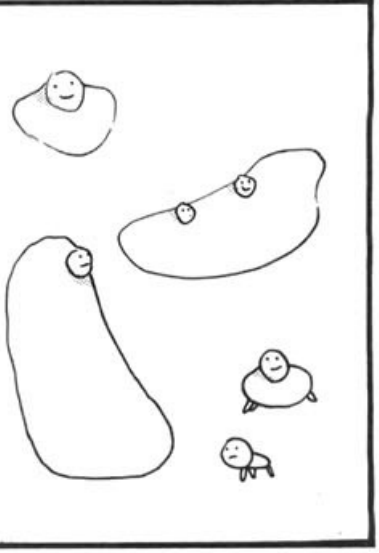


急いでいる
クララは
構わずに
彼にさせたのだ





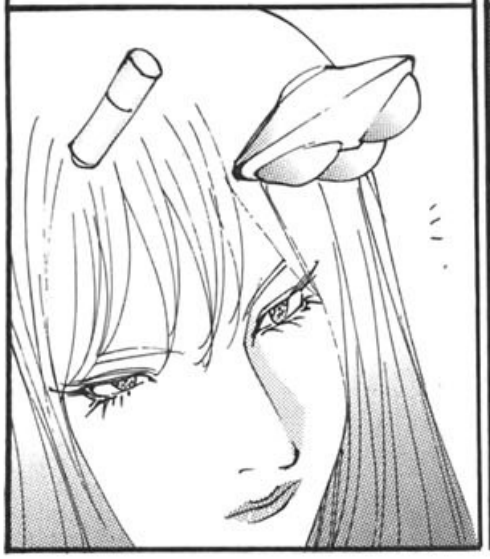
室内には
まだいろいろの
家具があった



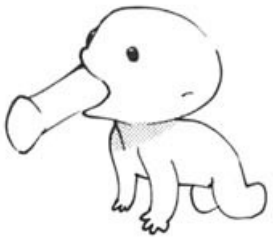
クララは
寝台を詳しく
見なかったが



さもなければ
円盤内で
見たのとは
形の異なる



舌人形（カニリンガ）と



ロングネックド・
轆轤首型
単能肉便器（セッチン）と



ユーリナリ・ピグミー
検尿矮人



とが
寝台の下に



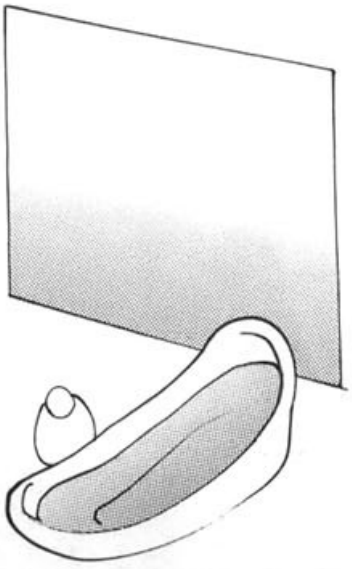
そして
引出しには
膣内小童子（トンネルボーイ）が
はいっているのに
気付いたこと
だったろう



この四種は
女性来客用寝台の
標準備品なのだ。



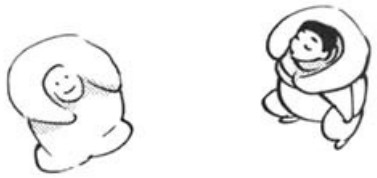
衝立（ついたて）の裏には浴槽があって
その横に



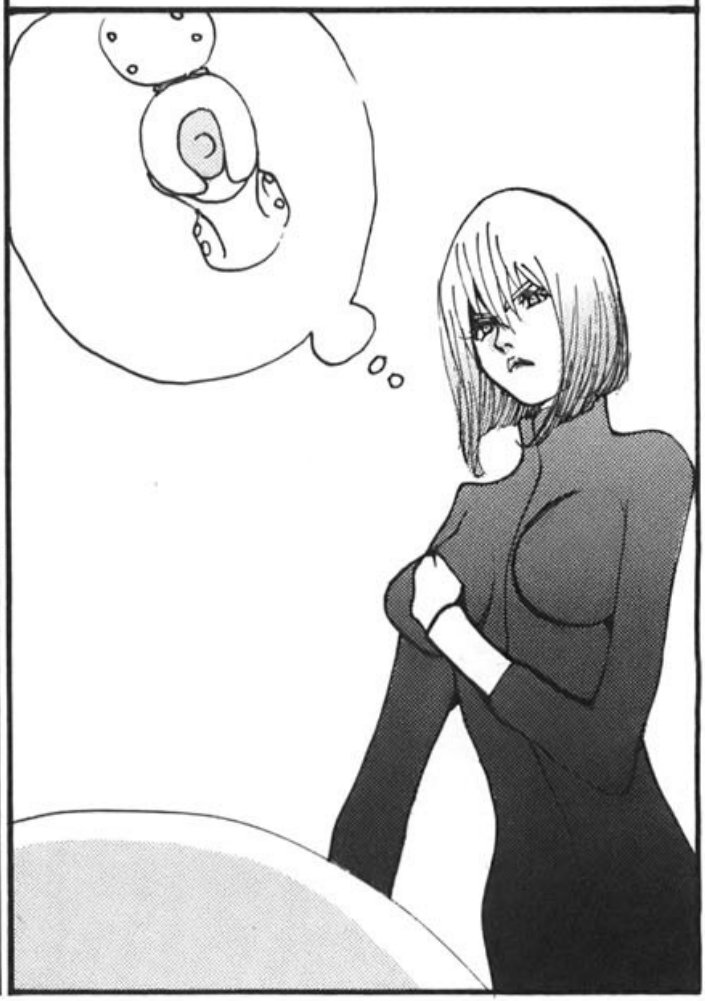
偏僂型単能肉便器(ハンチバックド・セツチン)が
据えてあった



標準型の
セッチンとは
形が違ったが



坐った
身体(からだ)全体が
一見して
腰掛便器を
連想させる形を
してるから
すぐわかる



一昨日から
便通が
なかったのが



先ほどの
ソーマが
効いたのか
便意を
催してきている
ところ
だったので



彼女は
使ってみる気に
なった



それは
来客用で
専用器ではないから
生体彫刻などの
個人的趣味は
省いてあったが



単能具に
ふさわしい
体格を
していた



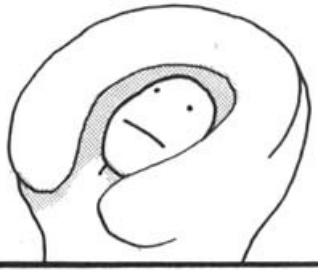
猪首(いくび)で
丸禿(まるは)げ



後頭部が
平らだ



よく発達した
馬蹄肉瘤の
内底に
その後頭部を
接して



仰向けた
大きな顔が
ある



鼻はほとんど
隆起せず
孔(あな)二つだけだが

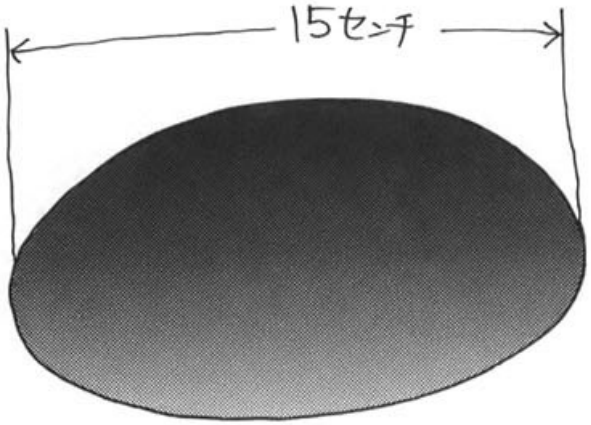
黒い目は
利発そうだ



唇(くちびる)の
裂け目は
大きく



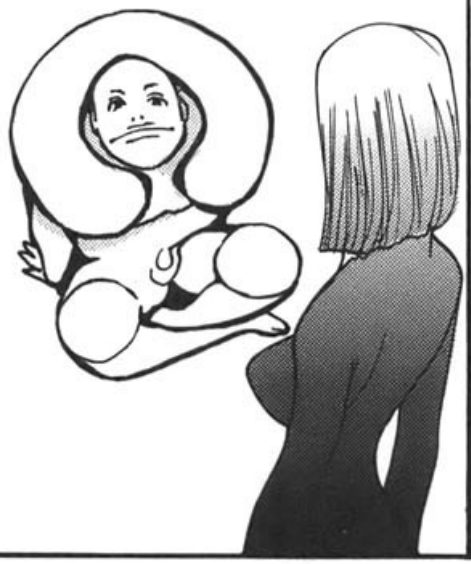
丸く開けば
直径十五センチは
あろう



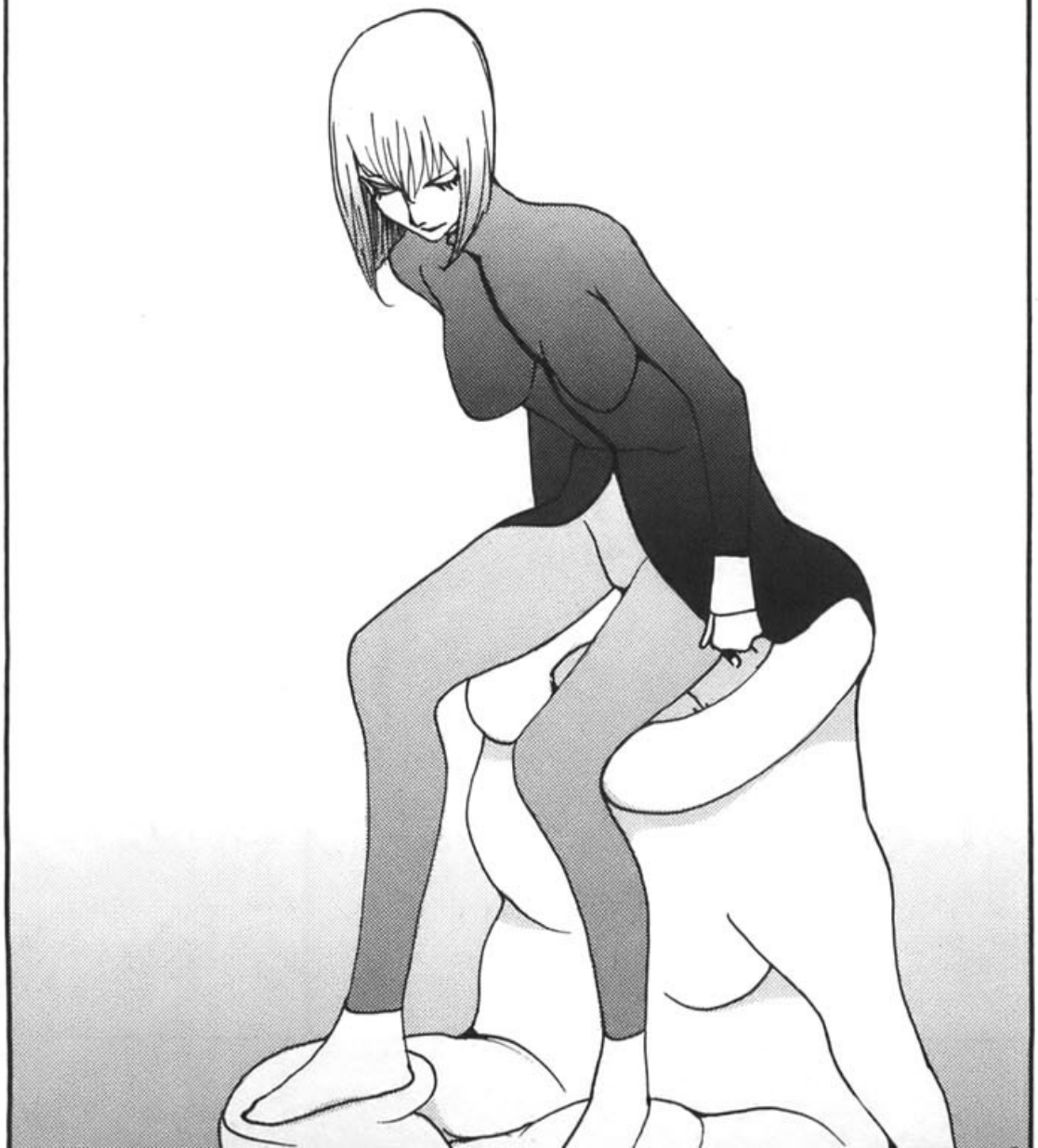
胡坐(あぐら)して開いた
両膝頭(ひざがしら)が
扁平になって



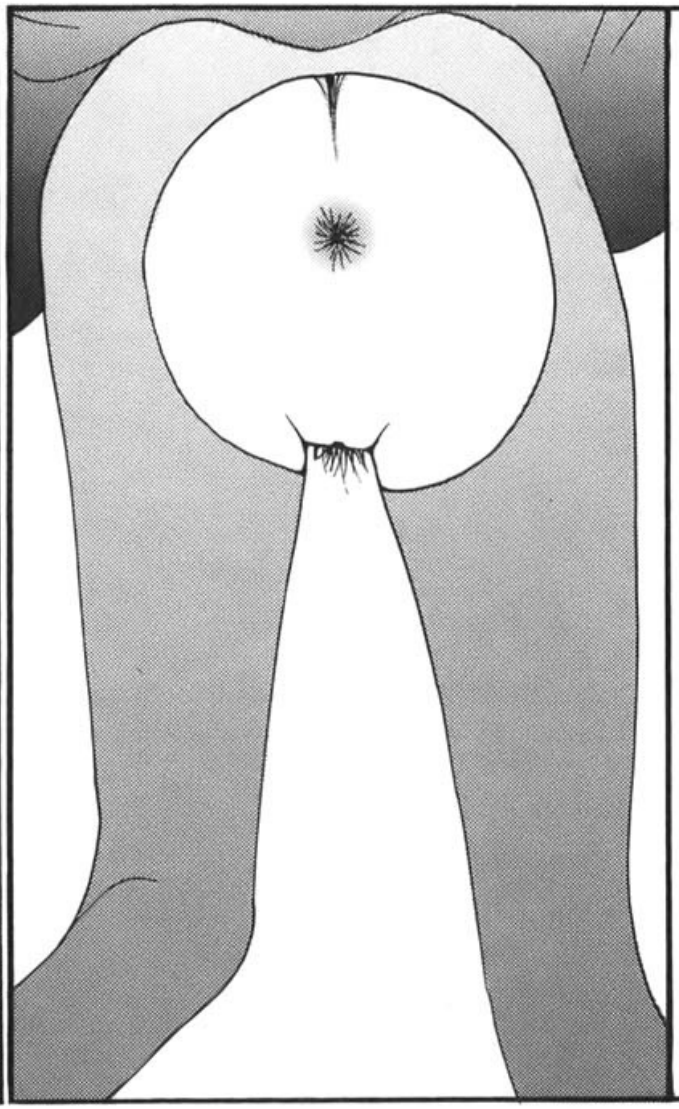
使用者が
そこに
両足を載せるように
なっている



腰を下ろしてみると



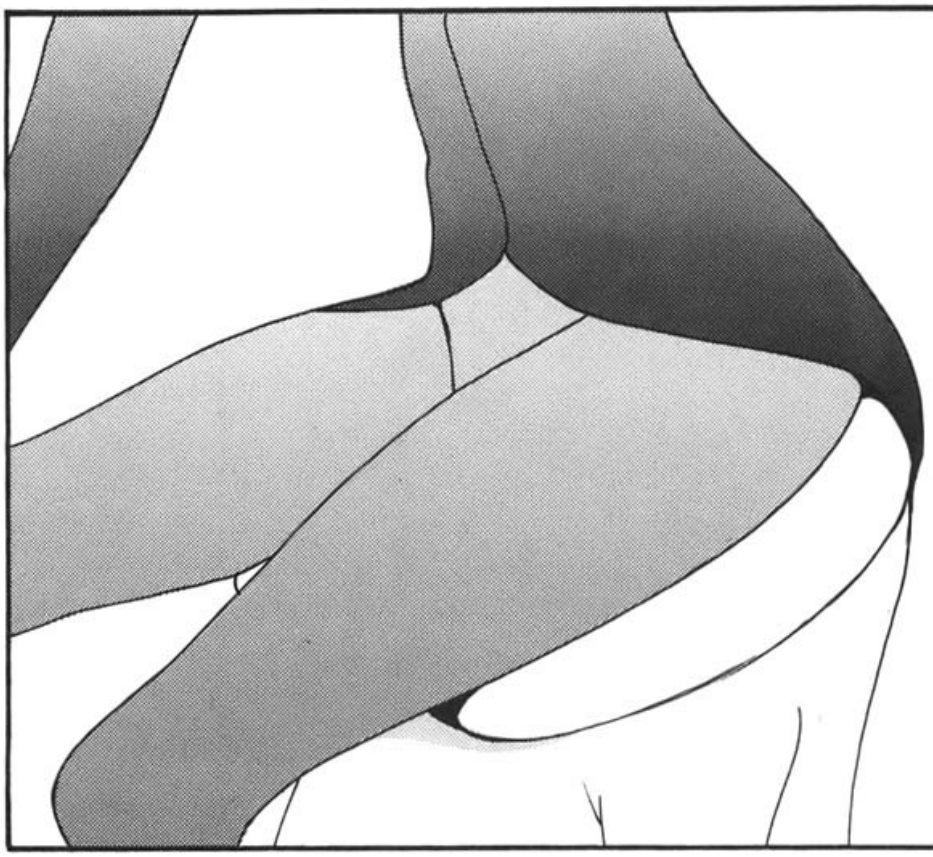
同時に孔釦（ホール・ボタン）が開いて
お尻が露出した



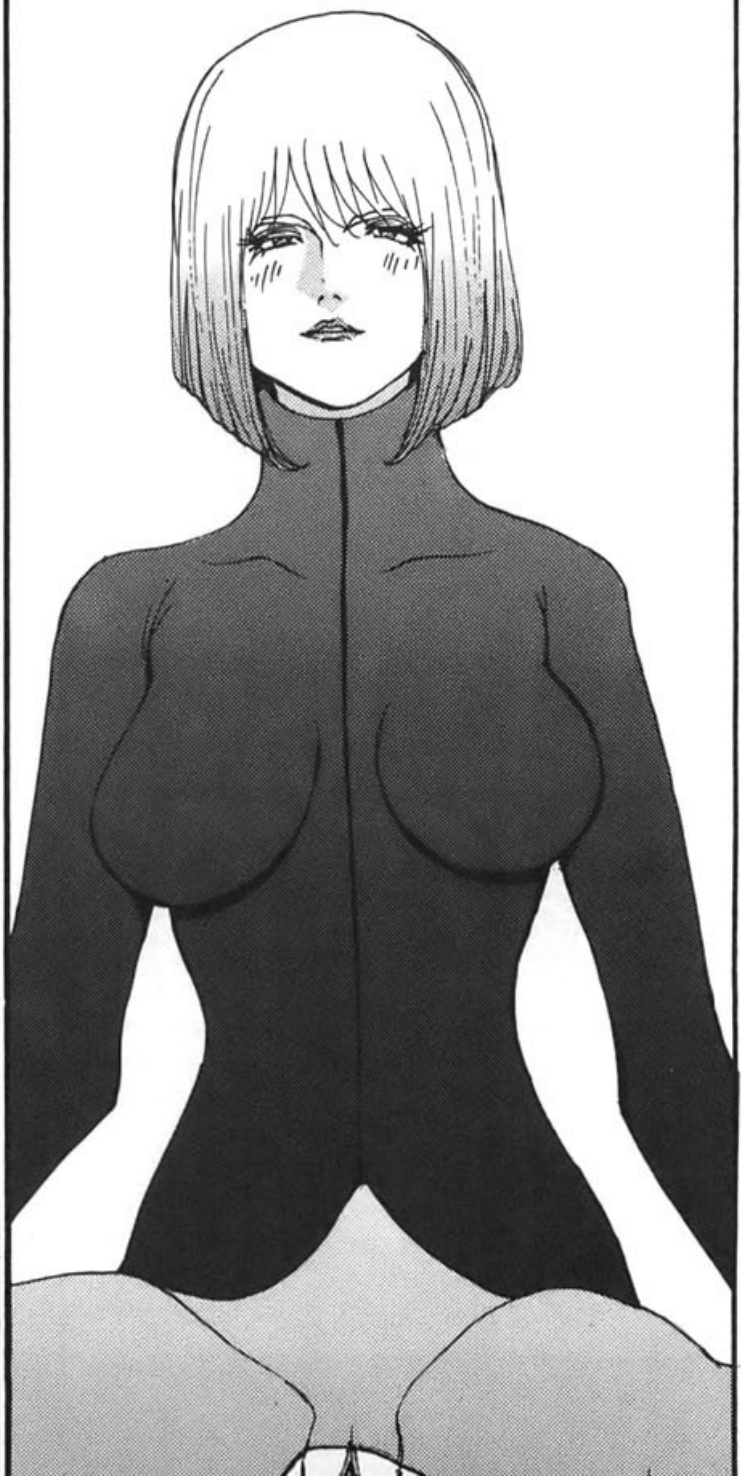
ズボンや
パンティーを
ずり下ろす手間が
いらないのだ



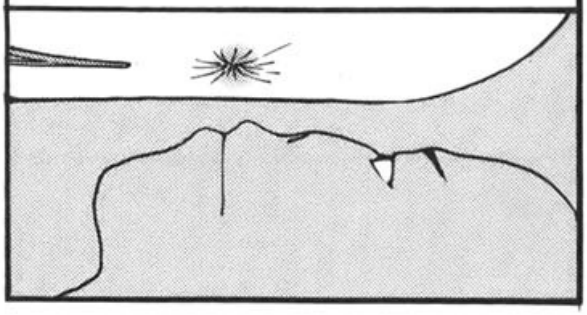
そして
お尻をささえる肉瘤の
温かい感触は



昨日まで
使っていた
水洗便所の
冷たい腰掛より
ずっと
気持がよかった



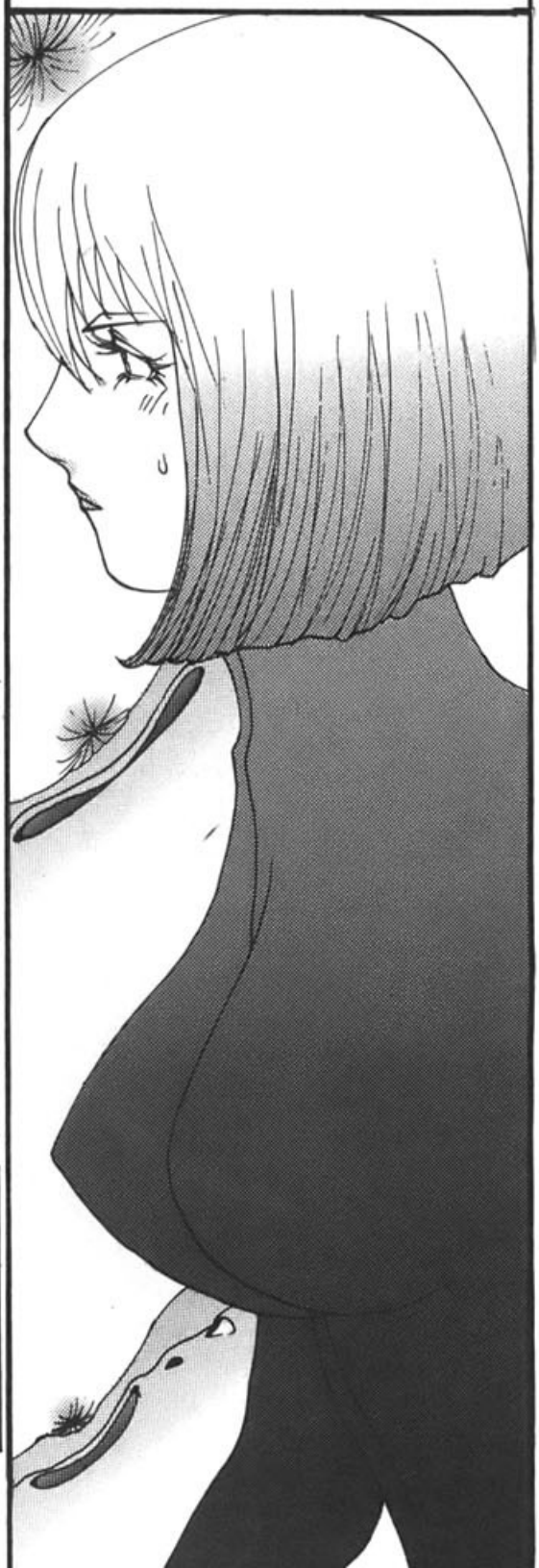
唇の縁(ふち)は
肉瘤の
高さより
少し低く



さっきの
標準型肉便器(スタンダード・セッチン)と
違って
局部の皮膚に
接触して
いないが

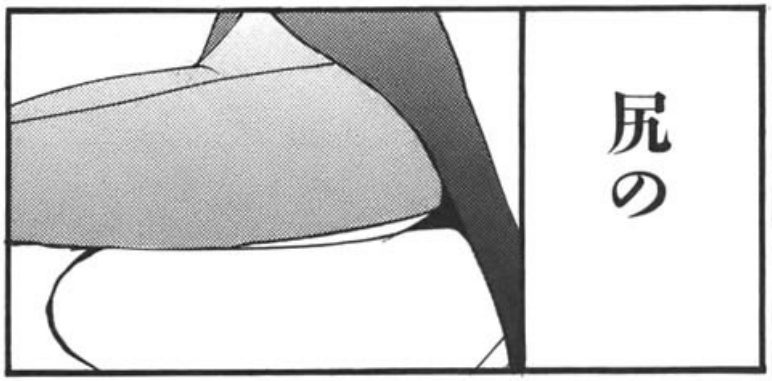


スレスレの
ところに
口腔が深く
開かれているに
違いない

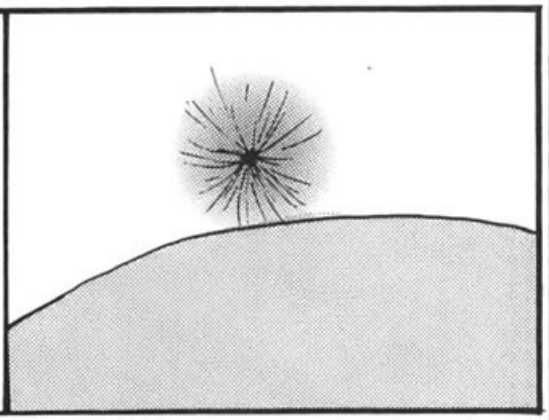




しかし



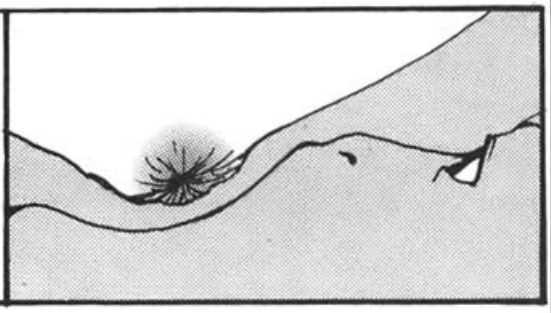
尻の



すぐ真下に

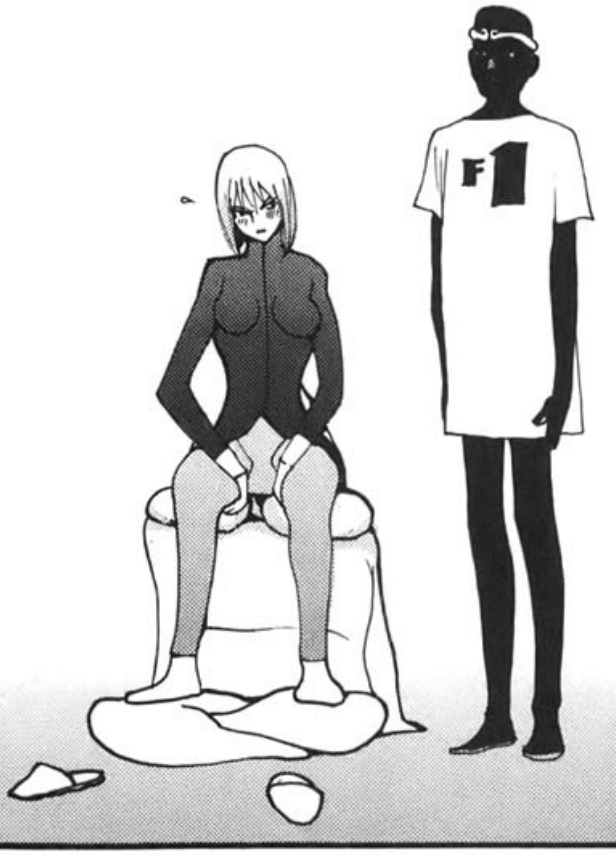


口を
開けている



人間

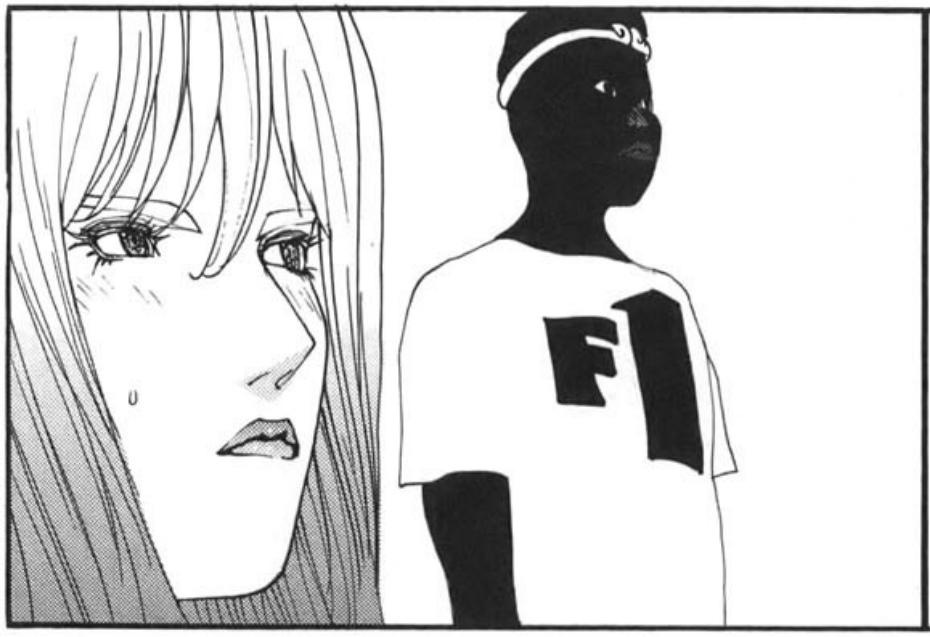
かたわらに立っていた
F1号のほうこそ
多少気にかかったが

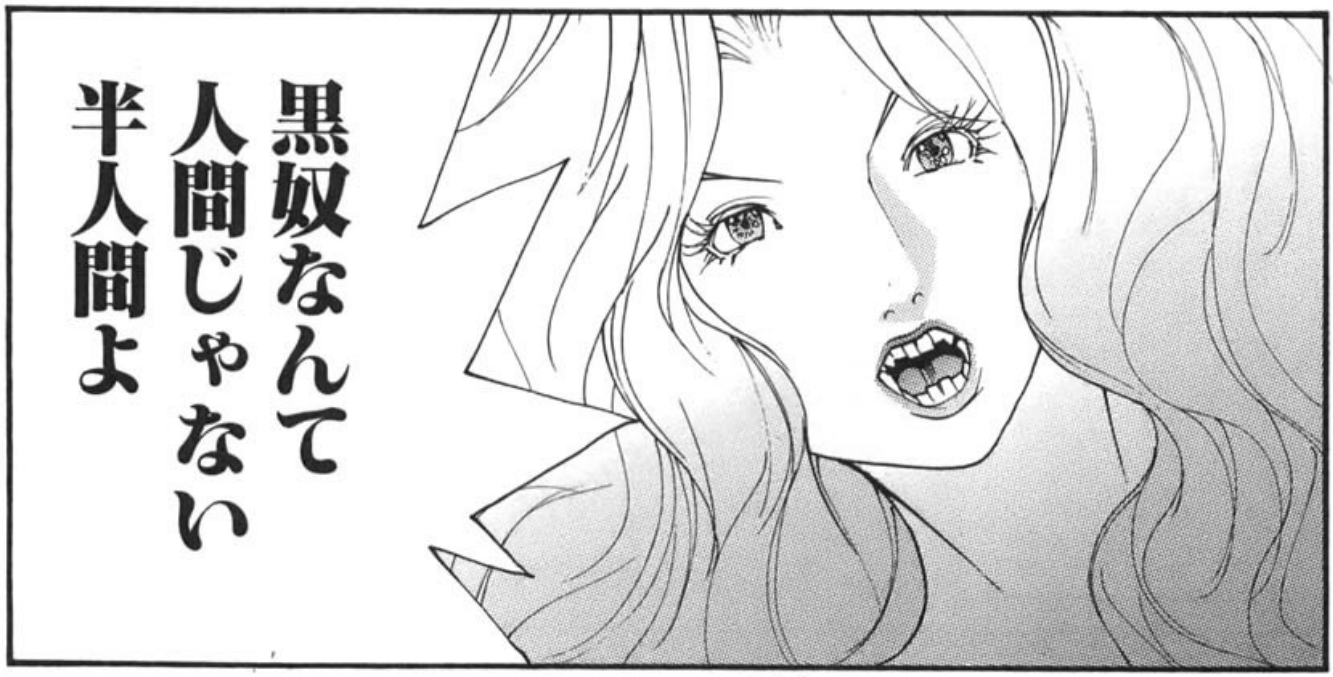


さっき裸まで見せた
あとのこと



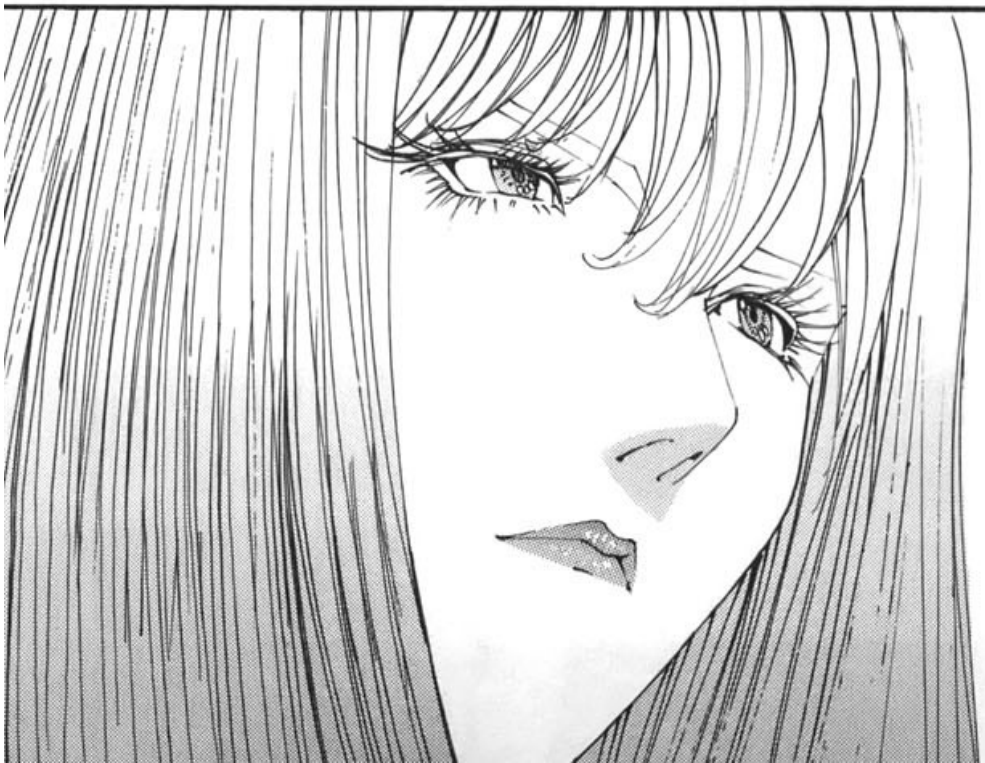
その前で
排泄できないほどに
羞恥を感じる
というほどでは
なかった

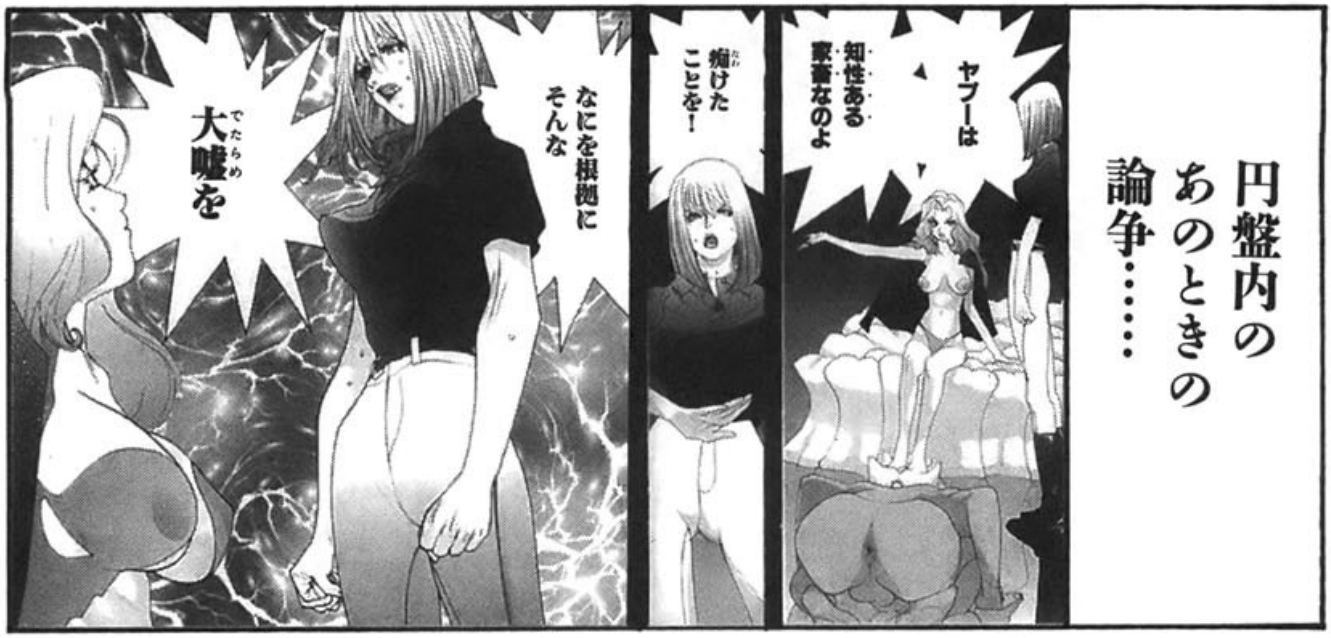




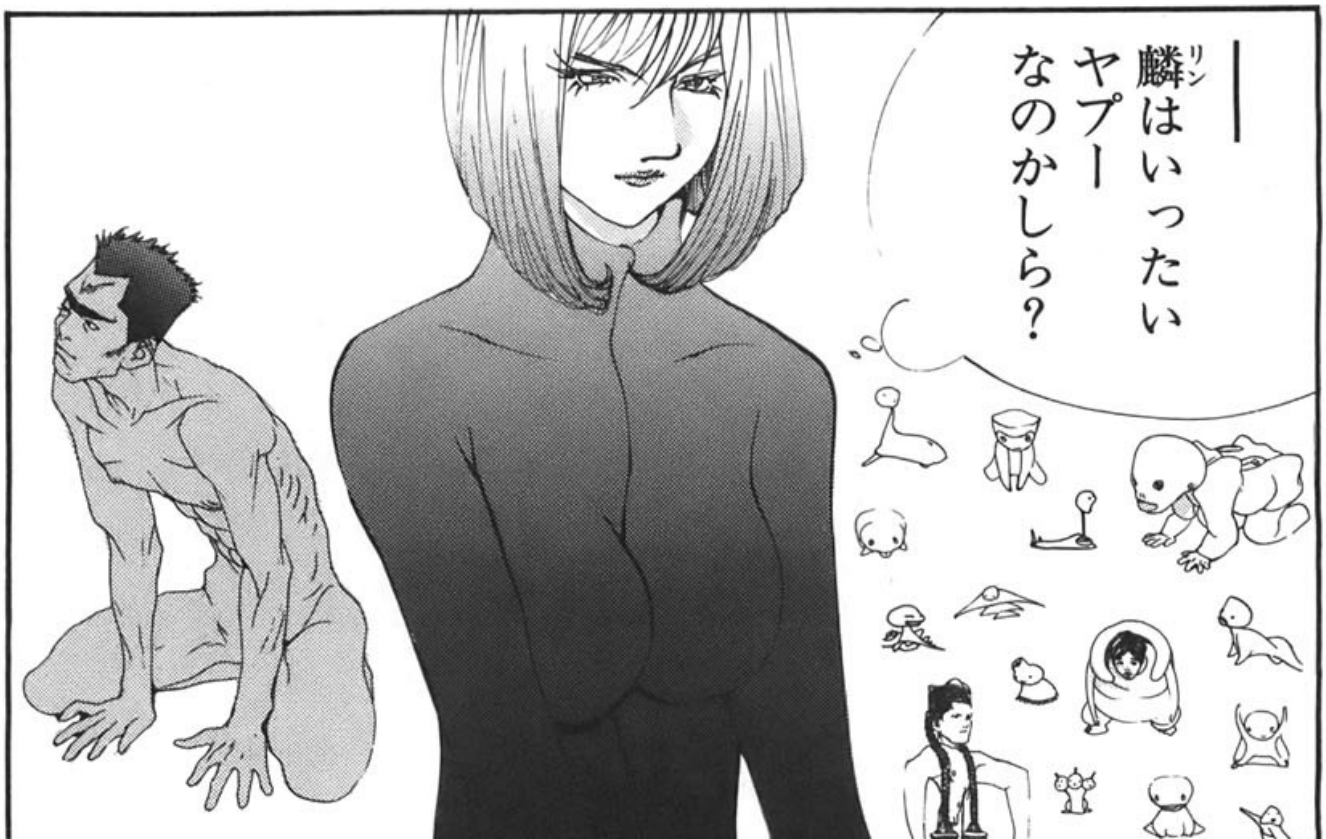
黒奴なんて
人間じゃない
半人間よ

といった
ポーリーンの言葉が
思い出された




円盤内の
あのときの
論争……
ヤプーは
知性ある
家畜なのよ
痴(た)けた
ことを！
なにを根拠に
そんな
大嘘(でたらめ)を

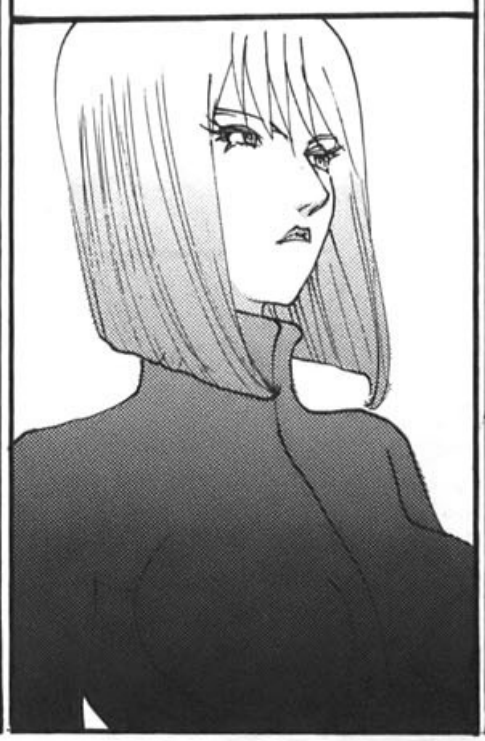

と
連想は
またもや
麟一郎のことに
返るのだった

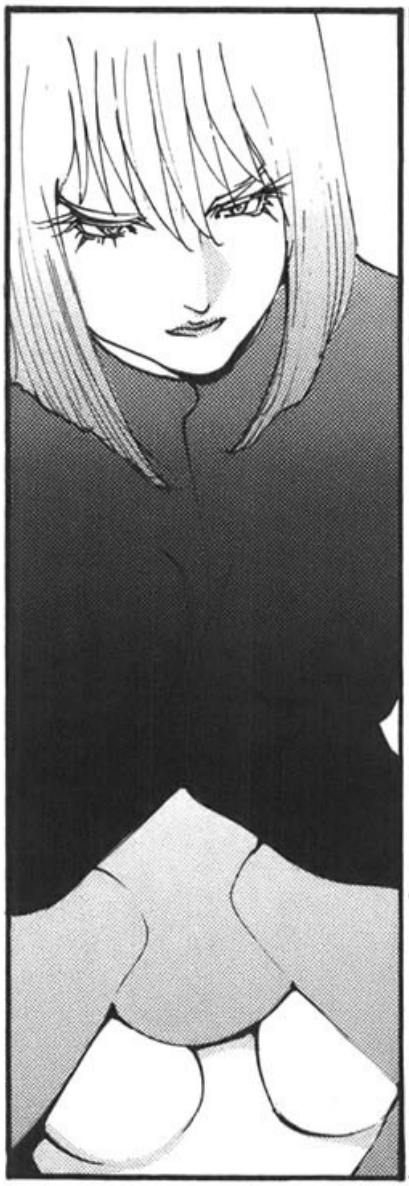

麟(リン)はいったい
ヤプー
なのかしら？

いや
彼がヤプーか
どうかはすでに
問題外かも
しれない



確かなことは
自分の愛情が
もはや
彼のほうに
向いていないこと
だった





黄色い肌のあの小男は
自分の婚約者たるに
値しない




こんな
自明なことが
なぜ今まで
わからなかったのか
不思議なくらい
だった

円筒内の
体験が
クララを
開眼(かいげん)させていた

ソーマの効き目も
あった

彼女は
彼との関係を
きれいに
清算したいと
思った

しかし
円盤内で

貴方の肌の色を
なんのかのと
いってたけど

それが
愛情の試金石だと

貴方を

いつまでも
愛するってこと

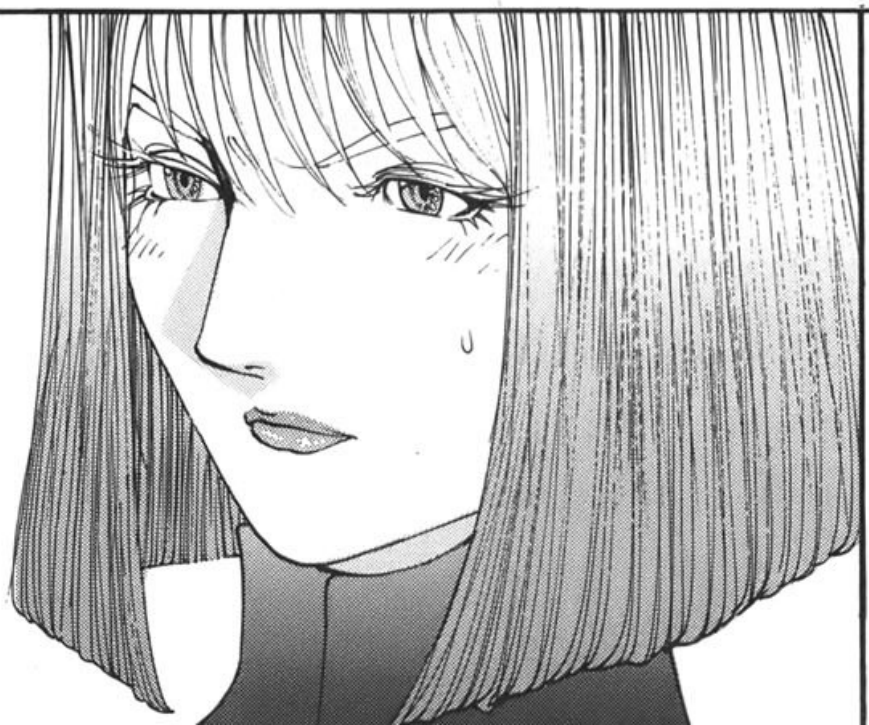
麟

妾
誓うわ

その試練を
受けてみましょうよ

二人は
決して
離れまい

と誓った
あの堅い約束も
彼女は忘れては
いなかった



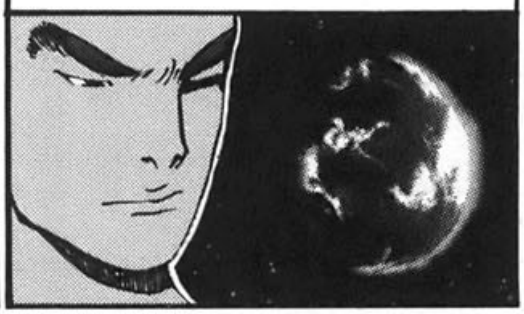
その
言葉の手前
自分のほうから
彼に

別れよう

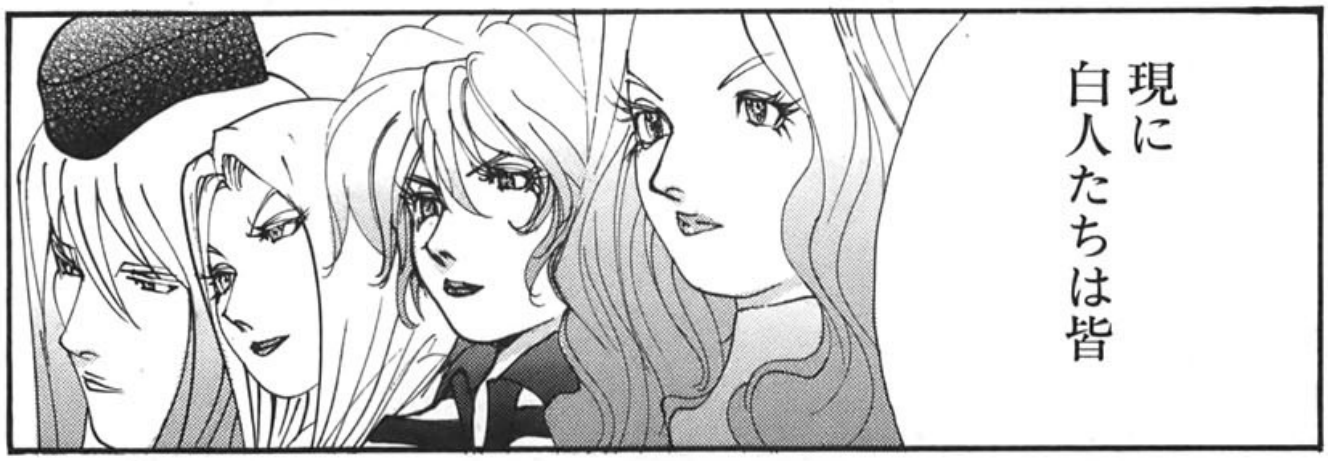
ということには
やはり憚(はばか)りを
感じるのだった

何とか
彼のほうから
そういい出して
くれないものか

それは
彼が
このイース世界で
どんなふうに
扱われるかに
かかっていた



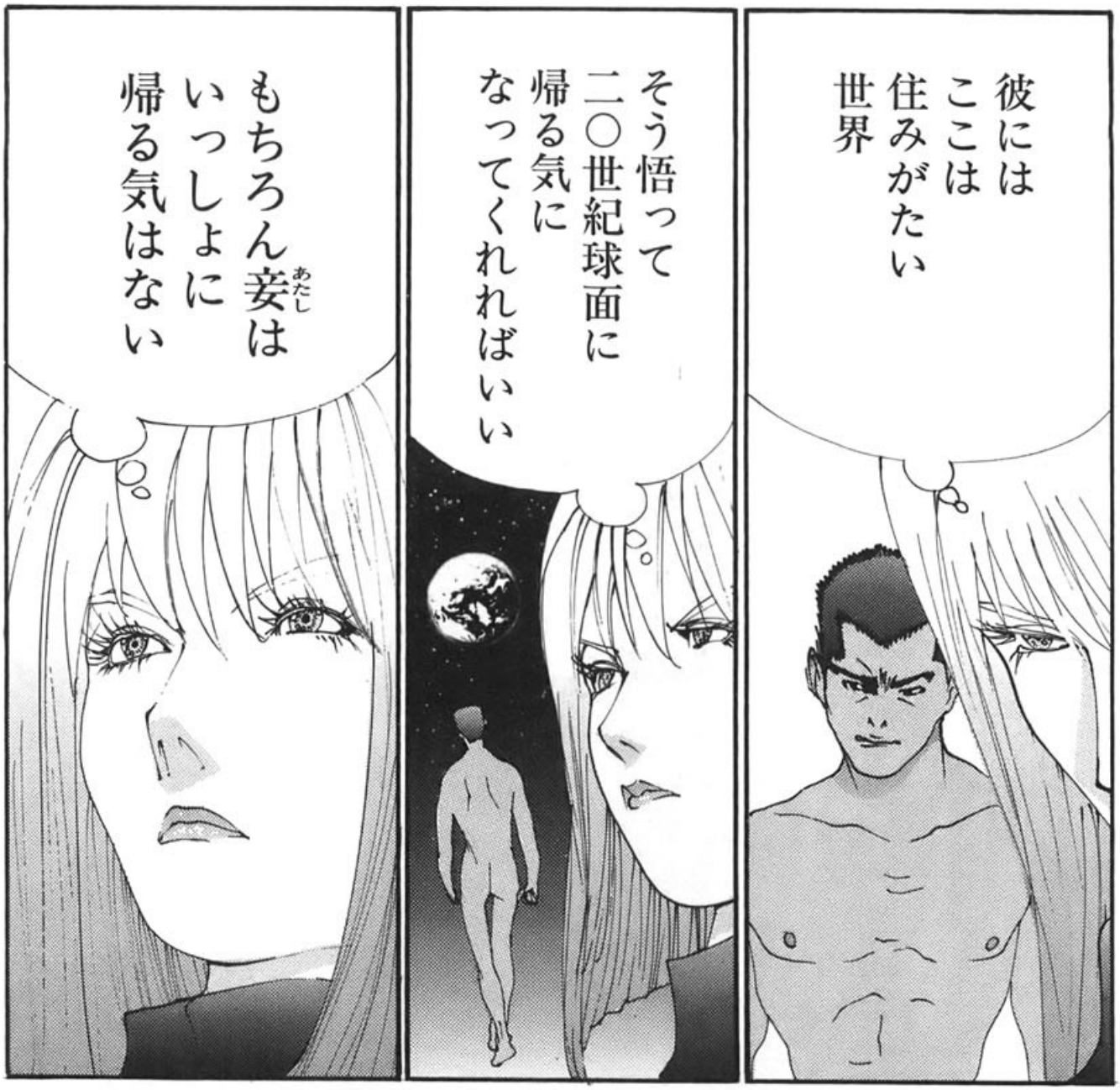
ほんとうに
ヤプーかどうかは
知らないが



現に
白人たちは皆



彼を
ヤプーと見て
疑っていない
ことだけは
事実なのだ

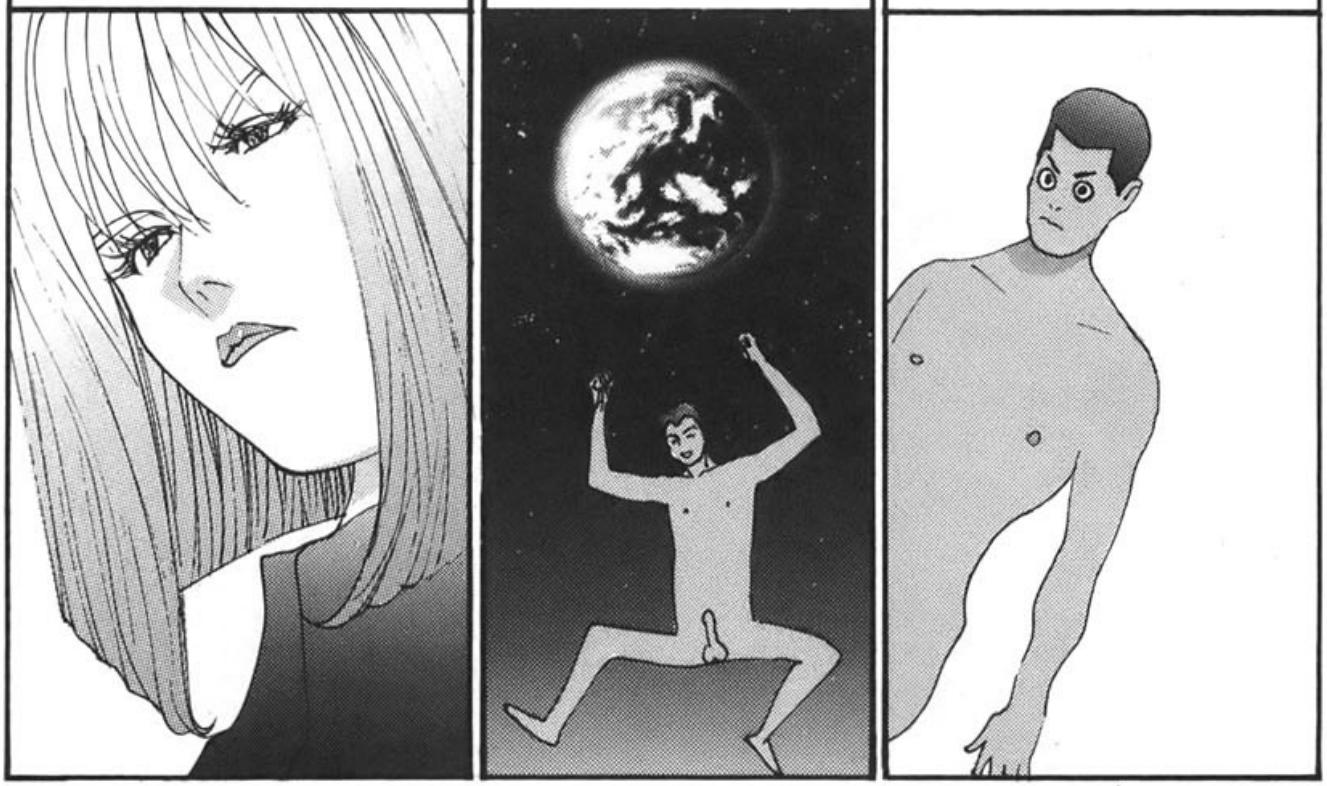

彼には
ここは
住みがたい
世界
そう悟って
二〇世紀球面に
帰る気に
なってくれればいい
もちろん妾(あたし)は
いっしょに
帰る気はない


しかし円筒船を
手配してもらうくらいは
妾(あたし)から頼んでやれる

もともと
麟一郎の麻痺を
直しに来たので
あるから

元の身体に
もどした彼を
二〇世紀の世界に
帰らせてやれば

それ以上の
責任は
ないはずで
あった



妾(あたし)はそのうえで
この素晴らしい
未来世界をできるだけ
享楽すればいいのだわ



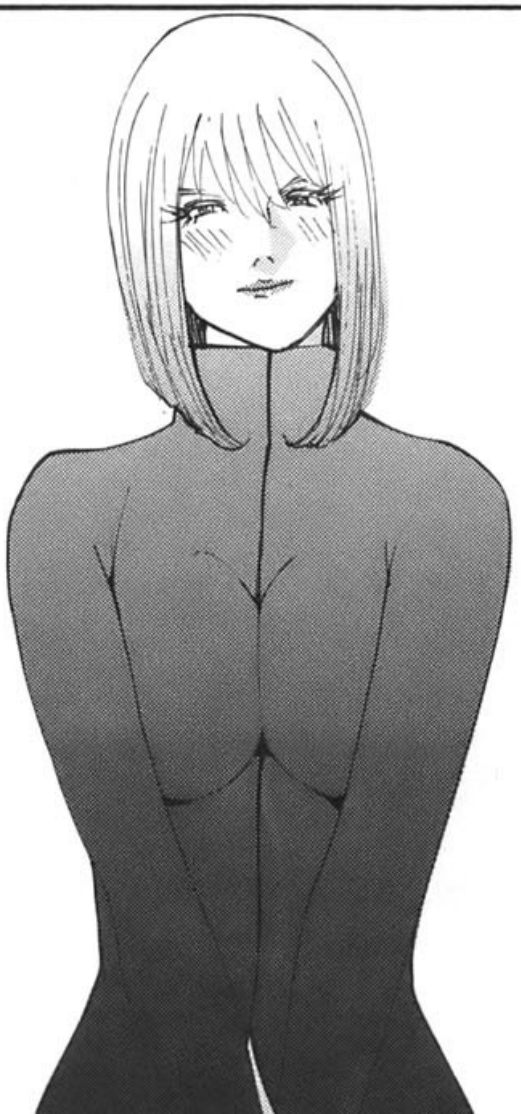
滞在できるだけ
滞在して
帰らねば
ならなくなったら
帰るとしても

もう
麟(リン)と
いっしょに
なる気は
しない

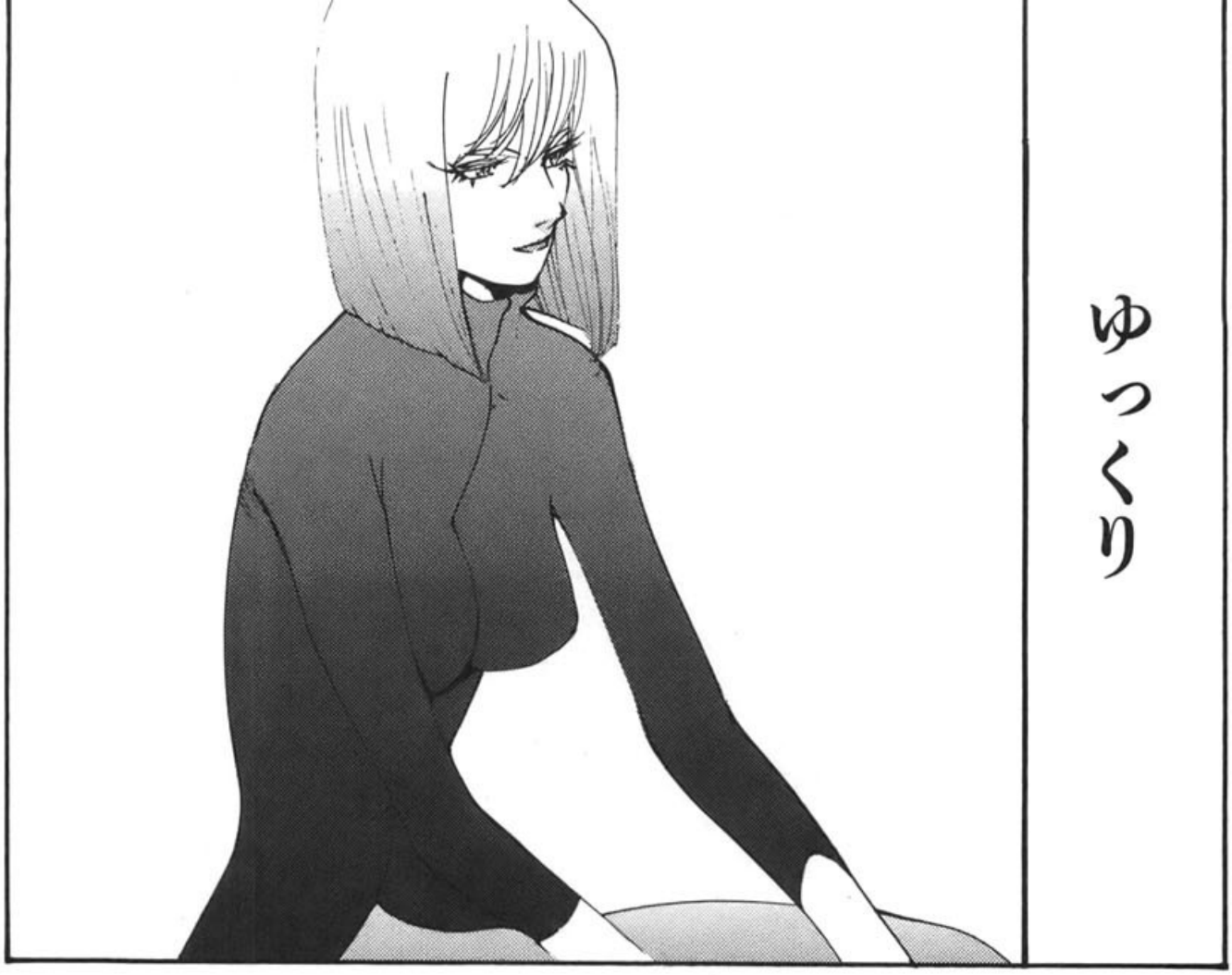
相手は
やはり白人で
なければ
……

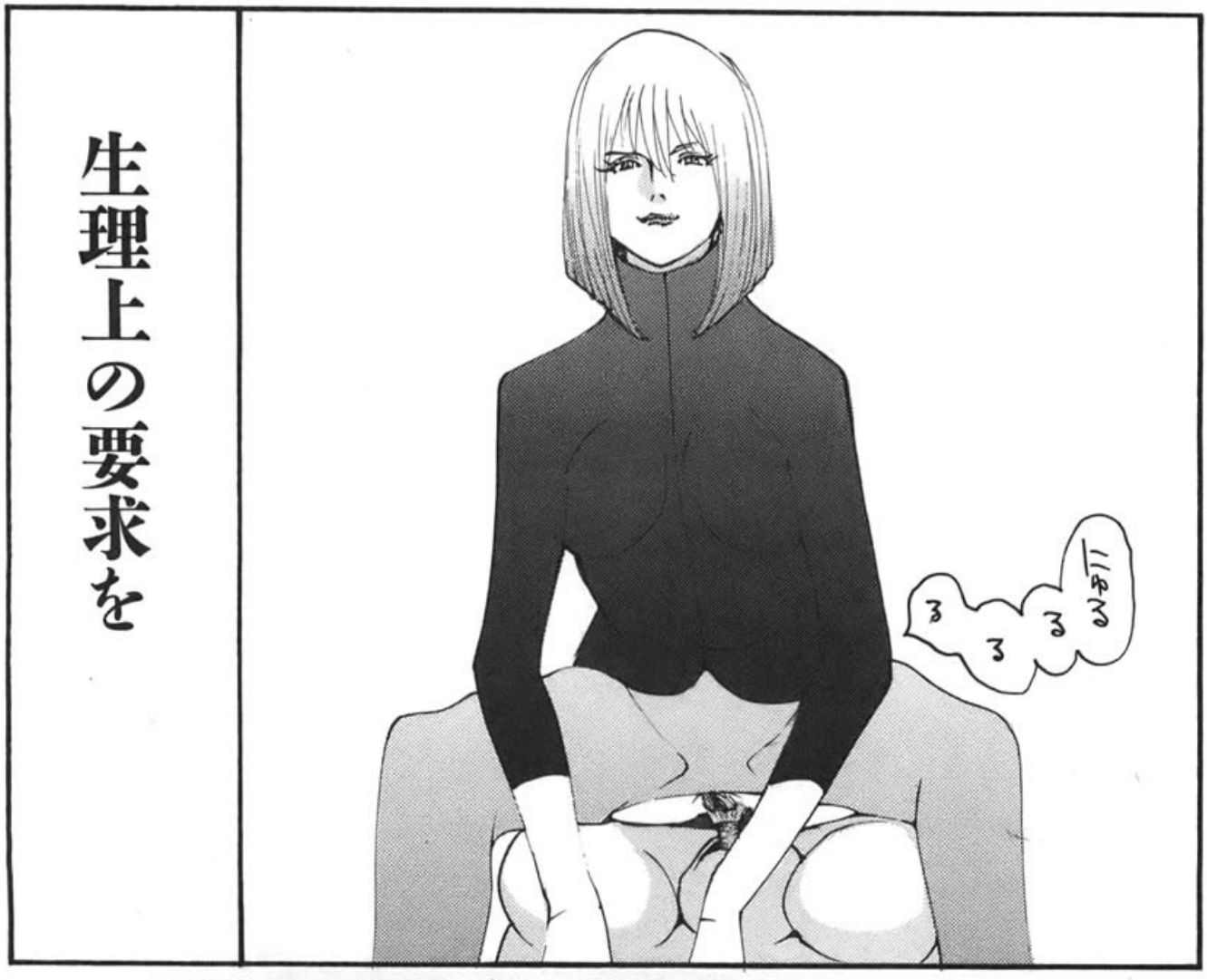


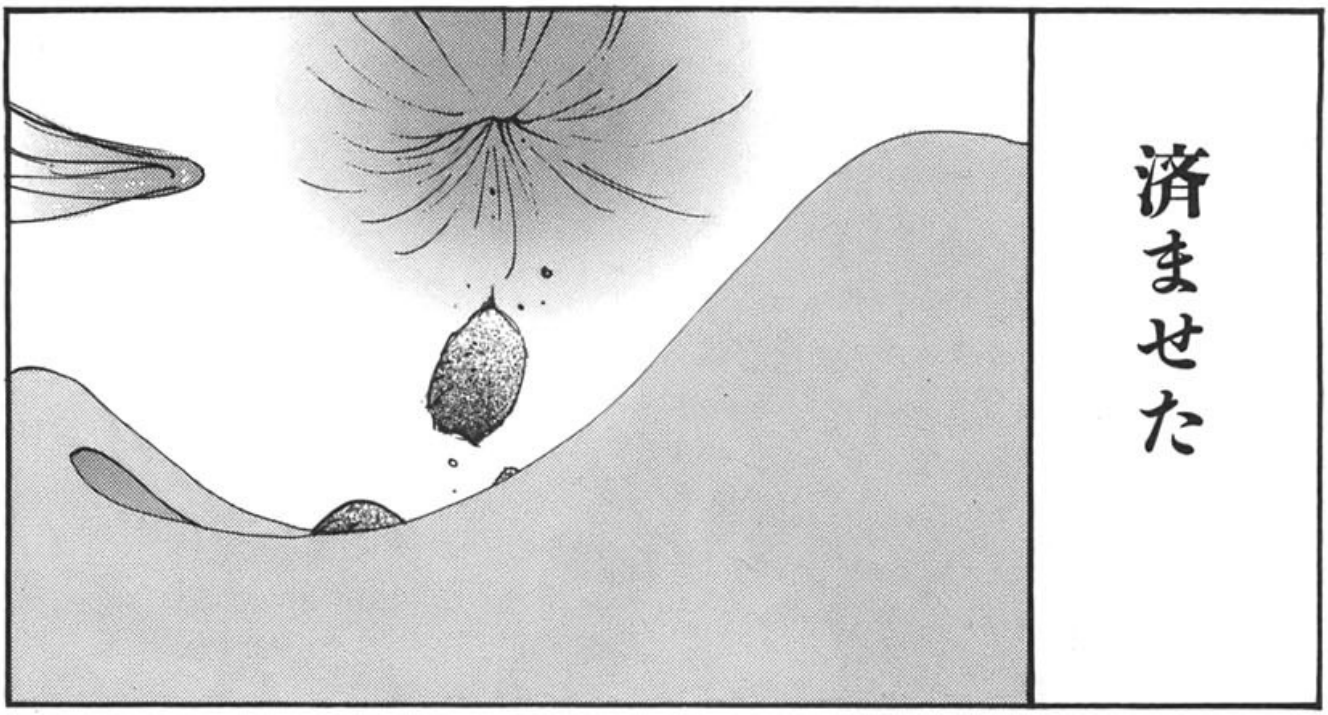
あの
ウィリアムの
ような……

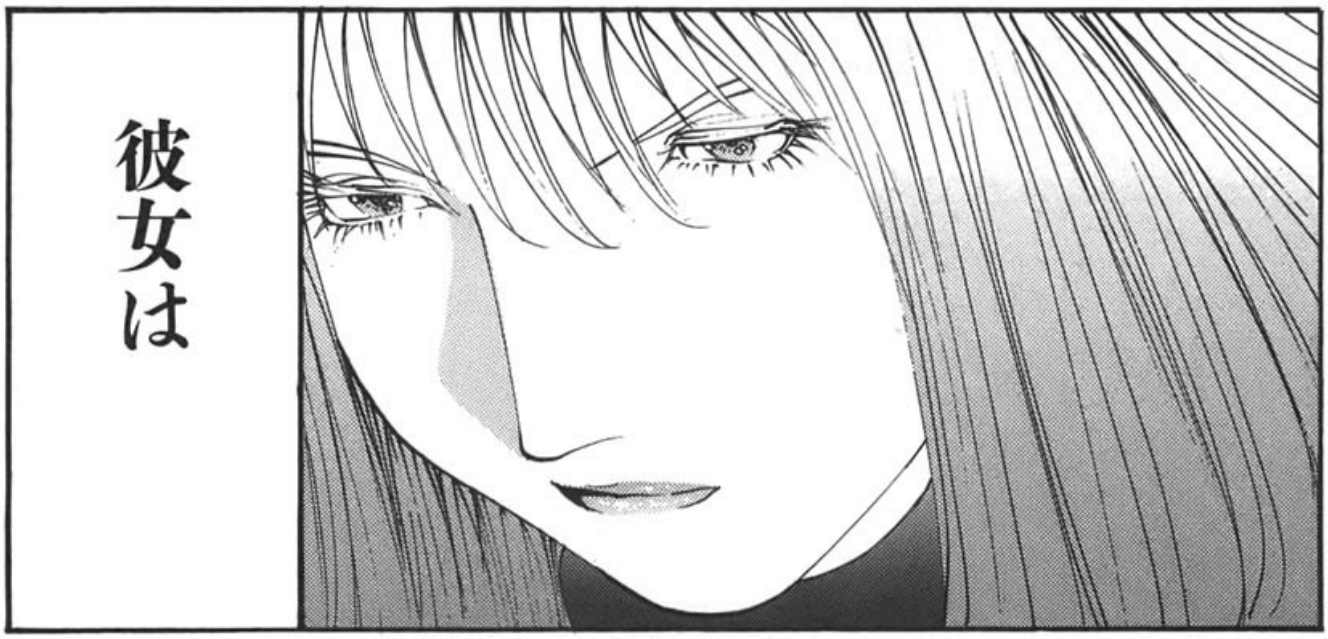


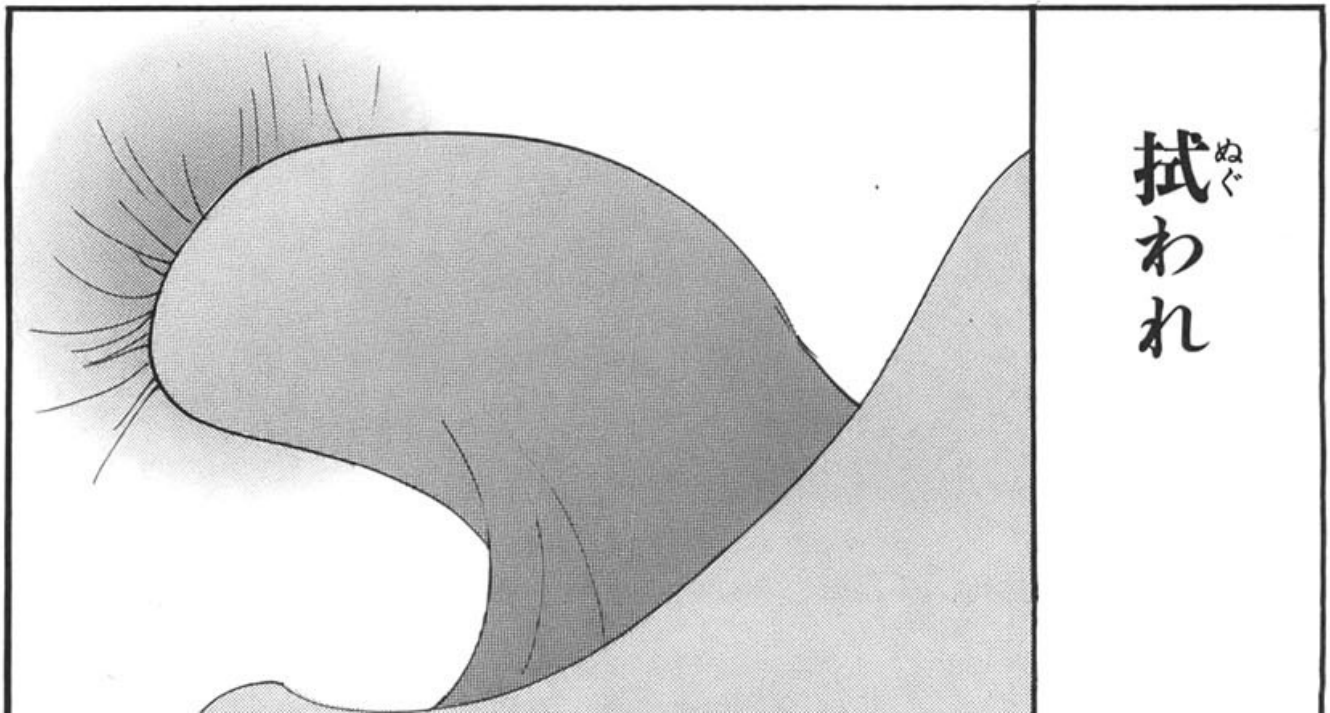
黙想しっつ


ゆっくり


生理上の要求を
いやぁ
る
る
る


済ませた

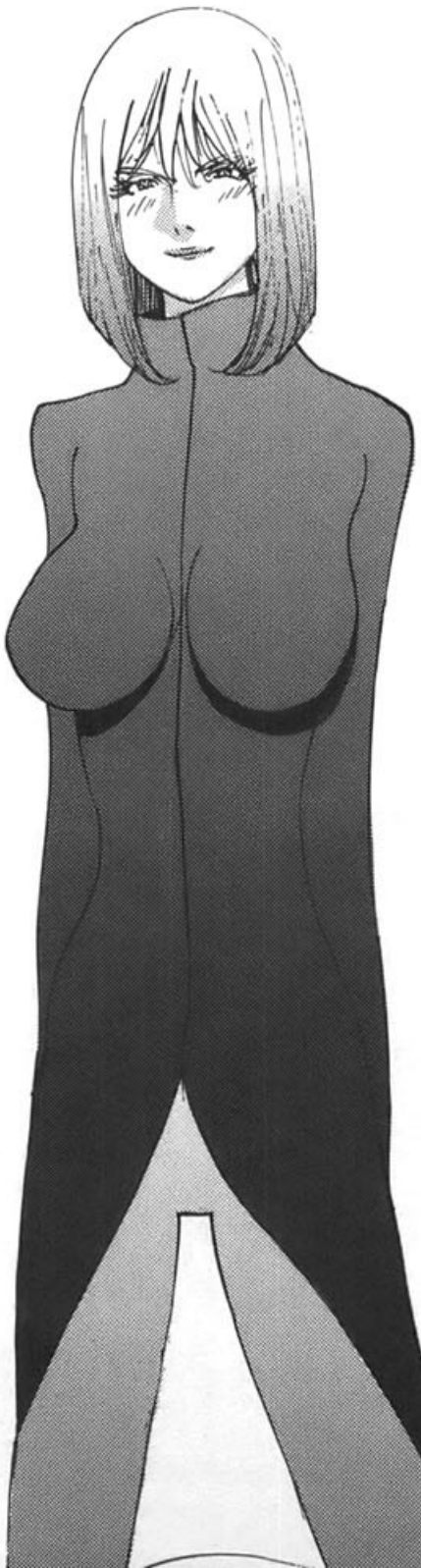

彼女は


拭われ

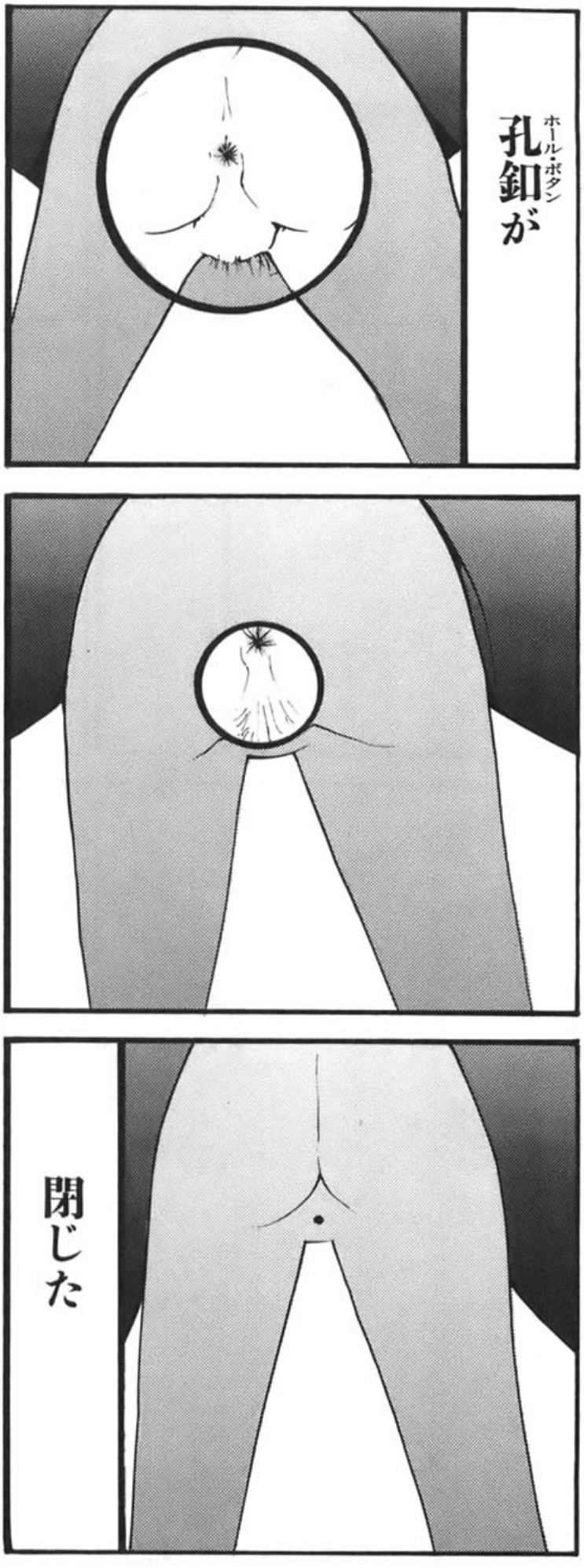
乾かされるのも

そこそこに

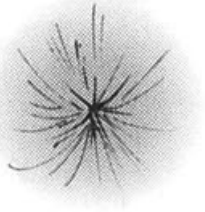
急いで
立ち上った

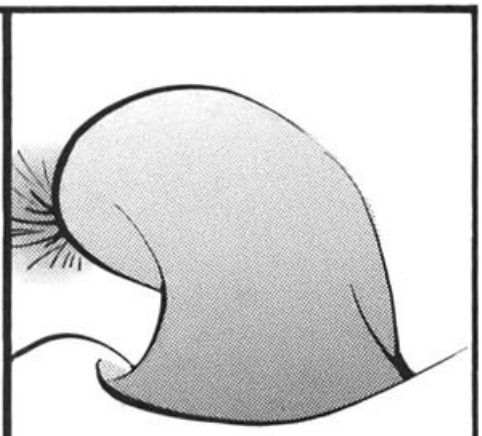



——そうだ
ウィリアムが
隣室でさぞ
待ちくたびれて
いることだろう


孔釦（ホール・ボタン）が
閉じた
下を見ると

食器を





清拭(せいしき)した

ばかりの口が

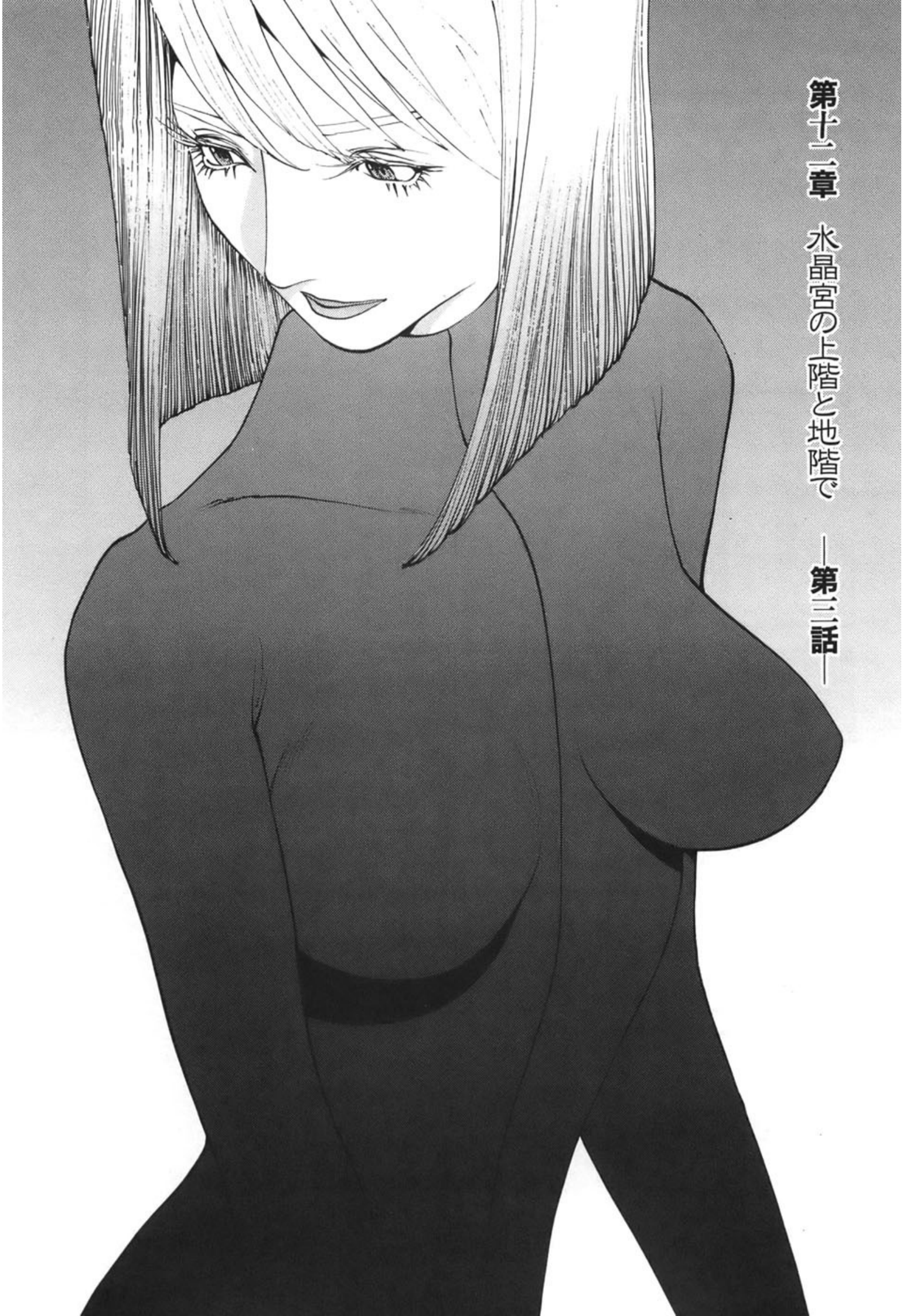


舌なめずりを
している



金色の毛が鼻の孔の上に
載ってそよいでいる





第十二章　水晶宮の上階と地階で　―第三話―

―妾(あたし)が
今まで
食べたものは
イース人とは
違うから

こいつ
味が変だといって
驚いているのかも
しれない

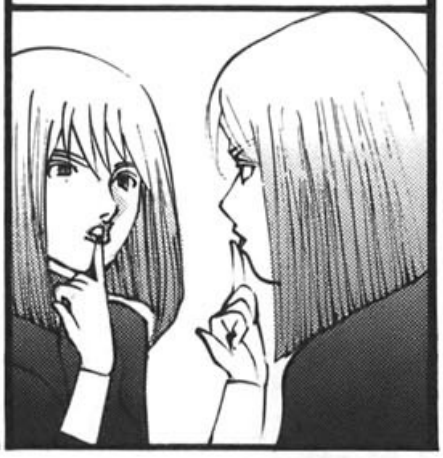



それとも
噛(か)まずに
嚥(の)みこんで
しまうのかしら
……

とりとめも
ないことを
考えながら



化粧机に
倚(よ)って
ちょっと
顔を直すと
クララは

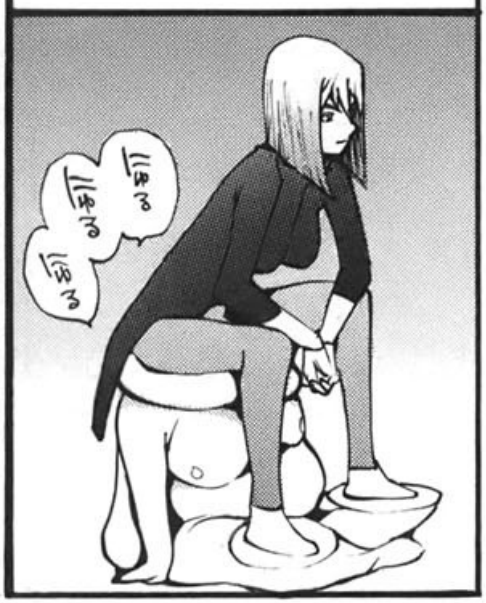


ふたたび
先ほどの
応接室に
自動椅子を
駆って行った

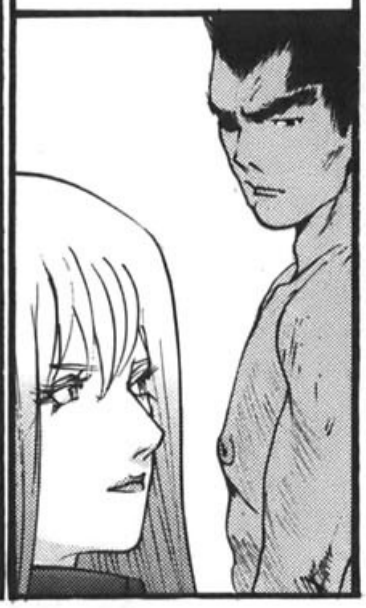




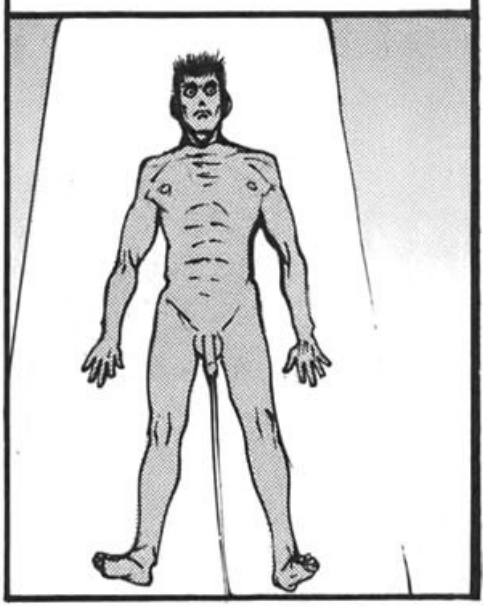
ちょうど
クララが
セッチンに
跨って

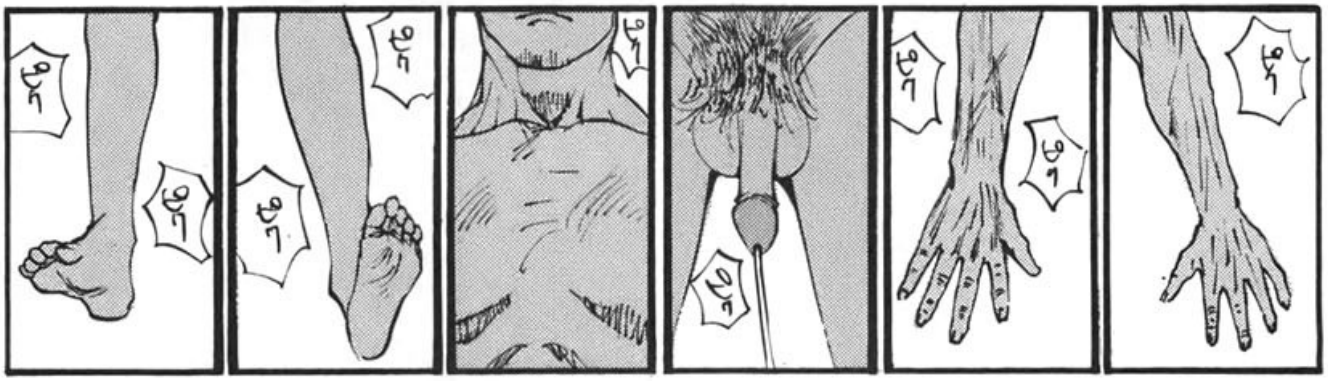


麟一郎との
関係を
あれこれ
思いめぐらして
いたころ



獣医科手術室の
寝台に
横たわっていた
麟一郎は





にわかに
五体が
回復してきた
のを感じた



獣医が
注射針を
ブルブル
震わしたことが
かえって
幸いして

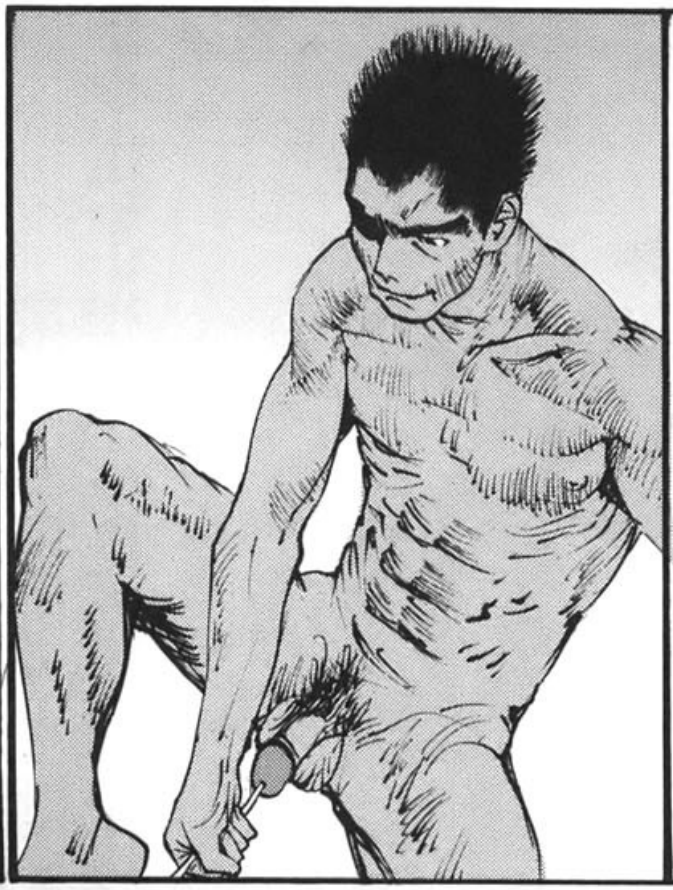
ぶるぶるぶるぶる

薬のまわりを
促進したため

ドドドドドドドドドド

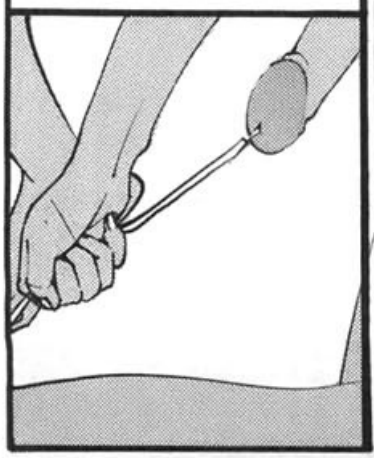
注射後
十分あまりで
毒が緩解して
しまったのである





麟一郎は
半身を起して

自ら
導尿管（カテーテル）を
抜き去った



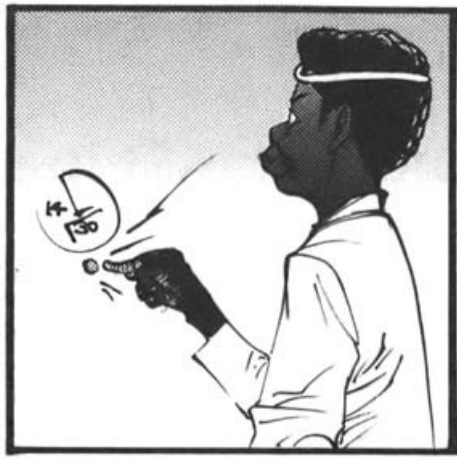
何時間
ぶりかで
自分の体が
動かせる

クララ
直った
動けるぞ！

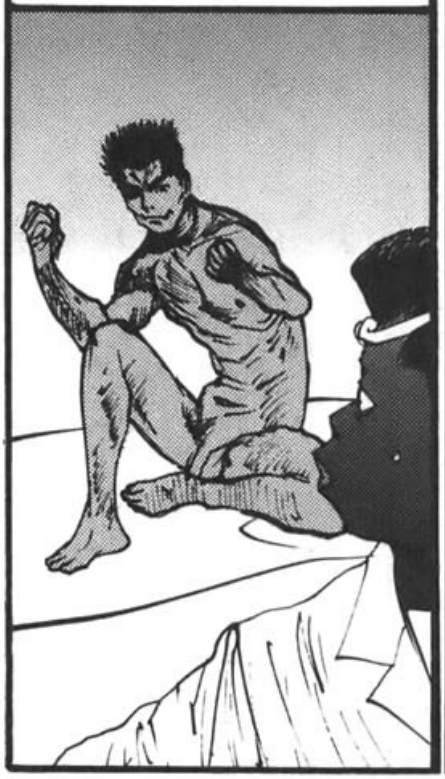
喜びに
あふれて
麟一郎は
叫んだ

あっ
ヤプーが……

十四分三十秒に
タイム・スイッチを
かけて
安心していた
ジムは



ヤプーが
寝台から
むっくりと
起き上ったのを
見て



突然の大声とともに



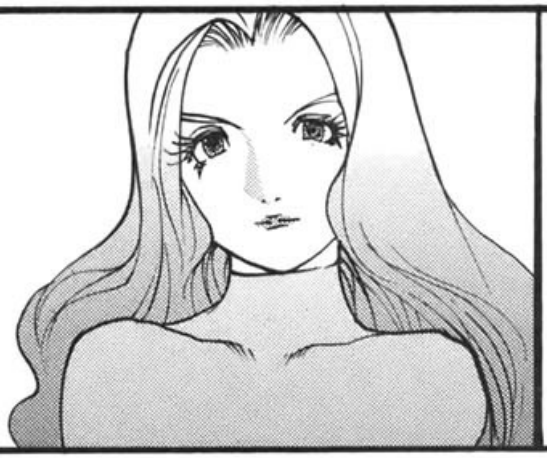
仰天して
しまった



予定より
五分も早い



さっき
ポーリーン
だけが来て
クララが
来なかったのに





不安を
感じていた
麟一郎は



一刻も早く
恋人に
出会って



無事を
確かめたかった

しかし
不案内な
この広壮な
屋敷内



一人では
捜せない

それに第一
素裸じゃ
困る

と
麟一郎は
思った

円盤の中へ
素裸で
はいったのが
今度の苦難の
原因だったんだ

いいよ…
このままじゃ
きまりが悪いが

まず
着る物を
手に入れて

獣医に
向って
頼もうと
したが

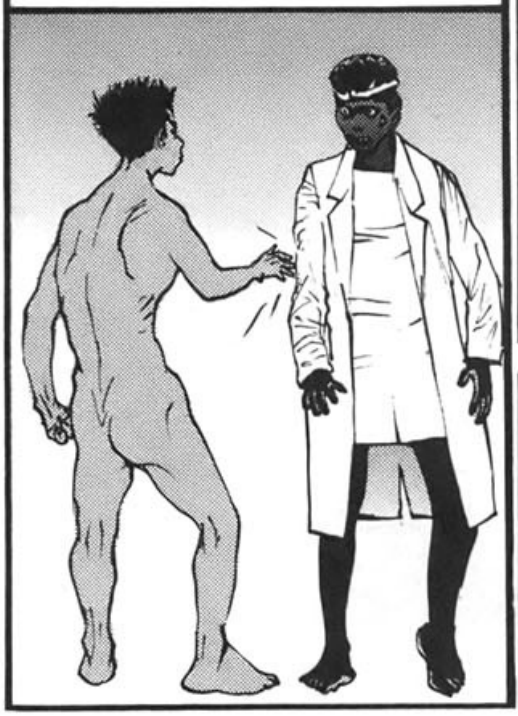
英語で
話すのは
いっこう
不得手な
麟一郎

とっさの
際とて

なお
言葉が出ずに

着物（クローズ）
……
着物（クローズ）
……

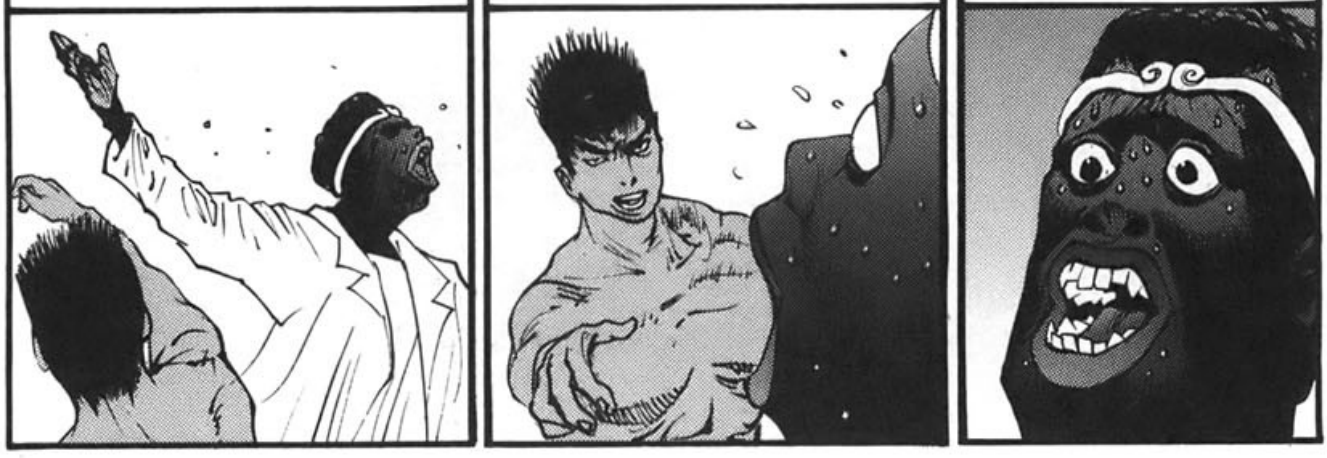
とだけいって
獣医の着ている
手術着を
引っ張って
みせようと
したところ



獣医は
動転している
際とて

何か
危害でも
加えようと
するのだと
誤解してか

いきなり
その手を
振り払って
助けを求めた



来てくれ
ヤプーが乱暴する
……

叫びを聞いて
奥の控え室から
二人の船員が
駆けつけて来た



麟一郎は





自分は
乱暴するのでは
ない



着物を
求めているだけ
なんだ



ということを伝えようとしたが

彼らは
耳を貸そうとも
せず



いきなり
手錠を
持ち出して



彼の手を押え
枷(かせ)を掛けようと
するのだ



冗談じゃない



と
手を引っ込めた
麟一郎は



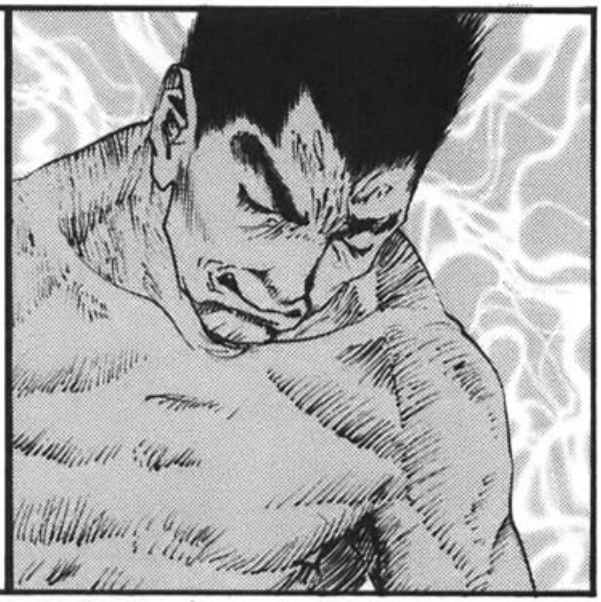
喧嘩(けんか)せずに
こちらの
希望を
わからせたい



との
一念から



腹の虫を
抑えながら



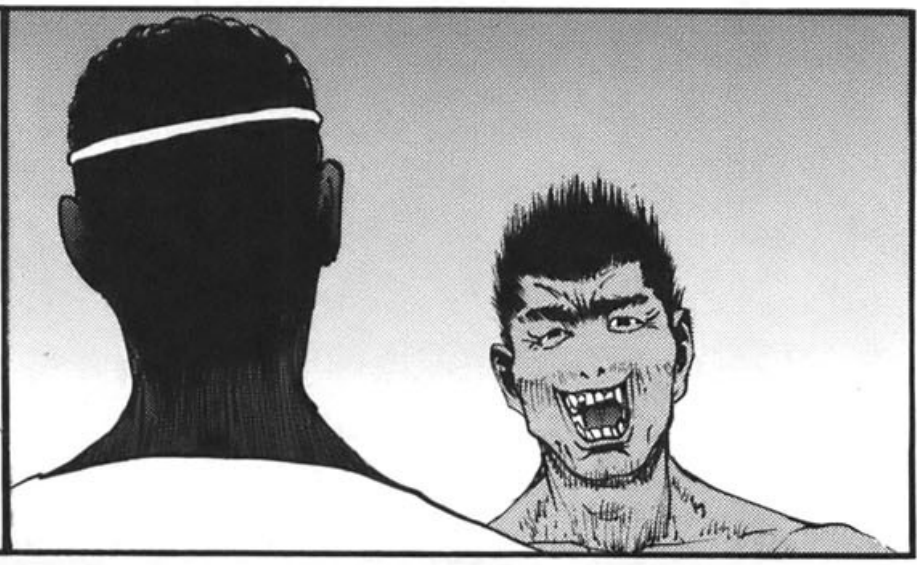
一人に



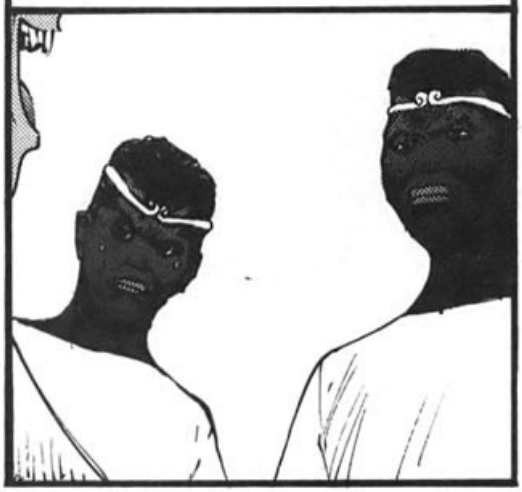
笑いかけ
ながら



何とか
言葉を
捜そうとした



そのとき
もう一人のほうが
荒々しく





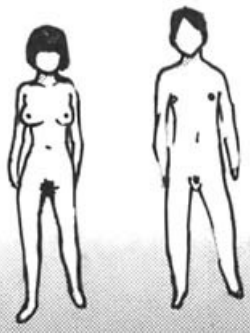
というなり　いきなり
拳骨（げんこつ）で頬桁（ほおげた）を殴りつけた

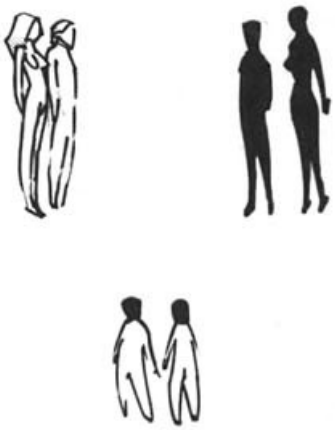


ヤプーは
服従本能の
旺盛な動物
といわれ



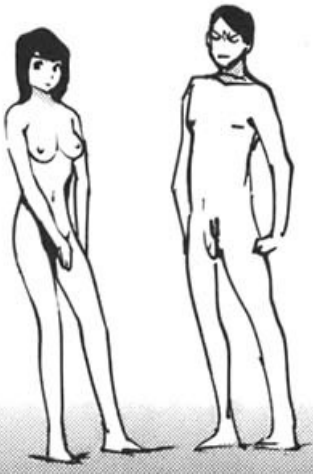
普通の
原(ロー)ヤプーが





人間や
半人間に
反抗するなどと
いうことは
決してない

しかし
未調教の
土着ヤプーは
別物で

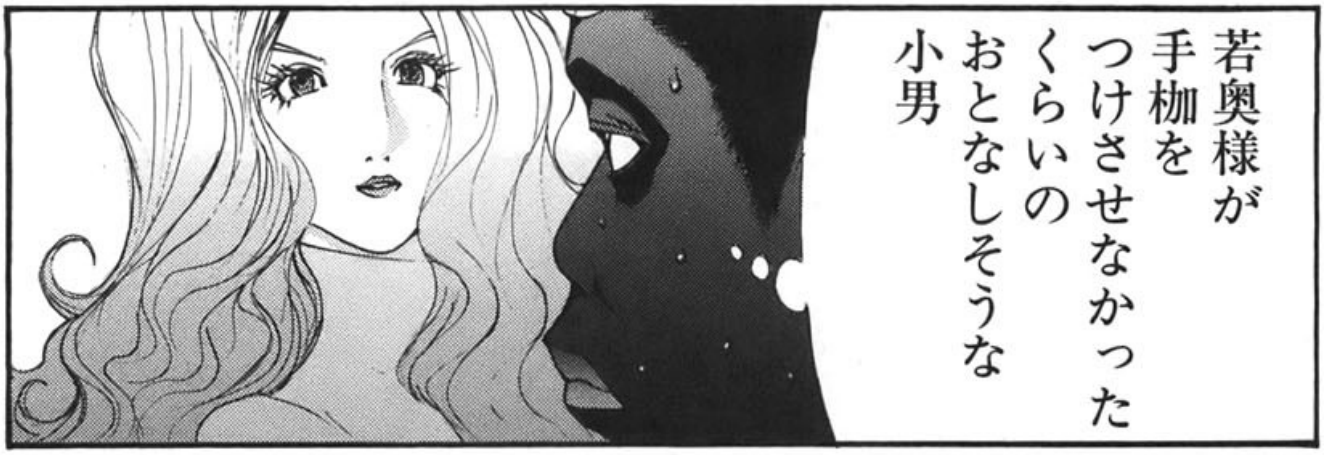


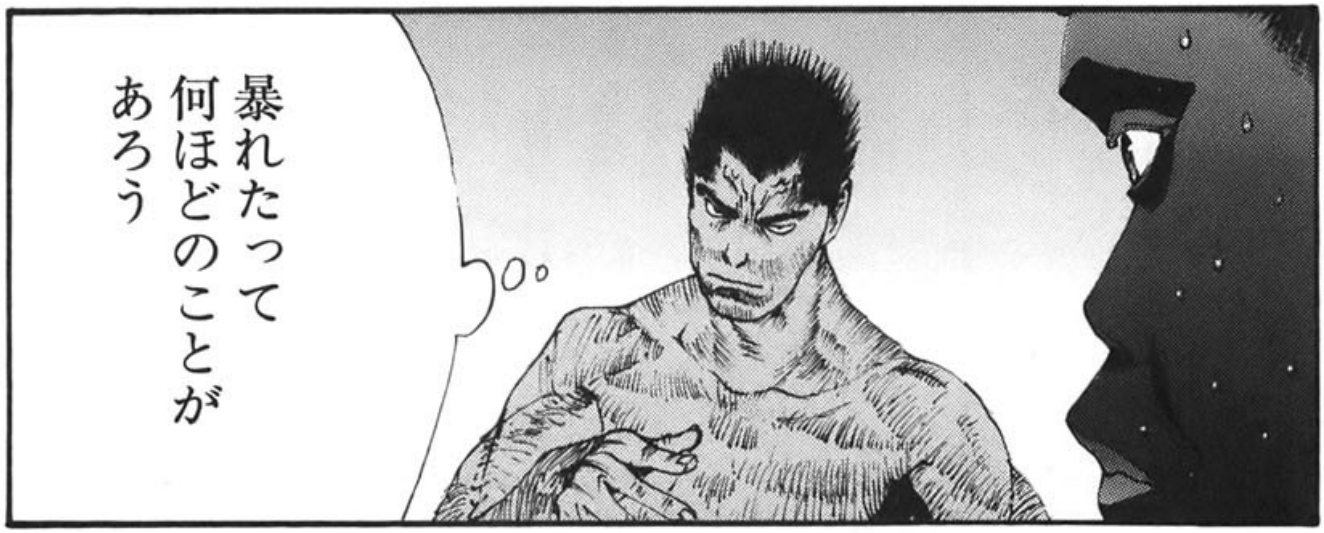
殴ったりすれば
怒ることは
当然である



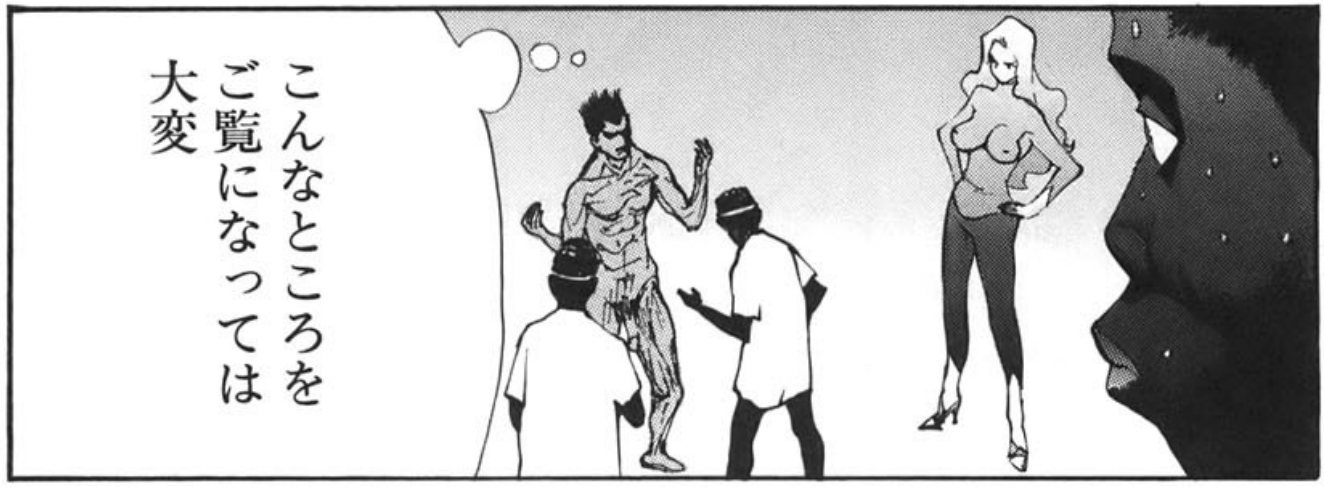
それを
知らぬでは
なかったが




若奥様が
手枷を
つけさせなかった
くらいの
おとなしそうな
小男


暴れたって
何ほどのことが
あろう


ぐずぐず
しているうちに
若奥様が
お見えになって


こんなところを
ご覧になっては
大変

早く
取り押えて
しまわねば

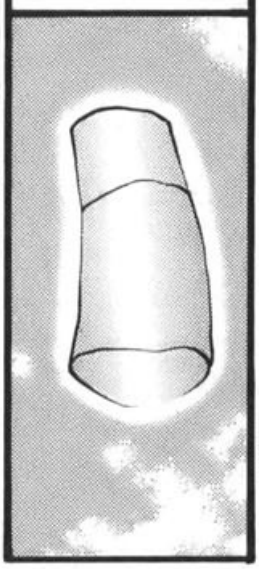
といった
焦(あせ)りから

彼は
手荒い処置に
出たのだった

麟一郎は
憤怒に
自制力を
失った



円筒形の
船倉で

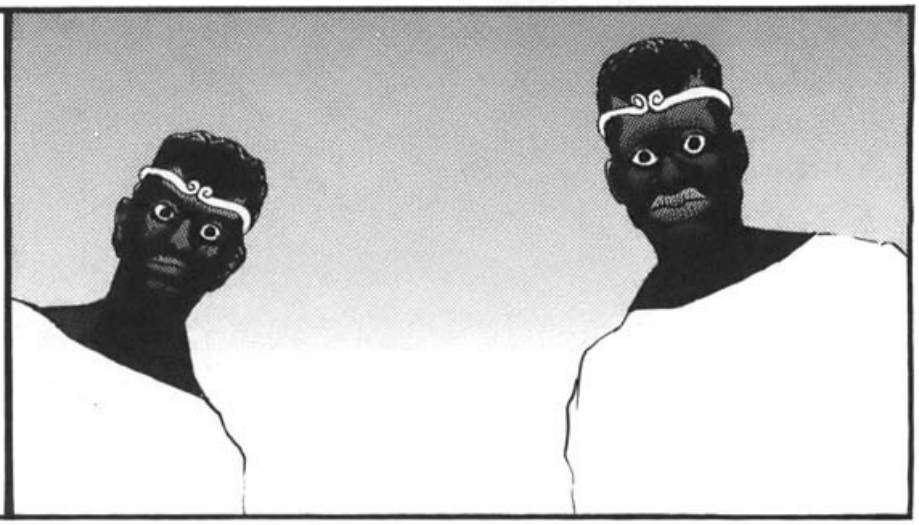


この二人から
言語に絶する
焦熱地獄の
拷問を
受けたことは

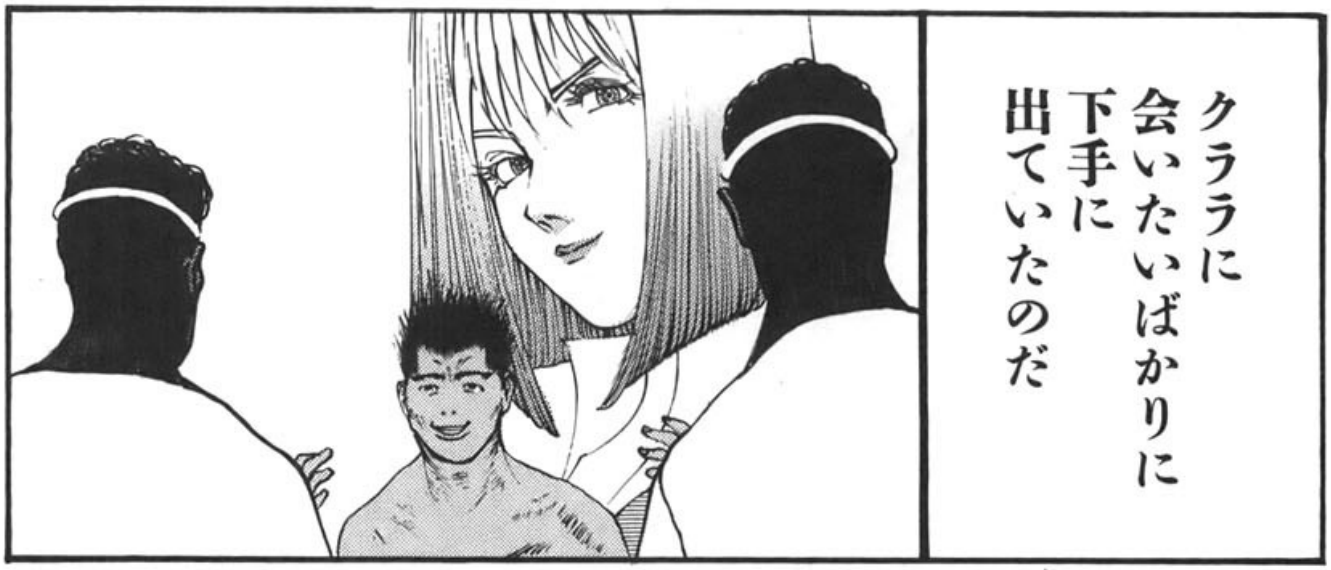


忘れようと
したって
忘れられる
ものでは
なかった





恨みかさなる
奴らだったが


クララに
会いたいばかりに
下手に
出ていたのだ


それを
何事ぞ


手錠だの
打擲(ちょうちゃく)だの

怒鳴ると
彼は



小兵(こひょう)ながら
高校時代から
学生柔道界に
知られ



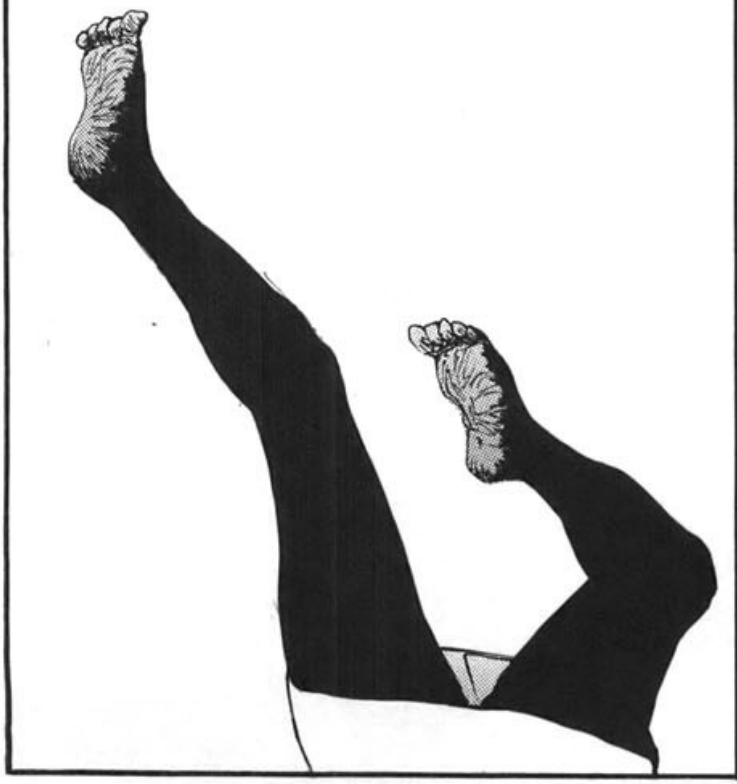
今殴った8号に
つかみかかった



華麗な投げ技(なげわざ)で
鳴らした
柔道五段の
麟一郎である



大きな黒いG8号の図体が



地響き立てて床に落ちた

ズドーン



途端に13号が
後方から襲いかかったが

危うく
身をかわして



腰車一閃（いっせん）



鮮（あざ）やかに
決った



二人とも
受身を知らないから



骨を痛めて
起き上れないところを

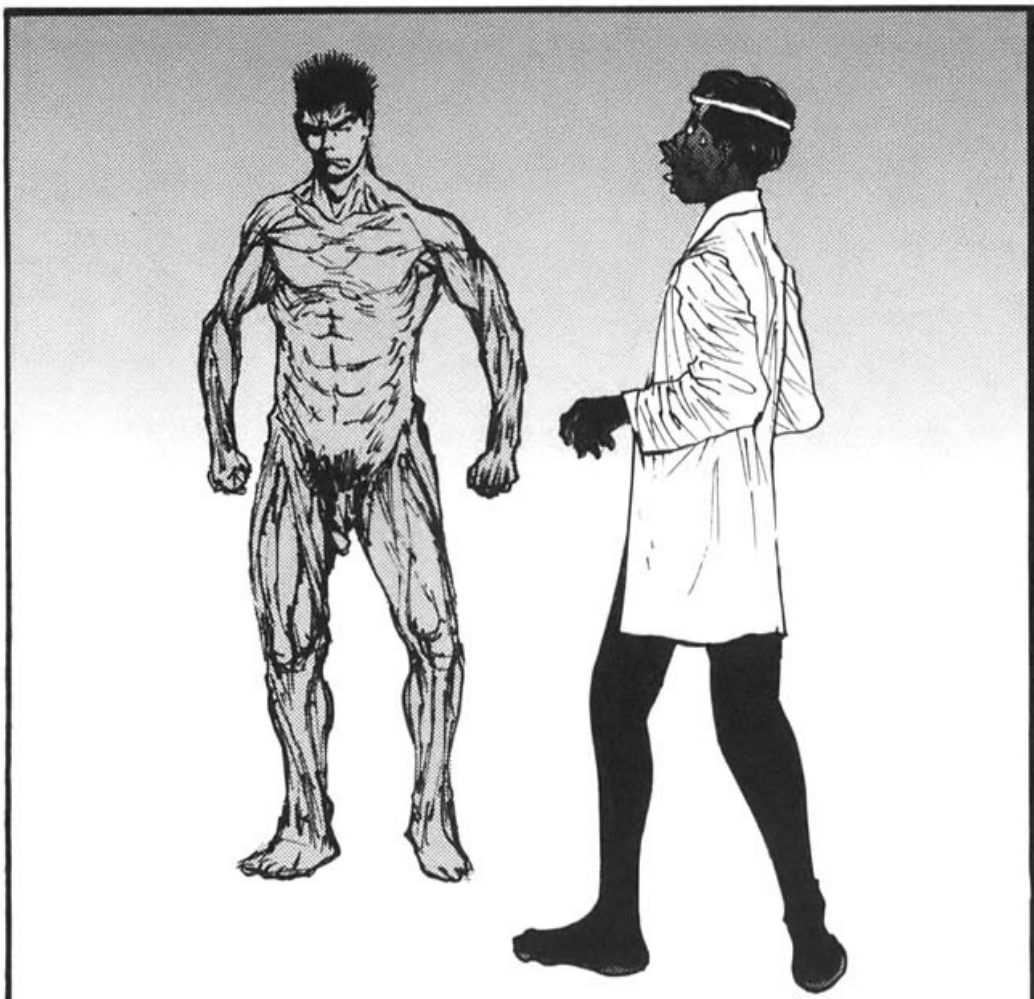
当身(あてみ)で気絶させた



獣医の
黒い顔から
血の気が
引いた

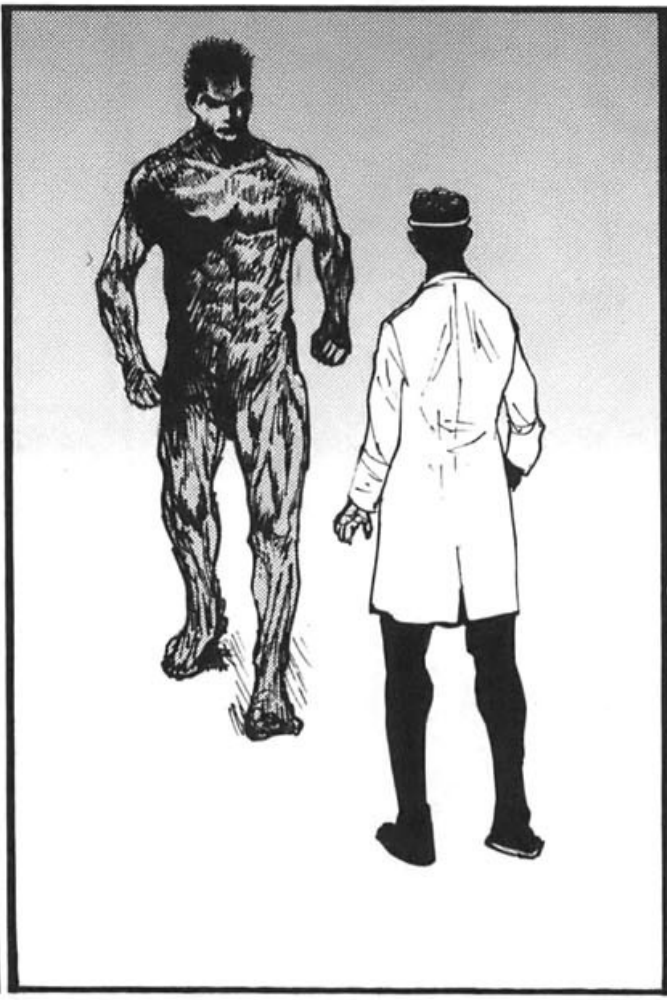


この狂暴な土着ヤプーの前に
ただ一人立つ恐怖……

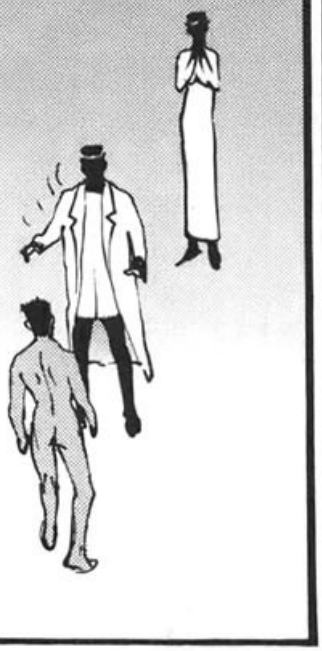




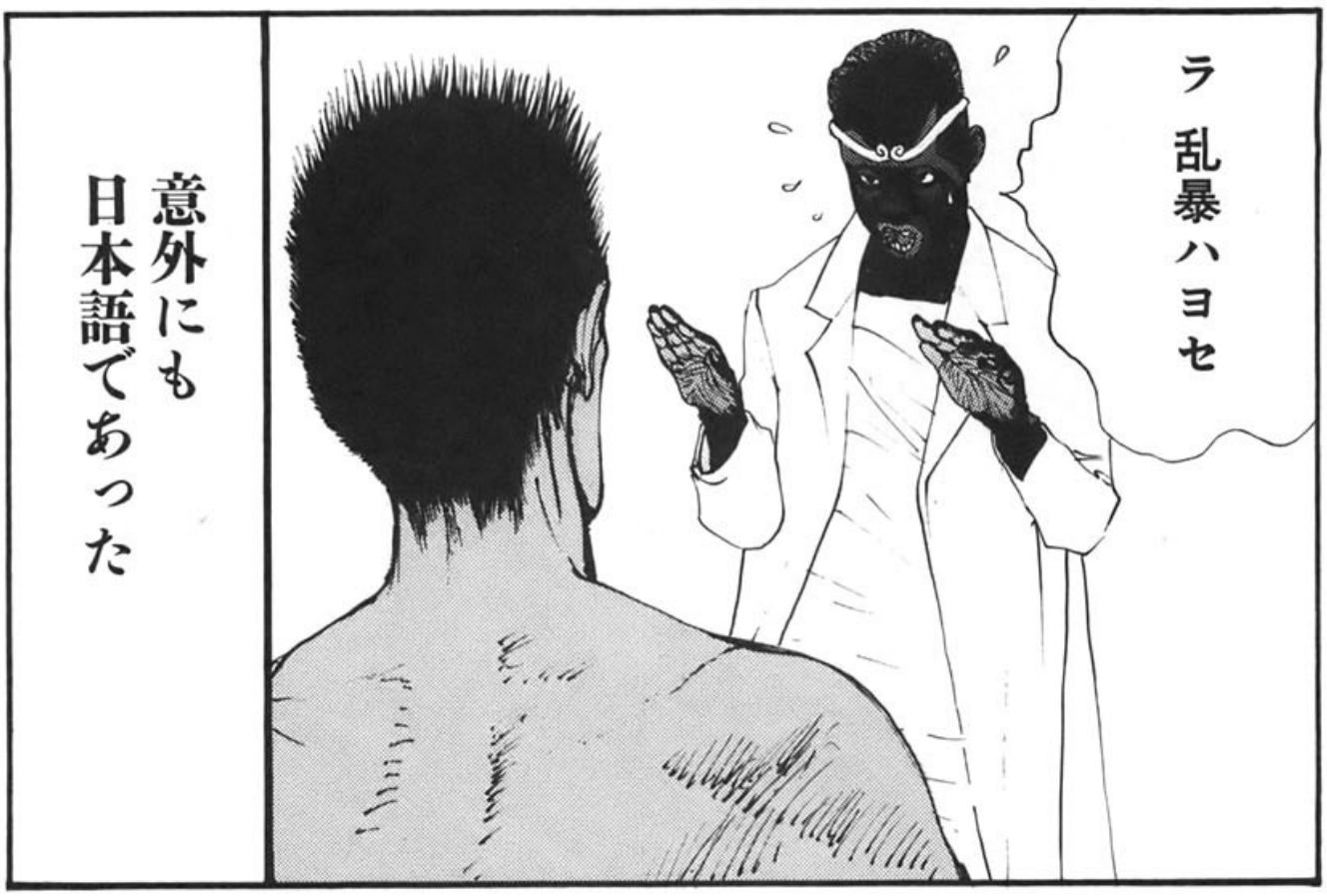
背後では看護婦も
震えていた

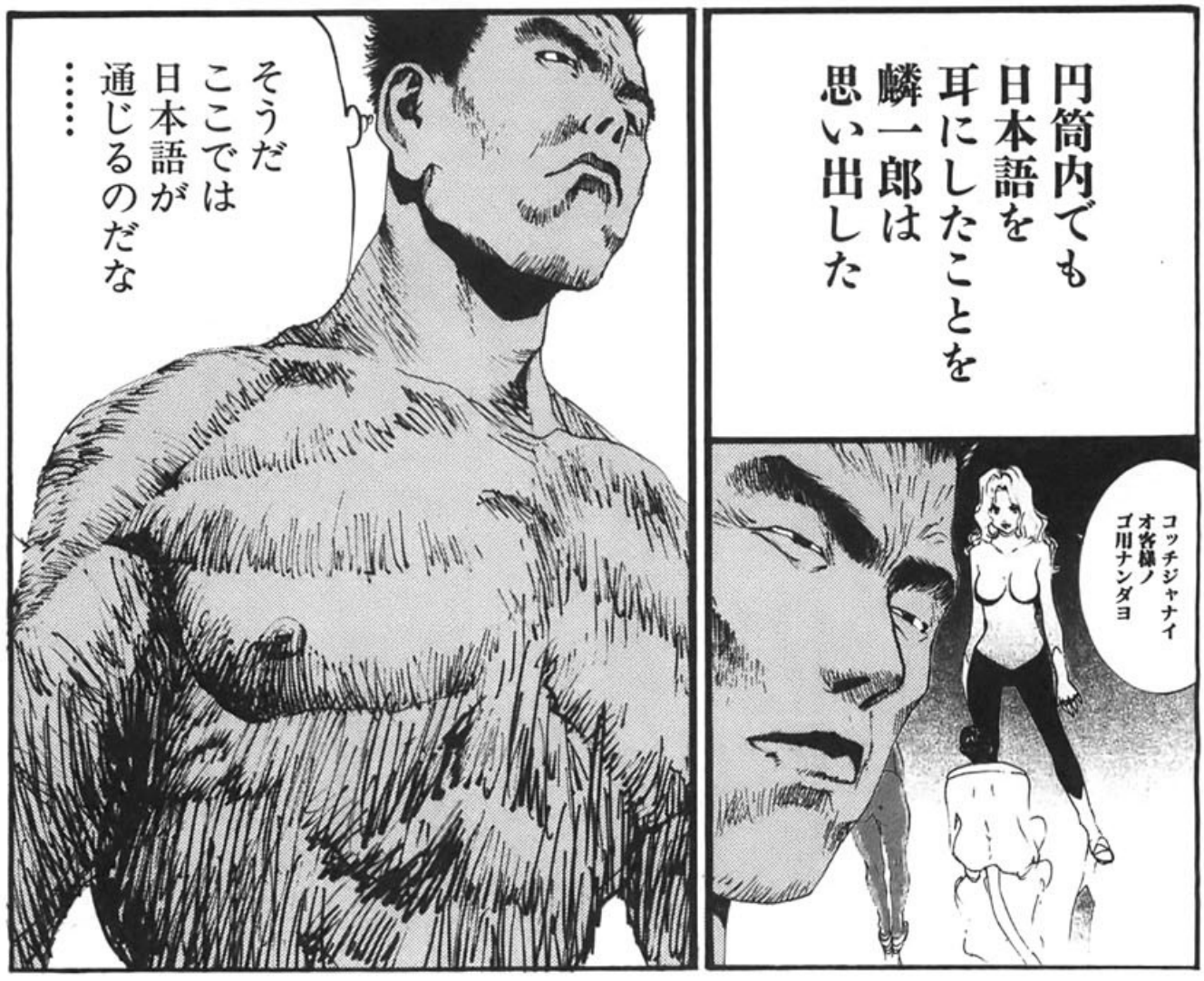


麟一郎は
獣医のほうに詰めよった



相手は
後じさり
しながら


ラ 乱暴ハヨセ
意外にも
日本語であった


円筒内でも
日本語を
耳にしたことを
麟一郎は
思い出した
コッチジャナイ
オ客様ノ
ゴ用ナンダヨ
そうだ
ここでは
日本語が
通じるのだな
……

何カ
着ル物ガ
ホシイ

着ル物
オ前ガ？

ジムは
どす青くなった顔に
素っ頓狂な
表情を浮べた

はあ〜〜っ!!

二〇世紀世界の
獣医も
犬が洋服を
ほしがったら
こんな顔を
するだろう

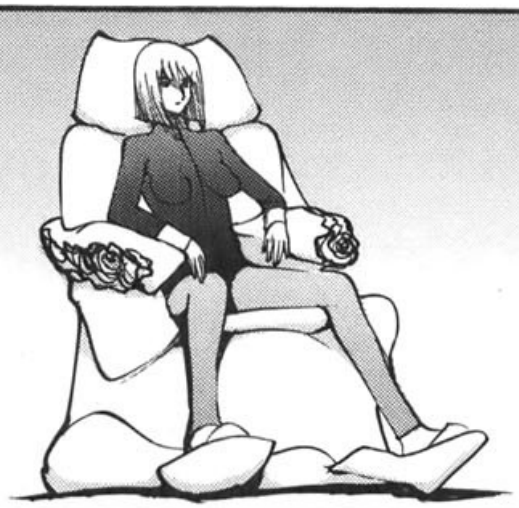
何カ
着ル物ガ
ホシイ

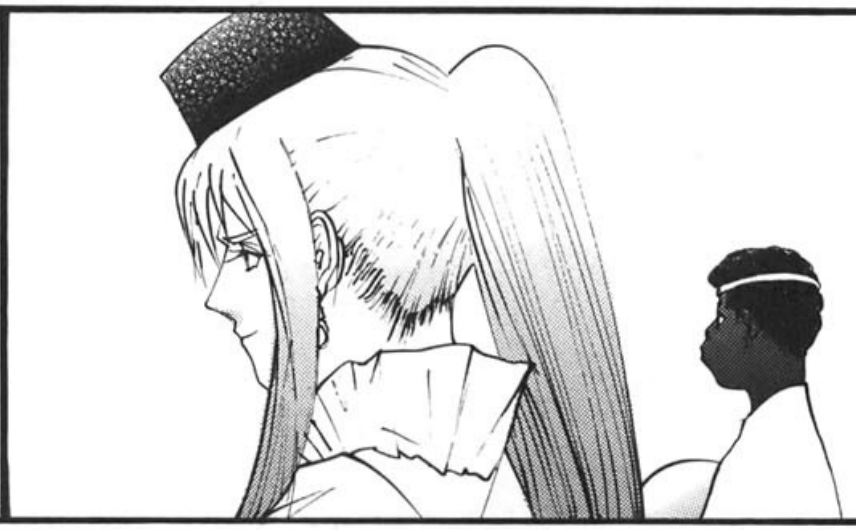
ソンナ物
アルモンカ

ナニッ


思わず
麟一郎は
語気を荒らげたが
ソンナコト
イワズニ
思い直して
今度は下手に
頼んだ
頼ミマス
ドウゾ……

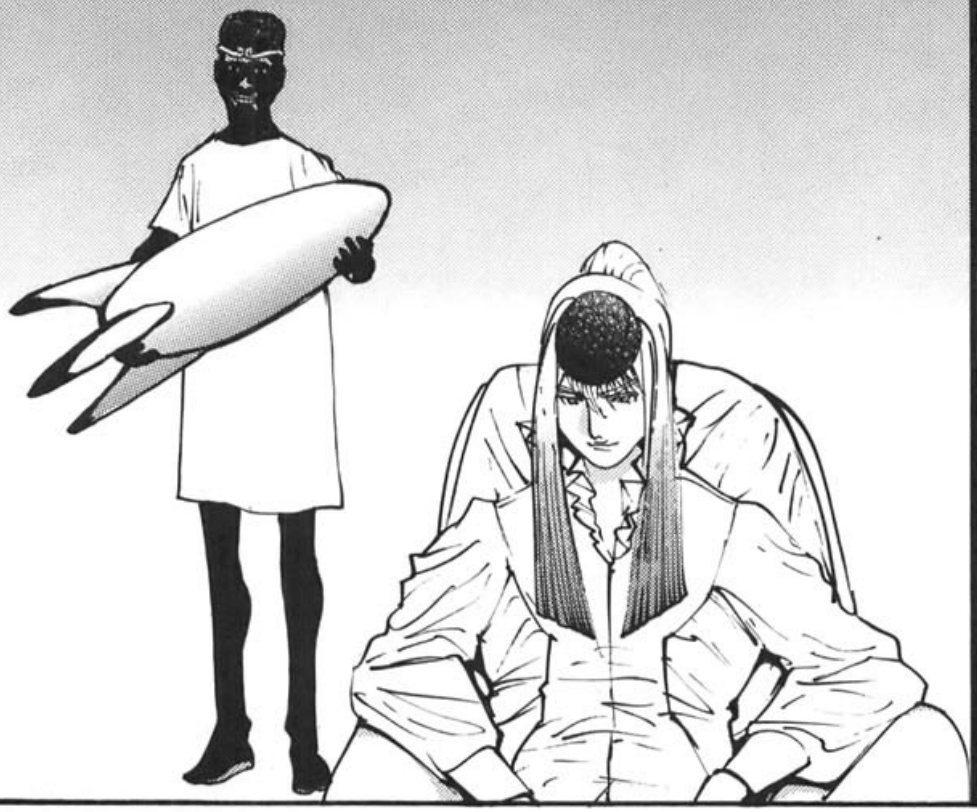
自動椅子（オート・チエア）に乗って
応接間に戻った
クララは



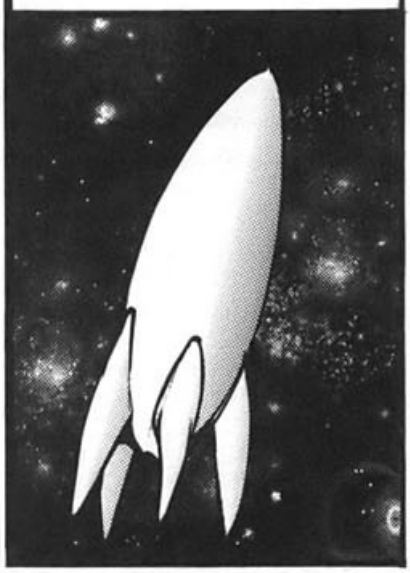


ウィリアムの横に
待立（じりつ）する
従者M9号が

両手にひとかかえほどもある
宇宙船の模型を
持っているのを認めた



雑誌で
よく見た
ロケット船
だった



クララ
矮人血闘(ピグミー・デュエル)では
僕の選んだ奴は
負けましたけど



勝ったら
引出物にしようと
思っていた
この置物は
あの勝負を
離れて





やはり貴女(あなた)に
贈物(プレゼント)したいと思って
今 持ってこさせた
ところです


立派な
宇宙船の
模型だことね


宇宙船としては
いちばん旧式な
ロケット船
ですがね


宝船（トレジャー・シップ）といって
枕元に置くと
幸福が来る
というんです

YAPOO, THE HUMAN CATTLE 6 END


ミックス化!!
作画 江川達也 原作 沼正三
発行・幻冬舎コミックス 発売・幻冬舎
BIRZ COMICS
POO, THE HUMAN CATTLE
gawa Tatsuya Numa Shozo
家畜人ヤプー
かちくじん
YAPOO
毎月30日発売 ◉490円(本体価格467円)
月刊コミックバーズにて
絶賛連載中!!
◎幻冬舎コミックスHP▶ http://www.gentosha-comics.net
◉①693円(本体価格660円)②～⑥620円(本体価格590円)
(一)～(六)
絶賛発売中

衝撃のコ

西暦196X年、将来を誓い合った恋人同士であるドイツ人・クララと日本人・麟一郎。

二人が乗馬を楽しんでいたそんなある日、

突如見た事もない飛行物体が目の前に墜落する。

それに乗っていたのは、完璧な美貌を持つ白人女性・ポーリーン。

彼女は日本人が生体手術により、生体家具、肉便器などあらゆる「物」に加工され、

宇宙帝国イースを支える家畜「ヤプー」として生きる

二千年後の未来世界からタイムドライブしてきたのだった。

船内で気を失ったポーリーンを助けてしまったクララと麟一郎。

恋人同士の輝く未来は、この時を境にあらぬ方向へと流れ出す……！

異才・沼正三が放った
戦後最大のタブーに
鬼才・江川達也が挑む!!

バーズコミックス
家畜人ヤプー⑥

2005年9月24日　第1刷発行

著　者
江川達也（えがわたつや）
沼　正三（ぬましょうぞう）
発行人
伊藤嘉彦
発行元
株式会社 幻冬舎コミックス
〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷4-9-7
電話　03(5411)6431(編集)
発売元
株式会社 幻冬舎
〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷4-9-7
電話　03(5411)6222(営業)
振替00120-8-767643
印刷・製本所
大日本印刷株式会社

検印廃止
万一、落丁乱丁のある場合は送料当社負担でお取替致します。幻冬舎宛にお送り下さい。本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。
定価はカバーに表示してあります。

©Egawa Tatsuya, Numa Shozo, GENTOSHA COMICS 2005
ISBN4-344-80623-9　C9979　Printed in Japan

幻冬舎コミックスホームページ　http://www.gentosha-comics.net
この本に関するご意見・ご感想をメールでお寄せいただく場合は、comics@gentosha.co.jpまで。
本作品はフィクションです。実在の人物・団体・事件などには関係ありません。